

# COSMIC

## コズミック・ヴォエージ

SRV：科学的遠隔透視による宇宙(謎の大探査)

エモリー大学準教授

コートニー・ブラウン

南山 宏 監訳 ケイ・ミズモリ 訳

徳間書店

# VOYAGE

First published in the United States under the title  
COSMIC VOYAGE

by

Courtney Brown

Copyright © Courtney Brown, 1996

Published by arrangement with Dutton Signet,  
a division of Penguin Books USA, Inc.  
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

---

[R][日本複写権センター委託出版物]

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、  
著作権法上での例外を除き、禁じられています。

本書からの複写を希望される場合は、

日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡下さい。

---

「私たちのSRV（科学的リモート・ビューイング）が正しいかぎり、地球にはたしかに昔から各種の異星人が来ている。中でもわれわれの歴史と文明に重要な関わりを持っているのは、グレイと呼ばれる連中と火星人の種族だ……」

衝撃的な発言内容にはすぐわぬ穏やかな、だがきっぱりとした口調でインタビューの相手からそう断言された時、私は正直いって絶句した。

1996年の9月、オリンピックが終わったばかりのアトランタに立ち寄って会う機会を得たその人物は、れっきとしたインテリの大学教授、それも名だたる医学系名門私立大、エモリー大学（米ジョージア州）で政治科学を教えるコートニー・ブラウン準教授（教授と助教教授の中間）、すなわち、ほかならぬ本書の著者である。

だが、こちらの当惑などいっこう気にするふうもなく、ブラウン博士は科学研究者らしい理知的で冷静なまなざしをまっすぐ私に向けたまま、さらに過激な発言をたんたんと続けた――

「グレイ族はべつに邪悪な存在ではなく、ただ自分たちの種族保存をはかるとともに、われわれ地球人類にも、彼らの母星と同じような環境破壊による自滅の轍を踏ませまいとしているのだ……」

「彼らは物質的であると同時に非物質的存在でもあり、サブスペース（亜空間）を通じて組織されている汎銀河系連合の一員として、われわれ人類を陰から助け、導いてくれている……」

「火星にもかつては高度文明が栄えていたが、ある不幸な自然の大災害によって破滅し、わずかに生き残った連中の子孫が今もほそほそと地下シェルターで暮らしている。また、火星人の一部はグレイ族の助けで地球に移住し、南米の先住民に混じって生活しているが、肉体、精神両面の適応技術のおかげで見分けはつかない……」

「別の火星人グループはニューメキシコ州の地下洞窟に隠れ住んでいる。彼らの子供たちはここで生まれたのだから、法的にはアメリカ市民だ。火星人移民の問題は、将来アメリカ政府の直面する重大課題になるだろう……」

彼はべつに自作のSFを披露しているわけではない。

冒頭の言葉でお分かりのように、「RV」（リモート・ビューイング）の実験結果を報告しているのだ。



R V——耳慣れない人が多いだろうが、いわゆる超能力、正しくはESP（超感覚知覚）の一種で、訳せば「遠隔透視能力」というところだろう。

日本では「千里眼」とか「天眼通」という表現があるように、昔からよく知られている超能力で、この分野ではスウェーデンの哲学・科学者で大霊能者と謳われたエマヌエル・スウェーデンボリが体験し、ドイツの高名な哲学者イマヌエル・カントに記録されたケースが有名だ。

1759年、彼はイエーテポリで夕方の散歩中、450キロ以上離れたストックホルムの自宅から3軒先が起火し、みるまに大火事になる光景を「透視」して、友人のイエーテポリ市長に告げた。翌日、王家の使者が到着して、スウェーデンボリの見たとおりであることが判明したのである。

意図的な「千里眼」実験としては、初期の英国心靈科学協会員だった物理学者サー・オリヴァー・ロジが、1927年に報告した「遠距離テレパシー」実証実験がある。これはミス・マイルズという女性がイングリランドのとある教会を撮影して写真に精神集中し、その思念をスコットランドにいる霊媒のミス・ラムズデンが読み取るという方法で行われた。基本的には、後世の科学的RV実験と大差ない方法だった。

しかし、「RV」という超心理学用語そのものは、1970年代に入ってから「偏見やオカルト臭とは無縁の客観的用語」として、アメリカでも指折りのシンクタンク、カリフォルニアのスタンフォード調査研究所(SRI、現在はSRIインターナショナル)の物理学者コンビ、ラッセル・ターグとハロルド・パソフ両博士が使い始めたものだ。彼らはニューヨークの画家で当時すでに超能力者の名が高かったインゴ・スワンを実験台に、まず「プロジェクト・スキヤナイト」とのちに称される特殊な実験を始めた。これは地図上の任意の地理座標を選んで、電話でスワンに教え、実

際にその地点に何が存在するか「遠隔透視」させて、あとで事実と照合するという実験だ。

その上首尾な結果に勇を得て、ターグとパソフはさらに元警察本部長のパット・プライスほか、10人以上の被験者を対象に、厳密な管理実験を積み重ねた。その方法をごく単純化すれば、実験者（透視者、指標者、判定者）の四者に役割が分担される。実験者と透視者は実験室に残り、指標者はターゲットとなる地点に行く。この時選ばれるターゲットは、ブラインド方式（透視者にも実験者にも分からぬよう無作為に選択）を用いる。決められた時刻に透視者は指標者のいるターゲット地点の光景を透視し、口頭やスケッチで描写する。その後、実験チームとは無関係な第三者の判定者が、いちいちターゲット地点を訪れて、透視者の残した録音記録やスケッチとどこまで合致しているかを判定するのだ。

2人目のプライスを実験した段階で、彼が9地点中7地点もヒット（的中）させ、偶然に起きる確率3万5千分の1という好成绩を上げたため、ターグとパソフはイギリスの権威ある科学専門誌〈ネイチャー〉1974年10月18日号に、その実験結果を発表した。RV実験報告としてはもちろん、超心理学分野の論文としても、同誌に掲載された初の科学論文とされている。

その後も、被験者の1人、女流プロカメラマンのヘラ・ハミッドが、偶然の確率わずか50万分の1というプライスを上回るすばらしい成績を出すなどあって、1977年にまとめた共著『マインドリッチ』では、この科学者コンビは高らかに宣言したのである。

「われわれはついに突破口を切り拓いた。リモート・ビューイングとして知られる現象が実在することを、科学的に立証したのだ。おそらくこの超感覚的能力は、広く誰にでも潜在している能力だ

ろうとわれわれは考えている」

しかし、一般科学界は彼らが期待したほど好意的には受け入れてくれなかった。超心理学実験に付きものの、心理的環境に左右される不安定要素、完全には徹底できない厳密さ、多少でもまぎれこむ恣意性などの弱点を衝く反論や否定論が続出した。それに、ほかの同僚科学者たちがいくら追試をやっても結果がまちまちに出て、必ずしもターグとパソフの主張するとおりにならなかったのである。

ただ、ターグとパソフを弁護していえば、どんな超常現象についても言えることだが、否定論者は肝心の論点をはずしている。実験の弱点や欠陥をいくらあげつらったところで、現象そのものが実在しないという証明にはならない。洋の東西、時の今昔（こんじやく）を問わず、互いに無関係な人々が、どういうわけか「遠隔透視」らしき現象を起こしているという事実までは、否定できないのだ。

科学者の大半が否定的か、あるいは無関心なのは逆に、科学的な実証性より実用性のほうに目をつけて、いち早くRVの利用に乗り出したのは、アメリカの情報機関と軍当局だった。1972年、CIA（中央情報局）はSRIに、スワンのRV能力を偵察情報収集に使えるかどうかとひそかに打診した。それを契機に1977年、国防総省のDIA（国防情報局、陸海空軍情報部の統合機関）が本格的にSRIと組んで、極秘のRV研究計画（スターゲイト）をスタートさせ、冷戦下の仮想敵国・ソ連を相手の「超能力戦争」にしのぎを削ることになる。ごく最近になって直接関係者から暴露されたのだが、この計画は軍の情報将校から優秀なRV能力者を選抜養成し、実際の諜報活動を兼ねて研究を進めるものだったのだ。

なぜそんな国家機密が明るみに出されたかという点、じつは一昨年、冷戦終結後強くなる一方の議会の圧力による情報関係の機密予算縮小のおおりで、ついに〈スターゲイト〉関連の機密文書の一部が解禁され、全米のマスコミがこぞって騒ぎだしたためである。

同年11月にはABCテレビが、政府と軍の二十数年間にわたる「超能力兵器開発作戦」に延べ2千万ドルもの国家予算が使われたとすっぱ抜いた。また、ワシントン・ポスト紙11月30日付の報道によれば、1979年にはソ連が建造中の新型原潜を探知、81年にはイタリアでテロ組織「赤い旅団」に誘拐された米軍将官の、また88年にはレバノンでゲリラ組織の捕虜となった米海兵隊員の監禁場所を透視するなど、少なくとも合計19件のRV作戦成功例があったという。

ブラウン準教授もインタビュー中に強調していたが、先ほどの紹介でもうお分かりのように、〈スターゲイト〉計画の主役がCIAというのは一般社会の先入観的な誤解で、計画の中心はもっぱらDIA（国防情報局）だった。ところが、1994年の国防新議案で〈スターゲイト〉など政府予算によるESP研究の管轄責任が、CIAに一括移管されることになった。ここでCIAは情報活動におけるESP利用の有効性の見直しを、アメリカン・インスティテュート・リサーチ（AIR）に依頼する。AIRは政府関係の科学研究の専門調査機関である。

実際にはイラン／コントラ事件以来の内部不正をめぐる失態続きに、これ以上議会やマスコミを敵に回したくないCIAの腹の内を読んだように、AIRが議会に提出した調査報告書の結論は、ESPは統計学的には有意だが、実用にはならないとするものだった。それをマスコミが暴くのを待っていたように政府予算も打ち切られ、CIAもまた少なくとも表向きには（と私はUFO問題に照らして疑問符を付けておくが）、ESPはけっきょく兵器として役に立たなかったと説明して、

研究から手を引いたのである。

現在、R Vの研究開発とその応用面の活動は、元S R Iなどで研究主任を務めていた科学者や、元(ヘスターゲイト)要員だった退役軍人たちが会社を興して進めている。当然ながら彼らはこそぞつて、そんな政府やC I Aの態度に、自分たちの貢献をないがしろにされ、名譽と信用を傷つけられたと感じている。

ちなみに、(ヘスターゲイト)要員の中でも総合力でずば抜けていたと仲間うちでの評価が高く、最初に秘密ビュアーに抜擢されたため認識番号が0001だったという元陸軍情報将校のジョゼフ・マクマニグルは、自著『マインドトレック』(1993年)の中で、同計画の遂行中に火星表面の「人面岩」やピラミッドや火星人を「遠隔透視」したと、ブラウンと同様の告白をしているのはじつに興味深い。

本書の冒頭で詳しいように、ブラウン自身は軍のR V実験と直接関わりはなかったが、そのような軍専属のリモート・ビュアーの1人との出会いをきっかけに積極的なトレーニングを積み、他方、科学者として実験手順に彼なりの改良を加えながら、自らを優秀なリモート・ビュアーに鍛え上げた。そして本書にまとめたような自分のR V体験を学者生命をかけて公開するとともに、R Vの可能性の探求を目的に(フアーサイト(遠方視)研究所)を設立、自分の創出した新トレーニング法を(S R V)(科学的リモート・ビュイング)と名づけて、トレーニング・コースを開講し、新しい科学的リモート・ビュアーの養成に力を入れているわけだ。

最後に、私がインタビュアした時とくに強く印象に残ったのは、アメリカが去年暮れに相次いで

打ち上げた最新型火星探査機の失敗予告である。マーズ・パスファインダーもマーズ・グローバル・サーヴェイヤーも、今年の夏に到達する予定だが、その前後に「撃ち落とされる」可能性が高いという。来年、日本がやはり火星をめざして発進させるプラネットBも、ヨーロッパ共同体が打ち出す予定のマルス98も、同じ運命をたどるだろうという。

ひろん火星人に攻撃の意志はなく、あくまで自分たちの存在を秘密にしておくための防衛手段で、過去に旧ソ連のフォボス1号・2号とアメリカのマーズ・オブザーヴァーが、いずれも火星周回軌道に入る直前、たてつけに交信が途絶えてしまったのもそのせいだと、彼は力説した。

にわかには信じがたい予言だが、しかし、ひるがえって考えれば、今なぜこの時期に、人類文明始まって以来の「火星探査ラッシュ」なのか？ 向こう10年間でアメリカは10機も送り出す計画だし、ほかの諸国の火星探査プロジェクトも、合わせてなんと33通りに達すると言われているのだ。何やら背後に巨大な陰謀がひそんでいるような気がしないでもない。

そしてまた、ブラウンのこの大胆きわまる予言は、彼自身のリモート・ビューイングの真実性を判定する、いわばリトマス試験紙にもなるかもしれない。折りも折れ、このインタビューを終えて帰国後数カ月たった去る11月17日、ロシアがアメリカに負けじと打ち上げたマルス96が、けっきょく火星に向かう軌道に乗れず、またもや失敗に終わったのは、すでに予言の中が始まった前兆なのだろうか？

まさかとは思うが、私の心は不安と期待こもごもの複雑な気持ちで、どうしても抑えることができないでいる。



# コスミック・ヴォエージ

SRV: 科学的遠隔透視による宇宙[謎の大探査]

## CONTENTS

謝辞……………

15

プロローグ 二つの地球外文明について……………

17

## **PART I 予備知識**

第1章 米軍超能力戦争プログラムの略史……………

29

第2章 遠隔透視(リモート・ビューイング)……………

35

第3章 アーカシヤを通る旅……………

64

## **PART II 人間の心がかつて一度も訪れなかったところ**

第4章 最初の火星訪問……………

85



第5章	UFOアブタクシヨンの遠隔透視	90
第6章	火星人：現在の生存者	95
第7章	最盛期の火星文明	103
第8章	サブスペースのヘルパーたち	111
第9章	空からの攻撃	119
第10章	銀河系連邦	128
第11章	グレイの心	137
第12章	人間の貯蔵庫	148
第13章	リアリティー・チェックへ	157
第14章	外交的解決法	161
第15章	イエス	168
第16章	初期グレイ文明崩壊の原因	179

第17章	『スター・トレック』とET支援による人類文化の変質……………	191
第18章	ふたたびイエスへ……………	203
第19章	すべてのグレイが同じわけではない……………	208
第20章	アダムとイブ……………	215
第21章	デブ導師……………	224
第22章	神……………	228
第23章	火星の聖職者……………	236
第24章	ロスウェル事件……………	242
第25章	未来の地球環境……………	250
第26章	連邦内でのようにグレイは組織されているのか……………	257
第27章	ブツダ……………	267
第28章	地球上の火星文明……………	275

# PART III 銀河系政治への人類のアプローチ

第29章 リアリティ・チェック(2)……………284

第30章 サンタ・フェ・ポールデイ山……………289

第31章 火星人との公式会見……………296

第32章 地球の低次の生命体……………301

第33章 火星を破壊した出来事……………308

第34章 未来の地球文化……………313

第35章 外交官の訓練……………325

第36章 人間政府の介入……………338

装幀——熊谷博人／監理典之

CG——飛木慎司

本文図版デザイン——鈴木祥之

翻訳協力——土屋屋個人

校正協力——安秋アートセンター

編集協力——ポーターランド編集部

このような本は、多くの人々の助けなくしては決して書くことができなかつたであろう。また、意識問題を専門とする私の先生方の助けなくしては、本書のための研究を始めることすらできなかつたであろう。

彼らがこの点で私の成長に手を貸してくれる前には、私は自分自身という存在の重要な側面に気づいていなかった。私はだれか、我々は皆だれなのかということに關する私の具體的認識は、それがほぼ完全にわからなかつた時期に比べて、大いに深まってきている。

私の代理人であり友人であるサンドラ・マーティンに特に感謝しなければならぬ。

アイデアが少し固まつた段階で、彼女は私の本をマーケットに乗せることを申し出てくれ、原稿を書き終える前の困難で不確実な時期を通じて、私の努力を支えてくれた。彼女は私を信じ、その信念は、私が多くくの学者仲間からつねに批判の矢面に立たされることが確実なプロジェクトを終了することに勇気を与えてくれた。

私はペンギンUSAの編集者、エドワード・スタックラーの助力に感謝している。

原稿が他の出版社の編集スタッフの意見を二分して暗礁に乗り上げたとき、彼は思い切つてこの本の出版に賛成してくれた。また、學術論文と比較して、私の文章を明確で平易にするよう彼が重視したことにもたいへん感謝している。ロバート・デュラント、ジョー・レノア・ジョーダン、そ

してデール・ステイブンスもまた私に有益な助言を与えてくれた。

私の妻と息子も彼らなりのやり方で私を助けてくれた。

このすべてが始まって以来、私たちがつましい「普通の」生活を送ることは不可能であった。しかしその間、妻は終始、私を支えてくれた。息子に關していえば、あらゆる人生の背後にある本当の理由を私に見つめさせることで、私の研究をより幅広い文脈で捉えられるようにしてくれた。

読者がやがて理解するように、地球外生命体は存在する。

これについては間違いない。というのも、もしこれら地球外生命体の多くが私の研究努力に協力してくれなかったら、いかなるデータも得ることができず、本書を書き上げることもできなかったであろう。本当に、これは私の本であると同時に彼らの本でもあるのだ。私が語るのは、少なくとも彼らの本当の話である。

最後に、私のしたことを理解し評価してくれるであろう読者の皆さんに、前もって感謝の意を表したい。

新しい研究に対してはつねに批判しようと待ち構えている人々がいる。私は可能な限り彼らの批判を受けて立つつもりである。最もわからないのは、この本を有益なものとして判断してくれる人々の数である。しかし、後者のグループに属する人々がどれだけようと、私はそのような人々に感謝する。もし私がここで報告する内容によって読者の人生が少しでも豊かになるとしたら、私のすべての努力は報いられたことになるであろう。

## プロローグ 二つの地球外文明について

本書は、我々がすでに知っている地球外知的生命体の二つの社会を詳細に調査したものである。さらに明確に言えば、本書は、その活動がここ地球においてひじょうに顕著となってきた宇宙文化を何年にもわたって観察してきたことの結果として生まれたものである。その要点は、死滅した二つの宇宙人世界の歴史と、いかにしてその文明が故国の崩壊を生き延びてここ地球にやっ来てたかを描くことにある。

これら生存者たちには必要なもの、絶対的に必要なものがある。しかし結局のところ、同じようなことは我々人類にもあてはまる。この銀河系での三者の出会い、三種族が同じ運命を共有することになる未来へとつながっているのである。

三種族を結びつける大きなつながりは、三種族すべての故郷が、惑星規模の生態系破壊をすでに経験したか、あるいはまもなく経験するだろうということである。我々人間は、どのようにして我々以外の二種族が塵の惑星で生き残ってきたかに関して本当に多くのことを学ぶことになるであろう。

う。

本書に示された調査は、最近アメリカ軍の諜報活動を目的として開発された、厳格で熟練を要するRV（リモート・ビューイングII遠隔透視）の実験手順を使用しながら行われた。

これらのデータは想像や寓話ではなく、正確に現実を反映している。私は自分の調査に利用した方法について弁解するつもりはない。もともと、この方法なくして調査は不可能であったが、この手段は新しいものであるが、他の多くの科学者がそれを受け入れるか、あるいはそれに通じているかどうかに関係なく、有効で信頼性の高いものである。

本書で述べることは、私自身の訓練期間中とその後数カ月間にわたり地球外生命について知りえたことである。本書のパートIではRVの問題と歴史を紹介する。また、RVや意識にかかわる他の高等技術における私の強化訓練プログラムに関係する自分自身の話にも触れる。

この本の中心はパートIIにあり、そこで地球外生命にかかわる私のデータと分析のすべてを詳細に記述する。私はこの資料を日付順に選んでパートIIに収録したので、読者は私とともに発見のステップを共有することができるであろう。

パートIIIでは、我々が必要としていることやさらに広範圏の銀河系コミュニティが必要としていることで我々にわかっていることを示しつつ、現在の人類の状況について分析を行う。また、種族間外交への我々の参加に関して私はいくつか提言を行っている。それには、銀河系の集合的組織である銀河系連邦において、我々の外交が結果として人類を代表できるような研究の方向を含む。

地球外生命体は数多く存在している。

本書は、最近地球を訪れている二つの地球外文明について、我々が現在知っていることを説明す



る。これは地球外生命体についての憶測の本ではない。本書は、それらの事実の解釈であると同時に、我々自身の惑星とは別の世界において進化してきた実在の社会に関して、私が喜んでその信憑性を弁明できる多くの成果からなっている。

一つの分野での最初の研究というものがつねに存在するが、これはそうした研究なのである。

この方法が広く受け入れられるときはまもなくやって来る。これについて私の心にはまったく疑いはない。それまでの間、我々はこれら新しく発見された方法の使用を恥じる必要はない。その技術の使用が厳密で科学的な基準にしたがっている限り、新しい世代の科学者たちがこれらの方法に通じるようになるであろう。本書はこうした基準のための基線を敷くものである。

本書のデータ収集に利用された手段は、信頼できる社会科学の研究において利用される方法と同じく厳密にコントロールされている。これは、社会科学において一般的に利用される方法と手段が同じであるというのではなく、むしろ、データ収集の過程において科学的原則が厳密に適用されるということである。のちにさらに詳細に説明するように、これには結果に再現性を備えた原理があるという点で特筆すべきことである。

人類には現実の先入観にしたがわない情報を切り捨てようとする驚くべき能力がある。科学者たちも人間であるため、他の人々と同様にこの性向に苦しんでいる。

あるグループにおいては、これらの先入観に満ちた世界観が現在、パラダイム（規範）として受け入れられていることが知られている。外部から得られる情報のすべてがこれによって判断されるという意味で、これは内部に版型を備えた情報のパターンである。

この外部からの情報は、新聞や友人、大学での講義、書物やその他の情報源から得られる。しか

し、受け入れられている情報のパラダイムにあてはまらない考えに出くわすと、人間はその新しい情報を信じまいとする激しい欲求に駆られがちである。時々、いいわけのすべてが理になつていられると思われることがある。それは、確立されたパラダイムは簡単には放棄されないということである。

こうした現象のために、人間社会には多くの異議がもち上がる。たとえば、テレパシーが可能であるという考えを支持できる事実など何もない、という物理学者を多く見つけ出すことは容易である。他方で、そのような物理学者の多くは、いつものように、唯一あるいは複数の非物質存在とのテレパシーによるコミュニケーションをもつために、少なくとも週一回は家族とともに礼拝所へ出掛けることは、あつさりとは決断する。

実際、読者が本書を読み終えるときにははつきりするだろうが、そのようなテレパシーやRVは「現実」ではないと考える大多数の科学者たちは、単に間違つたことを一生懸命に学んできたか、あまりにも偏つた考えをもつために対象を客観的に捉えることができないのである。

しかし間違えてはいけない。保守的な科学界の中でも批評眼のある者たちは、少なくともいくつかの（サイ現象）は絶対的に存在することを十分承知しているのである。

そのような現象を科学的に証明する例はいくつも存在している。特にダリル・J・バーンとチャールズ・オーナートンの二人の心理学者による注目すべき報告——人間同士のテレパシーによるコミュニケーションに関するもので、十分に照査された一連の研究——は、心理学の主流雑誌『心理学紀要』の一九九四年一月号に掲載された。確かに大多数の科学者は懐疑的である。しかし討論の結果、最終的に出てきた結論はもはや疑うことのできないものであった。時がたてば、ますます多

くの主流科学者がサイ現象の数々を「発見」することになるであろう。

偉大なる物理学者マックス・プランクは、科学における飛躍は、だれかが重要な発見をしたり、人々が新しい考えを熱心に受け入れることで起こるのではない、とかつて言及したことがある。むしろ世代の変化が科学の進歩を可能にする、というのだ。年配の科学者たちは自分たちが大半の研究を行っていた若い時期に、主流であった知的なパラダイムに固執しがちである。そのため、新しい科学的発見が広く受け入れられるようになるには古い世代の科学者が新しい世代の科学者に置き換わるまで、社会はたびたび待つことになる。

過去一五年以上にわたり、RV——空間と時間を超えて遠距離からの情報を正確に知覚する能力——の科学的理解は大きな進展を見せている。もともと、広く科学界に受け入れられるほどにはまだ至っていないが。

人類の歴史を通して、明らかに天賦の才をもったある個人が遠隔地からの情報を知覚する能力、たとえば、地球の裏側の家を知覚できるような感覚をもっていることは繰り返し注目されてきた。しかし科学には、なぜ「天賦の才」のある個人にだけそのようなことが可能である（必ずしもいつもうまくいくとは限らない）のか解明できないために、その能力の現実性がつねに疑われてきたのである。

現在、すべてのことが変わりつつある。過去一五年間における最も重要な発見は、我々はもはやそのような特別なことをなすとげられるために、天賦の才をさすけられた個人に頼る必要はなくなったということである。才能は教わることが可能で、科学者を含めだれでもがそれを習得し、すばらしい正確さでそれを利用することができるのだ。さらに、訓練を積んだ個人の信頼性は、最も優れた

生来の超能力者、霊能者のそれよりも総じて大きいのである。適切に実践することにより、訓練された透視者を使いながらRVを行う研究は、事実上、ほぼ完全な精度で再現可能な結果をつねに生み出せる。

このRVの訓練形態を最初に習得したのは、アメリカ軍のメンバーたちであった。彼らは陸軍の高度に機密扱いとされた特別作戦チームや情報将校らの配下にあった。これら超能力戦士（サイキック・ウォリヤー）の訓練の背後にあるそもその目的は、合衆国の敵をスパイすることであった。しかし、ひとたび彼らの訓練が完了すると、グループはミサイルの格納庫やクレムリンの壁よりもさらに面白い目標物をたびたび見始めるようになった。グループは未確認飛行物体、そしてさらに明確に言えば、地球を訪れる地球外生物の謎を調べ始めたのである。

私自身が軍の遠隔透視者たちのグループと交流をもつようになったのは、以前にもましてさらに幅広く応用可能となった新開発のRV機材の使用を希望し、彼らの多くが退役したあとのことであった。

UFOに関する彼らの初期の骨折りに対する私の最初の性格づけは、彼らは宇宙船を飛ばしている存在にあまりにも大きなエネルギーを注ぎすぎたということである。私の考えでは、彼らは自分たちの努力を、宇宙船を飛ばしている社会そのものを理解することに向けるべきであった。

私は、我々の銀河系における感覚生命体の構造に関係する広範な質問に答えるために、重大な貢献ができることを希望して、社会学者として彼らに仕えることを申し出た。これが本書の起源であった。

今日までにRVがUFO現象について明らかにしたこと全貌は、ほとんどだれにも知られてい

ない。本書では我々に与えられた現在の知識を利用して、謎の数多くの断片を、できるだけ組み合わせて試みている。

これは、決定的なUFOの本でも地球外生命(ET)の本でもない。むしろ、新しいデータ収集法の数々を利用して、信頼できる調査を試みたものといえる。これと同じ方法を利用する他の研究者たちがさらなる発見を重ね、ETに対する我々の理解が飛躍し続けることを期待する。

## 種族の選択

本書は二つの地球外文明の社会と故郷を調査する。

一つは、地球で恐竜たちが歩き回っていた時代に火星で栄えた古代文明である。それは人口をはるかに減らしているが、現在もかろうじて存在している。

もう一つは、〈グレイ〉と呼ばれる生き物集団の文明である。本書でこれら二つの文明を選択したのは、透視者がそれ以外に地球外文明を発見しなかったからではない。実際は、他にも地球外文明は発見された。私がその二つの文明に焦点を絞ったのは、この地球における我々自身の文明の現在の進化において、彼らが特に重要な役割を演じているからである。

ある実的な問題もまた、火星とグレイ文明がこの時期、適切な調査的であることを示している。火星は物理的に我々とひじょうに近く、その惑星の歴史には人間にとって当然というべき関心がある。

人類は近い将来火星を訪れることができるようになるだろう。それによって、我々はその文明の

考古学的遺跡を間近に調査できるようになり、それは本書で示されたRVデータに物的証拠を加えるであろう。グレイに関していえば、彼らは長い間、火星人と人間の両方に密接にかかわってきている。この太陽系における彼らの行動範囲を考えると、唯一意味をもつのは、グレイが何者であるかを説明し、彼らの興味深い歴史を描写することである。

## リスクを負う責任

これはフィクションではなく、事実に関する本である。

私はさまざまなデータ収集法のもとで得られた自分の観察結果の正確さを繰り返しチェックし、一九九五年半ば現在、他の訓練された遠隔透視者たちも、私の基本的な発見の多くあるいはそのほとんどを個別に確認している。

このように、再現性は私が本書で行う主張の重要な要素である。

私は今日まで、自分が得た結果を確証するものをさらに獲得すべく、透視者たちと引き続き仕事を続けている。

健全な心をもった人物であればだれでも、私が得た結果を個別に再現するのに必要な訓練を受けることができる（本書の第35章でこの訓練プログラムについて詳述する）。再現性は、すべての科学における根本的条件である。

もしある発見が行われれば、それを発見した科学者は、発見がなされた手順を明確に説明する必要がある。そして他の科学者たちがその手順とまったく同じことを行って、その主張が正しいこと

を立証するのだ。元の実験と同じ試みをせずしてその主張を批判することは、すべて無効である。私自身の研究は、加速器をはじめ特別な実験器具を使って新しい素粒子を発見したと主張する物理学者の研究と同様に、正確なものである。

私が研究の過程で発見したものは、どんなSF小説の筋立てよりももっと意外なものであった。私は自分が知覚した現実よりもさらに驚くべきストーリーなど夢見ることさえできなかった。私が知ったことは、振り返ってみて初めて意味をなすものである。しかし、それは私の予想をほとんど裏切るもので、そのプロセスが簡単なものであったと書いてしまえば、読者に嘘をつくことになるであろう。

私は無邪気だからこの資料を発表するわけではない。これらの発見を発表することから生じる批判の嵐も期待するものではない。さらに私には、社会現象の非線形数学的説明を含め、思想に富む独創的な研究によって、苦勞して得ることができた、人が羨むような名声がある。私はこの名声を失いたくはない。

しかし、職業として科学に深くかわる者は、それに伴う責任を受け入れなければならない。科学者としての私の仕事は、大衆受けするもの、あるいは現在まかり通っている、政治的に正しいことを発表することではない。科学者は、その真実がどんなものであれ真実を報告しなければならぬし、徹底的に研究された十分に再現性のある結果を発表するにあたっては、その真実に対する他人からの予想される反発を最初から考慮に入れるべきではない。

端的に言って、人類はその進化の歴史において岐路に立っているのである。

我々は、世界共同体に深くかかわっているメンバーとして、銀河系生命の領域に入ろうとしてい

る。どの科学者も短期の業績のみを考えて、スケールの大きなこの問題に対して真剣に取り組もうとしない。

これは、他の人々が私の発見を修正あるいは発展させはしないだろうといたいのではない。私は完全ではなく、未来の学者たちは私の研究を補足し、私が犯している間違いを正してくれるだろう。しかし、私の分析の基本的側面は維持されるだろう。

私が自分の心に向けた場所に、自らの意識をあえて合わせようとする者は、疑いの余地のない真実を見つけ出すことになるであろう。



A black and white image of a starry night sky. The background is filled with numerous small, bright stars of varying sizes. In the center, there is a prominent, bright star with a visible diffraction pattern. A comet streak, consisting of a long, narrow tail of smaller stars, extends from the bottom left towards the center. The overall appearance is that of a deep-sky photograph or a stylized representation of a star field.

**PART I**

**予備知識**



## 第1章 米軍超能力戦争プログラムの歴史

本書は、現在すでにあるいはまもなく地球人類に重要で進化論的な衝撃を与えるであろう二つの地球外文明に関する書である。これは科学的遠隔透視（サイエンティフィック・リモート・ビューイング。以下SRVと略称）に関する書ではない。にもかかわらず、SRVは本書に載せたデータを得るのに利用されており、また、それは新しい科学であるため、それについて簡単に歴史を振り返ることは必要であろう。またそうすることによって、読者は、本書に利用された技術を適切に理解することができるようになるはずである。

超能力問題<sup>サイキック</sup>について米政府がかかわるようになったのは、国家の敵に関する情報を収集する必要が生じてからのことである。一九七〇年代にまずCIA内で生まれたが、研究の大部分は、何人かの有能な将校を訓練することを目的とする極秘プロジェクトを皮切りとして、米陸軍情報部によって行われた。

軍事情報の収集に伴う重大問題は、つねにエージェントが直面する危険、すなわち本部への情報

伝達にしばしば困難が生じることであった。工学機械はどんなに巧みに隠してもいずれ発見されてしまい、エージェントの命と情報は危険にさらされた。必要なのは、いかなる物理的装置も介することなく、ワシントンDCに情報を伝達する手段であった。

軍の当初の考えは、たとえばモスクワからペンタゴン内にあるスイッチを作動させることが可能なる種の超能力スイッチを開発することであった。エージェントは、イエスカノーかの返事を求められる重大情報を得る任務に割り当てられる。たとえば米軍は、ソビエトが新型兵器を保有しているかどうか関心をもっていた。その情報を得る任務を負ったスパイは、そのような超能力スイッチを効率的に使うことができるであろう。たとえスパイがKGBの監視下にあっても、データを送信していることを悟られることはまったくくないはずである。

米軍はまた、ソビエトが超能力の分野で軍事力を高めることを憂慮していた。合衆国は遅れをとるまいとして超能力冷戦が進展した。

興味深いことに、ソビエトには実際に超能力戦争プログラムがあった。彼らの取り組みは、訓練プログラムをつくろうとするよりは、最も信頼できる生来の超能力者をロシア人の中からふるいに掛けて選ぶことであった。ようやく有能な超能力者チームを集めたところで、ソビエトの努力もアメリカが直面したのと同じ問題、すなわち軍上層部の抵抗によって妨げられた。両者とも抵抗の矛先は、UFOのような求められてもいない特定の目標物に焦点を当てさせないことに向けられた。しかし、時々その抵抗は、より一般的にデータの収集方法それ自体の性格にかかわっていた。

米ソ双方の多くの指揮官たちは、しばしば、事実上宗教的ともいえる保守的または伝統的な信念に賛同している。たとえそうでない非宗教的な異論の場合でも、それは事実上、多くの人々がその

ような技術の潜在能力を認めることを欲していないことを明らかにした。抵抗は軍を超えて広がった。政治的に任命された国防長官直属の高級文官が、UFOをテーマとした最高機密のブリーフィングの際、宇宙人テクノロジーと超能力情報の話題がもち上がるや猛烈に反対し始めた一例を、私は聞かされた。その役人は、我々が死んで天上の情報源から教えられるまで、いかなる人間にもそのような情報は知らされないことになっていると断言した。ソビエトの状況がそれよりもよいはずがないことは明らかだった。ロシアの役人たちも同様にその話題に恐れをなしたために、彼らのプロジェクトは資金不足におちいった。

問題にCIAが最初にかかわったのは、生来の超能力者たちと仕事をすることに始まる。CIAが内密にニカラグアの港へ機雷を設置したことが議会の注目を呼ぶと、CIAは政治的トラブルや困惑をまねくようなすべての部隊と計画を一掃した。これでCIAの超能力戦争への参加は終止符を打ったのである。

超能力「スイッチ」を開発するプログラムは決して成功しなかった。しかしその努力は、情報収集において超能力技術を適用するという軍の探索につながった。この点で、二つの計画は特筆すべきものである。一つは、プリンストン大学のPEAR（プリンストン工学超常調査）研究所のロバート・ヤン教授による仕事で、同研究所は軍や諜報機関から資金援助は受けなかったが、諜報機関の多大な関心を呼ぶことになった。しかし、軍の関心を最も呼んだのは、ハロルド・パソフ博士の指揮の下で行われたSRIインターナショナル（以前はスタンフォード調査研究所と呼ばれた）のRV実験所における研究であった。

米陸軍は、CIAを悩ませたのと同じ政治的問題は抱えていなかった。陸軍にとってなすべき任

務は唯一、問題となっていることをやるだけであった。CIAが超能力をめぐるトラブルにおちいつている間、陸軍はさらに困難な諜報問題のいくつかを解決すべく、秘密あるいは「闇」部隊の一団を編成し始めた。

それら特別部隊の一つは分遣隊G（Gは〈あぶり火〉の意味）というコードネームであり、軍のどんな組織図にも現れなかった。分遣隊Gは、合衆国にとって敵となる軍の最極秘計画を探るため、超能力技術の利用を研究する仕事を、まず割り当てられた。

部隊の特異な性格により、集められた情報はほんの一握りの上級将校と政治的に任命された高級文官だけに知らされた。このプロジェクトは有益な情報をもたらすことがまもなく明らかとなった。もしその計画がもつと練りあげられていたら、当面の枠を超えて、それは拡大されていたであろう。計画拡大の障害は、遠隔透視（リモート・ビューイング。以下RVと略称）現象が科学界では認知されていなかったことであった。陸軍は、やがてその努力が報いられて資金を増やせるよう、RVに十分な科学的信頼性を与えるすべを見つけ出す必要があった。このようにして軍は、その現象を確認しようとする科学的努力に資金助成を与えるようになったのである。

超能力者を使う情報収集における初期の努力には、今日行われているようなRVは含まれていなかった。それは、生来の超能力者である人々の意識変容状態を維持することに焦点が向けられた。操作上、これは通常、ベッドに横たわって頭や足に電極をつながれた超能力者たちも含まれた。電気装置は、被験者が体内電圧で一八〇度の極移動を達成したことを示すのに用いられ、それはつねに変容状態が達成されたことを示すものであった。部屋の中の「ファシリテーター」と呼ばれる別の人物が被験者に目標に向かって「動く」よう指導し、彼らが見たものを報告する。

これらの実験は多少有益な情報をもたらしたが、このようにして収集された情報は、新たにセツションを行ったり被験者を変えると、必ずしも一貫しないものであった。軍は高い信頼性を求めていた。もしお偉方がそのテーマに価値を認めるようになれば、それに越したことはなかったのである。

生来の超能力者であるインゴ・スワンが、信頼できる情報収集を可能とする実験手順を開発して、RVにおいて画期的躍進を遂げたのは、一九八二年のことであった。スワンは、スタンフォード調査研究所を含め、さまざまな科学機関において行われた広範囲にわたる実験に参加していたため、長年を費やして自らの発見をなしたのであった。彼は地理座標の利用に基づいたRVの形式を開発し、その形式は「座標（ターゲット対応番号）透視」として知られるようになった。

のちにスワンは契約して、その技術で軍人、軍属を含む一二人以上の個人を訓練した。彼らに施された最初の訓練は一年間で終了した。訓練生に対して変容意識の概要を紹介するために、チームは最初にバージニア州のモンロー研究所に送られ、そこで彼らは体外離脱状態の正式な訓練を受けた。

ワシントンDCには、つねに国会議員やプレス関係者の注意を引く、少なくとも一つの大スキヤンダルがある。しかし大スキヤンダルのあとにいつでも、将来そのような事件を再発させないよう当局は行動を起こす。イラン、ニカラグア、オリバー・ノース中尉事件のてんやわんやの間、国防長官は、国防組織に巣くうごろつきや適切な監視を欠く「ノミ屋」組織の探索に着手し、それは大統領を政治的に困惑させるほどだった。彼はRV分遣隊を見つけ、調査させるために査察官チームを送った。RVチームは調査部隊とされていたため、民間の監督者たちは、その研究は「常軌を逸

したものではない」と擁護することができた。

国家の最も高度に訓練された透視者たちにとって、そのときから運営上の問題は悪化に向かうことになった。ワシントンにおいて彼らが及ぼした影響力はさほど大きいものではなく、やがて消えていった。

しかし、このときまでに、チームのメンバー全員が、自分たちには特別の視覚能力が与えられていることを自覚していた。その能力は国境を超えた責任をもち始めることになった。彼らの内なる目を上方の天の星々に向けさせたのは、より偉大な思想に奉仕しなければならないという新たな要求と並んで、この責任を自覚したことであった。一九八〇年代の初期にこれらのすべてが始まったとき、彼らのだれも、自分たちの能力がやがて人類自身の進化の道を変えることが可能なある使命に導くとは、想像もしていなかったのである。

\*1 S R インターナショナルで幅広い仕事をしたもう一人の生来の超能力者は、ジョゼフ・マクマニグルである。最近、マクマニグル氏はR Vをテーマにひじょうに読みやすい本を出版している。その本『心の旅路／遠隔透視を通して意識、時間および空間を探索する』には、また、火星における過去の文明に関して、自身のR Vをいくらか記した章がある。実際、コントロールされた状況のもとでの私自身の研究は、この古代火星文明に関するマクマニグルの観察の多くを支持している。



## 第2章 遠隔透視(リモート・ビューイング)

### 背景

おそらく、近代のRV(リモート・ビューイング≡遠隔透視)の歴史的起源に関する情報を、唯一最もよく説明したものは(実験手順自体であり、それを使うための軍のプログラムではない)、米軍で使用された実際のRV実験手順の初期バージョンを發展させた人物、インゴ・スワンによって書かれた一冊の本である。

自身の著書『エプリバディ・ガイド・トゥ・ナチュラルESP』において、スワンはなぜRVが機能するのか、という基本的で理論的な概観を描いている。

スワンの見解はRVに関する仮説あるいは理論であることは理解されなければならない。スワンは画家であり、並外れた能力をもった生来の超能力者であったが、科学者ではなかった。にもか

わらず、彼の見解はその問題に関して直感的に導かれた貴重なアイディアの集大成である。

読者はまず最初に、ここで使用される専門用語・RVがテレビやタブロイド紙に登場する超能力者たちの技術とはまったく別のものであることを理解すべきである。

RVは正確につくられた実験手順を含む厳格な訓練法であり、有能な教官によって十分に訓練された個人のみが、データ収集の目的でそれを正確に利用することができる。

本書の読者は、少なくとも一時的に、事前に得た情報や生来の超能力者との体験に基づいたどんな意見（賛成であれ反対であれ）をも脇へ追いやっておくのが賢明であろう。本書には、方法論的にも内容的にも、ほとんどすべての読者にとってまったく新しい情報が含まれているのだ。

## **SRV(科学的遠隔透視)**

RVは進歩と洗練の歴史を通して、特殊技術から科学へと発展し、私の研究におけるRVの利用はまた、技術と理解を高めることを促した。一九八〇年代、ターゲット対応番号透視を通して現代の軍が行った手続き上の最初の革新は、地理座標の使用が要求されるという制限が除去されたことである。しかし同時に現代の軍によるRVは、ターゲット対応番号透視を利用したものよりも膨大な量と異なる質のデータを収集することができた。

興味深いことに、そのように軍が発展させた手続きを使用している民間会社が、現在存在している。さらにその手続きは、使用する人物に応じて、しばしばさまざまに命名された。軍が開発した手続きを利用する私の訓練士でさえ、それを改名したこともある。しかし、私の知る限り、そのよ

うにさまざまに分類された手続きは米軍で開発され、今日も軍によって使用されているものと同一か、あるいはほぼ同一であるといえる。

本書のために利用したRVの形式は、私が「科学的RV」と呼ぶものである。SRVは、軍が開発した手続きから引き出した技術でもある。SRVは、どのように何の目的で利用されるかという点で、現代の軍の手続きとは多少異なるものである。SRVは、構造においてはRVのための現代の軍の手続きと同一である。しかしSRVは、遠隔透視者とテレパシー能力のある存在との間に双方向コミュニケーションを可能とするまでに達している。

軍パージョンのRVは、つねに受動的にデータを獲得する手続きであり、そのために決してコミュニケーションの目的で使用されたことはなかった。にもかかわらずこれから論じるように、私は軍による利用についてはなく、軍が引き出したRVの手続きの構造を描写する。そのため、私がSRVの構造に言及するとき、私は現代の軍が開発した手続きについても一般的に対象としている。SRVは、一連の実験手順あるいは手続きで、それはしばしば「無意識の心」と呼ばれるものを意識の心と交信させることを可能とし、それによって貴重な情報を意識のあるレベルから別のレベルへと伝える。

無意識の心から来る情報は典型的に直感と考えられている。それは、ある者が他の方法では直接知りえない何ものかについての感覚である。たとえば多くの母親は、いつ自分の子供の一人が深刻なトラブルに出くわすのか、端的にわかると主張するだろう。彼女たちは子供の状況について何か特別なことを教えられていなくとも、いわば自分の体でそれを感じとるのである。さらに一般的に直感とは、物理的な意味における情報の伝達なしに、空間と時間を超えて作用する。SRVは直感の

解釈を体系化し、正確に、紙の上に転写し、のちに分析することを可能にする。

合理化や想像力といった通常の目覚めている状態では、ある知的な思考過程を通じて、意識の心はRVの結果に干渉してしまいがちであるが、SRVを使用すると、そのような影響が出る前に、無意識からやってくる情報はそのまま記録されることになる。これらの実験手順の一部は、この問題に関する現存の歴史的文献において描かれている透視対象の絵図にひじょうに似通っている。実際、絵図はSRVの最初と三番目のステージの重要な構成要素となっており、ターゲットに対する基本的な情報を引き出すために、透視者たちはこれらの図を解読するように訓練されている。

基本的にターゲットに関する情報は、訓練された個人の無意識の心を通してやってくる。透視者たちは徹しい実験手順のもと、セッション中にこの情報を即座に書き留める。

SRVのルールにより、透視者の「意識の心」による知的思考は、セッションが終了するまでその活動を自重させられる。実験手順から逸れることは、プロセスにわずかながらでも「意識の心」を介入させてしまうことになる。そうすると、「意識の心」は想像力を働かせて、即座にデータを解釈しようとするため、惨憺たる結果をもたらしてしまう。

これがデータから正確さを失わせることは、経験からいえることで、それゆえに訓練されていない生来の超能力者は、概して信頼のおける遠隔透視者とはいえないのである。

データが収集されるまでは分析をしないことが、SRVの最も重要な特徴である。これなくしては、RVは白昼夢よりもっと信頼できないものとなる。

次の点はきわめて重要である。

人はある種の宗教的概念を信じなければならぬという意味で、私は自分が本書で書くことをだ

れかに信じるよう求めはしない。本書は私の調査を報告したものである。すべての優れた科学調査同様、これもまたSRVの実験手順にしたがって訓練した者であれば、だれにでも独立的に再現可能なものである。したがって、他の研究者も、私がここで報告することのすべてを確認することができる。

さらに、私はすでに、ここで報告する情報のすべてを証明し確認することを完遂している。これを確認するメカニズムはのちに本章で触れるが、これには信仰や信念の入りこむ余地はなく、他のどんな科学的調査も存在しないことを強調しておくことは重要である。唯一、データとそれらデータの知的解釈が問題となる。ここで、私は大量のデータを提示し説明する。他の研究者たちもSRVの実験手順にのっとって適切な訓練さえ行えば、容易にそのデータの正確さを立証することができる。

\*2 情報転移における無意識の役割についてのさらなる情報は、ターグとバソフの一九七七年の著書、ウィルバーの一九七七年の著書、マウロマティスの一九八七年の著書を参照。

## ターゲット現象

SRVはつねにあるターゲットに焦点を合わせる。ターゲットには情報が欲しいすべてのものが対象となりうる。典型的には、ターゲットは場所や出来事、人々である。しかし、さらに興味を掻き立てるターゲット、たとえば人の夢や神についてさえも対象とすることが可能である。ある者

は、「意識の心」に理解可能な方法で必要な情報を与える無意識を頼る。

S R Vのセッションはターゲット対応番号を使用する一連の手続きを執行することによって始まる。それらは基本的にターゲットに割り当てられた、ランダムにつくられた二つの四桁番号であり、その番号がどのターゲットに相当するのか遠隔透視者にはわからないようになっていゝる。これには番号を使用することが便利であるが、文字もまた同様に機能する。明らかに、これらの番号はターゲットの地理的所在を表すものではない。透視者の「意識の心」に対して、番号はそれ自体では意味がない。

ターゲットの名前よりもむしろ番号を使用することにより、「意識の心」とデータ収集のプロセスから生じる想像力とを引き離し、それによって、憶測や他のデータ汚染を避けることになる。さらに、さまざまな経験から、たとえ対応番号が与えられるだけでも、「無意識の心」は即座にターゲットを認識することもわかっている。実際、訓練において、しばしばターゲット対応番号は、まったくそれ以上の情報なしで透視者に与えられる。そして、R Vが終了するまで、その透視者はターゲットが何であるのか教えられずに、ターゲット情報を得ようとこれらの番号においてS R V実験手順を実践することになる。

これらのターゲット対応番号を使用しながら、遠隔透視者はセッションを通してS R Vの厳しい実験手順にしたがうことになる。ターゲットとの精神的な関係は、いわゆる信号を生み出す。透視者が信号情報に対する精神的嗜好をしっかりと見極める術を学ぶことにより、ターゲットからやってくるすべての情報は、汚染した情報（たとえば想像力から生じるもの）とは区別されるようになる。そして、各セッションの終わりに、そのR Vのデータと比較するために、透視者にはターゲッ

トを実際に描いたものが与えられ、それによって、データ収集の過程におけるフィードバックを得ることになる。

## SRV実験手順

SRV実験手順には七つのステージ（段階）がある。各ステージにおいては、異なるタイプの情報がターゲットから得られる。もしターゲットに関する必要情報が早い段階で得られている場合、しばしばセクションは七つのすべてのステージを踏まずして終了することがあるが、各ステージは、ステージ1からステージ7までの一連のSRVセクションに関係している。

SRV実験手順の七つのステージは以下のとおりである。

「ステージ1」ステージ1とステージ2は本書では「予備ステージ」として言及され、最初の現場コンタクトを達成できるように考えられている。ステージ1でターゲットに関して得られるデータ、たとえば、ターゲットの現場に人工構造物が存在するかどうかは、大ざっぱなものである。

「ステージ2」このステージでは現場とのコンタクトが増える。このステージで得られる情報は、ターゲットに関連した色や表面の手触り、温度、味、匂い、音などが含まれる。

「ステージ3」このステージではターゲットについて最初のスケッチが行われる。

「ステージ4」このステージにおけるターゲット・コンタクトはかなり詳細なものである。ステージ4では、無意識は「問題解決」において全面的にコントロールされ、それによって情報の流れを意識の心に向けさせる。

「ステージ5」このステージでは、部屋の中の家具のように特定の構造物に関する詳細が得られる。ただ、もし特定の対象に関して、そのように詳細な情報が必要でなかったら、このステージはしばしばSRVセッションにおいて省略される。

「ステージ6」このステージにおいて、透視者はある指導の下に現場の探索を行うことができる。透視者は無意識をある特定の仕事をさせるよう仕向ける、ある限られた意識的かつ知的な活動に携わることができる。ここでは時間系列と地理的所在の整合性が分析される。

「ステージ7」このステージは、地名のように現場に関係した聴覚的情報を得るのに利用される。

## RVデータグラフィック

すべてのRVデータが同じとは限らない。じつにさまざまなタイプのデータがあり、すべてひじ



ように異なる状況の下で得られる。どんな状況下でも、RVを行うのは簡単なことではない。ある者は自分の目を閉じずに突然ターゲットを視覚する。各セッションには約一時間を要し、ターゲットに関連する物体や存在、概念などを確実につかみとるために、しばしば同じターゲットに対して数回のセッションが必要とされることもある。

RVデータには六つの異なるタイプがある。さまざまなタイプのデータにおけるある明確な特徴は、RVのセッションを始める前にターゲットについて透視者がもつ情報の量にある。

この情報はしばしばセッションごとに異なる。データのタイプで他にも重要で明確な特徴は、以下にさらに詳述するが、透視者がモニター（監視・聴取者）と呼ばれる人ともに行うかどうかにある。

セッションの目的に応じて、たとえば、実験手順の七つのステージまでの間には、次々に入れ替わって、六〇〇もの異なることをする必要があり、これら多くの仕事の背後にある基本的な概念は、心の分析的部分がターゲット情報を歪めたり、解釈したり、他の方法でその情報を汚染させたりする前に、できるだけ早く（紙の上に）それを記録することにある。セッションの最後に、透視者はさまざまな形態のデータとともに約二〇枚の紙をもち、そして、それらのデータは解読、解釈、要約されることになる。

SRVの間のターゲットとのコンタクトは込み入っている。しばしば、セッションの半ばあたりで現れ、透視者は自分が同時に二カ所にいると感じるような特別な感覚を体験し始める。この時点で、RV信号としてやって来るデータの速度はかなり速いもので、透視者にとっては、できるだけ短時間で書き留める必要がある。

## 【タイプデータ】

遠隔透視者がセッションを単独で行うときは、データ収集の状態はソロ（単独）といわれる。セッションがソロで、透視者がターゲットをとり上げるとき（そのターゲットについて事前に知識がある場合）、そのデータはタイプデータと呼ばれる。

事前にターゲットを知っている場合はフロント・ローディング（事前告知）と呼ばれる。フロント・ローディングはしばしば必要なものである。

すなわち、すでに知っているターゲットについて透視者がただ何かを知りたい場合である。このタイプのセッションでやっかいなこと（主に未熟な透視者に影響をもたらす）は、透視者がターゲットに関して事前にある考えを抱いている可能性があるため、透視者の想像力がデータを容易に汚染させることである。それが、RV実験手順の厳密な構造にしたがって、このタイプの汚染を抑える重要な理由である。汚染の危険は経験によって確実に減少し、経験は実験手順の構造に厳格に留まる習慣を植えつける。

## 【タイプ2データ】

未熟な透視者にとつては、汚染の危険はタイプ2データで軽減させることができる。このタイプのRVセッションでは、透視者はソロで行うが、特定のセッションのためにターゲットを選ぶことはない。ターゲットは前もって決められたリストからコンピューターでアトランダムに選ばれる。コンピューターは透視者にターゲットの番号のみを与えるのである。透視者はターゲットのリスト

に馴染みがあるかもしれないが（そして、本当に、リスト作成のためにターゲット選びに携わってきているかもしれないが）、どの番号が各々の特定ターゲットに相当しているのかについては、コンピュータだけが知っている。透視者の意識の心には、どのターゲットがどの番号に相当しているのかわからないため、彼らはターゲットに関するすべての情報を引き出すために、自分たちの無意識を利用しなければならない。そのように、透視者はフラインド（目隠し状態）でセッションを行っていると見えるので、ターゲットに関する予備知識（またはフロント・ローディング）なしで行うことと同じことになる。

## 【タイプデータ】

ソロでフラインドによるセッションの別のタイプは、タイプ3データと呼ばれるものを収集するために利用される。タイプ3データにおいては、ターゲットは透視者以外のだけかによって決定される。たとえば、RVの会社は、ターゲット対応番号をもつ本社から全米に住む熟練透視者のグループに対して、ファックス送信が可能である。会社の経営者たちはターゲットを知っているが、透視者たちは知らない。透視者たちも互いに連絡をとることはない。彼らはまたターゲット、たとえば場所とか出来事に関して、限定された、憶測の働かない情報を受けとることがあるかもしれない。透視者たちは単独で座標を使いながらセッションを行い、それからその結果を本社にファックスで送り返す。経験上、複数の透視者を使用して確認される情報は、毎回一〇〇パーセントの精度を示すことがわかっている。さらに、透視者たちが時間と空間の異なるポイントで、ターゲットに「立ち寄る」ことがあるかもしれないので、さまざまなセッションによって、補足的な見通しを得るこ

とができ、描写はさらに完全なものとなる。

ソロのRVにはいくつか障害がある。透視者たちが自らのSRVセッションを行う際、実験手順は彼らが自分たちの心の分析的部分を十分に使用することを妨げようとする。こうして、透視者たちは次に何をするのかわからずに、自分たちがターゲットを透視していることに気づく。ソロのセッションはターゲットについての貴重な情報を与えるが、他のだれかが誘導を行うときには、さらに詳細で深みのある情報が得られる。この第三者はモニターと呼ばれ、モニターされたセッションは劇的で興味深い出来事になりうるのである。

## 「タイプ4データ」

モニターされたSRVセッションには3タイプある。モニターはターゲットを知っている、ターゲットの番号のみを透視者に伝える場合、これはタイプ4データを生む。これらのタイプのモニターされたセッションは、訓練の間かなり利用される。モニターは透視者を誘導する最大量の情報をもっているため、タイプ4データは研究の観点からはひじょうに有益になりうる。これらのセッションにおいてモニターは透視者に、何をして、どこを見て、どこに行くのかを教え、またテレパシーを使う存在に出くわしたときには、何を尋ねるのかさえ教える。これは、透視者がほぼ全面的に自身の分析的精神を放棄することを可能にするし、この間、モニターがすべての分析を行う。

モニターと透視者はセッションの間、同じ部屋にいる必要はない。モニターと透視者の間に必要な対話にはスピーカーフォンを使用することができる。これにより、たとえモニターと透視者が数千マイルも隔てた異なる場所にいるとしても、モニターされたセッションを行うことを可能とする。

そのようなセッションで一、二度は、情報の流れを適切に調整し保証するために、図式によるデータをモニターにファックスすることも可能である。そのような状況は遠隔モニター・セッションと呼ばれる。本書のために使用された主なデータの多くは、この種のタイプ4データから得られたものである。

## 【タイプ5データ】

特に重要な状況では、モニターが誘導する可能性を排除するために、研究者たちはデータ収集に完全なブラインド状態を欲するかもしれない。そのような場合、外部の機関から与えられるターゲット対応番号、あるいはターゲット・リストからコンピューター・プログラムで引き出されたターゲット対応番号のいずれかを使用し、透視者とモニターの両者はブラインドされる。このような方法で収集されたデータはタイプ5データと呼ばれる。この状況下で行われるセッションはかなり信頼性が高い。不利な点は、このようなセッションは他のタイプのRVより時間がかかり、セッションの最後にモニターが最も有益な情報を選ぶことが許されないことである。それは、飛行機が動き出してしまったあとに、飛行士に自分の仕事をするよう求めることと少し似ている。もし全体の飛行プランが出発前に整っていたら、おそらく飛行はさらに円滑にいくことであろう。しかしながら、タイプ5データはある状況ではきわめて有益であり、それは全体の結果にさらに信頼性を付加することになる。

\*3 もしリストが長ければ、モニターと透視者がリストの中身について気づいているかどうかは問題ではない。経験から、もしリストが十分に長ければ、無意識の心はターゲットが何であるのかを推測しようと試みるのを諦めることがわかっている。

## 「タイプ6データ」

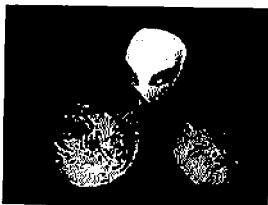
最後のタイプ6データは、ターゲット情報に関してモニターと透視者の両者が前もって知らされている状態で行われるセッションから得られる。このタイプのセッションは、透視者が特定のターゲットに関してさらなる情報を得る必要があるが、ソロのセッションが無理な場合に利用される。この設定では、モニターは誘導を引き継ぐが、透視者とモニターはセッションの行方に関して事前に情報交換を行う。

## データ・タイプの要約

まとめると、異なるカテゴリのRVデータは以下のようになる。

「タイプ1」ソロ。フロント・ローディング（事前にターゲット情報を知っている）。ターゲットは透視者に選ばれる。

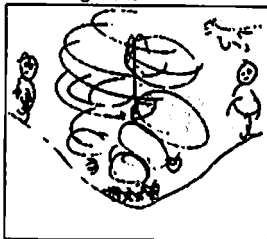
「タイプ2」ソロ。ブライインド（透視者は事前にターゲットを知らない）。ターゲットは前もって作成されたターゲット・リストからコンピューターでアトラダムに選ばれる。



Sketch of the concert  
at the target site



Sketch of the explosion  
at the target site



コートニー・ブラウン博士の研究はインターネット上で公開されている。2つのスケッチはアトランタオリンピックにおける爆弾テロのビューイング結果を博士の生徒が描いたもの。Brown's Home Page Address: <http://www.farsight.org/>

「タイプ3」ソロ。ブラインド。ターゲットは外部の機関によって決定される。

「タイプ4」モニターされる。透視者はブラインドで、モニターはフロント・ローディング。

「タイプ5」モニターされる。透視者もモニターもブラインドで、ターゲットは前もって作成されたターゲット・リスト、または外部の機関からコンピュータでアトランダムに選ばれる。

「タイプ6」モニターされる。透視者もモニターもフロント・ローディング。

いずれのタイプのデータも他のすべてに勝るといふことはなく、それぞれに利点と欠点がある。

## ターゲット

本書のためのデータを得るのに利用されたSRVセッションの大多数は、タイプ4の状況下で行われた。これは、私のモニターはターゲットを知っているが、遠隔透視する私はプラインドでセッションを行ったことを意味する。セッション用のターゲットのほとんどは、私のモニターと私が共同でまとめた四〇のターゲット・リストからランダムに選ばれた。調査中、私は自分のモニターがそれらが何であるのかを秘密にして約一五のターゲットを他に追加することを許した。モニターもまた、私が見ようとしているターゲットがその特別なターゲットの一つであるのか、元のリストの一つであるのかに関しては、事前に注意を与えなかった。

モニターと私がセッションをやり始めて以後、私は故意に元の四〇のターゲット・リストを見ることを拒むことにした。リストを通して（非連続的な）進行の跡をたどるのを避けたかったからである。プラインドの状況下でデータが収集されたということは、私が元の四〇のターゲット・リストを一度も見なかったことを意味するものではない。それは、セッションごとに私がどのターゲットに接するかに関しては、知識をもっていなかったことを意味する。

SRV実験手順の観点からすれば、目的は、ターゲット情報を推測しようとする試みは意味がないということ、事前に意識の心に納得させることにある。これは、意識の心を、無意識の心によって得られるデータに完全に依存させることを強いる。そのような方法は、データのタイプにかか



わらず無意識によって得られる情報だけを報告する訓練を十分に受けている熟練した遠隔透視者にとっては、それほどたいしたことではない。しかし、本書のテーマには物議をかもす性格があるので、私はこの調査を始めた初期の段階で、できるだけタイプ4データを利用することで私のデータ収集の努力にさらに信頼性を付加することに決めた。

## 無知から生まれる批判

R Vに批判的な人たちは通常、モニターされたデータに焦点を絞り、そのようなデータ（タイプ4から6）はモニター自身の偏見や解釈によって汚染されうることを決まって主張する。特に彼らは、自閉症の子供たちのコミュニケーションを誘導するために、知ってか知らずか、あるセラピストたちが手の動作を利用してきたのと同じやり方でモニターが透視者を誘導することを非難する。一般的に、R Vデータの正当性を失墜させるために、そのような非難が最も頻繁になされてきた。しかし、S R Vに対するそのような非難は現実にはほとんど根拠をもたない。

忘れてはならないのは、地球ベースのターゲットを使用したほとんどのR Vデータは、それぞれ別個に確認をとることが可能で、これは実験手順の発展において徹底的に行われてきていることだ。我々は、ある者が宗教的思想を信じるのと同じようにデータを信じさせるために何かを扱っているのではない。データは単に正確であるかまたは正確でないかのどちらかである。もしターゲット情報を物理的手段を通じて確認することができなければ、他の透視者たちが何人でも、ソロでブラインドの条件下（タイプ3データ）で、つねにそれを支持するデータを得ることが可能である。ブラ

インドのタイプ3条件下で、複数の透視者が同じ現場情報を得る確率は無限小であり、それはふう厳密に行われる経験科学の研究に対して課される、統計的要求をはるかに上回るものである。

これらの非難の問題は、たいいていの初期の探険家たちが経験したことにそっくりあてはまる。たとえば、ジェームズ・ブルースは現在エチオピアとして知られるアフリカの地区に入ったヨーロッパで最初の探険家の一人である。彼の探険は一七〇〇年代後半に行われ、イギリスの同時代人にはまったく信じられないさまさまな体験を含んでいた。人々は彼を嘘つきと呼んだ。人々はそんな奇妙な場所は存在しないと主張したのだ。しかし、エチオピアはなおもエチオピアであり、のちの探険家たちはまさにジェームズ・ブルースが見たものを発見することになった。ブルースを嘘つき呼ばわりすることはほとんど意味をなさなかった。しかし人々は、彼のいったことを確認する個人的体験をもたなくとも、なおも彼を嘘つきと呼び続けた。

まったく探険の直接体験をもたなかった人々による不信は、今日の我々の間にも存在する人間共通の現象である。ある個人の体験に関するあらゆる疑いに対する答えは、それが可能か不可能かという論争では決してなく、むしろそれを確認することにある。

## SRVの世界

科学的遠隔透視（SRV）には限界がある。それら限界のいくつかは、特定のターゲットの性格によるようだ。たとえば、訓練された透視者は本をターゲットにすることが可能で、その内容の概略を得ることができが、それを読むことは不可能と考えられる。私は個人的にあるETのユニフ

オームについた勲章をRVしたことがある。私にはそのユニフォームが白であったということではきたが、バッジに描かれたシンボルの輪郭を正確につかむのには膨大な時間を費やさなければならなかった。そのようなことはかなり訓練を積んだ透視者には可能なことであるが、自動車を運転中に道路脇の標識や通りの名前を読むことに似て、難しいことである。

RVにおける他の限界は、ある既知の場所と関連づけて問題の場所を特定することにある。たとえば、ET文明の故郷の惑星をターゲットにすることは簡単であるが、我々の太陽系と関連づけてどこにその惑星があるのか割り出すことは困難なことである。ある透視者にとっては、地球からETの故郷まで宇宙船を追い掛けて行くことは可能であるが、その途中の道筋は正確にはわからないのである。このタイプの限界は克服することができるが、その情報の“代価”は（時間や労力、財源の点で）大きなものとなる。他の例を挙げると、我々の研究を通して、ETのあるグループが地球のある丸い山の下に地下基地をもっていることを発見した。多くの透視者の協力によって、我々はいよいよ丸い山のおおよその所在を割り出したが、それは簡単な仕事ではなかった。

たいていのSRVの限界は、適当な時間や労力、財源で克服することができない。しかし、かなり最近になるまで、まったく異なる性格をもつ別のタイプの限界があった。時折、透視者は外部的原因によってターゲットを透視することを拒まれることがある。たとえば、UFOアダクティ（UFOに誘拐された者）に関する文献は、“グレイ”として知られるETについて多く言及している。彼らETは背が低く、瘦身で、灰色がかった皮膚をしており、しばしば人間を宇宙船内に連れていっては、医学的検査や婦人科医のするような処置を行うと報告されている。グレイの宇宙船に侵入しようと試みたことのある訓練された透視者たちは、視覚が“ブロックされる”経験をもって

いる。実際には、代替的視覚が彼らに与えられているというのがより正確であろう。

偽りの信号を検知することは、通常は簡単である。たとえば、グレイがその代替的視覚を生み出すときは、複数の透視者たちでも互いに重なるような確証的データはほとんど受けとれないだろう（第14章で明らかになるが、最近では、UFOアブダクションを透視する際の妨害は解除されている）。

最後に触れるべき限界は、透視対象の概念にかかわっている。透視者たちは「ありのまま」でセッションに入る。RVとは、目隠しされて見知らぬ町に立ち寄るようなものである。あなたは目隠しをとってあたりを見渡す。あなたはどこにいいのかまったく見当がつかないが、建物、人々、異国語、そして多くの物理的な感覚に気づくことになる。あなたにはすべてのものが知覚できるかもしれないが、何も理解できないかもしれない。

理解するには、すべてのRVデータが、透視者自身の知的背景のどこかに置かれる必要がある。無意識の心が情報を意識の心にも理解できるよう働きかける間に、もし意識の心が透視して得たデータに関する基本的概念をすでに理解していれば、仕事はより簡単になる。たとえば、進歩した宇宙人テクノロジーの詳細を私が透視することは、あまり有益なこととはいえないであろう。おそらく自分で見ているものが私にはわからないからである。仮に試みたとしても、私の無意識の心が意識の心に、そのテクノロジーに関する最も基本的な情報以外のことを理解させるのは無理であろう。ただ、訓練を積んだエンジニアであれば、専門的な詳細情報を含めあらゆる種類の重要情報を把握できるかもしれない。エンジニアの受けた教育は、何が知覚されているかの理解に助けとなる。他方で、私は社会学者であるため、ET社会の透視には力を発揮でき、どのように彼らが自らを組

織・統治するのかを理解することができる。つまり、私の無意識の心が自分に示すものを、私の意識の心が理解し、自分が見るものを他の人々に説明できるのである。すなわち、無意識の心は事実上あらゆるものを感知できるが、知覚されるものを理解するためには、なおも人は意識の心に頼るのである。

一般的に、RVの限界はほとんどなく、もし障害があってもそれが我々の技術や訓練の結果に由来するものである限り、のちの世代の十分に訓練された透視者たちの前ではその限界はなくなるだろう。ETによつて我々に課された限界についていえば、ETたちはめつたにこれを行わず、またこれを行うときには、彼らの目的は、我々がETの活動に干渉するのを防ぐため、あるいは我々にはまだ十分に用意のできない何かから我々を守ろうとするためである。人類が十分に成熟し、我々が現在知っているのは単に銀河系社会の一部であることを知るようになれば、これらの限界も克服されるようになるだろう。

## 現在SCILORの報告をめぐって

地球上、あるいは地球近辺における地球外生命の活動について現在我々が知っていることと比較すると、UFOに関する現存の文献には、科学的に支持しえない数多くのかたよりがある。しかし、我々がそれら文献の中に不完全な結論を多く見つけるのは、UFO報告者が無能力であるためではない。本書で紹介される研究を行う間、私はきわめて複雑な問題を真剣に解明しようとする有能な人々と話をしたり、彼らの著書を多く読んできた。UFOの謎はRVデータがあつたとしても理解

するのは難しい。しかし、これらのデータなくして完全に理解することはほとんど不可能である。唯一、他の表立った方法で有用な情報源は、UFO目撃談や、通常、退行催眠にかけられた個人から引き出されるアブダクション報告、あるいは、人間がトランス状態にある間友好的なETたちが協力的な人間に意図的に話しかけるチャネリング情報のいずれかである。

後者のタイプのデータにはすべて問題があり、これらを明確に説明することが重要である。通過UFOの目撃談から始めると、端的にいつてその報告には科学的見地から見ても有益な情報が十分には含まれていない。異常な飛行物体が目撃されたこと以外に、そのような報告について何がいえるであろうか？ 飛行船の搭乗員に関する情報はまったく存在しないばかりか、彼らがやってきた社会について我々は何もわからないのである。

アブダクション報告にかかわる問題はさらに複雑で、より慎重に対処する必要がある。ETに誘拐され、UFOに連れていかれたと主張する多くの人々に、現実には何かが起こったこと、また現在、我々が報告されている多くのことを確認するRVデータをもっていることに対して、私は何の疑いをもっていない。

それらの報告における一般的な考えは、人間が自らの意志に反して誘拐され、妊娠三カ月間に、遺伝子工学的に生み出される半人半ETの子孫のために保育器として利用されるというものである。文献によれば、グレイは自分たちの現在の生物学に満足していないため、自分たち自身のために新種の体をつくり出す必要があるとされる。大多数のアブダクション事例には、訓練されたセラピストによる、退行催眠を利用して克服されるアブダクティイ（誘拐された人）の記憶喪失がかかわっている。アカデミズムの世界で示されたこの現象に関する系統的で有益な二つの報告は、ハーバー

ド大学教授、ジョン・マック著『アブダクション』（一九九四年）と、テンブル大学教授、デイヴィッド・ジェイコブス著『未知の生命体—アブダクションの直接記録』（一九九二年、邦訳・講談社）に見ることができぬ。

ハーバード・メデイカル・スクールの精神医学教授、マック博士は、世論調査に基づき、一〇〇万人以上のアメリカ人が人生において少なくとも一度は誘拐されており、そのような体験は合衆国の市民に限られたことではないと示唆している。

そのような体験者の数は相対的に少ないものであるが、ある人々は精神的なショックに対処するため助けを求めている。通常は心理学的なカウンセリングというかたちで。たとえそうであってもセラピストたちから入ってきた非公式の報告によると、合衆国内でおよそ四万人の人々（現在までに）がアブダクション体験に関して専門家による何らかの助けを求めているという。ただ、これが正確な見積りであるかどうかは私にはわからない。

カウンセラーのところへ行く人々が、主にE.Tとの遭遇でひどく困惑した人々であることは大いにありうる。これは、どんな理由であれ、たいてい他の交流は心理的外傷（トラウマ）を生むことはないのに対し、E.Tと人間の交流はスムーズにはいかないこともあるからである。もしこれがあてはまれば、そのアブダクション文献はアブダクティイの見本としてはかたよっていることになる。これが私がアブダクション文献に見つけた五大偏向の最初の一つである。つまり、文献は、誘拐された人々を代表する見本として役立っていないのである。それどころか、そうしたもともと代表例とはならない見本は、調査報告を恐怖と心理的外傷に満ちた解釈の方向に歪めてしまうことになる。この種の文献の多く（特にマックの仕事を除いて）は、あらかじめ大人を誘拐し、ナチのような遺

伝子実験のために胎児を奪いとる邪悪なエイリアンに関する警告に満ちている。要点は、それが真実かどうかではなく、心理的外傷を負った個人のかたよった選択だけに基づいては、真のET像を判断することは不可能であるということである。よりバランスのとれた事例を選択すれば、人間とETとの交流がスムーズにいった場合をも含むであろう。しかし、そのような個人はおそらくカウンセリングを求めないので、セラピストたちに知られることはないのである。

二番目の大きなかたよりは、退行催眠の利用にまつわるほとんどすべてのアブダクション文献にかかわっている。退行催眠がアブダクティの記憶を蘇らせるのに、ひじょうに助けとなることに私は疑いをもっていない。しかし、もしグレイが、これらの文献において示唆されるように深く記憶再生に影響を与える能力があれば、蘇る記憶もまた一般的ではなくなることはありうる。さらにアブダクティにとって、たいいていの場合、表に現れる記憶は、ショックや心理的外傷を得る瞬間にかかわるものである。

こうして、一般的ではない記憶見本が、典型的とはいえないアブダクティの心から蘇るという状況がある。たとえ報告されるデータが正確であっても、そのようなデータからETの意図全般について、一般的な結論を引き出すことは不可能である。それは、ETがただ自動車事故の犠牲者にインタビューすることで、人間はどのようなものなのか割り出そうとするようなものである。そのような研究結果は不可避免的に、人間は不注意で、しばしば酔っぱらい、サディスティックで、そして、自分自身の種族同士で紛争を起こし、苦悶を楽しむ邪悪な種族であることを示すことになる。そのような苦悶は生じるかもしれない。しかし、人間文化のすべての代表として、苦悶という特徴は大きな誤解をまねくことになる。



アブダクション文献における三番目のかたよりは、研究家自身の見方に関係している。誘拐され、虐待を受けた個人に対して同情することは簡単である。我々は容易に心理的外傷を伴う出来事の犠牲者と自己を同一視する、高度に感情的な種族である。

我々は悪者を憎み、天罰を求め、研究家たちは隠された記憶を呼び戻す退行催眠を行う際に、犠牲者とともに、いわば感情のスープの中にいる。そして、それら研究家で、自分たちの調査対象となった個人の人生から、感情的に自分自身を引き離すよう訓練されている者はほとんどいないのである（特にマックを除いて）。

心理学的カウンセリングの訓練を高度に積んだ専門家だけが、そのように抑圧された記憶に十分に対処し、客観的な立場を保持し続けることができるであろう。感情は現実であり、最もコントロールされた適切な環境で対処されなければならない。これには最低限、患者が健康であることが必要である。しかしまた、解釈的な視点からいえば、あまり心理療法の訓練を積んでいない個人によって集められたデータから一般的結論を引き出すことは、そのデータに関して深刻な誤解を招くことになる。

私がアブダクション文献において見出した四番目のかたよりは、その報告が生み出される、より幅広い文化とかかわっている。我々は暴力のレポートを好む社会にいる。これは、日々のテレビのニュース番組を見れば明らかである。ほとんどの人がそのような番組において、穏やかで感情的に健全な出来事については聞いたことがないというであろう。

むしろ、その放送を支配するニュースは、レイプや殺人などあらゆる種類の犯罪である。犠牲者は典型的に哀れな姿で描写される。罪を犯した人物が子供のときに性的虐待を受けたとか、スラム

街の路地でギャングにレイプされた際、その人物がどのように心理学的に不安定な状態になったかというような、犯罪者について何か同情的なことがいわれることはほとんどない。

我々はなぜ犯罪が起こったのかについてめつたに問うことはない。むしろ我々は、犯罪者をどのように罰するかを問うのである。そして、人生の複雑さに対するより調和のとれた見通しを展望することを、未熟にも拒否するのである。

その上、我々の文化は想像上と現実の詳細な暴力描写を楽しんでいる。暴力はハリウッド映画産業の最も成功した産物の一つである。それは膨大な数の売上げヒット作品に浸透している。

もし我々の社会が成熟すれば、我々が向き合わなければならないことの一つは、暴力への愛である。これは、アブダクティーたちが確実に個人的虐待と見なしたことを、経験しなかったということではない。しかし、起こった理由をまったく問わずにただ虐待報告に焦点を絞り過大評価してしまえば、その話には見逃してしまふ別の側面があるだろう。

比喩を使えば、子供たちがワクチンを接種するために医者に連れていかれるとき襲われると必ず感じるように、もし我々がETの活動の背景にあるさまざまな事情を理解していなければ、我々人間もまたETによって虐待されると感じるかもしれない。もう一度いうが、私はアブダクティーたちの体験を過小視しているわけではない。私はただ、我々が結論に飛んで、攻撃されていると断定する前に、出来事に対するよりバランスのとれた見方を開拓するために、恐れや憎しみという嵐の中で一息入れ、議論を行っているだけである。

私がアブダクション文献において見出した最後の偏向は、最も物議をかますことになるかもしれないし、ある者はこの考えに強く反発するかもしれない。

その偏向とは人種差別的な類型化の一つである。これは重要なことであるが、私はアブダクティたちが人種差別主義者であるといっているのではない。問題は、我々の一般的社会がどのように我々自身と異なる存在を見ようとするのかである。

多くのアブダクション文献によると、この活動にかかわるETたちはまったく文字どおりグレイである。彼らは背が低く、瘦身で、大きく側方まで回った目を持ち、革のような皮膚をしており、感情的な深みを欠いている。彼らは長身、金髪、青い目ではない。私の考えでは、このような違いを認めることは、彼らの存在に関して我々の心の内に自動的に類型化を起こしていることになる。

もし我々が人種差別の存在しない社会に暮らしていれば、ここでこの点をもち出したりはしなかつただろう。しかし、もし我々が自らに正直であれば、人間社会は、人種的特徴に基づいて人間の扱いを変えるという、不公正な習慣をもっている点を認めなければならぬ。もし我々が人種の異なる他の人間に対して異なる対応をとるとするのが本当であれば、非人間に対してはなおさらではあるまいか。

アブダクティーたちは我々自身の文化から生まれる。そして我々自身の文化は、我々自身とまったく異なる外見の存在を必ずしも好意的には見ていない。そういう状況であれば、我々と異なる存在がしばしば邪悪なものとして描写されることは、驚くべきことではないのではなからうか。この観点からいえば、人間には解釈的な文化的偏向によってデータを汚染させてしまう可能性が潜在的に存在する。もし我々が銀河系社会で大人の役割を演ずるつもりならば、おそらく我々は正直に我々自身の心理的問題と直面する必要があるが、より客観的なレンズを通して他文化を見る方法を学ばなければならないだろう。

アブダクション文献に繰り返し登場する人種差別的な類型化の典型例を挙げてみよう。この例によって、私はある著者を批判的に選ぶつもりはない。この例は特異なものではなく、さらに一般的な問題を例証するという目的をかなえるためだけにここで利用されるものである。その例は最近出版されたジョージ・C・アンドリュースによる本である。彼はあるアブダクティイから与えられた情報に依存しており、他のアブダクティイたちもその見解の多くを同様に支持していると書いている。その本において著者は、グレイはヒトラーとコンタクトし、切断された動物から抜きとった腺分泌物から栄養をとり出し、エイズウイルスやその他のウイルスをばらまくためにCIAやナチと共同したり、他にも多くの否定的なことを行っていると主張している。他方で彼らの敵（すなわち友好的なET）は「長身のプロンド」、あるいは「北欧人」である。主要な西洋文化の視点から見ると、彼らはいかに賢くて美しい。プロンドの友好的なETは、我々の政府が彼らにとって恐ろしい邪悪な敵であるグレイとともに仕事をしたがっているように見えることから、人間の心を心配している。

もし我々がET現象を明確に理解したければ、この種の人種的偏向と紋切り型の一般論はまったく助けにはならない。必要なので再度繰り返すが、問題となるのは唯一、正確なデータを得ることと、これらのデータを知的に解釈することである。

現在までのところ、我々のもっているデータは大半はかたよっており、その解釈も我々の調査慣習や我々自身の文化的問題によって、深刻に歪められている。我々にはETの謎に対して新しい試みが必要である。我々は偏見を捨て、その現象に対してさらに完全なイメージを築く必要がある。

私が言及したデータ収集の最後の方法はチャネリングであり、ある者はこれをRVの一選択肢と

思うかもしれない。なぜチャネリングがRVとは違うのかをここで説明しておく必要がある。チャネリングは、ある者が宇宙存在とテレパシーによってコミュニケーションをとる間、ほぼトランス状態になって起こるものである。時折、その存在はコミュニケーションをとるために、一時的にその人の心と体に「乗り移る」といわれる。

私の経験において、わずかの例外を除いて、チャネリング情報がRVデータと比較して信頼できるほどに正確であった試しはない。典型的なのは、チャネラーたちが、自分たちは善良な宇宙人であり、悪い宇宙人を監視するよう人間に警告を与えるというET兄妹たちを人間に紹介することである。そしてチャネリングの相手は、警告や勧告とともに過去・現在・未来に関するさまざまな情報を進んで与える。しかしその中身はチャネラーごとに違っており、RVの結果ともたいてい食い違うのである。

RVを利用すれば研究者たちは、観察されるものと、観察者の訓練そしてデータが観察される状態のいずれをもコントロールすることが可能である。厳しい審査とチェックの手続きを踏んで、正確なデータははずされ破棄されることになる。しかし、チャネリングはこのいずれをも満たさない。我々は単にチャネラーを信じるか否かを選ばなければならず、信じることは個別に証明・確認できる客観的観察にとって代わることはできないのである。

\*4 この点はホイットリー・ストリーパー著「躍進・次の一步」(一九九五年)においても指摘されている。

### 第3章 アーカシヤを通る旅

地球外生命体を遠隔透視する私の仕事は一九九二年一月に始まった。その日以来、私はさまざまに地球外生命体と多くの体験をもった。コンタクトの大半は遠隔透視を通じて行われた。しかし、私はETたちに気づかれずにアプローチしたとは信じていない。実際、私は、自分が気がつかないうちに意識の普遍的概念を探索するよう示唆された、ということ薄々とだが、しかしはつきりと気づいている。だれがこのような示唆を私に与えたのか定かでないが、私の直感では、この方向に知らない間に導かれていたか、促されていたということをはつきりと感じている（かなりの状況証拠もこの考えを支持している）。

人間の意識に対する私の探索には三段階の訓練がかかわっている。それは、シディーと呼ばれる超越瞑想（トランセンデンタル・メディテーション。以下TMと略称）の上級コースを学ぶことから始まった。訓練の二段階目はバージニア州フェーバーにあるモンロー研究所における一週間のコースであった。三段階目はRVの訓練であった。以下に説明するように、各段階は私のET研究に

直接の関連性をもっていた。

## シディー

一九九一年、私はTMシディー・プログラムの訓練を始めた。TMのように、シディーはマハリシ・マヘーシユ・ヨギから訓練を受けた教官によって教えられる。私がTMシディー・プログラムによる自分の体験を話すには二つの理由がある。最初に、地球外生命体を研究していた間、私は明らかにシディーと似た訓練を行う地球外生命体のグループと出くわしたことがあるからだ。二番目に、RVのセッションの間、私は集合的心性をもつ地球外生命体の一グループの意識を繰り返し体験したことがあるからだ。このETの集合意識は、時に「集団精神（マス・マインド）」と呼ばれたりするが、TMシディー・プログラム訓練中の人間の体験に似た主観的体験をもっている。

私のTMシディー・プログラムに対するそもそもの関心は、権威ある社会科学誌における見慣れぬ報告に接したことにある。「ジャーナル・オブ・コンフリクト・リゾリューション」の一九八八年一二月号に、ある場所においてTMとTMシディー・プログラムを実践中の瞑想家グループが、近郊の紛争に影響を与えることができたと述べる方法的に洗練された記事が掲載された。この現象はマハリシ・マヘーシユ・ヨギに敬意を表して「マハリシ効果」と呼ばれる。発表されたとき、その記事は物議をかもすと考えられ、報道によると、論争は現在も続いている。

マハリシ効果の記事登場を受けて私は、瞑想は本当に世界の紛争を減らすことが可能かどうか調査を行うことにした。真正面からこの問題に取り組むため、私はTMシディー・プログラムを学ぶ

ことでマハリシ効果を研究しようと、エモリー大学に研究奨学金を申請した。そして、私は奨学金を受けとり、その後すぐにシダ（上級瞑想者）となった。

この議論の最初に、重要なことなので、私はTM運動とは正式なかかわりがいつきないことを強調しておきたい。いかなる形でも、私はその運動を代表するものではない。私はその運動から金銭や他の物質的恩恵を得たことは決してない。私は研究に従事してきた、完全にフリーな社会科学者として、ここに結果を報告するのである。私自身の思考と体験は地球外文明への自分の研究とかかわっているため、ここでの私の瞑想に関する説明のすべては、それらを反映している。何が起きているのか理解し解釈するため、科学者そして訓練された観察者として、私は自分自身の能力を利用して利用しているのである。

## TMマインド・プログラムの主観的体験

普通の目覚めている意識において、精神は五つの物理的感覚、すなわち視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚からの入力であふれかえっている。ほとんどの我々の精神活動はこれらの感覚からの情報を利用する。これらの感覚からの生の入力なまは、論理や想像力のような知的活動の糧となっている。しかし瞑想の間、精神におけるこれら大量の感覚情報は減少していき、最終的に沈黙する。この時点で、論理と想像力もまたなくなるのである。

残るものは空な精神ではない。実際に残るものは、多くの瞑想家が「意識界」と呼ぶものとの精神のつながりで、それはとても活動的になりうるものである。主観的観点からは、意識界はすべて



の個人の内なる意識を含むとともに反映するように思われる。深い瞑想状態において、人々はこの意識界を直接体験する。意識界との実験的コンタクトは、思考、記憶、感情の信号と同様に、通常は五つの物理的感覚から来る信号によって影を投げかけられる。そのため、非物質的なものを知覚するために、諸感覚から人の意識をそらすことで意識的な知覚の進行を「超越」することが必要なのである。定義によると、非物質的なものは物質的ではないということであるが、それにもかかわらず、それは、十分に敏感になった神経組織を用いて、だれにでも正確に知覚されうる客観的現実を備えている。そのような知覚は瞑想家の夢の産物ではない。

瞑想の最終的なゴールは、非物質的なものの知覚が強化されるまで、意識界の体験を実践することである。この過程が完了するとき、人はもう瞑想する必要がなくなる。そのような人は高度に磨かれた意識をもっており、悟った者と呼ばれる。それは、通常の意識は外に向けられた物理的感覚の知覚に限定され、内なる自己には及ばないという分離した、あるいは二重の存在としてもはや生きないことを意味する。悟りに至った個人は唯一統合された（すなわち密に結合し合った）意識をもっている。意識界は生命のすべての側面とつながっているため、五つの物理的感覚の知覚は、人が幅広いレベルから知覚するものによってそのとき補足されることになる。これなくしては、すべての生命の相互結合に対する理解は弱まってしまふ。このようにして、瞑想は内なる存在の感覚を日々の普通の意識へと吹き込むのである。重要なことに、調査の間、高度に進化したETたちと典型的人間とを区別する根本的な特徴が、人間の場合はまれだが、ETたちは普通悟りに到達しているという点にあることを私は発見している。

よくあることだが、十分に悟った個人は我々と共存する非物質的生命的多様性にすぐに気づくよ

うになる。すべての生命は物質的、非物質的を問わず、ある種の空間に住んでいる。不幸にも英語のスペース(space、すなわち宇宙空間)という言葉は物理的であるということに制約されている。物質的・非物質的の両方を含むスペースに相当する幅広い単語は、サンスクリット語のアーカシャである。我々はすべてアーカシャに存在し、我々の旅のすべては、宇宙船で行うとか、我々自身の高度に磨かれた意識を利用するかどうかに関係なく、アーカシャで起こるのである。実際、古代の予言者たちはまさに文字どおり心で天国を徘徊したため、彼らは最初の偉大な人間宇宙飛行士であった。一般的に、優れた瞑想家やETたちは一致して、アーカシャにおけるこの生命の幅広い視点から我々の存在を眺める。

ひじょうに大きなグループと一緒にTMシディーを私が最初に体験したのは、一九九二年、マハリシ国際大学にある二つの大きな瞑想ドームの片隅で瞑想したときであった。この最初の体験の間、私とともに二つのドームの中には二〇〇〇人を超える瞑想者がいた。我々は皆TMシディー・プログラムを実践していた。

実際のTMシディー・プログラムはかなり複雑なもので、ここでいちいち手続きの仕組みを説明することはできない。しかし、このプログラムの一部はヨガの飛行と呼ばれる何かとかかわっている。一般にはいわれている。この現象については公の場で数多くのデモンストレーションが行われており、それらの多くがテレビ放映されている。見たところヨガ飛行者は、座禅状態で部屋のまわりを蛙のように飛び上がっているように見える。しかし、ヨガ飛行の思想は体操を行うことではない。むしろ、意識界に密につながった瞑想状態で特殊な活動を実践することにある。飛ぶという部分を除いた瞑想体験の間、私ははつきりと気持ちも落ち着くのを覚えた(たとえば、平静化、後退、

意識変化)。私自身の意識は何もしないのにどこかへ動いていくようであった。実際、適切な瞑想で最も重要なことの一つは、努力が表に現れてはいけないことである。努力は目覚めた状態の精神の情報処理活動を作動させてしまい、それは逆に意識界からのあらゆる信号知覚を圧倒するのである。この意識の新しい状態へ到達すると、この意識状態と通常の目覚めた意識状態の間の相違がはっきりと知覚される。この相違の全側面を描写することは現在の議論の要求を超えるだろうが、いくらかの観察的な説明はここでも有益である。

瞑想意識の状態において、自分の意志とは異なるものとして自分自身を明確に感じるがあった。この状態で想念は浮かんだが、数としては微々たるものであった。さらに私は、自分の根本的な自我とは異質なものとしてそれらの想念が知覚される、という意識感覚をもった。実際、最も支配的な私の知覚側面は、拡大された意識感覚であったのだ。第三者的な観点からいえば、私の意識は、意識がそれと気づくほどには思考を働かせなかった。

しかし、この拡大された意識の状態には活動がないわけではない。私はある場所を体験し、同じ体験を共有している意識は私自身の意識だけではないという明確な知覚をもった。この体験はまた瞬間的でもなかった。実際、そのプログラムがヨガの飛行に移るまでにかかなりの時間を費やした。

通常が目覚めた意識状態の視点からは、ある者が瞑想中に体験する意識状態はとても神秘的であるとしばしばいわれる。私の個人的体験からも、その描写は的を射ているといえる。しかしながら、瞑想と結びつき拡大された意識状態からすると、意識界における活動は必ずしもつねに神秘的であるとは限らない。私が最初にドーム内の意識構造を通して、いわゆる「意識の波」のざわめきを知覚し、一トンものレンガがぶち当たったように感じたのは、ヨガの飛行の最中であつた。

ある場所で瞑想している瞑想者が、影響力の大波がすべての瞑想者たちに同時に知覚されるように意識界を操るとき意識の波は起こる。この体験は言葉でいい表すことは困難である。しかし私自身の体験においては、エネルギーの大きな流れのように感じられた。

もちろん、このような主観的観察を切り捨てることは簡単である。それは、ある実験に参加した初心者に何かをいったり書いたりすることを期待するのと同じだからである。しかし、私は人間行動の観察については訓練を積んでおり、想像された知覚と現実の知覚との違いを見分ける必要性に對して高度に敏感になっている。個人的には、以上のような体験は想像するにはあまりにもリアルすぎて、それに対する私の知覚を切り捨てる気にはなれない。私の主観的観点からは、マハリシ国際大学の瞑想ドームの中では何か客観的なことが起こっていたのである。私は経験という物理学を理解するよう主張はしないが、それはあなたかも自分の顔を殴られたようにリアルだったのである（もちろん、もっと心地好いものであったが）。

私は大グループで最初に瞑想を体験したあとの自分の反応をはっきりと覚えている。世界中の科学者たちが、まさに私に起こったことを説明するためにあらゆる装置をもってそのドームにいるべきであったと確信したのである。それは物理的なものではなかったが、現実であり、物理的なもの（たとえば私）に影響を与えた。そのとき、私は永遠に科学による吟味を逃れられるものはないだろうと確信した。しかし、正確に何が起こったかに関しては答えをもっていなかった。概して、私の精神は意識のある微妙な段階へと動いたようで、その段階で私はエネルギーの力強い波を含め、大きな活動を感じた。

## モニター研究所

TMシディー・プログラムの課程を終えて二一カ月目、科学的遠隔透視(SRV)の訓練を始める直前、私はバージニア州フェアバーのモニター研究所で一週間の〈入門航行プログラム〉に参加した。このプログラムは、脳波エントレインメント(伴出)技術を介して意識変容状態について教えるものである。このコースをとる前に、私は自分にRVを教えてくれ、私がここで報告する研究調査のモニターとなった人物とすでに会っていた。その人物は私に、モニター研究所での訓練は、RVの正式な指導を受けることになる軍のRV練習生にとっては不可欠なものであることを教えてくれた。軍の訓練プログラムと同じことを体験するために、私は〈入門航行プログラム〉にも参加することにした。

簡単にいうと、モニター研究所の人々は、脳で発生する電気化学的信号で物理的变化を起こす安全な方法を案出している。彼らの技術は、脳の右半球と左半球の間を共鳴させるさまざまな振動数の音を使用することに基づいている。ロバート・モニターは特許をとっている自分の技術のことを「ヘミシンク」と呼んでいる。ヘミシンク音はある音色を片耳にインプットして(たとえば一〇〇ヘルツの音色)、最初のものとは異なる振動数の音色をもう片方の耳にインプットする(たとえば一〇四ヘルツの音色)。結果はビート振動数と呼ばれるひじょうに低い振動数の振動音である(この場合、四ヘルツ)。ビート振動数は耳で実際に聞くことはできないが、精神はそれを認めることができる。脳自体は分離した可聴周波振動数を混合させることでそれをつくり出す。このよう

に、音は人間の耳には（低振動数のおかげで）知覚できない振動数で共鳴する脳に、電気化学的反応を起こすために使用される。

モンロー研究所の研究者たちは、聞いている者が意識変容状態を獲得するのにきわめて有益なヘミシンク音の巧みな混合を数多く開発している。彼らは、意識変容状態を体験することが可能な多くの個人の脳波の電気化学的活動を「地図」に描き表している。

ヘミシンク技術で起こる変化に地図を対応させることにより、研究者たちは文字どおりスイッチ一つで、偉大な予言者や意識の境界線を探索しながら生涯を送った神秘家の精神に、人の心を機械的に共鳴させることができる。モンロー研究所の最も興味深い業績は、生命が繁栄する非物質的存在の領域を個人に気づかせる一連の振動数を発見したことである。

私はこの領域をさす言葉として、読者もテレビ番組や映画の『スター・トレック』で聞いたことがあるであろう「サブスペース（亜宇宙）」という言葉を使用する。我々個々の一側面は、他の存在と同様にサブスペースに存在する。我々の物理的空間にもはや住むことのない人々は、サブスペースに「住む」。彼らはひじょうに活動的なため、「死んだ」人々というのは正確ではない。

モンロー研究所の入門課程では、サブスペースまでの最初の入口はフォーカス21と呼ばれている。この意識の状態において、ある者はサブスペースを奥深く見透かし、そこにいるかもしれない存在とコミュニケーションをとることができる。私が二回目のフォーカス21を体験しているとき、地球外生命への私の見方を大きく変える注目すべき出来事が起こった。

私はヘッドフォンを通してフォーカス21の音を聞きながら、ベッドと必要な電気機器のある小さな部屋であおむけになっていた。精神的にある場所に運ばれていくというのがこのときの主観的体

験であった。利用した技術は、聞き手の側の想像力は要求しない。精神は自動的に音色が発生する振動数に波長が合い、そして、私は「そこ」にいた。二、三分ののち、扉のような入口のあるどこかにたどり着いたようだった。画像の分析は完全ではなかったが、何が起こっているのか感じることができた。私は何かの入口にいたのだ。

私は入口を通って、一つ壁面が欠けているらしい部屋を見つけた。そこらじゅうに光が、それもひじょうに明るい光が満ちていた。見回すと、だれかが私の左にいるのが見えた。その人物の体は発光してやや透き通り、まるで私の訪問を見張っていたかのように、私を見つめていた。部屋の中に進むと驚いたことに、他に私が知っている三人の人々に出会った。私の祖父、祖母そして大おば（祖父の姉妹）であった。

感情のレベルでは、私は我を忘れていた。だれもが私と会えて喜んでいて。私は言葉に尽くせないほど幸福であった。私は自分の肉体から涙が流れるのをかすかに感じたが、意識は肉親たちともにあつた。おば（私の母の姉妹）が最近死んでいたので、私はあたりを見回し、彼女がどこにいるのか尋ねた。いくぶん心配気に「ところで、エルシーはどこにいますか？」と尋ねたのをはつきりと覚えていてる。

その瞬間、やや力強い別のサブスペースの生命体が、私を黒いマントとしか考えられないもので包み込んだ。それから私はもち上げられ、別の場所に移された。その移動の旅の間、なぜ私は外を見ることができないのか尋ねた（私はただ質問を意識の中で考えることでのこのことを聞いてみた）。尋ねた瞬間、マントの角がもち上げられ、これまでに経験したことのないような明るい光を見た。まるでじかに太陽を見るようであった。さらに、その光の中に入り込んでいきたい衝動に駆られた。

そしてふたたびマントは被された。私は光に曝さらされることから守られているのを知った。私はまだ肉体的な存在だったので、直射光に曝さらされることは害となるのだということに察した。

その後すぐに、サブスペースにおける旅は終わり、マントははね上げられた。私は目の前に数万にも及ぶ「グレイ」を見た。それらは地球外生命で、ちょうど人間のようにサブスペースに存在していた。私は近づいて自分の心を彼らに向けた（どういうわけか、そのときそうすることが当然のことのように思えた）。彼らから自分が受けとった感覚で私はふらふらになった。

肉体的ではなく、心理的、感情的に激しい痛みを感じた。私は半分開いたマントの中にあと戻りした。しかしこの機会を逃したくはなかったので、ふたたび試してみた。このとき私は、私自身の人間の感覚で意識に第一印象をもたせるよりも、グレイが意識を体験するようにグレイの意識を感じようと努力した。ほっとしたこと、受けとった感覚は先程と異なっていた。

私は平静、落ち着き、静寂を感じ、同時に、『スター・トレック』のミスター・スポックの心の状態と唯一比較できる意識も感じとった。それはまるで表面に感情を表さないものであったが、何かとても深いものがあつた。そして、苦痛という私の最初の印象が、グレイの意識として生きることを強いられたとき私を感じるであろうものとかかわっていたことをはっきりと自覚した。移行過程はあまりにも唐突であつた。私はまだ強い痛みを感じていたが、それが私自身に由来するののか、それともグレイに由来するものなのか、まだ決断できずにいた。私は双方とも疑ってみたが、そのときは判断を下すことができなかつた。

その時点で、私はある声を聞き、だれが私をグレイのところへ連れていったのかを知った。その声は「あなたが助けたいと思っっている存在がいます」といった。それはおばのエルシーの声であつ



た。

グレイの一人が私に近づいてきて、自分たちを助けるためにここにいるのかどうか尋ねてきた。私には何と云ったらよいのかわからなかった。彼らが問題を抱えていることは察したが、最初の印象は、その問題は私の力ではどうしようもないというものであった。

私はその人物に、わからないといった。私は口ごもりながら、いちおう試してみようといった。多分私は戻ってくるができるだろうが、私のすべき仕事は何であるのか自分にはわからなかった。しかし何であろうと、それは私を途方に暮れさせることのように思われた。私はしり込みした。そして深い悲しみを感じた。しかし、助ける時期は今ではないとも感じ、私はそこを去らなければならなかった。

マントがふたたび私を覆い、肉親の待つ入口に戻された。私は実際におぼには会わなかったが、私にはそれで十分であった。私はさよならをいって、最初に会った一人のサブスペースの生命体がまだ立っていた入口のところへ行った。そして、手をつないだ二〇人ほどの人々が私の前を通りすぎ、下方に落ち込むトンネルのドアの中に入っていくのを見て、私は驚いた。私はそれを奇妙だと考えたが、そのときはそれ以上のことは考えなかった。

音の信号は私の心の中で変わりつつあった。私はフォーカス21をあとにした。何事もなく無事に帰還したあと、私はコントロール室から聞こえてくる心地好い声を耳にした。

「ようこそお帰りなさい！ さあ、もう今は十分に目覚めました。聴取報告室へどうぞ」

その後、入門課程をとっていたグループは彼らの体験を論じるため、研究所の大きな会議室に集まった。議論で最初に話題になったことは、参加者の多くは、いわば彼らのサブスペースの手を

握りあって、前もってグループとして体験をもつことを決めていたことであつた。彼らは自分たちの航行とドアを通した帰還について話した。すぐに私は、トンネルの中に入つていったものの正体を理解した。

私自身はといえば、あまりにも感覚が麻痺していて話すこともできなかった。私はただ耳を傾け、次にどんなことが起こるのかいぶかるばかりであつた。

## 私のRV訓練

私の研究の物語を呼ぶに違いない性格と、軍のRV作戦に関する詳細は極秘扱いにされるといふことから、私のRV教官の名は明かさなざることにする。ある時点でこの人物は、この研究において自分が私の教官兼モニターであつたことを打ち明けたくなるかもしれない。しかし、その選択はこの人物に任せるのが最善であると感じている。そのため、ここでは彼をただ「私の教官」あるいは「私のモニター」と呼ぶことにしよう。言葉の問題でやむをえず代名詞が必要な場合、彼が男性であることを意味するわけではないが、便宜上「彼」を使うことにする。

私のRV教官となることになった人物（かつて軍のRV部隊の隊員であつた）と私は、ある全国的な会議の場で会つた。私は会議中ずっと彼と話をし、私の名刺を渡して彼からRVの訓練を受けることができぬものか尋ねた。彼はそのときは訓練はできないと答えた。また彼には、新しい訓練プログラムを開始する予定もなかった。訓練はまだ、軍の訓練生のためにインゴ・スワンによつて開発された当初の路線に沿つて組織されていた。つまり、時間、経費、人材において、それはあ

まりにも高くついたので。

にもかかわらず、引っ越して彼の電話番号がまもなく変わるといわれたが、私は彼の電話番号を控えておいた。彼は引っ越し先の街を私に教えてくれた。会議のあと数週間たって彼が私にある文献を送ってくれた以外、一年以上も彼からふたたび手紙をもらうことはなかった。

私はただ丸一日会議に出席し、別の日に彼と昼食をとみにしただけであった。私の妻はそのとき妊娠していた。私は妻を不安にさせないために、自分がE TやU F Oに関心をもってゐる専門家に会おうとしてゐることは話さないようにした。最終的に彼女にいったことは正確には覚えていないが、それが私の研究に関係した専門的な会議であるというように話したはずである。

私が昼食での面会から帰宅すると妻は自宅にいて、ひどく心配してゐた。彼女は、私が何をしていたのか知りがたがった。私が昼食に出ている間に訪問者があつたといひ、彼女は直感的にその訪問が、何であれ私の行動に関係してゐるものと確信したので。妻は、裏庭のベンチに座つてゐると、自分の背後にある存在の出現を感じたといつた。私の妻はシタ（上級瞑想者）で、超越瞑想（T M）の教師であつたため、洗練された正確な知覚能力があることに気がついていた。そこで、私はその場に静かにたたずんで、ショックを受けてゐる彼女の言葉に耳を傾けた。

彼女は、その生き物は彼女をよく見るために眠らせようとしたといつた。それは自分が妊娠してゐる事実に興味をもつてゐるように彼女には感じられ、まったく不快であつた。彼女は襲つてくる睡魔に抵抗し、代わりにその生き物のほうに向き直つた。その時点で、その生き物は妻の前で動き、彼女はそれを見た。すると、それは消えるように素早く近くの木のうしろに突進していった。その生き物に対する彼女の描写は典型的なグレイのそれと一致してゐた。私は一度もそのようなことを

彼女に話したことはなかったのだ。

私が最初に考えたことは、ETたちは人々の会話を傍受できる能力があるのではないかというものであった。私がETたちに関してもっと知りたがっていて、また、特に彼らの文明に関して書きたいと思っていたこともあり、私が会議でやりとりした会話をだれかが聞いていて、私についてさらに調べに来たとしか、私には推測できなかった。そこで私は、自分が出席した会合についてすべてのことを妻に話した。

会議から一五カ月たった頃、私はミシガン州のアン・アーバーの新しい自分のアパートで瞑想を行っていた。私は多くの国々から集まる社会科学者に非線形数学のコースを教えるため、いつも夏にはミシガン大学へ行っている。私の朝の瞑想プログラムの間、瞑想が終わったらモニター研究所のテープの一つをすぐに聞くようにいわれるのをはつきりと知覚した。私は、そのテープはフォーカス12用のものを使うに違いないという感覚を得た。

フォーカス12は私の発見によれば、意識がほとんど完全に非物質的な領域に移行するフォーカス21と違い、物質的現実と密に調和する一方で、テレパシーによるコミュニケーションを促進するのに特に有効であった。

私は瞑想を終えるとすぐに寝室へ行き、寝ていた妻を起こさないように静かにテープをとって、リビング・ルームに戻った。ポータブル・プレーヤーにテープをセットしてヘッドフォンをつけた。そして再生ボタンを押し、ゆったりと聞くためにうしろにもたれかかった。

テープの余白部分が終わるとすぐ、私には発光するある存在の心的イメージがはつきりと見分けられるようになった。その人物は男性で白いガウンを着ていた。彼はメッセージをたずさえていた。

RVの訓練を受けるために、先の会議で会ったかつての軍の遠隔透視者と私がコンタクトをとる時期が訪れたと彼は教えてくれたのだ。私がすぐに行動に移すように彼は強調した。テープは終わり、その体験をどう解釈したらよいのだろうかと思はれた。

午前の授業のあと私は研究室に行き、自分がだいぶ前に会った遠隔透視者とコンタクトを試みようとした。これまでに彼の事務所に通話したときは、いつも留守番電話が回っており、そこへはたまにしか行かないと以前に聞いていたとおり、実際に彼と話することはできなかった。さらに、私は彼が引越すことになっていた街の電話番号も知らず、彼が実際にそこに引越したのかどうかもわからなかった。他に方法がなかったため、私は電話番号案内にかけてみることにした。驚いたことに、彼の電話番号はリストに載っていた。電話してみると、留守番電話に彼の声を聞いた。私は自分の電話番号を伝えて、翌日のクラスのため講義の準備を進めた。

まもなく彼から電話をもらった。私は彼と話して光栄であることを話し、かねてからの希望であったRVの訓練を私に施してくれないものか尋ねてみた。私はET現象について本を書きたいと思っており、データ収集の手段としてRVが必要であることを話した。驚いたことに、彼はちょうどRVの最新の訓練プログラムを完了したところで、一日六時間で計七日間の集中コースによりすべての基礎を人々に訓練できる状態にあることを知った。

また私は、あと約七週間で始まるその新コースの二番目の生徒になることができるということだった。彼は指導料を告げ、私の教官になってもいいと話した。私は彼に好感をもっていたので、彼が私の教官となってくれることはとても重要なことであった。私は同意したことをいい、彼へのコース指導料の支払いを決めた。電話を切ったあと、モンロー研究所のテープを使った朝のセッション

ンの間に、自分にテレパシーで近づいてきた発光する存在について考えてみた。私はその驚きはかなり続くという感覚をもち、自分自身にそれに慣れたほうがよいといひ聞かせた。

私がRVの訓練をするタイミングは完璧であった。訓練前の数週間、私はモンロー研究所の一週間集中（入門航行プログラム）に参加することができた。また、その夏の間、同じくモンロー研究所が行う（入門体験編）と呼ばれる家庭学習コースも修了することができた。それは、一週間の滞在プログラムの際に利用されるのと同じテープをいくつか使うコースであり、その夏、私はかなりの時間をフォークラス12のテープに費やすことができた。家庭学習は、一週間の滞在プログラムでの私の体験をかなり充実させてくれた。モンロー研究所での経験はどれも、私がRVのコースでまさに知覚しようとするものに対して、私の準備を促してくれた。

私の訓練は質素な環境のもとで行われた。そこにあるビルと同様に、訓練室は灰色が基調であった。訓練生の視界にはどこにも明るいい色はなかった。データ汚染を招かないように、教官の着ている服は私の想像力を視覚的に刺激しないにぶい中間色であった。私は十分に疲れをとって、訓練中には空腹でないことが要求された。RVは自律神経系のある側面を開発するので、これらのことはひじょうに重要である。この自律神経系に空腹感のような否定的影響を与えるものは、データ全体の質を落としてしまいかねない。

私の教官は特に辛抱強い人物であった。データの信頼において生徒の自信を高めることが重要なため、意識の心を疑うことで、変更あるいは無視される前に、データは正確に書き留められたのである。このように、最初の緊張した数日間に私の訓練を手がけた教官が示してくれた気づきには、特に感謝している。

R Vの際に起こることは、T Mの実践の際に起こることばかりか、モンロー研究所でのヘミシンク音課程の体験の際に起こることも密接にかかわっていることを私は発見した。通常の目覚めた意識状態では一般に利用されることのない精神の一部は、精神の覚醒の中で近づきやすくなり支配的となる。実際、シダにとって、S R Vは正確に情報を記録する手段、すなわち複写実験手順と同然である。

## PART IIの構成

この時点で、本書で資料を示すために私が選んだ方法の一側面を強調しておくことは大切なことである。PART IIにおいて、私は二年間のコースを通して行った多くのR Vのセッション結果を報告する。その結果は資料の提示を容易にするため、複写に似た形式で示されている。セッションの間S R V実験手順にしたがいながら、私は、私の心とペンと紙で実施された数多くの手続きを行ったが、それは説明しない。その手続きは訓練を受けていない者にとってはほとんど理解できないであろうし、ここでそれを議論することはそのセッションへ向けられる関心をそぐことになろう。なぜなら、訓練を受けていない者には、ある手続きがいかにこの情報を引き出せるのかを理解できないと思われる、ある者はその情報が根拠のないところから来ていると思いたくなるであろうし、また、この報告の正確さを立証するために、彼らは自分たち自身でそれらのことが知覚できることを当然求めるからである。他の人々がそれらのことを知覚できない唯一の理由は、彼らが適切な訓練を受けていないからであることを理解いただきたい。

これは重要なことであるが、SRVの訓練は一般にも可能であるが、簡単なものでも貧弱なものでもない。私はここで報告する情報を得る方法を学ぶために、かなりの時間と手間してお金を投資した。もし私と同程度の訓練レベルに到達していなければ、私が報告するこの体験がだれにでも共通して得られると期待すべきではない。

PAR IIでは、大部分のデータと私が提示する解釈を紹介する。私は、ET種族についてはテーマ別に、私自身の発見過程に関しては年代順に本書を構成することにした。私が年代順のアプローチを選択したのは、読者のためにも、私が感じた発見のスリルをとっておこうとしたからである。こうしたアプローチの結果、話題の整理という点で、各章がどこか混乱してしまった。ただ振り返ってみて、その未整理は大したことではないことがわかった。それは、この惑星にかかわるET事情にすでに詳しい人々だけを困らせるだろう。ETに関する本書のテーマ別構成は、数年後、基本的データが多くの人々に十分に理解されるとき、もっと意味をもつようになるであろう。





**PART II**

**人間の心がかつて  
一度も訪れなかったところ**



## 第4章 最初の火星訪問

私は自分のトレーナーが遠隔透視（リモート・ビューイング。以下RVと略称）の指導に使用する部屋の中にいる。室内には、人の注意をそらすようなものはほとんどない。周囲の主な色は明るいグレイである。目の前のテーブルにはペンと紙の山以外は何もない。天候は申し分なかった。訓練はうまくいっている。最近の目標は、戦時中のベトナムのある川にかかった橋であった。私の心があて推量しないように、目標の選択には変化がつけられている。これまでのところ、セッションが完了するまで、何を、そしてどこを見ているのか私にはわからない。

教官はいつものように、今日の午後のセッションを始める。彼はトレーニング・テーブルを挟んで私と向かい合って座っている。快適かどうか彼は私に尋ね、私のペンが紙の上に置かれるまで待つ。私は準備ができたことを彼に教え、彼は私にターゲット対応番号を与える。

日付…一九九三年九月二九日

場所…トレーニング室

データ…タイプ4

ターゲット対応番号…5987/9221

私は紙に番号を書き、そしてペンを数字の右側に動かす。この時点で、私の自律神経系が私の手を作動させ、即座にラフな線画をスケッチする。それから、この絵は知的分析と私の直観力の両方を使いながら、調査分析される。これらのすべてがSRV実験手順のステージ1に含まれている。

SRV実験手順のステージ2に移動しながら、私はターゲットにかかわる色や表面の手触り、音、温度、味、匂いなどの情報を集め始める。ステージ1と2の手続きは、私がターゲット信号で精神的な「ロック」を確立するのを手助けする。もちろん、私はまだこれには慣れていないので、その信号を分離させるのには時間がかかる。最後に、そして一一ページに及ぶ予備データのあとで、私は同時に二つの場所に存在し始める（肉体はトレーニング室に留まり、意識はターゲット現場に存在する）。

私「ここには山のようなものがある。まわりの陸地は半ばやわらかく平らで、砂地になっている。現場一帯に壮大さが感じられる。今はだれも見えない。平地には人工構造物のようなものがあるよ  
うだ」

モニター「いいぞ。ステージ3のスケッチをやるんだ。それをすべて書き留めて、ステージ4に移るんだ」

私「了解。マトリックス（紙の上に描かれた分類欄の一式。一種のチャート）を見直して……ここにあるものは茶色で砂っぽい。家が一軒ある。あのピラミッドは何だ？ ピラミッドについて（分析的判断）（アナリティック・オーバーレイ。対象に対する透視者の心的判断。その正否はセッシヨン後に初めて明らかになる）を加えさせてください。想像の産物かもしれない」

モニター「決めつけてはいけません。今のはただ（分析的判断）として書き留めるんだ」

私「その家はかなり長くて狭い。材木でできているようだ。残念ですが、またあのピラミッドだ。本当に巨大だ」

モニター「データを記録し続けるんだ。該当欄にすべて書き留めるんだ。他に何が見える？ マトリックスを見直すんだ」

私「ああ、今は人がいる。いっぱいいる。そして動物も。人々と動物と……すべてをマトリックスに書き留めています。このピラミッドはある種の崇拜に関係している。つかみどころがないですよ」

モニター「そのとおりだ。続けるんだ」

私「ピラミッドは高くて、石造で堅く砂っぽい。周辺は砂っぽくて風が強い。ピラミッドは密で堅いようだが、同時に空洞でもあるようだ。本当に高い」

モニター「了解、視点移動を行うんだ。ペンをとって準備するんだ。ピラミッドの内部に何かが見えるはずだ」

私「茶色と明るい黄褐色だ。表面はざらざらして砂だらけ、石がある。涼しいが寒くはない。ある部屋の中にある。床と石の壁がある。テーブルがあって、その上にはコップの形をしたものがある」

モニター「該当欄にすべてを書き留めるんだ」

私「この場所の目的にはどこか陰気なところがある。窮乏あるいは必要性に結びついた強固さが感じられる。トンネルがいくつもある。一つのトンネルの前にいる」

モニター「そのトンネルに入るんだ」

私「床の上はほこりだ。トンネルは暗い。外につながっている。今、地表の構造物の外側にいる。一本の道があり、まわりにはたくさん砂がある。また、この構造物に対して陰気な目的を感じる。

何てことだ。今私はたくさんの人々が知覚できる。この構造物あるいは近くの何かは壮大な建造プロジェクトで、人々は援助と多くの資源を必要としていることがはっきりとわかる。どうやら、多くの人々がこの建造で死んでいる。

隣接して都市がある。また、そばには噴火している山がある。ここで何が起こっているんだ？

私の知っているピラミッドのそばには火山はない。これはポンペイのようだが、ポンペイのそばにはピラミッドはない」

モニター「分析してはいけない。ただデータを記録するんだ。続けるんだ」

私「たくさんの人々がこれまでに死んでいて、今も続いている。たくさんさんの動きがある。人々は走っている。多くは散らばっている。失望感がある。これはひどい！」

私はその光景のスケッチを始める。火山は都市の東方にあるよう、人々はほとんど北に走っている。

「時間を少し先に進むと、生存者たちは近くで村をつくっている。彼らを助ける者はだれもない。絶望的な貧困がある。小屋とテントがある。これは本当にひどい。

うーん。都市を再建している新しい人々が何人かいる。彼らは元からいた人々ではない。彼らは新しいグループのために再建しているようだ。他の人々がやって来ていて、新しい人々はとも遠いところからやって来て、かつての住人を助けることについて、緊急だからといってうるたえてはいない。最初の人々の視点から見ると、それは私利をあさり歩く渡り者のようだ」

モニター「了解。今のところはこれで十分だ。時間を書き留めて、セッションを終わりにしよう」私「そう、あれはどこだったんですか？」

教官はテーブル上の書類フォルダーを私のほうに突き出した。私はそれを開け、人工衛星によって撮影された火星のサイドニア地区の写真を引き出した。日中で、はっきりとしたピラミッドがある。火山活動を示す証拠は、ピラミッドの右（東）にあった。

「冗談でしょう。私を地球の外に送ったのですか？ 火星に？」  
モニター「ああ、私は自分の生徒をそこに送るのが好きなんだ。それは彼らに悪評を買っているがね」

## 【検討】

このセツションが、私に初めて、火星にはある時期人々が実際に住んでいたかもしれないという考えを植えた。これ以前は、その話題はただSFの世界に属するものであった。その日の残りの時間は、私が火星史の実際の断片を目撃した事実慣れることに費やされた。

遠隔透視者たちは、UFOがかかわる人間誘拐（ヒューマン・アブダクション）の体験を観察することに成功していないと、たびたび私の教官は語った。透視者たちは過去にそれを試みてきたが、そのたびにわずかな例外を除いて、彼らはアブダクションの代わりに代替信号を受けとっていた。しばしばこの信号からのデータは象徴的にのみ解釈されうる。透視者は何かを見るが、ターゲットは見えないだろう。

事実、集められた情報にターゲットと似通ったものはまったくなかった。他の透視者たちが同じターゲットに挑戦したときも、彼らの結果はせいぶんバラバラだった。ある場合には、アブダクション事件からはまったく何の情報も得られなかった。

本章で描写されるターゲットはETによる人間誘拐である。ターゲットとした事件は、ジェイコブスの著書『未知の生命体』中のあるページからとられたものである。

たとえば自分が透視者にこの特別なターゲットをまったく与えておかなかったとしても、私にはア



ブダクシヨンの代わりに偽の信号が与えられるだろうことを私の教官は知っていた。結果は、ET  
たちが私に理解してもらいたかったシンボルを含む信号であった。おそらく、アブダクション自体  
は誤解されることを彼らは確信していて、そのためアブダクションの背後にある目的や意味を伝え  
るシンボルを代用したのである。

もちろん、セッションが完了するまで、実際のターゲットの正体について私は何も教えられてい  
なかった。

日付…一九九三年九月三〇日

場所…トレーニング室

データ…タイプ4

ターゲット対応番号…2864 / 0576

予備ステージでは、ターゲットは乾燥した陸地にあることを示していた。

私「ここには土のような色がある。茶、白、黄褐色。暖かい。砂漠のようだ」

モニター「ステージ3のスケッチに行くんだ」

私「ええと、ビル、フェンス、そして鉄道の線路のようなものがある」

私はそれらを描いた。教官は異なる視点を与えるために、現場周辺で私に三度視点移動を命じた。

「これは何かが保存されている場所のように感じられる。ここにフェンスがある」

私はぐるりとカーブしているフェンスを（紙の上に）描いた。

モニター「了解。ステージ4のマトリックスに行くんだ」

私「確かにフェンスがある。平坦で土のある場所だ。これは何かの仕事場だ。フェンスの中には動物と数人の人がいる。彼らは白人で仕事に従事しているようだ。動物に関していると、私は馬を察知している。

ここでのゲシユタルト（心理的な統一の形態）は、動物管理のそれだ。ここは明らかに仕事環境で、人々はただ割り当てられた仕事を行っている。彼らは仕事が必要があるとこの感覚をもっている。ここではたいへん厳しい決定がなされている。それは闘牛のようだ」

モニター「それをターゲット信号の（分析的判断）として、闘牛のよう」と書き留めるんだ。解釈してはいけない。ただデータをとるんだ」

私「ええと、動物たちにいるフェンスで囲われた場所には人々もいる。何かが虐待されているようだ。しかしまた、同様にここにはたくさんのお見物人を収めた大衆観覧席がある。人々はフェンスで囲われた円形の場所に見入っている。私はこれがまったく好きになれない」

モニター「了解、コートニー。休みをとろう」

再開。

私「現場に戻ってきた。たくさんのお呼び声、金切り声、また笑い声が聞こえる。大衆観覧席の人々は現代の普通の人々だ。その人々については娯楽の感覚がある。彼らにとって、これは土曜日のスポーツ・イベントのようなものだ」

私の教官は現場上空一五〇〇メートルへの視点移動を命じる。

「何だ、これは変わっている。銀色の金属製のものがここにある。速い動きがある。E.Tの宇宙船を識別している。次に何をしますか？ ここには乗り物があるようだ」

教官は私に所在追跡技術を実行させた。これを使いながら、私はその乗り物を現場上空から元の場所まで追跡した。

「キラキラ輝く金属製の飛行機のように見える宇宙船の中の人々は、目的をもった任務を帯びているようだ。飛行機の中に二人いる。彼らの態度は気取っているように見える。スタート地点は都市だ。」

都市にはたくさんの人々がいる。ある種のイベントの間、飛行機に乗っている人々は都市の人々を傷つけているように感じられる。後者は何かの目標になっており、彼らはそれを好んでいない。飛行機が離陸する飛行場がある。

元の現場に戻ってみると、動物たちは明らかに脅かされている。まるで人々が動物たちをもてあそばしているか、おもちゃにしているようだ。動物たちはパニックになっている。しかし、フェンスの内側の人々は動物たちに害を与えるつもりはないことがはっきりと感じられる。しかし、彼らはそれからいくらか楽しみを得ている」

モニター「君には動物と一緒にいる人々の目的に焦点を絞ってもらいたい」

私「彼らはまるで群れを集めるように動物たちを管理しようとしている。これは調教場だ。彼らは何かをやらせるために動物たちを訓練している」

モニター「少し時間を先に進むんだ」

私「動物たちはもうパニックにはなっていない。本当に、彼らは調教師から食べ物と愛を得ている」

モニター「了解。セッションを終わりにしよう。ここにターゲットがある」

## 【検討】

私が提示できる最善のことは、このRVセッションに対する私個人の解釈である。読者はこの体験について私とは違った解釈をするかもしれない。このタイプのセッションは二つの既知の状況においてのみ起こっている。最初は、UFOアブダクションをRVしたときである。二度目は、軍の遠隔透視者が危険なエネルギー装置を観察しようと試みたときである。いずれの状況においても、どうやらだれかが人間がその情報入手することを歓迎せずに、透視者に代替信号を与えたのである。

このセッションにおいて、動物たちは人間を代表しているように思われる。フェンスの内側の人々は、人間をある目的で訓練するためにもに仕事をしているETたちである。大衆観覧席の人々はおそらく銀河系の見物人たちである。飛行機は、フェンス内の調教師たちの活動に関係したETの宇宙船を表し、搭乗者たちはおそらく地上のそれらを支持している。

これは私が本書で描くその種の唯一のターゲットである。このターゲットは、シンボルを通して理解されることなく、実際の観察で、直接に分析可能な他のすべてのターゲットとは異なっている。あるETたちは代替シグナルをつくり出すことができ、彼らは遠隔透視者の心と体験に代替シグナルを合わせることが可能であると、現在私は知っている。しかし、そのような出来事はきわめてまれなことである。

## 第6章 火星人…現在の生存者

まだ訓練中の私は席に腰かける。私の教官は新しいターゲットを記した閉じられたファイルを手  
にしている。まだ私にはターゲットが何であるのか推測しようとする誘惑があつて、わずかに抵抗  
がある。私の心が直接情報を受けとることに慣れれば、推測しようとするのを自然に止めるよう  
なる、と彼は私にいう。おそらく、忍耐は学究上の美德である。昨日の朝、彼は私に壁から巨大な  
フォークが突き出ている異様な美術館の展示を透視させた。私は彼が時々冗談で話すメリーランド  
州フォート・ミードにある汚水処理場へ私を送ろうとしているのかと思つた。彼はテーブルをはさ  
んで私の前に腰かけ、訓練を始める準備ができているか尋ねる。  
「いいですよ。合図してください」

日付…一九九三年一〇月一日  
場所…トレーニング室

データ・タイプ4

ターゲット対応番号…5664/1821

予備ステージでは、ターゲットはある山に関係していることを示していた。

私「茶と緑をとらえている。風があつて涼しい。ヒューヒューという音も聞こえる。うーん。ここでは何が起こっている」

モニター「了解、コートニー。ステージ3のスケッチに移るんだ」

私は白紙の上に丸い山を描く。山の頂上は禿げているが、下には木々がある。山の表面を風が吹きつけている。ステージ4に進む。

私「今、マトリックスを調べている。ああ。人々がいる。白人だ。ちょうど今予感がする。人々が着ている服が見える。またあの山があつて、風がある。ひやつ！強い恐怖、それに興奮と解放が感じられる。ここには、さまざまな感情をもったさまざまな人々とともに、たくさんの感情があるようだ。飛行船のようなものが見え、異常に興奮した活動が感じとれる」

モニター「視点移動の準備をするんだ。山の上空三〇〇メートルからならば何か知覚できるだろう」  
私はその移動を実行する。

私「ここには活動が、とても速い活動がある。何が起こっているのかを割り出すのは難しい」  
モニター「了解。人々のところに戻るんだ。何が見える？」

私「また活動があるが、今回はそれは動いている人々だ。人々は興奮している。うーん。彼らは、

おそらく彼ら自身が計画したものではない活動に巻き込まれている。また山が見える。それが彼ら自身の計画であるのかわからないが、彼らは作業計画をもっている。乗り物がある。人が一〇人ほどいる」

モニター「さらに視点移動をやろう」

彼は私が山頂に移動するように指導する。

私「とても速い円を描く運動がある。それは山の上にならなくて来る。かなり渦巻いている。風で葉が落ちるように、あるいは激しい横風の中を下降する鳥が円を描くように。オー！これは分析したほうがいい。E.Tの宇宙船を見つけた。つやがあり金属質で暖かい」

モニター「ただ書き留めて、ステージ6のスケッチに進むんだ」

私「今、たくさんの山を見ている。多くは丸くなっている。それは、ちょうど今私がいる山をとり囲んでいる。この山の片側には平らになった場所がある。一つの谷がこれともう一方の山々をへだてている。東方に伸びるいくつかの高原と、特に北側と南側の周囲の山々を私は見えている」

モニター「もう一度、視点移動だ。物体の中に何かが見えるだろう」

私「了解。ここにあるこれは鏡のようなものだ。輝いていてつやがある。たくさんの光がある。暖かい。異様に甘い砂糖菓子のような匂いがする。また何かヒューヒューという音が聞こえる。おやつ、これは本当に動いている！」

モニター「ステージ6のスケッチ」

私「これはまっすぐ山の中に入っている！完全に岩を通り抜けて！何だこれは!？」

モニター「手続きにしたがうんだ。ただデータをとるんだ。それをすべて書き留めて、ステージ6

のマトリックスを調べるんだ」

私「了解、宇宙船の中に生き物たちがいる。生き物はすべてが同じタイプではない。ここに壁がある。機械。生き物たちの心から何かがわかる。これは供給航路だ。たいしたものではない。彼らはいつもの任務をこなしている。人間に似ている……技術者だ。皆がユニフォームを着ているようだ。今、山の中の洞窟か穴のようなものの中にいる。宇宙船はその中央に着陸している。これは格納庫か何かだ。私がここにいることを彼らは知らない。何か大切そうな液体を運んでいる。それはへドロのように、見た目に本当にむかむかするものだ。それにはある生物学的な目的がある。彼らにとつてそれは重要な液体だ。エンジン・オイルの粘りぐらいありそうだ。

私は今、このまわりを移動している。仕事をしているたくさんの生き物がいる。作業の実施にかかわる重要な仕事は男たちが行っている。女たちはここでは働いていない。彼女たちの仕事は別にある。彼女たちは大事にされていて、あまり重要でない仕事を行うようだ。

まだ移動を続けている。ここには子供たちがいる。子供たちは健康ではない。子供たちは具合が悪く、本当に病気になる。女たちは辛うじて自分たちを抑えているが、ほとんどパニック状態だ。彼女たちは静かに腰かけているが、うろたえている。とても怖がっている。ふたたび、男たちを見つめる。ああ、この文化は男性上位主義だ」

モニター「休みをとろう、コートニー。時間を書き留めるんだ」

昼食後に再開。

私「育児室の女性のところに戻ってきた。赤ん坊のための容器がある。子供たちはしゃべっていない。彼らは陰気か、寝ているか、不幸であるかのいずれかである。ここでは何かが感じられない。



何人かの少年と少女が見える。若者たちは大丈夫なようだ。しかし、彼らはそれほど多くはない。たくさんの赤ん坊がいて、彼らは病気がまたは少なくとも大部分が病気である。若い人々はその問題を無視している。しかし、母親たちは何が起こっているのか知っているようだ。

物質的な環境が健康的でないことが問題だ。問題があるのはすべての環境だ。体の機能不全ばかりではない。牢屋を出るように彼らは、文化または社会的束縛を断ち切って外に出る必要があるように見える。状況は、ある新しい要素と成分を必要としている。私はここで、人間的な何かが役に立ちそうな気がする」

ここで教官は、私とその問題の解決法に焦点を合わせるよう指示した。

「遺伝子上の問題がある。彼ら自身の遺伝子的な変化がいまだに続いているようだ。今、私ははっきりとわかるようになった。生き物たちは、今、生きている火星人たちの感覚を私に与えている。彼らには遺伝子が修正できない。これは彼らにとってひじょうに大きな問題である。自暴自棄な状態が広がっている。」

彼らの装備と資源は、外からの助けなしに遺伝子の問題を解決できるほどには十分に進歩してはいない。女性に関する限り出口はないようだ。彼女たちは男たちが救援を得るのを期待して、ただここに座っている。男たちは自分たちの活動にひじょうに狭い視野しかもっていない。彼らは怒っていて頑固である。生き残りがここでのカギである。生き残ること。ああ、この生き物たちは絶望的だ！」

モニター「コートニー、液体に関してもっと調べるんだ」

私「何かが火星からやって来る。おそらく〈分析的判断〉として書き留めるべきだろう……その人々

の本当の正体をだれが知ろう。私はただその人々に火星の感覚をもったただけだ」

モニター「手続きにしたがうんだ。ただ書き留めて、分析してはいけない」

私「ああ、液体はひどいものだ。ひどい味がして、粗末なものだ。しかし、この人々は自分たちの血液のようにその液体を大切にしている。それは大きめの容器に入っている。それを貯蔵して守る環境設備がある。それは緑がかった黒である」

モニター「その液体が作られている場所に行くんだ」

私「オー！ 私はどこにいますか？ 私はどこかに飛ばされた。ムチで打たれたように、パチッと音がして私はどこか別の場所に来た感じがした。」

この場所は赤く、砂地だ。構造物がある。私はその建物の中に入れる。何か密閉されたドアがあるようだ。ドアを通り抜けるべきですか？」

モニター「最初に、その建物のまわりの環境について教えてくれ。そしてその建物の中に入るんだ」私「ここは砂漠だ。何も育っていない。不毛だ。そして寒い。建物は日干しレンガづくりの家のようにだ。内側の表面は金属質でプラスチックだ。輝いている。生産施設だ」

モニター「視点移動するんだ」中絶。

「生産施設の五キロ東に何かが見えるだろう」

私「ああ、またあの宇宙船の一つが見える。下降しながら、曲がったり、円を描いたりと狂った動きをしている。それは真上からまっすぐにその建物の中に向かっていった。何と、まっすぐ屋根を通り抜けた！」

モニター「建物に戻って乗り物についていくんだ。それはどこに行くんだ？」

私「今、建物の中にいる。ああ、宇宙船が降りてきた。建物の下にはたっくさんの地下室がある。宇宙船内の生き物たちは建物の外を歩きたがらない。建物の外にはかなりの赤と黄褐色があるのがわかる。そして依然、私は火星の感覚をもっている」

モニター「地下室に行くんだ」

私「この場所は最新風だが超モダンではない。男たちが見えるが、女はいない。労働者がいる。ここは楽しい労働環境ではない。人々は非番でここにいるのだ。さらに下がってみよう。

彼らはここに、下の洞窟に住んでいる。事実上、一つの都市だ。たっくさんの洞窟とトンネルがある。機械が至るところに置いてある。このほうが上の洞窟の中の仕事よりも快適で、この人々はここで長時間暮らすことができるだろう。ここから立ち去ることに対する恐れを感じる」

モニター「なぜ、彼らは立ち去ろうとするんだ？」

私「彼らにとってここには未来がない。ここは死んだ場所だ」

モニター「その人々の外見を描くんだ」

私「えーと、今、男たちが見える。彼らは人間のような顔をもっているが、髪の毛がない。普通の人間のようには見えない。別の人種のように見える。彼らはある方法で自分たちの意識と交流する装置のような、精神の機械をもっているようだ。彼らの精神がその装置をコントロールする。生き物自身は薄い色の皮膚をしている。また彼らは人間と比較して弱々しく見える」

モニター「了解。セクションを終わりにしよう。今はこれで十分だ」

私「ふー、長かった。ところで教えてください。私はどこにいたんですか？」

モニター「メリーランド州フォート・ミードにある汚水処理場だよ」

私「えっ！」

モニター「ただの冗談だ。ここに書類フォルダーがある。見るんだ」

私はそのフォルダーを開き、次のように書かれている一枚の紙を引き出した。へ火星入／現在の生存者。しばらく無言が続く。

モニター「大丈夫か？」

## 【検討】

その日遅く、教官と私は長時間にわたって火星の問題について話した。私と他の透視者たちが提出した描写に基づいた山の所在について、彼には思い当たるふしがあるといった。彼は私に、ニューメキシコ州サンタ・フェ近くにある山々の写真をいくつか見るよう提案した。写真を見ながら心の内側で何かを認識したと感じた。他のたぐさんの透視者による以後のRVは、その所在を確認する方向に向かった。RVによる証拠は、その山がニューメキシコ州のサンタ・フェからさほど遠くない国定森林の内側に位置するサンタ・フェ・ポールデイ山であることを示している。

地球に火星人がいる。しかし、警笛を発する前に我々は、これが何を意味するかについてはつきりと考えなければならぬ。この火星人たちは絶望的である。どうやら彼らの火星居住区はたいへんなことになっているらしく、地表では生活できない。彼らの子供たちには自分たちの故郷に未来はない。彼らの故郷は破壊された。それは塵の惑星だ。本書の最終章において、困窮するこの時期の火星の隣人たちに人間はどのように対応すべきか、私は自分の考えを述べるつもりである。

## 第7章 最盛期の火星文明

訓練はうまく進んでいる。昨日の午後、教官は私にカリフォルニア州のモンテレー湾を遠隔透視させた。結果は、私が帆船上から下をじっと見ているところで終わった。しかし、今朝のセッションは異なるタイプのものであった。彼はタイプ6の条件下で、私にセッションを体験させたいと思っていた。それは、モニターも透視者も事前にかんりのターゲット情報をもって行うものである。

前もってターゲットについて知ることになっていたので、私が見たい時間と場所、すなわち最盛期の火星文明を選んだ。崩壊前に、彼らがどのような社会を営んでいたのかを私は見たいと思った（後章でこの崩壊を起こした大惨事について説明する）。

このセッションで何が起こるのか私にはまったく予期することはできなかった。私がこのセッションから学ぶことになった一つは、予期しないことが起こった際（むしろそのほうがふつうである）、いかに経験を積んだモニターをもつことが重要であるかということであった！

日付…一九九三年九月二日

場所…トレーニング室

データ…タイプ6

ターゲット対応番号…8587/7258

予備ステージでは、ターゲットは乾燥した陸地と、人工構造物に関係していることを示していた。

私「茶色に黄褐色、そして赤が見えてきた。あたりは砂っぽくて、風がある。気温は暖かいところから涼しいところまで幅がある。声、音楽、会話が聞こえる。また、何かをこする音や騒音が聞こえる。場所の雰囲気は、ケニア東岸の古代スワヒリ港都市、オールド・タウン・モンバサに少し似ているようだ」

モニター「続いてステージ3のスケッチに移るんだ」

私「片側に建物が並ぶ道がある。だれかが丸い建物のそばに立っている。それは小さな円形競技場といった感じだ」

モニター「了解。今のは〈分析的判断〉として、〃円形競技場のようだ〃と書き留めるんだ。ステージ4に進むんだ」

私「今、人々を、たぐさんの人々をとらえている。男たちだけが見える。彼らの顔に注目する。髪の毛がなく、人間よりも大きな目をしている。皮膚は薄い色をしている。家がある。建物は粘土か日干しレンガづくりのようだ。現在の地球基準からすると、この人々は貧しいが幸せなようだ。全

体的に、住むには苛酷な場所に見える。

まわりにはたくさんの水がある。この人々は水を好むようだ。彼らは基本的な道具はもっている。彼らのコミュニケーション手段もまた素朴なものだ。アフリカを思い起こさせる」

モニター「〔分析的判断〕として、アフリカのようなだ」と書き留めるんだ」

私「彼らの心に注目する。いくらかテレパシー能力をもっている。女と子供たちがいるところに来た。女たちはほとんど家の中にいて、あまり子供たちと外に出ることはない」

モニター「彼らの文化について何か察知できるか？」

私「ええと、彼らは村の集まりに似た会合をもつようだ。もう一度男たちを見させてください」

モニター「休みをとろう」

三〇分後に再開。

私「私はまた家のあるところに来た。その中の一つに入る。三つの部屋がある。家の中にはトイレがある。ここの人々は、これが快適な生活だと感じている。コップなど台所用品が見える。家族がここに住んでいる。四人の男女が見える。この人々は一夫多妻をとっているようだ」

モニター「何かシンボルのようなものがあるかどうか見てみるんだ」

私「オー。今何が起こったんだ？ 時間の混乱を経験した。別の時間帯に飛ばされたような気がする。かなりびくつきた感じだ。ここは様子が違っている。何が起こっているんだ？」

モニター「分析しないで、ただデータをとるんだ。何がある？」

私「私はバッジを見つめている。まわりは白く磨かれた表面だ。金属が見え、空中には灰色と黒の煙がある。さっきまでいたところと比較すると、ここにはきわめて急速な科学技術の発展がある。

他の生き物も今ここにいるのが見える。彼らはもつと小さく背が低い。彼らはある任務のために働いているようだ。ヤー、彼らは動機づけられている。ある理由のために、スピードと緊急性が最も優先されている。

彼らは宇宙船をもっている。バッジをつけたユニフォームを着ている。何人かはパイロットだ。今は火星人は見当たらない」

モニター「火星人がどこにいるのか見つけ出すんだ」

私「まさにそうだ。火星人は行ってしまった。彼らは出た。家々は空だ。私はまだ火星にいるが、この背の低い進歩した生き物たちを除いて、ここはゴースト・タウンとなっている。彼らは自分たちの家を建てた。箱型の最新式のものだ。家の中には工学的機械がある。またモダンな部屋が見える」

モニター「背の低い生き物たちの目的に注目するんだ」

私「彼らは大きなプロジェクトの第一段階としてここにいる。彼らはすべてのものを荷造りしているようだ」

モニター「了解。ステージ6の時系列線タイムラインに行こう。線上に最盛期を置くんだ」

中断。

「さあ、その線上に他の者たちがやって来た時期を点として置いてみるんだ」

私はピーク時を時系列線の左側に置き、他の者たちの到着をページの真中に置いた。教官は、背の低い生き物のユニフォーム上にあつたバッジを描かせるのに、私にかなりの時間を与えた。それは中央にとぐろを巻いた蛇をあしらつたバレンタイン・デーのハート型に近かつた。ハート型の境



Skech of the target site

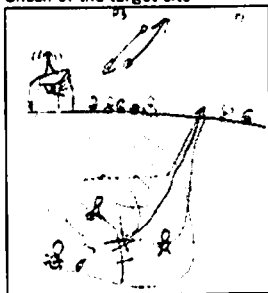


Photo of the target



火星面岩をターゲットにしたときのスケッチ。ブラウン博士の生徒によるもの。もちろん、生徒にターゲットは伏せられている。詳細はブラウン博士のホームページを参照のこと。http://www.farsight.org/

界線は金色で、その中の地は白で、ヘビの頭は赤であった。モニター「いいぞ。今度はステージ6のマトリックスを調べるんだ」私「二つの異なるタイプの生き物がいるように感じられる。火星人自身はその人々のことを、必ずしも宇宙人ではなく別の種族の火星人と考えているようだ。火星人たちにはただ理解できていないのだ。

背の低い生き物たちが来たとき、状況はパニックと絶望のそれであった。背の低い生き物は不透明な白い肌をしている。火星人は彼らのことを神のようにみなした。私は赤い液体に注目している。背の低い生き物たちはある方法でこの液体を使用している。火星人たちはある変化に備えるために一まとめにされているようだ。これは気味が悪い。火星人が自らの肉体に肉体的変化を起こすことを、背の低い生き物たちが計画しており、火星人たちはしばらく冷たい貯蔵庫の中に入れられる。

この背の低い人々はグレイに似ている」

モニター「了解、コートニー。セッションを終わりにしよう。終了時間を書き留めるんだ」

## 【検討】

シンボルを探させようとする教官の言葉は、まったく思いがけず、時間を通り抜けて、グレイのユニフォームにつけられたバッジまで私を導いた。以来、私はそのような体験を多くもった。その感覚は、急速な物理的動きと似ているが、二つを混同することはできない。それは静寂をしたがえる突然の加速や瞬時の方向感覚の喪失を伴っている。

最盛期の火星人类社会は、テクノロジの面において古代エジプト社会と比べられる。彼らは苛酷な状況の下で生活した人々である。しかし、彼らは家族を養い、街で暮らし、共同体生活に参加することができた。男たちと女たちは、その社会においてひじょうに異なる役割を果たした。それは男女平等の社会ではなかった。女たちはほとんどの時間を子供たちとともに家の中で過ごした。興味深いことに、この文化的側面はあまり今日でも変わっていないようだ。

火星人类社会はある大惨事を経験した。多くの火星人が死に、ある者は救済された。もつとも、火星人たちが救済といういい回しを好むかどうか私には定かではない。

救済したのは、我々が現在グレイと呼んでいる生き物であった。彼らは火星文明が崩壊する最後の瞬間にやって来た。彼らは、大急ぎで火星人たちを「貯蔵」した。専門的な説明をすることができないが、救済の本質的な目的は火星人の遺伝子物質の維持であった。

これらすべては何百万年も前に起こった。セッションのあと教官と私は、どのようにして火星人が「解放された」、どのようにして彼らが地球にやって来たのかを考えてみた。事実上すべてのR Vデータは、火星人たちは火星と異なる地球の重力と条件の下で生きられるよう遺伝子的に変化が与えられたことを示している。実際の変化は貯蔵期後の最近に起こり、まだ完了していない。

我々はまた火星人の科学的進歩について思いをめぐらした。今日の火星人はテクノロジーを発達させてきているが、グレイとは比較にならない。

グレイは自分たちの宇宙船を時間と超長距離——つまり銀河スケールの距離——の両方を横断させることが可能なテクノロジーをもっている、現在の我々は知っている。しかし、火星人たちの宇宙船ではこれは不可能である。もし可能であったなら、火星人たちは、大惨事の前に自分たちの惑星から逃げ出していただろう。それでも彼らの宇宙船は、(人類の水準にくらべれば)進歩した推進技術を利用してゐる。それは宇宙船の物質相を部分的に変え固体物質を通り抜けるのを可能とする。

このセッションから、我々はいくつか予備的な結論を導き出した。

- (1) 火星人はグレイによって滅亡から救済された。
- (2) 火星人は遺伝子操作によって最近救い出された。操作は完璧ではなく、多くの子供たちに死をもたらした。
- (3) 火星人の科学技術レベルは、現在の人類よりも約一五〇年進んでいる。
- (4) 現在の火星人たちには地球以外に避難する場所がない。

研究のこの時点で、火星人の科学技術におけるゆるやかな進歩の背後には何か理由があるのか、と私は考え始めていた。だが、人類と火星人との間の相互交流のために、可能性をとっておいでくれているように思われる。

グレイは火星人を救助するために最後の瞬間にやって来たことを思い出していた。過去のデータに基づいて未来を予言すれば、ここ地球における大惨事の危機も予見できるかもしれない。そのような危機は、人類をワラをもつかむ気持ちにさせるだろう。火星人の科学技術は、まさにそのような状況において必要とされるものかもしれない。

## 第8章 サブスペースのヘルパーたち

同じ日の午後一時三〇分、教官と私はちょうど昼食から戻ってきた。ETの状況は私が以前考えていたよりもはるかに複雑であることを私は悟り始めていた。地球のまわりを飛ぶETの状況はもはや単純なものではない。彼らの活動の背後には現実の目的があり、少なくとも火星人の中にはかなり困難な状況におちいつているものがある。

我々は火星人の救済方法について思索した。彼らは故郷の苛酷な環境条件と地球人類の敵意から逃れ、長い間地下で暮らしてきた。火星人たちは自分たちの状況を改善するための手段をもたなかったが、我々の中には彼らが必要とするものを正確にいえるものはだれもない。ただいえるのは、彼らが早急な助けを必要としているということだけだ。

本章では、私がブラインドで教官がターゲットを選んだSRVセッションを紹介する。

日付…一九九三年九月二日

場所…トレーニング室

データ…タイプ4

ターゲット対応番号…8976/6643

予備ステージでは、ターゲットは人工建造物の複合体に関係していることを示していた。

私「たくさんさんの色が見えてきた。青、赤、主に原色、黒、緑。手触りは塗装した感じだ。滑らかで、びかびかで、輝いている。空気の流れが聞こえる。ここは暖かくて、快適だ。うーん。この場所は進んでいる感じだ。ここには初めて来たような気がする。ここにいるべきではないという気持ちと、ここにいるべきだという気持ちと同時に起こり、少し私は臆病になっている」

モニター「ステージ3のスケッチに移るんだ」

私「了解。えーと、何か黒い長方形のものがある。上に動き。たくさんさんの大きな長方形の物体。何だ、これは都市のようだ」

モニター「とりあえず〈分析的判断〉として『都市』と書き留めるんだ。ステージ4に進むんだ」  
私「ここにはいくつもの構造物がある。建物が至るところにある。ここには目的感がある。また何か、あるいは何者かの興奮が感じられる。……これは異様だ」

モニター「分析してはいけない。ただマトリックスをチェックするんだ。データを書き留めるんだ」  
私「しかし、それはただ、私はこのターゲットには目的があることを感じているということだけだ。これまでこんなことを感じたことはなかった。だれかが、非物質的な何ものかがここにいるという

感覚だ」

モニター「了解、とりあえず休憩をとろう。時間を書き留めるんだ」

五分後。

私「えーと、今は建物のところに戻ってきた。ここには他の生き物たちもいる。彼らの間にも目的感を察知している」

モニター「君はどこにいるべきだと感じるんだ？」

私「最初にその建物を追いかけるべきだと感じている」

モニター「了解、その建物から始めるんだ。マトリックスをくまなく調べるんだ」

私「建物のところにいる。この場所は救済目的に関係しているようだ。その種の仕事が行われている仕事場だ。どうやら、建物の中に入っていくようになっていっているらしい」

モニター「それでは中に入るんだ。マトリックスをチェックし続けて、すべてのことを書き留めるんだ」

私「オー！ 本当には生き物がいる。それらは人間ではない。彼らをくまなく見ることができる。ここはどこなんだ？」

モニター「マトリックス内に留まるんだ。分析してはいけない。素早くデータ欄をこなすんだ。続けるんだ」

私「えーと、部屋の中にいる。壁があつて、壁からやってくる光がある。白い光がある。以前ここに来たことがあるかもしれないと今感じているが、いつだかわからない。

ワァー。私は歓迎されている。この生き物たちは私がここにいることがわかっている。彼らはま





屋のほうへ導かれていた。ここには他の生き物たちがいる。しかし、ここにはまた人間のエーテル体かサブスペース体がある」

モニター「未来に関して彼らがやっていることを探り出すんだ」

私「彼らには必要に迫られてここにいるようだ。うーん。異なる人種や種族がかかわるようになるだろうと私は教えられている。悪い時代がやって来つつある。たいへんな闘いの時期がやって来るだろう。その間、科学技術はゆっくりと進歩する。人々の生活は基本に戻るだろうが、原始的にはならない」

モニター「火星人について尋ねるんだ」

私「人間は火星人と、ニューメキシコの洞窟近くにある彼らの収容ホームで会うだろうと私は教えられている。火星人は強い恐怖心をもっている。我々（人間）は彼らを洞窟から連れ出すことに助力しなければならぬ。」

火星人たちを連れ出すには我々が積極的であると同時に受動的にならなければならないと、この生き物たちは私に話している。我々はとても賢くなる必要がある。これは簡単な仕事ではない。火星人たちは外には出たがらない。彼らは人間の攻撃性を恐れている。どうやら、火星人の視点から見れば我々はそれほど開化してはいないらしい。しかし、我々は彼らに話しかけ、交渉する必要がある。

私はひじょうに直截に何かをいわれている。火星人たちは正式な話し合いを必要としている「モニター」どこでその話し合いは行われるんだ？」

私「家、人間の家のなかで。火星人たちが外に出る準備ができたときにのみ（その前ではない）、人

間たちは洞窟の中に入ることができるだろう。我々は積極的なコンタクトをとる必要があると私は教えられている。我々は彼らを追い求めなければならぬ。我々は絶対に挑戦を止めてはならない。しかし、我々は一歩ずつ前進する必要がある。我々は火星人によって傷つけられるようなことはない、とはつきり私はいわれている。彼らが我々のところに出てくるのを期待するのではなく、我々が彼らのところへ行くべきだ」

モニター「どのように我々はとり掛かるんだ？」

私「我々ほもつと多くの人々を訓練することによって始めるべきだ。訓練はたいへんなことのようにだ。遠隔透視はその一部だが、それ以上のことがある」

モニター「今のところはこれで十分だ。そこを去るときに、ありがとうをいうんだ。セッションを終わりにしよう。さあ、ターゲットを見ていいぞ」

彼は大きなマニラ封筒をテーブル越しに私に差し出した。私はそれを開け、一枚の紙を引き出した。(ミッドウェイアーたち)(中間・途上の人たち)と読めた。

私「いったい、ミッドウェイアーとはだれなんですか？」

モニター「それは長い話だ。まずは背景から始めよう」

## 【検討】

夕食をとりながら、教官はミッドウェイアーたちとかかわった事情について私に十分説明してくれた。軍のRV調査の初期の頃、RVチームの何人かのメンバーは、精神世界を見極めた本である

『ザ・ウランティア・ブック』から着想を得て、ある非物質的なターゲットを調査したいと考えた。チームは（ミッドウェイアーズ）と呼ばれるサブスペース存在の一团をターゲットとした。『ザ・ウランティア・ブック』によると、その生き物の密度は人間の肉體密度と近いのだが、決して肉體的形態をとらない。彼らの体は、我々の認知能力外の存在である。ミッドウェイアータちは人間の精神的進歩を促すために、地球に派遣されている。

ミッドウェイアータちが現実存在するという発見は、数年の間、軍のRVチームの意識に大きな衝撃を与えた。一方で、彼らが存在するという情報は、さまざまな理由できわめて重要であった。しかし、他方で、ミサイルの地下格納庫内の弾頭総数について心配する將軍たちに対し、これらのすべてを説明することは至難のわざであった。

どうやらミッドウェイアータちは、ここ地球に永久的に基礎を置いているので、彼ら自身は地球外生命ではない。しかし、彼らは人間ではなく、肉體的な意味で人間の形態をもとらない。彼らは人間的環境で生き働く、サブスペース生命体である。

ミッドウェイアータちはここ地球で働くが、彼らの指令組織はこの惑星に起因するものではない。彼らは、さまざまな仕事を割り当てられる、たくさんのサブスペース集団の一つである。ミッドウェイアータちは共同して働く軍のチームのように、部隊としてともに働く。しかし、彼らは軍国主義者ではない。彼らは人間の進化の可能性を促進するために人間のサブスペース面とともに働く。

本来の意味で、彼らは「品行方正家」のように見える。彼らが我々を助ける動機について私はまだ深く理解してはいない。彼らは、人間を含め、彼ら自身や他の者たちにとっても重要な、ある目的のために働いているようだ。

教官は、テレパシーの可能なスペース生命体と働く経験を私に与えるために、彼らに私を少し紹介した。彼らが私をどこに連れていこうとしているのか彼にはわからず、彼らが私にどんなタイプの情報を与えるのかについても彼は知らなかった。

かなりたつて、火星人を洞窟から連れ出すために、我々はどのように彼らを勇気づけられるのか理解することができた。大きなカギは、人間との正式な話し合いを始めるために彼らと会うようにすることにあるらしい。ミッドウェイアーたちは、我々は脅すことなく火星人たちと積極的に接するべきであるという明確な印象を残したが、これはいくらか矛盾しているように思われる。最初のSRVの訓練から何週間もたつて、直接人間と働き始めるといふ火星人の間の欲求を満たしてあげるには、人間に見つからないように暮らしている、洞窟内の彼らのホームの地理的所在を含め、彼らの活動を広く知る必要があることが私にはわかった。私が考えたように、もし人間が彼らを見つけて出すことになっているのなら、そして、もし人間が彼らを探し出し、彼らの動きと活動を後押しできるのなら、彼らはもはや隠れる必要はなくなるであろう。そのような状況の下で、唯一道理にかなった行動は、心を開いて人間との交渉を行うことである。

しかし、この状況には二つの側面がある。一つは、火星人たちが人間とつき合いたくなるようにさせることである。それは、人間が火星人と交流をもちたがるようになることとはまったく別問題で、教官と私は、後者の問題が解決をさらに難しくしてしまうことを恐れている。我々は人間の側にこそ助けが必要であると感している。

## 第9章 空からの攻撃

一九九三年八月二一日、突然、NASAの宇宙探査機と地上管制官との間のすべての通信が途絶えたとき、探査機は火星に向けて飛行していた。探査機の「マーズ・オブザーバー」号は、火星表面のほぼすべてを詳細に写真撮影する予定で、その中には、以前の衛星写真が明らかにしたピラミッド状構造物や、人間の顔に似た地形カーブを示す異常な地表面をも含んでいた。以前は完璧に機能していた探査機の予期せぬ沈黙について、NASAの技術者や科学者はその状況説明に当惑した。事件の数日後、『「ニューヨーク・タイムズ」紙は、NASAの人々は、なぜ火星に不運がつきまとうのか率直に不思議がっていると報じた。火星にかかわる他の不可解な出来事の一つとして、この事件の少し前、ソビエトの探査機が火星の衛星の一つに近づこうとして、似たような状況下で行方を絶っている。当局の何人かは半ば冗談で、あの惑星にかかわる奇妙な技術的な失敗の連続には地球外生命が関係しているかもしれない、と大いに不思議がった。数カ月の調査のあと、おそらく探査機は内部の給油トラブルで爆発したものと当局は発表した。しかし、調査員たちはその診断に

ついでには確証をもっておらず、その主張を支持するデータもなかった。それは一種のカンであったが、当時の彼らにできた最大限のことであった。

本章では、実際に「ヘマーズ・オブザパーバー」号に何が起こったのかを説明する。読者は、セツシヨンの前にはターゲットの正体について私には何の予備情報も与えられていなかったことを心に留めておいていただきたい。さらに、データは遠隔でモニターされたセツシヨンで収集された。つまり、このセツシヨンは、私がジョージア州アトランタにあるエモリー大学の私の研究室に座っている間、教官の自宅でモニターされたものである。そのようなモニタリングは言葉と視覚の両方によるものである。モニターと透視者の密な連絡を保つために、両者でスピーカーフォンが使用される。さらに、セツシヨンの間、途中結果（スケッチや生のデータを含め）は、セツシヨンが終わったあとの最終結果と同様に、モニターにファックスで送られる。すべてのタイプ4データでは、セツシヨンが完了したあとに透視者にターゲット情報が与えられる。

日付…一九九四年二月七日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…6421/9054

ステージ1のデータによると、私は運動感の伴う硬質な人工構造物にかかわっていることを示していた。

私「ここにはたくさんさんの動きがある。何かがとても速く動いている。たいへん活動的だ。うーん。二つの物体が一緒に、またはかなり近づいているのがわかる。一つは小さく堅い固体だ。それはかなり速く動いている。もう一つは大きく、もっと複雑で不揃いな形をした物体だ。

これは奇妙だ。どちらの物体の下にも地面がない。どうして地面が見えないのか私にはわからない。それらはただそこにあるのだ」

モニター「ステージ6に進んで、マトリックスとスケッチの準備だ。スケッチの際に、その物体の位置を示すよう紙の上にXと記すんだ。その物体の動きを追うんだ」

私「ええと、小さいほうの物体は横からやって来た。今最初の位置に戻ってそれを追いかけている。ワアー」

モニター「何があるんだ？ 手続きにしたがうんだ。マトリックスに戻るんだ」

私「宇宙船だ。小さいほうはETタイプの宇宙船に誘導されている。どうやら宇宙船からの発射物だったようで、もう一方の不揃いな形をした大きい物体のほうに当たった。どうして彼らはこんなことをするんだ？」

モニター「分析してはいけない。ただデータを集めるんだ。何が見える？」

私「えーと、今、宇宙船の中に入ろうとしている。うーん、ここには生き物たちがいる。皆禿げているようだ。目がある。今一人の顔をスケッチしている。

宇宙船全体は大きな金属の構造物に見える。ある部屋の中にいる。部屋の中には物が、たくさん物、専門的な物がある。椅子、テーブル、多少の生き物、コンピューター端末機、他にもそのよ

うなものがある」

モニター「了解、とりあえず休憩をとろう。時間を書き留めて、これまでの結果を私にファックスして、電話し直すんだ。またな」

私「わかった。二、三分ください」

再開。

モニター「コートニー、ステージ6のスケッチに戻るんだ。宇宙船の動きをたどって、その出発点に戻ってもらいたい」

私「了解。今やっている……出発点にいる。それは地面の中の穴、洞窟だ。金属の乗り物は洞窟の中にある。生き物たちがその乗り物に乗り降りしている」

モニター「地表に行くんだ。何が見える？」

私「今、上に向かっている。赤、砂地の手触り、凸凹の地形。火星のようだ」

モニター「それは分析だ。とりあえず〈分析的判断〉として書き留めるんだ。マトリックスを見直すんだ。データだけだ。洞窟に戻るんだ」

私「洞窟の中にはたくさん生き物がいる。彼らはグレイ種だ。働いている」

モニター「コートニー、生き物の一人を選んでその心に入ってもらいたい。何かわかるか？」

私「了解、一人選んだ。オー！」

モニター「〈感情的反応〉（遠隔透視されたものに対する感情的反応。エーセティック・インプレッション）としてそれを書き留めるんだ。続けるんだ。彼らについて何か見つけ出すんだ。彼らは眠るのかどうか探り出すんだ」



私「何てことだ。今はつきりとこれがわかった。私がここにいることをそのグレイはわかっている。私の探索を気にしていないようだ。とても自然な感覚だ。それは我々が眠るようには眠らないかもしれない。何か他のことが起こっている。これと比較可能なプロセスは、意識がひじょうに深くさかのぼるときだ。これが何を意味するのか正確にはわからない。意識をたどって戻るべきですか？」

モニター「先に進むんだ。マトリックス内に留まって」

私「オー。真っ暗だ。空虚な空間だ。悪くはないが、ここで何をするのか私にはわからない。次に何をすべきですか？」

モニター「その生き物についていつ誕生時までさかのぼるんだ。それはどこから来たんだ？」

私「今、そこにいる。幼児は透明な小型容器のようなチューブの中にいる。今は新しい場所に来ている。ここがどこなのかはわからないが、実験室のように見える」

モニター「外に出るんだ。何が見える？」

私「ここは空気のない世界だ。星、クレーター、岩が見える。この印象を表層的にも分析したほうがいいだろう。月のようだ。光は信じられないほど明るい。たくさん星、凄く明るい！ おや、このものは透明だ。見回している。空には一つ惑星がある。残念だが地球のようだ。雲や水さえも見える。それは青い。(分析的反応)として地球とさせてください」

モニター「チューブの中の幼児に戻るんだ。チューブの中には何がある？」

私「大きな胎児のような、ただの幼児と濃い液体。液体は緑だ」

モニター「その液体を味見するんだ。どんな味に似ている？」

私「ウワァー。オイルのようなひどい味だ」

モニター「わかった。時間を進めて、宇宙船があつた洞窟内の生き物のところに戻るんだ。労働環境とその生き物の個性についてもっと探り出すんだ」

私「このグレイ、それがグレイの外見に似ているので、そう呼ばせてください。彼は我々の標準からすると幸せではない。それは働いている。

今、その心に入り込んでいる。感情がないようだ。心理的にひどい目にあつたことがあるような感じさえする。これはよくない。

他にほとんどわかるものはなさそうだ。この生き物について私はよい気持ちがない。何かここにはない」

モニター「その生き物をスケッチするんだ」

私「わかりました。皮膚は白く、革のようだ。痩せた外見にもかかわらず、実際はかなり強健そうに見える。しかし、何となくその生き物がかわいそうだ。そう思うのはよくないことかもしれない。ただ私は気分が悪い」

モニター「もうセクションを終わりにしなければならぬ。君はその生き物を強調し始めている。それはデータを汚しかねない。ただ、現在までのところ、これはとてもよかつた。終了時刻を書き留めるんだ」

私「ああ、このセクションは私にはまったくの謎だ。何のターゲットを見ていたのか想像もできない。何だったのですか？」

モニター「〈マーズ・オブザーバー〉号、一九九三年の失踪事件だ」

私「からかっているんじゃないですか？」

モニター「いや。それは〈オプザーバー〉だった」

私「それでは、あれが不揃いな形をした物体だったんだ！　大きな弾丸で打たれた？　どうして彼らはそんなことをしようとしたんだ？」

モニター「それはよい質問だが、我々はデータを信じなければならぬ。このセッションは間違っていないかった。どうやら、彼らは探査機が回って、何であれ詳細な写真を撮ることを望まなかった。それを打ち落とすのに大砲のような機械を使ったのは、レーザーなどさまざまなものがあるこの時代には奇妙なような気がする。しかしソビエトの探査機も、また謎めいた原因で消息を絶ち、その探査機から最後に自動計測伝送された情報は、接近する物体か、または宇宙船エネルギーの上昇と結合したエネルギー源の画像であったことは覚えておくべきだろう。私の推測は、ETたちは似たようなデータ漏洩の機会を望まず、そのために物理的に排除したというものだ。ただ、人間の知りえる範囲で、それは隕石によって打ち落とされたこともありうる」

私「私はまだ少し感覚を失っている。ほとんど信じられないことだが、それはすべてにあてはまる。落ち着くまで、心の中でただターゲットを繰り返し呟いている」

モニター「いいセッションだった」

私「ええ。現実に戻らせてください。そうすればあなたにこれをファックスできる。今夜にでもまた話しましょう」

モニター「いい計画だ。君のファックスを待つてるよ。今夜話そう。気をつけて」

## 検討

かなりの量の情報がこのセッションから得られ、それは基本的な印象を要約するのに有益なものである。(「マーズ・オブザーバー」号は、近くのE.T.の宇宙船によって打ち上げられた発射物のような機械によって破壊された。

宇宙船は、どうやら火星の地下格納庫からやって来た(または帰還した)。格納庫の中にはたくさん生き物がいた。彼らの何人かは(すべてではない)小さなグレイ種であった。彼らは労働者であった。私はその生き物たちの一人の誕生までたどって、それが実験室で「生まれた」ことを突き止めた。それは労働者になるように創造されているのかもしれない。

その生き物自体は、必ずしも自分たちが虐待されているとか奴隷にされていると感じていない。明らかで睡眠期間中(言葉のグレイ的な意味で)、彼らの意識は、宇宙空間のどこかに止まっている。それは夢のようなものではない。それが生まれた実験室は、我々の月の地下構造物ある種の基地にあるようだ。胎児のような幼児をとり巻く栄養物は、エンジン・オイルほどの粘りをもった緑の液体の中にある。

このセッションには答えを与えるのと同じだけ多くの疑問がもち上がる。NASAの火星探査機に何が起こったのか、今我々は知っている。しかし、E.T.たちが探査機の探知あるいは写真撮影を望まなかったのはなぜだったのか、我々にはいまだにわからない。火星の基地にかかわっているグレイが、他の場所のグレイとともに仕事をしているかどうかもはっきりしていない。

この状況においては、グレイは労働者のようであり、他のヒューマノイド（人間に似た生き物）が監督しているようである。不幸にも、いつたいたれが監督しているのかについては、はっきりと知覚できなかつた。

## 第10章 銀河系連邦

アブダクティー（宇宙人に誘拐された人々）の報告に基づく現存のUFO文献は、しばしば「銀河系連邦」と呼ばれる地球外生命の組織について言及している。それは、銀河系スケールであることを除いては、どこか国連に似た組織のように思われる。

このRVセッションは存在するはずである、そのような組織についてさらに探り出すために計画された。セッションの結果はモニターと私にとってあまりにも驚くべきものであった。ここではそれをほとんど前置きの説明なしで紹介する。これはタイプ4のデータであり、セッション終了まで、私はその連邦のことを遠隔透視していたとは知らなかった点を、読者は心に留めておいていただきたい。

日付…一九九四年二月九日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…3114/0029

予備ステージでは、ターゲットが人工構造物、動き、ハイレベルのエネルギーに関連していることを示していた。

私「ここには膨大なエネルギーが感じられる。このターゲット信号は特に強いようだ。とても明るい光だ。黄色、白、青。滑らかで、ふんわりとした空気のようなものがたくさんある。暑さと同時に涼しさが、また膨脹感と発散するエネルギーが感じられる」

モニター「ステージ3のスケッチに進むんだ」

私「黄色や青や白などの明るい光に囲まれた、中央が堅くて丸いものを描いている。雲のように、光のまわりには何かふんわりしたものがある。中央の物体は金属かあるいは金属質なものが表面か内部に含まれているのかもしれない。この全体を竜巻として表層分析したい。中央の堅いものまわりに渦巻きを感じているからだ。これはエネルギーの渦のようだ。とてつもないエネルギー」

私「また、たくさんの光が感じられる。丸くて円形のものがある。また、ある意識を感知している。ある種の精神的な感覚を受けている」

モニター「すべてをマトリックスに書き留めて。それから休みをとろう。ここまでのデータを私にファックスして、電話をよこすんだ」

私「わかった。二、三分後に話ししょう」

再開。

モニター「コートニー、堅い物体の表面に行つて、ステージ4のマトリックスで続けるんだ」

私「今それをして……オー！ 強く感情に訴えるものがある。とても力強いエネルギーだ」

モニター「その印象をさまして先に進むんだ」

私「また、あの青い空気のような白い光がある。膨大なエネルギーだ。今、表面にいる。うーん。ある場所だ。丸い物体は惑星だったかもしれない。曇つていて霧がかかっている。ほとんど真上で光のショーだ。表面はかなり冷たい。大気中に少しアンモニアの味を感じる。

上に登っていくものを見ている。近寄らせてくれ……今、堅く金属的なものの隣にいる。それは建物か、ある種の構造物だ。構造物は、ある生き物にとっては何か意味がある。開口部、おそらくドアが見える。入るべきですか？」

モニター「そうする前に、少し戻ればその構造物がもっとよく見えるだろう」

私「今、そうしている……これは本当にかなりでかい。高く、そびえ、という形容がぴったりだ。事実、まわりを動いてみると、それは異常に大きい。金属でできているようだ。他には都市という意味での構造物は見えない」

モニター「了解。それでは、その構造物に入るんだ」

私「今、入口に戻ってきた。中に入って……ここにはたくさん生き物がいる。この生き物たちはみんな禿げている」

モニター「手続きにしたがうんだ。分析には気をつけるんだ。マトリックスに記入するんだ」



私「生き物たちは皆、ナイトガウンのような白いガウンを着ている。彼らの皮膚はとても滑らかで、白かわずかに灰色がかつた色をしている。ここは重要な場所のようだ」

モニター「その生き物の一人の顔をスケッチするんだ」

私「今、そうしている……彼らはヒューマノイドだ。この場所は、禅僧院を思い起こさせる」

モニター「該当欄に『禅僧院のようだ』と書き留めるんだ。続けるんだ」

私「この生き物たちはテレパシーと言葉による伝達を行っている。これはある種の評議会だと明確に感じられる。この評議会のために集中化された組織構造がある。私が見ていることを彼らは気づいてないようだ。彼らは国務か統治の問題を憂慮しているようだ。」

今、そのメンバーたちにも少し注目している。この人々はこの仕事をしたが、ついでに、これはだれもが望む仕事で、ここにいるということはたいへんな競争に打ち勝つたことを意味する。

活動に指令を出す評議会メンバーの長がいるのに、今、気がついた。他のメンバーは彼を支持している。彼は、大統領とか、議長とか総理大臣にかなり近い。オー」

モニター「どうしたんだ？」

私「私がここにいることを彼らは気がついていないと思っていたのは、間違いだったようだ。私は歓迎されている。我々が到着したことを喜んでいると私は教えられている。我々は、今、評議会にいる。この評議会で我々が最初の人間代表だと彼らはいっている。」

私は、今、その生き物のリーダーのところへ連れてこられた。彼は私の顔を正面から見ている。

彼は椅子に座っていて、白あるいは青みがかつた白のガウンをまとっている。少し小太りのようだ」

モニター「君は、今、少し手続きをそれている、コートニー。ただ手続きにしたがうんだ。すべてを書き留めるんだ」

私「彼は陰鬱だが、ユーモアのセンスが現れている。全然私を脅そうとはしていない。ブツダのよ  
うな精神的師と面会しているような感じだ」

モニター「それを〈分析的判断〉の欄に書き留めるんだ。彼の言葉にしたがうんだ」

私「彼は心から私を歓迎してくれている。現に、もっと効果的にコミュニケーションできるように、  
私が彼の心の中に入ることを彼は望んでいる。どうすべきですか？」

モニター「中に入るんだ。ガイダンス（手引き、指導）」という言葉を手掛かりに、彼のすること  
を理解するんだ」

私「彼の心の中に入るとすぐに、私は再度宇宙空間に現れた。そこが今、私のいるところだ。私は  
天の川の外にいて、それを見上げている。四分儀のように、銀河系を分けながら、点線が天の川の  
上に引かれている。

彼らには助けが必要なことを私は教えられている。彼らは我々を必要としている。彼らは銀河系  
の一員として我々を必要としているように感じられるが、私はそれに抵抗しているようだ。彼らは  
人間よりもはるかに力強く、なぜ彼らが我々を必要とするのか、私にはわからない。

リーダーは私の抵抗を感じて、ふたたび私に惑星へ目を向けさせている。私にはそれが地球だと  
わかる。将来、人間のためにその惑星の遠くで一つの動きが現れるだろうと私は教えられている。  
私は今、その心理的形態（ゲシュタルト）を翻訳して言葉に変えている。しかし、その感覚は、現  
在のところ地球人類は暴力的で問題が多いというはつきりとしたものだ。のちの協力の前に、自ら

が進歩することが人間には必要だ。地球のはるか遠くまで手を伸ばす前に、人間にはある種の変化を経験する必要がある」

モニター「どうしたら我々は助けることができるのか、聞いてみるんだ」

私「私はこの本を完成させる予定になっていると明確に教えられている。他の者たちは各々自分たちの仕事を行うだろう。多くの者がかわりをもっている。多くの種族、代表、グループ」

モニター「RVあるいは他の専門技術を使って、我々は他にだれと会うべきか聞いてみるんだ」

私「火星人だけ。うーん。我々が地球外生命と近く交わすコンタクトは、今のところは、少なくとも近い将来においては、火星人に限定されるだろう、と彼はいつている」

モニター「我々が将来知るべきだが、今はまだ知らずにいる新しい情報があるかどうか聞いてみるんだ」

私「このリーダーはとても辛抱強い。これは私には難しいことを彼は知っている。彼はたくさん問題がやって来ると私にいつている。明らかに惑星規模の一大惨事、あるいは一連の大惨事が起こるだろう。政治的な混乱、動乱、現在の政治秩序の解体が起こるだろう。現在の状況では、我々は新しい現実に対処できない。我々が先に進むために、意識が人間の主な関心事にならなければならない、と彼は単刀直入に私に語っている。」

ちょうど今、彼はあなた（私のモニター）の心を探っている。あなたの居場所を突き止め、おそらく測定か何かをしているのだろう。このすべてにおいてあなたはひじょうに重要である、と彼は私に話している。我々は後日、ここに、彼らの世界に戻ってこなければならぬ。我々は意識によって決められた人間の最初の代表者となるだろう。この時点で意識は我々の到着を決定した、と彼

は話している。まだある。我々は救済者ではなく、ただ最初の代表者である。彼は私にこれを素直に理解するように望んでいる。

我々が公正な代表となるには責任があると、彼は理解してもらいたいようだ。これは我々が思いあがった態度をとらないようにするためだ。これはただ我々の今の仕事であり、我々すべてになすべき仕事がある。私の本の執筆はかなりいい線をいつている、とも彼は私に話してくれている。

彼はあなたのユーモアのセンスを気に入っている。将来、日増しにたくさんさんの活動が起こるだろう、と彼はいつている。しかし当面は、我々は本に意を注ぐべきである。本は重要であり、彼らはそれを利用するだろう」

モニター「『ありがとう』と彼にいうんだ。もう我々は行かなくてはならない」

私「彼にいったよ。そろそろやめる時間だということは彼もすでに感じていたよ」

モニター「終了時間を書き留めるんだ、コートニー」

長い中絶。

私「もうターゲットを覚えてくれていいでしょう」

モニターはかすかに神経質な含み笑いをする。

「連邦だ」

私「わかった」

このセッションの示唆するところは、実際の側面から高尚な哲学的側面にまで及んでいるが、私の解釈に関して読者はそれを受け入れざるをえないと思うであろう。

銀河系の政府組織は存在する。その権力がどのような階級構造になっているのか、あるいはどのようなに集権化されているのか、私にはわからないし、どれだけの数の種族や惑星文化がこの組織を代表しているのかも、私にはわからない。さらに、あるグループや文化はその組織に加盟しないことを選んだのか、あるいは、ある者はメンバーになることを拒否されているのかについても、私にはわからない。

しかし、地球を根拠にする人間は、正規メンバーとなることが約束されている、と私にははつきり感じられる。評議会の部屋に私が最初に入ったことは、この点で明るい光を投げかけているものといえるかもしれない。会員資格を受ける認可儀式の一つは、ある文化のメンバーが適切な手段を通して、その組織を意識的に捜すことらしい。モニターか私のどちらかが、人間を代表することに特別快感を感じるとは思っていないが、実際、私が教えられたことに基づけば、人間はすでにわずかながらも、連邦において代表となつているのかもしれない。

連邦のメンバーたちはひじょうに高いレベルの意識をもっている。つまり、肉体的またサブスペースの側面の両方において、彼らは意識を完全に理解している。さらに、連邦のメンバーたちは、意識に対する人間の理解が広範囲に高まることは、銀河系生活に人間が参加するのに欠かせない前

提であると考えているようである。

このセッションの間、意識に対する進んだ理解がどれだけ重要であったかは、強調してもし過ぎることはない。私自身の意識における成長が、その部屋（評議會の間）を見つけ、入るために、十分に高められていなければならなかったといえるかもしれないが、どの程度これが真実であるのかを測る客観的な物差しを私はもっていない。しかし、意識における成長という考えは、連邦の人々が、我々に追求すべきだと考えているような遠い目標点ではない。この点で意識の広汎な成長は本質的で緊急な課題である。さらに我々は、物質的・非物質的現実に対する我々の理解を分離させる知的に歪められた二重焦点レンズを通さないで、むしろ、もっと実際的で科学的な視点から、意識を調査し始めなければならぬようだ。私の考えでは、我々がこの点において視野を広げるまで、我々は比較的原始的な社会、さらには、惑星文化的視点からすると銀河系後進地域に止まりそうである。

UFOアブダクション文献は、将来の地球に惑星規模の大災害がやって来るといふ会話を軸としたETと人間の交信報告で満たされている。通常、大災害の原因は生態系や核に関連しており、そのような警告の頻出は、確かに我々を立ち止まらせるものである。

このセッションは、そのような惑星規模の問題が本当に起こるかもしれないということ、直接の情報源から最初に私が得たものであった。しかし、研究のこの時点においては、そのような問題が、人間が地球から立ち去るといふ考えとどのようにかかわっているのかについてははっきりしなかった。

## 第11章 グレイの心

どのようにグレイたちが思考するのかを理解するために、我々は少なくとも一人のグレイの心に入り、彼らの意識を透視することにした。

モニターされたセクション（タイプ4）に備えて、まず私はグレイの集合的精神という概念を一人で探ることに決めた。タイプ4データに関して覚えておいていただきたいことは、セクションが終了するまで、ターゲットが何であるのかモニターは透視者に教えないことである。各例においてそれは、我々が同意した長いリストの中から任意に選ばれるターゲットか、または、私にはまったくわからないモニターによって選ばれた別のターゲットである。

しかしタイプ1データでは、私が一人で行い事前にターゲットを知っている。タイプ1データに関連して、ソロで事前に情報を知っている条件下で行うとき、SRV実験手順の手続きに厳格にしたがうことが重要である。これは、ひとたび私がターゲットにたどり着いたとき、私ができることに制限を与える。

本章において、私は二つのセッション結果を報告する。一つは、私が一人で「グレイ／集団精神（マス・マインド）」をターゲットに透視したもので、もう一つは、ほぼ同じターゲットを使ってモニターされたセッションである。私は、心の中の対話という形式で、ソロのセッションからその資料を提示する。

日付…一九九三年一月二七日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ1

ターゲット対応番号…7119 / 5108

一五分の予備ステージでは、動きとエネルギーの感覚が示されていた。

灰色と白色をとらえている。手触りについていえば、つやのある鉄のような表面を識別している。奇妙なチイチイという音が聞こえる。

大きさという点では、とても広く、開かれた何かを感じている。それは、終わりがないか、もしくは膨脹する宇宙的なもの、またはただまったく巨大なものだ。これが……何であろうが……統一しているという強い感覚がある。それは限界があったり、境界で仕切られているようなものではない。また動きを察知している。もの、あるいはエネルギーが中央のところから出たり入ったりしているようだ。



今、翻訳の必要な何かをとらえている。それは、通常理解するものとは異なっている。最低でも、それは愛と心づかいのようだが、それよりもさらに全体を包み込むもののようなのだ。管理人、母親または何か貴重なものの所有者という感じがする。ある意味で、これは無限の自由が感じられる、大ききのない家である。

先に進み、また安全への配慮を察知している。何かがここにはない。ここには恐れがあり、それは強い。何か息が詰まりそうだ。ひじょうに進歩した宇宙船の動きをとらえている。ふたたび、恐れと他人の安全への配慮が感じられる。

グレイは行き詰まっていると感じられる。それは、赤ん坊が産道で止まってしまうような出産と似ている。恐れは、この行き詰まりの状況に関連がある。

しかし、この恐怖感をとる巻くものは、冷静さである。

## 検討

グレイの集合的意識は保護し育成する。同時に、閉じ込められているという考えに伴う深い感情的傾向の中に、恐怖感がある。それは、まるでグレイがある状態から抜け出そうとしているようだ（その脱出はかなわないが）。恐怖をとる巻く冷静さは、どこか（肉体的な生存を可能とする）集合的知性を安定化させ、日々の存在をあまり脅かさないものにする。心の中の愛や保護の感覚は、人間の視点からはほとんど強烈といえるほどだ。私自身の個人的な反応は、悲しみであり、おそらく同情である。

このセッションの二カ月半後、私のモニターは私にプラインドでそのターゲットを見させることにした。読者はこのセッションの終わりに見るように、彼はそのターゲットのニュアンスを変え、それによって、私の考えに対してどこか違った取り組みをうながした。

日付…一九九四年二月一日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…4384/8296

予備ステージでは液体と動きの感覚を示していた。

私「トルコ石のような色や青をとらえている。たくさん液体。それに、岩の多いところと滑らかな手触り。また、暖かさと同時に涼しさを感じている。何か塩辛い味を感じて、魚のような匂いがある。それが何であろうと、とても深く、広く膨脹する感じだ。またエネルギーを感じる」

モニター「ステージ3」

私「今描いている……ちょうど紙いっぱい水平線を引いた。また、魚と海を識別している」  
モニター「その〈分析的判断〉を書き留めるんだ。ステージ4に進むんだ」

私「液体がある。たくさんある。この液体は生命のある環境だ。生命が生まれる場所のように感じ

る。ここには生命が存在する。有機体。ここは保護されている場所だ。

液体の下に部屋があるように感じられる。今、私はその部屋の中にいる。実験室のようだ。今の（分析的判断）として書き留めさせてください。

部屋の中のここには、グレイが一人いる。彼は私を見つめている。今、彼の顔をスケッチしている。どことなく男のようだ。彼の頭の中に入るべきだと感じている。どうすべきですか？」

モニター「君の無意識に解決させるんだ」

私「了解。中に入っている……オー」

モニター「手続きにしたがうんだ。マトリックスに留まるんだ。何がある？ それを書き留めるんだ」

私「ここには空虚感がある。深い空虚。しかし同時に、心は偉大な意識、それが何であれ、完全な意識感覚で満たされている。このグレイにはやるべき任務がある。彼は労働者であり、たいへん忙しい。人間のように、表面にあまり感情を表さないように感じられる。もしそれを何かと比較するとしたら、モンロー研究所におけるフォーカス15のようだ」

モニター「その生き物を支配している者の感覚はとらえられるか？」

私「精神それ自身が支配者だ。それは集合的精神だ。それが統制者だ。特定の個人が優れているわけではない。すべてのグレイが同じ心をもっている。彼らは一つで、一緒である」

モニター「目的感はあるか？」

私「生き残ることが第一で、それから進化だ。それは一つの集合的有機体で、他の有機体においてと同じく、生き残ることが最も重要なことだ。個人間にはまったく差異を欠いている」

モニター「ステージ6に行くんだ。時系列線を作るんだ。君が今その生き物と一緒にいる場所の時系列線に印をつけるんだ。そして、このセッションの最初の位置を定めるんだ。重要な区分点のために時系列線を調べるんだ。それらを印で示して、ステージ6のマトリックスに進むんだ」  
私「それをやっているところだ」

中絶。

「私は今、そのマトリックスにいる。ちょうど今、たくさんのグレイ集団がいるのを感じている。今、何かがひじょうに強くやって来ている。彼らは自分たちの肉体から外に出る必要があると私は感じている。それは絶対的に必要なことだ。それは生と死にかかわることだ。それは、精神……有機体の生き残りのためにぜひ最優先されるべきことがらだ。心は今、縛りつけられている。それは絶対的に逃げ出さなければならぬ。ひじょうに深いところからやって来ており、集合的精神は、グレイ的な意味でほとんどパニックとなっている。」

集団脱出のために、グレイたちは人間や他の者たちと働いている。それはびんから抜け出すような、あるいは沈みかけた船から脱出するようなものだ。はつきりとパニックの感覚がある」

モニター「彼らの理想の環境とはどんなものなんだ？」

私「彼らは物理的な感星をもちたいと思っている。地球ではない。彼らには感星を作り替える能力とどこにでも旅行できる能力がある。彼らは人間を地球から追い出さないだろう。そうするには、宇宙はあまりにも大きいのだ」

モニター「連邦と彼らとの交流はどうなんだ？」

私「グレイたちの連邦内での立場は良好だ。彼らはさまざまな計画に参加して、多くの宇宙船内で

働いている。グレイの意味で、彼らは多くの連邦種族と交信する自分たちの能力を誇りに思っている」

モニター「人間に、グレイの進化の後押しができるのか？」

私「厳密には無理だ。遺伝子は一つの助けであり、必要なものだ。人間が助けられる他の方法に私は気がついたが、グレイたちはそれにまだ気づいていない」

モニター「グレイたちは余暇をどのように考えているんだ？」

私「彼らは人間が理解するような余暇はもっていない。グレイたちにとっては、すべての時間が連続体である。余暇は休息の必要性を表している。グレイたちは何か違ったことをする」

モニター「人間でいえば、彼らの寿命はどのくらいなんだ？」

私「グレイたちは死なないということをひじょうに意識している。彼らの肉体は洋服や貝のように見なされており、死は、我々が考えるようには、彼らにとって意味のある概念ではない」

モニター「一般的なグレイの肉体寿命はどうなんだ？」

私「人間の寿命よりも長い、それもいろいろな場合による。おそらく、地球という二〇〇年が彼らの平均だろう」

モニター「彼らの理想的な環境に、もう一度焦点を合わせるんだ」

私「グレイたちにとって理想的な環境はさまざまな側面をもっている。それはただ物理的な惑星ではない。なぜなら彼らは、今にそれを得るだろうから。理想的な環境は、新しい進化段階の個人の肉体である。グレイたちは出生の過程にある。彼らは集合的自我を捨て、代わりにきずなをもった個人になろうと備えている。」

今、私は奥に向かっている……これは面白い。彼らの心の奥底には、恐れと畏敬、あるいはおそろく驚きがある。つまり、どのようにして人間が個人化された自我として存在、繁栄しているのかと。彼らは自分たちにこのうちのいくつかが必要であるとわかっているが、同様にそれを恐れている」

モニター「グレイと人間の代表との物理的な会合の時期を探るんだ」

私「今、多くの交信が行われているが、自覚的な対等の参加者としての人間代表者たちとは交信はまったくなされていない」

モニター「場所や条件を含めて、そのような会合のための手続きは何なんだ？」

私「グレイたちでさえこれには困っている。会合が必要であることは彼らにもわかっているが、どのようにそれが開かれるのかは彼らにもわからない。彼らは感情をあらわにする人間との交信を、彼らなりに恐れている。彼らは監督あるいは権威の意義を放棄することを欲してはいない。しかし、彼らはこれを何とかしなければならぬことを知っている。彼らには助けが必要である。彼らは行き詰まっている。」

ちょうど彼らは、助けることに関して私に何か思いつくことがあるかどうか聞いてきた。彼らに何といったらよいでしょう？」

モニター「我々はそのために努力してみる、というんだ」

私「了解。今そういった。彼らは彼らなりに感謝しているようだ」

モニター「この状況を救うために、火星人と何かかわりをもつべきか尋ねるんだ」

私「グレイは火星人にも気づかっている。火星人からの援助はあまりないだろう。彼らは自分たち

の問題を抱えている。彼らは病気で、この計画のために費やす時間も資源もほとんどもっていない。監督されていない環境で、私はグレイと会うことを提案してみたが、それは断られた」

モニター「彼らの監視の下で、ボランティアとしての君と私に会ってみたいと思わないかどうか彼らに聞いてみるんだ」

私「彼らはそのアイデアを受け入れた。熱烈に。彼らはすぐにとりかかろうといっている」

モニター「わかった、コートニー。終わる時間だ。終了時間を書き留めるんだ」

私「これはちよつとしたものだった。このあと私は一休みする必要があるそうだ。それで、ターゲットを教えてください」

モニター「グレイ／意識だ」

私「それには驚きませんよ」

モニター「ああ。我々はこれについてじっくり考える必要があるな」

私「休憩をとらせてください。あとで電話します。データはすぐにファックスで送ります。すぐあとで話しましょう」

## 検討

なぜか私にはわからないが、このモニターされたセッションのはじめに私が降り立った惑星は、グレイ社会にとって重要なものと思われた。実際、ある点で——私がのちに検討したように——そ

それは、特に海洋に関して、グレイの故郷と似ている。しかし、それが本当にあの惑星であったのかどうか私にはわからない。それにもかかわらず、どんな理由であれこの特別な惑星は、その生き物たちにとってある重要な意味をもっているようだ。私は、その惑星はどこか彼らの意識と関係しているという感じももっているが、これが実際にどのようなように作用するのか、私にはわからない。

UFOアブダクション文献において繰り返される報告と同様に、私自身のRVの探索に基づけば、グレイたちはテレパシーでコミュニケーションを図る。集団精神の感覚あるいは集合意識は、頻繁にグレイの集団と関係している。我々自身の目覚めた状態の意識と比較すると、この考えを理解するのは難しいことである。

もし我々がグレイたちと首尾よく交信しようと考えのなら、我々はグレイの精神に対する理解を改善しなければなるまい。もしグレイたちが本当に人間と彼ら自身の種族の両方にかかわる遺伝子学的プログラムにたずさわっているのなら、彼ら自身の進化におけるこの難しい時期に、彼らは人間の助けを必要としているといえるかもしれない。我々は心を開き続けて、この点において何ものにも偏見をもつてはならない。

ちょうど、グレイの意識は集合的精神であるとはつきりいえるのと同様に、彼らはこの状態から抜け出す必要があるのだ。グレイの集合的知性には多くの積極的な側面がある。見たところ、彼らコミュニティーの個々のメンバーたちは、ダーウィンの進化論的淘汰の点では互いに競合しない。彼らは、一緒に沈むか泳ぐかのどちらかである。これは、人間が十分に研究すべき彼らの意識にある利他主義の一側面に関係している。

アブダクション文献において報告されるようなグレイと人間との交信範囲や内容を考えると、グ



レイの活動や意図が人間の視点から見ても、どれだけ敵意あるものと誤解されてしまいかを容易に理解することができる。しかし、グレイたちは侵略軍ではなく、救援にかけつける騎兵隊であることがわかるであろう。彼らには我々には理解できないことをするかもしれないが、彼らは邪悪ではない。このことを今、私は確信をもっていえる。我々は単にこの種族のことをまだ理解できていないのである。

## 第12章 人間の貯蔵庫

モニターも私も、少なくとももあるETたちはブレアデス星団から来ていると主張するアブダクテ  
イーの報告をしばしば聞いたことがある。もし本当にそれが単なるうわさ以上のものであるとして  
も、我々は、この情報はどこから生まれたのか、また、それが信ずべきものなのかどうか、少しも  
わかっていない。にもかかわらず我々は、一つのテストとして、知覚力のある生命を求めてブレア  
デス星団をRVすることに決めた。やがて明らかになるように、それはひじょうに価値のあるセッ  
ションであった。

日付…一九九四年三月一〇日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…2805/2070

予備ステージでは、強力なエネルギー活動と堅い人工構造物を示していた。

私「たくさんのひじょうに明るい光をとらえている。明るい白と黄色。また、膨大なエネルギー。気温は高く火のような熱を含んでいるようだ。何か燃えているような感じがあり、煙の匂いがある。また何か泣き声を聞いている。至るところ、厚い、空気のような大量のエネルギー活動。発光して丸い感じがある。これは重要らしいが、どこか異様な感じだ」

モニター「ステージ3」

私「水平線をスケッチしている。何か地上で燃えていて、空には何かとても明るい光がある」

モニター「ステージ4に移るんだ」

私「了解。マトリックス内にいる。まだ光、高温、燃える感じがある。丸い、火のようなものが空にある。今、地上にいる。二種類の生き物たちを察知している。一つの種類は地上にいて、もう一方は空中の何か、おそらく乗り物の中にいる。

現在、激しい作業活動が行われている。光のそばにいる空中の生き物たちは地上の生き物たちよりもさらに進んでいる。あの光は明るい！ その生き物たちは光のそばで何をしているのか、私にはわからない。彼らは乗り物の中にいるかもしれないが、見上げるたびに、あまりにも明るい光に目がくらむ。

しばらく、地上に注視してみると、土、芝、そして普通のアメリカ人風のふだん着を着ている人間がいる。あれをチェックさせてくれ。ああ、スポン、靴下、靴、工場。人間たちはたいへん狼狽

している。ここには嘆きに加えてたくさんの恐れがある。人間たちは空中の光の物体か、光るものにすっかり目をくらまされ、恐れているようだ。

まだ地上の人間とともにいる。一人の男と女と子供、彼らは一つ家族のようだ。子供が泣いている。

見上げて、もう一方の生き物たちを追いかけている……彼らはひじょうに進んでいる。彼らは光るものの中ではなく、一つの物体の中にいる。今、私は中に向かっている。物体の内部は丸い。今、私はその生き物たちを見ていて、近くで見ようと移動している。この人々はグレイに似ている」

モニター「コートニー、ステージ6に行くんだ。時系列線タイムラインを作るんだ。線上にターゲットの時間を置いて、それから現在の時間を置くんだ」

中断。

「それでは、西暦二〇〇〇年を置くんだ」

私はこの年をターゲットの時間よりもわずかにあとに置いた。

「次にマトリックスに行くんだ。そして、人類に関係する何か重要な、近い過去の出来事に焦点を合わせるんだ」

私「人間がここに移住してきたようだ」

モニター「泣き声はどうなんだ？」

私「泣き声は光る物体の出現に反応したのもかもしれない。少なくとも、人間たちは狼狽しながら、上を見上げている。しかし、彼らはグレイが乗る乗り物に気が動転したのかもしれない。動転しているものが何であれ、空にある何かに関係している」

モニター「人々を描写するんだ」

私「肉体的には、彼らは白い皮膚をもっている。農民のようだが、原始的ではない。彼らは快適で、おそらく町か村の近くに住むか、訪れている。彼らは本当にアメリカ人のようだ」

モニター「空にあるものところに戻るんだ」

私「一つのたいへん明るい乗り物（この表現が正確とは思わないが）、または二つの別々の物体——一つはとても明るく、もう一つは乗り物——のどちらかがある。明るいものがあまりにも視界を支配しているので、伝えるのは難しい。それがどちらであれ、乗り物は陸上の人々の上空にいて、その物体の中の生き物たちは人々に害を加えようとは思っていない」

モニター「乗り物の中の生き物の意図に焦点を合わせるんだ」

私「彼らは、ある任務でここにいる。これは何か決まり切った、彼らにとってはいつもの仕事である。宇宙船の中に戻るべきですか？」

モニター「その代わりに、他の場所と時代への訪問」という概念に焦点を合わせるんだ」

私「今それをやっている……オー！　ものすごい距離を動いてしまった。紐で引っ張られるようだ。今、私は地球に似た惑星の地表から三〇〇メートルほど上空にいる。雲、水、海そして陸がある。ああ、美しい惑星だ！　最初と二番目のターゲットは、時間、空間あるいはその両方、そして、おそらくはたくさんのもので隔てられているようだ」

モニター「ステージ6の図形では、この新しい惑星の位置を小さい丸で紙の上に描き込むんだ。それから、最初のターゲットの位置で正しいと思うところを、紙の上に丸で描くんだ」

私「これを行っている間、彼は一息入れる。」

「それでは、ペンをもって、新しい惑星の丸を探して、その惑星にはいくつ太陽があるか教えるんだ」

私「ただ一つです」

モニター「了解。それでは、最初のターゲットの丸を探して、いくつ太陽をもっているか教えるんだ」

私「何てことだ、二つある！　大きな黄色い太陽と白い小さいのが。こんなことがありうるのか？」  
モニター「我々は分析してはいけない。手続きにしたがうんだ。コートニー、空に明るい物体を見たステージ3の図形に戻るんだ。その物体を探して、ステージ6のマトリックスにデータをすべて書き留めるんだ」

私「待って……見上げると、それは火の玉のようだ。大量のエネルギーを発している。それは明るく、我々の太陽よりも明るい」

モニター「休みしよう。ここまでのデータを私のところにファックスして、電話をかけなおすんだ」

私「了解。二、三分以内にかけてなおすよ」

再開。

モニター「コートニー、最初の場所で、陸上の人々についてもっと情報をとってもらいたい」

私「今そこに向かっている……またその人々と一緒にいる。彼らは私がいることを知覚できていない。一人の男、女、子供の家族だ。また子供は泣いている。彼らには髪の毛がある。まったく人間そっくりで、アメリカ人のようでさえある。男には髭があつて、大きく羊毛のような髭だ。女は金

髪だ。服はカラフル。まわりの気温は暖かく、とても快適だ。ちょうど今、男はとても混乱している。何が起こっているのか彼にはまったくわかっていない」

モニター「わかった。その物体の中の生き物たちに意識を向けるんだ」

私「彼らはグレイだ。彼らはもちろん人間たちについては知っている。うーん。これは奇妙だ。私がかここにいるのをグレイたちはわかっていて。ちょうど今、彼らは私に注意を向けている。事実、彼らは私にとっても速く情報を与えようとしている。あまりにも速くて、私にはついていけない。」

何か他のものが彼らの注意を奪っているようで、今、グレイたちは少し混乱している。彼らの間で少し意見の食い違いがあるようだ。彼らはどのように私に情報を与えたらよいか対応を検討しているのかもしれない。

あー。ことはおさまったようだ。この世界の人々は地球から来ている。グレイたちがここに彼らを連れてきた。彼らは移住してきたのだ。人間たちは何一つ知らない。自分たちがどこにいるのかすら彼らは知らない」

モニター「移住の理由は何なんだ？」

私「人間の生き残りにかかわっている。新しい移転地は、地球の気象災害から逃れるために必要とされた」

モニター「探索を続けるんだ。もっと見つけ出すんだ」

私「このターゲット時間では移住はまだ続いているが、我々の現在時間ではまだ起こっていない。現在のところ、ただ準備だけがある。彼らは、人間が自滅するのを待つ間、クラスMの惑星を用意している」

モニター「他に何が移送されている？」

私「遺伝子材料が多い。彼らは、より優れた、より高度な遺伝子プールの存続能力が保証されるように、できるだけパラエティーに富む遺伝子材料を必要としている」

モニター「必要とされる遺伝子変化を探るんだ」

私「精神と肉体の間によりよい関係が必要とされている。現在の遺伝子はこれを軽視する。過去においては、元の遺伝子構造が生き残りのために必要とされた。しかし、新しい、あるいは修正された遺伝子は、このあとの段階の成長と生き残りに必要とされるのだ」

モニター「よし、コートニー。ここで終わりにしよう。終了時刻を書き留めるんだ」

私「やったよ。それで、いつたいこのターゲットは何だったんですか？」

モニター「じつは、それは『プレアデス星団／文化』だった」

我々の会話にとっても長い中断があった。

私「冗談じゃないんですか？」

モニター「真面目だよ。本当にそうだったんだ」

私「これが何を意味するのかわかりますか？」

モニター「コートニー、私はあまりにも長い間この仕事をしてきたから、もう何も驚かないよ。ただ、これは確かに普通じゃなかった」



このセツションのターゲットは、西暦二〇〇〇年前後の連星系を周回するクラスMの惑星へ我々を導いた。セツションの前には、二つの太陽をもつ系の放射特性の中で生命が存在しえるのかどうかは疑いをもっていた。グレイたちは居住性を保証するために惑星（の近く）にある種の環境バリアを設けていることもありうる。

近い将来、地球からグレイによって移送される人間たちが、その惑星に住むであろう。それが起こるとき（あるいはそれが起きたあと）、他の地球人たちがこれに気づくようになるのかどうか、私にはわからない。それは静かに行われるかもしれない、その場合、この新世界とその住人たちに関するすべての情報は、RVを通して得られるであろう。ターゲット時間では、人間たちは家族単位で住む。彼らは恐れ、混乱し、そして自分たちがどこにいるのかもわかっていない。

移送の目的は、できるだけバラエティーに富む遺伝子プールを維持する意味で、人間の遺伝子の血統を保存することである。ある種の遺伝子操作が、将来の人間の心と体の関係を高めるために必要とされるだろう。これは、我々の現在の破壊的傾向が理由のようだ。それは、惑星レベルの生態的、気象的な大災害に全世界の住民を追いやっていく。このようにして、残りの人間たちが必死に地球で闘っている一方で、ある人間たちは安全な避難所へ「空中携挙」されるようだ。

これは、将来の惑星レベルの問題に関して、人間のために私が直接グレイのメンバーから情報を受けとった最初であった。しかし、これらの差し迫った大災害の時期に関しては、いまだに私にも

わかっていない。グレイたちが地球から植物や動物のサンプル採取も同時に行っていることを示唆する、他のRVデータも私のモニターは、私に教えてくれている。もしこれが本当であれば、一つ可能な説明は、ブレイアデス星団内の惑星に地球人が住めるようにするために、生物学的な必要で行われるというものだ。

私は個人的に、我々の銀河系において、どれだけの数の種族がその進化において、グレイという星間助産婦からの利益をこうむるのか、疑いをもっている。

さらに重要なことは、地球に残る人間たちには何が起こるのだろうか？

彼らは単に滅びるのか、それとも、ブレイアデス星団に移り住んだ従兄弟たちとは、異なるかたちで進化を続けるのであろうか？

## 第13章 リアリティー・チェック(1)

これまでのところ、一〇回にわたるRVセッションの結果を紹介してきた(「グレイの心」の章では二つ紹介した)。読者がこれはすべて私自身の空想ではないかと疑うのは当然と思われる数多くの新概念と発見を、私は紹介してきた。

透視者たちもまた疑問に思っている。これに対する答えとして、「検定ターゲット」と呼ばれるターゲットを我々は使用する。それは簡単に立証可能なものであり、主にSRV実験手順の使用をチェックするのに役立つ。

モニターと私は、いくつかの検定ターゲットを分析にゆだねることにした。今回のセッションは、セッションの前にも最中にもターゲット情報がまったく与えられないタイプ4のデータを含んでいる。セッションは遠隔モニターされ、開始から終了まで約二五分を要した。

日付…一九九四年五月一日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…4933 / 4876

予備ステージでは、複合人工構造物を示していた。

私「茶と黄褐色をとらえている。手触りはセメントや砂利のように粗い。暖かい。何か大きくて堅い、重く、たっぷりとしたものだ。都市を表層分析している。それを書き留めさせてほしい」

モニター「ステージ3」

私「都市のスカイラインのように見える図形がある。中央に主要構造物があり、その両側に二つの構造物がある」

モニター「ターゲットの構造物を見つけて、その中で視点移動するんだ」

長い中断。

私「今、灰色と黒と白をとらえている。手触りはつやがあり、滑らかで、軋んでいる。気温は快適で暖かい。ブンブンという音が聞こえる。大きさは、短く、幅広く、狭く、ずんぐりに近い」

モニター「ステージ3」

私「ちょうどステージ3のスケッチで正方形を描いた。部屋から箱までの何かだろう」

モニター「ステージ4」

私「今マトリックスを調べている。紙のようなものをとらえている。平たく水平な何かがある。こ

れはオフィスのようだ」

モニター「活動」の目的に意識を探るんだ」

私「了解。周辺を歩いている人間たちがいる。彼らは服を、ビジネス服を着ている。スーツ、ジャケット、スラックス、それに男女がいる。彼らは皆ビジネス服を着ている。部屋の中にはデスクがある。その上には吸い取り紙のようなものがあるようだ。

デスクには一人の男がいる。オー！これは重要人物だ」

モニター「強い（感情的反応）として、オー！」と書き留めて、先に進むんだ」

私「おそらく私はこれに（分析的判断）を加えたほうがよいだろう。クリントン大統領を見つめている。デスクについているので、正面から」

モニター「セクションを止めるんだ。ターゲットは、ワシントンDCのホワイトハウス／大統領執務室」だ」

双方の電話から低い含み笑いが漏れる。

私「ああ、苦勞して国家安全保障の秘密を維持してきたのに台無しだな」

モニター「この時点で、君を彼の頭の中に入り込ませることができたが、これはプライバシーの侵害になっただろう。だが、我々はセクションの目的をやり遂げた」

私「もう一度、国家安全保障の秘密維持が台無しだ。これをすぐにあなたにファックスしますよ」  
モニター「よし。完璧なセクションだった、コートニー。それでは」

## 【検討】

我々の国家機密の維持をとり巻く問題に対して、今回のセッションの意味するところは明らかである。しかし、別の問題もある。なぜE.T.たちが、我々が彼らのことについて知っている以上に我々についてより多くのことを知っているのか、今、明らかとなったことだ。

現在のあらゆる秘密機関が今や時代遅れとなつてゐる事実以上に、我々の政府機関を困惑させるもの——を想像するのは難しいことである。

E.T.たちは我々がこの点で困惑することを望んでゐる——のではないかと私は薄々感じている。我々を混乱させることで、彼らは我々自身の成長にとって重要な何かに我々の注意を向けさせる。もしこれが本当に彼らの計画であるのなら、それはきわめて巧妙に計画されたものである——とだけ私はいうことができる。私は、おそらく希望をもつて、その成功の可能性に対する彼ら自身の見通しを疑つてゐる。

## 第14章 外交的解決法

ある日、私のモニターは、最近、ある透視者が自分自身のアブダクションを透視できるようになったと私に報告した（問題の女性は、どうやら古典的 UFOOETスタイルでこれまでに何年にもわたって誘拐されていた）。モニターが言及したセッションは、高度に監視されたタイプ4の条件下（透視者は前もってターゲット情報を知らされず、モニターだけが知っている）で行われた。そのセッション・データの真に驚くべき点は、透視者が完全に UFOOアブダクションを見ることのできたことである（概して、これは以前には不可能であり、偽の代替信号がつねに受けとられていた）。モニターも私もその時点ではこのエピソードに関していかなる結論をも引き出さなかったが、変化には気づいた。この会話の数日後、何がこれを可能にしたのかを我々は割り出した。

日付…一九九四年五月三一日

場所…ジョージア州アトランタ

データ・タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…3701/5475

予備ステージでは、ターゲットが乾燥した陸地と、人工構造物に関係していることを示していた。

私「茶と黄褐色、それに粗い木質の手触りをとらえている。気温は暖かく快適だ。何かテレピン油をかいでいるようだ。森のような匂いがあるので、野外のようだ。今のは森として〈分析的判断〉を加えることにする」

モニター「ステージ3に移って、それからステージ4に進むんだ」

私「家のような木造構造物をとらえている。構造物の中に入ってみる。木製のテーブルがある。これは少し古いようだ。内部構造は正方形、あるいは最低でも長方形だ。とても質素な居住設備だ」

モニター「ステージ6に進むんだ。視点移動をやろう」

彼は私をその構造物の上空一五〇メートルに移動させる。

私「構造物の近くには山と道がある。また、川もあり、どうやら急流か滝もその建物のそばにある。これを調べますか？」

モニター「コートニー、ステージ4に戻って、その構造物の中に入るんだ。無意識に問題を解決させよう」

私「了解。今、内部に戻ってきた。ここには人間の男がいる。格子柄のシャツにジーンズの仕事着を着ている。彼には髭がある。どんな種類の活動もあまり感じられない」



モニター「ある程度、自由に動くんだ。君の無意識にこれを解決させるんだ」

私「ちょっと時間をください。よし、家の中の強い恐怖感をとらえている。夜だ。だから少しの時間とまどつた。ETの活動を感じている。これは奇妙だ。誘拐だ。これを〈分析的判断〉として書き留めている」

モニター「手続きにしたがうんだ。続けるんだ」

私「木の床と同様に、テーブルはまだそこにある。しかし、今ここにはたくさんのグレイがいる。何人かは空中に浮いているようだ。ユニフォームを着ている。急いで片付けなければならぬ問題があるかのように素早く動いている。

一人の女性がいる。彼女が彼らの活動の中心となっているようだ。彼らはその女性を浮遊させて、この家の窓を通り抜けさせている。窓は開いているとは思えない。彼女はまさにそこを通り抜けたのだ！ 私は彼女とグレイたちのあとについて外に向かっている。

ここにはとても明るい光がある。今、見回している。グレイたちはその女性をもち上げて大きな宇宙船へ連れこもうとしている。宇宙船を、今、スケッチしている。また、彼女が窓を通り抜けたときの家の中の光景もスケッチしている」

モニター「グレイを一人選んで、その心に入るんだ。彼らが何をしているのか割り出すんだ」

私「待って。今、それをしている。これは生き残りのためのプロジェクトだ。生活のために行うという意味で、それは彼らの仕事だ。だれにとっても現状では、生き残りという概念はひじょうに幅広い」

モニター「今度は、その女性の心の中に入るんだ。ステージ4のマトリックスに留まるんだ」

私「彼女の状況把握には明らかに複数の階層がある。最上層では、彼女は落ち着いている。しかし、すぐその下のいまだに人間のレベルでは、彼女は恐れている。さらにその下のサブスペースのレベルでは、彼女は幸福で有頂天にさえなっている」

モニター「選択の基準は何なんだ？」

私「彼女が自分自身を選んだ。彼女は志願したんだ」

モニター「宇宙船の中に入るんだ。ステージ4に留まるんだ」

私「今、それをしている。オー！」

モニター「その強い〈感情的反応〉をマトリックス内に放り出して、先に進むんだ」

私「ここにはたたくさんのグレイがいる。膨大な数の手術台がある。広々とした場所で、たたくさんの活動が見られる。すべてのグレイがひじょうに忙しくしている。宇宙船内には、どうやらグレイたちによって連れてこられた人間たちが他にもいる」

モニター「宇宙船内には別のタイプのETはいるか？」

私「宇宙船内にはグレイと人間だけだ。木造の家からやって来た女性が、今手術台の上にいる。彼女は金切り声をあげている。彼女の両脚の間を見ている背の高いグレイがいる。彼らは彼女を検査して、何かをしようとしている」

どうやら私は気づかれている。だれかが文字どおりあるものを見させようとして私を押している。それは、通路の中に、あるいはドアを通して、強く押されるような感覚だ。だれかが私に何かを見せたがっているのが感じられる。

実際、私は今、その女性の子宮の中にいる。ここには胎児がいる。おそらく人工的にその場所を

照らす光が感じられる。胎児は外に出かかっていて、私はその胎児がとり出されるのを追いかけている。胎児は今、その女性の外に出た。彼女はとても穏やかで、疲れており、おそらく、まさに「途方に暮れている」。彼女は氣絶していたのかもしれない。胎児は素早くきれいな容器の中の液体に浸けられた」

モニター「どのぐらいの間、胎児は容器の中にいるんだ？」

私「この特別なチューブには短い間だ。私のそばに辛抱強く立っている大人のグレイから、今、この情報を受けとっている。その生き物は、管理人の人格をもった、一種の看護婦か助産婦のようだ。赤ん坊は成長に応じてあちこちに移し変えられると、そのグレイは私に話している。このあとは大きめの容器に入れられて、やがて完全に外に出る。最終的に、移し替えは普通の出産に似ている。そして赤ん坊はとり出され、呼吸する空気が与えられる」

モニター「どのぐらいの間、この作業は続いているのか？」

私「これは人間にとって大きな躍進だ、と私は教えられている。その決定は、人間（すなわち我々）に全体計画を示すために、まさに最近下されたものだ。グレイたちはもはや我々のRVに干渉しないだろう。今、我々はいわゆるアブダクションを自由に見ることができよう。グレイたちは、人間との関係において変化を望んでいて、彼らの側の主要な譲歩として（だがこれはおそらく間違った表現である）これを行っている。彼らは人間と協同して仕事をしたがっている。

現在の彼らの活動の活発さに関しては、これは新しい動きだ。連続と緩やかな過去の变化から、グレイと人間に自己決定を許す、急速で主要な進化論的前進へ、計画は新しい方向へ向かっている。どうやらこの変化は、より大きな連邦の決定によって指示されている。グレイたちには変化が求

められていて、彼らにはまた人間を助けることも要請されている。人間たちが自発的にグレイたちを助けてきたことに関して、彼らは長い間感謝してきたことがはっきりとわかる」

モニター「今のところはこれで十分だ。セッションを終わるんだ」

私「このセッションは時間がかかった。疲れたよ。それで、ターゲットを教えてください」

モニター「連邦／現在の地球での作業」

私「うーん。今後は、ことが変わってくるようだ」

モニター「考えさせられるな」

## 【検討】

今回のセッションが、ジョン・マックがETアダクション現象に関する本を出した数週間後に行われたものであることは注目すべきことである。その現象に対するマックの扱いは、おそらく既存の文献において最も慎重であり、グレイに関して肯定的である。グレイたちは、我々のRVの試みに関して、従来の作戦を変えることに決めたのかもしれない。というのも、彼らの活動に対してこれまで我々の典型的な反応であった「恐れ」なして、今や我々は、その現象を理解することが可能であると彼らは結論づけたからである。

このセッションのあと私のモニターは、高度に監視されたタイプ4の条件下でETアダクションをターゲットとした多くの透視者と連絡をとり合ったが、彼らの結果はすべて目覚ましいものであった。一九九四年五月のある時点でグレイたちは、人間との交信方法を変化させていた。我々は、

少なくとも互いの活動を自由に看視できるといふ意味で、彼らと対等に考えられている。これは、将来のさらに大きな協力関係への前触れとして見られるのではないかと私は思っている。

おそらく、今回のセクションから得られる最も重要なデータは、少なくとも一人のアブダクティーは自発的に誘拐されたということであつた。私がセクションの間に考えたことは、この特別なアブダクティーは、複雑な意識構造の中に何層もの意識をもっているということであつた。深層レベルでは、彼女はアブダクション体験に気づいており、それに参加することを喜んでゐた。しかし目覚めた意識は、それに参加する事前の合意も覚えておらず、ただ恐ろしいと思えることに深入りすることも望んでいなかった。

人間の意識には何層にもわたる構造があることを考えれば、それがグレイたちをいかに戸惑わせるものか、また、なぜ彼らが無神経とも思えるやり方でアブダクションを行っているのか、私にも理解することができるとは。彼らはその人物が（肉体的誕生以前に）もともと参加に同意していたことを知っており、だから肉体的人間のパニックを無視したのかもしれない。多分彼らは、アブダクティーの肉体が死に、そのサブスペースの個性が肉体的意識から自由になるときすべてのことが許される、と想定しているのだろう。

最近の人間の行動は、グレイの態度の変化を促しているようだ。もしグレイたちが本当に自分たちと同様に人間を救うために働いているのなら、我々をこの冒険における行動的なパートナーとして扱うことで、さらに得るものがあるのかもしれない。

## 第15章 イエス

研究が進むにつれ、これらの発見の意味するところは、事実上すべての人間にとってきわめて大きいことがはっきりとした。そこで、我々の長いターゲット・リストにいくつかの新しいターゲットを加えることにした。これらのターゲットは、我々の歴史上重要な時期に、人間を導くことに貢献した個人であった。彼らは、助言を求めてやって来た多くの人々にとっては師であった。イエスは、私がリストに加えたそのような人格者の一人である。

最初、私のモニターはリストにイエスを加えるのをためらった。彼にはいくつかの理由があったからだ。私は思っている。私はターゲットをブラインドで見ることになったが、これはイエスにアプローチするにはあまり敬虔りけんな方法ではないと思われる方もいるかもしれない。我々の最大の恐れは、イエスは我々の研究に参加しながらないだろうということ、イエスは我々の会談要諦を無視するだろうということであった。正直に言って、何が起るのか我々にはわからなかった。

問題の複雑さに加え、我々は当初設定されたSRVの目的を拡大しようとしていた。SRVの当

初の目的は、観察という受動的行為を通して物理的現場についての記述的な情報を引き出すことであつた。しかし、特定の個人をターゲットにすることによって、我々は既知の知覚力のある存在と意識的にコミュニケーションを試みてみた。これはできないと疑う理由はなかつた。というのは、RV中に偶然、非物質的存在に出会ふと、彼らは我々に発信してきたからである。しかし、セッションの目的としてオープンな対話を確立しようとする試みは、これまでに一度もなかつた。このように、このセッションはSRVの発展において、ひじょうに重要な前進のための舞台を設定した。今、我々は疑いもなく、SRVは交付のための信頼できる積極的な手法として、活用可能なことがわかつている。

本章にはイエスがターゲットとなつた二つのセッションのデータが含まれている。

日付…一九九四年六月二日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…8863/8473

予備ステージでは当初、ターゲットは堅い人工構造物と関係していることを示していた。

私「機械の音が聞こえる。気温は暖かく、苦い味と煙の匂いがする。凝縮した場所にたくさんのエネルギーと活動があるのをとらえている。これを建設現場として識別することにする。」

ステージ3のスケッチに進んでいる。いくつかの構造物、煙、建設用乗り物、そして穴のある場所を描いている」

モニター「それらを〈分析的判断〉として書き留めて、ステージ4に進むんだ」

私「了解。煙がある。大量に燃えている。いやな匂いがある。充満しているようだ。たくさんの作業活動がある。現場に対する〈感情的衝撃〉（透視者の体験感情ではなく、ターゲット現場の感情。エモーショナル・インパクト）がある。異常に興奮した不安感をとらえている。

今、私は少なくとも一つの乗り物をとらえている。ここには生き物たちがいる。彼らは作業衣にジーンズをはいている。生き物たちはヘルメットをかぶっている。ふたたび〈感情的衝撃〉。私は現場にかかわるパニックを感じとっている。再度、私はこれを建設現場として知覚しており、これをターゲット信号からの〈分析的判断〉として言明したい」

モニター「建設という概念を探るんだ」

私「待つて……この人々は何かをつくっている。建設作業員は急いでいる。今、私は間に合うように進んでいる……大きな、磨かれた建物を知覚している。〈分析的判断〉としてこれを書き留めることにする。これは、ここエモリー大学で現在建設中の新しい公衆衛生ビルのようなだ」

モニター「建物の中に入って、そこにいる人々の心の中に入るんだ」

私「緊急な健康問題、感星レベルの心配事がある。疾病抑制センターの人々の心の中に関係があるようだ。これは、疾病抑制センターのすぐ隣のエモリー大学で建設されている新しい公衆衛生ビルだ」

モニター「それを〈分析的判断／同定〉として書き留めるんだ。それから、健康問題について調べ



るんだ」

私「今それをやっている……惑星上の至るところにいくつもの問題がある。飢餓と病気の両方がある。新しい病気、新しい形態のバクテリア、新しいウイルス、また放射能による突然変異さえある。公衆衛生ビルの人々は、手に負えない様子であるが、その状況を抑制する方法を探し出そうとしている」

モニター「導き／援助の概念に意識を向けるんだ」

私「了解。待つて。人間は生活の基本に向かう必要がある。急速な科学技術による修正は不可能だという明確な認識を感じとっている。

待つて、何かが起こっている。この全体のセッションの情報が、ある存在からやって来ていることを、今、知覚している。私はその存在のほうに向かっている。うーん。これは光の存在のようだ。彼はどこか半透明だ。ガウンを着ていて、髪の毛は光でできているようだ。私は靈的存在の雰囲気を感じとっている。この男はイエスであるという感覚を得ている。私はそれを〈分析的判断〉として書き留める。私はまた、この人物から自分に向けて投影される多大な愛を感じとっている。

その存在は、状況は切迫していて、物質的な解決策ではその問題を改善することはできないといっているようだ。その思想は、肉体的なワナから人間を抜け出させて、人類を救うことである」

## 【検討】

セッションのこの時点で、私のモニターの声がそれとわかるぐらい変化した。彼は少し神経質に

なつたようで、すぐにセツションの終了を命じた。私は彼にターゲットが何であったのか尋ね、しばらくして彼は「イエスだった」と答えた。

まだ私はどこか二重存在の状態で、「イエス!? 冗談いつてるんじゃないんですか? ターゲットは本当にイエスだった? 彼はそこで何をしていたんですか?」と返事した。

モニターは、これは彼の人生とR.V.の発展において画期的な出来事だったと簡単に私にいい、さらに、電話を切つてその意味するところを考えなければならぬといった。

彼が電話を切る前に、私はうっかり口を滑らせた。「しかし、彼はかなり友好的なようだったし、ユーモアのセンスも感じとつた。彼はまた私と会うことを期待しているという印象すら受けとつた。彼に火星人やグレイについて聞くこともできなかつた! 我々はそれらに対してどう対処することになつてゐるんですか?」

私のモニターは、ただ電話を切つてこのすべてのことを考えたがつていたので、私はそれで終わりにした。いつもの自分を取り戻したのち、このセツションがいかに画期的なものであつたのかを悟り始めた。最初に、それはかつては肉体をもつた人間で、すでに死んでいる人物をターゲットにすることに成功したことを示していた。

二番目に、S.R.V.は二つの存在間(すなわち透視者と他のだれか)の交信を確立するために利用可能なことを、このセツションは明瞭に示していた。三番目に、ターゲットにされた個人は時々透視者に向けた情報の流れをコントロールできることを、それは明らかにしたことである。この場合、イエスは自分自身を明らかにする前に、惑星レベルの健康問題という回り道を介して我々を旅させた。私はターゲットの人格がこの設定にひじょうに影響を及ぼすのではないかと思つてゐる。イエ

スは、ただ説教によってではなく、経験的に何かを我々に教えたがっていた。そのために、彼は学びとる状況を我々のために設定してくれたのだ。さらに、我々がリストに加えた他の人格者の何人かも、交信において同様なテクニクの使用を、決断するかもしれないと私は悟った。

教訓それ自体、またとても重要なことである。どうやら、人間が近い将来に直面するだろう健康障害と地球における地球外生命の活動の間には関係がある。プロジェクトのこの時点で、多くの側面とグループを巻き込む複雑で劇的な仕事は巧みに調整されていたようだ。その現象の基本的概念は、人間をより広域の銀河系共同体に紹介し、実際に成熟した銀河系市民としての新しい責任を負うようになるまでの間、さまざまなやり方で人間たちに態度や行いを変えさせようと強いることである。しかし、このような概念は、この時点ではただの憶測にすぎなかった。はっきりとした結論が下せるようになる前に、私はその事情についてさらに幅広く知る必要があった。

イエスをターゲットにモニターされた最初のセッションから約二週間後、対話を行うために、今回はタイプ1の条件下でイエスをターゲットにすることを私は決めた。この時点では、私のSRV実験手順の使用はかなり上達してきており、正確なタイプ1データを得る能力は疑いのないものとなっていた。他のタイプ1データのセッションのように、私は物語体で情報を紹介する。

日付…一九九四年六月一四日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ1

最初の印象は、青、白、黄色であった。手触りは風のような感じを受けた。セクション後のステージで、私は落ち着いた感覚とともに拡張的なエネルギーを感じとった。休憩所のような感覚をもった。最初のイメージは、発光してエネルギーを放射しているような大きな円形の物体であった。私はそのターゲット信号を追って光の中に向かった。

このすぐあと、私は生き物たちを識別し始め、その生き物たちが私を待っていたことをはっきりと感じとった。ふたたび私は、周囲から落ち着いた感覚を得た。ある種の保護区域、(私の知らない何かから)回復するための場所にいるように感じた。

ターゲット信号を追いつつ、私は人間のような顔に近づいた。そこには他に五人の生き物がいた。彼らは皆白い半透明のガウンを着ており、すべてを透かして見ることができた。中央の生き物のところへ行つて、彼らは私に何をしてほしいのか質問してみた。彼らは、どこかへ私を連れていきたくて示唆した。

我々は、半透明の壁がある大きな部屋の中へ進んだ。部屋の中には他の生き物たちがたくさんいた。この時点で、これが私が先に訪問した連邦本部であることをはっきり感じた。このセクションにおける私の最初のイメージ——発光する活動的な様子の大きな円形物体——が、前のセクションで連邦本部に近づいたときに自分が感じたものに似ていることを悟った。現在、部屋の中にあるすべての生き物たちは、最初の五人が着ていたのと同じ、半透明の白いガウンをまとっていた。

この時点で、私は二つの(分析的判断)を行った。最初は、この場所がある種の中央指令室であるというものであった。二番目は、さまざまな作戦の指令と統制のための軍本部のようなおもむきがあったことだ。部屋の中にはテーブルや椅子もあった。

私は、先に連邦本部を訪れたときに交信した重々しいブツダのような人物と向かい合った。彼はある方法でその場所を管理しているように感じられた。彼は私に彼の心の中に入るように指示し、私は中に入った。

彼の心の中に入ると、同時に私は別次元あるいは別の領域に入っていた。それは、まるでである次元がもう一方の次元の裏側にあるようであった。この別次元で、私は導きという概念に意識を向けてみた。なぜならそれは、先のセツションで私の無意識がイエスの人格を表面化させるきっかけとなったからである。私は彼の顔を見た。イエスの顔を知覚してすぐに、私が一人で（ソロのセツションで）彼に会いに戻ってきたことに、彼は喜んでいるのがはつきりと感じられた。

SRV実験手順の手続き内でイエスから情報を得るために、私は人間とグレイとの交信の概念について意識を向けてみた。私が受けとった反応はとても明確で、厳然とさえしていた。人間は彼の計画でない生き物とは交信することはない、とイエスはいった。それからイエスは、彼らが我々のところにやって来たなら、我々は彼の子供たちを救う予定になっていると主張した。

イエスが何を意図して「彼の計画」とか「彼の子供たち」という言葉を使ったのかは私にはわからなかった。彼はより多くの人間たち——その中には彼を宗教的人物とみなす人々もいる——に理解できる言葉を使っていたのかもしれない。私は、彼の意図したことはもっと複雑なものではなかったかと思っている。読者の中には、彼の言葉を違ったふうに解釈する人もいるかもしれない。

イエスは続けて、我々は自由意志をもっており、グレイとの交流で何をすべきか選択する能力をもっていると言った。しかし、我々の選択は我々の未来の多くを決定することになるといふ明確な印象を私はもった。そして、私は人間と火星人ととの交流の概念に意識を向け、グレイに関するのと

似た反応を得た。

さらに私は、精神とシデイーの二重概念に意識を向けた。イエスのこれに対する反応はひじょうにはつきりしていた。精神が源泉に導かれるには数え切れないほどの方法があると彼はいった。それは川とその支流の關係に似ている。一つの方法があるのではなく、シデイーの実践が人間を進化させる唯一の方法ではない。しかしそれにもかかわらず、人間の精神にとってシデイーは有益なアプローチだと彼は付け加えた。他の種類の精神には、シデイーのように非物質的現実を見極める訓練は必要ないかもしれないという感覚を受けとったことも、付け加えておくべきであろう。シデイーは人間の精神にとつて有益であり、おそらく人間の精神にだけ有益なのであろう。他の非人間の場合においてもそれがどの程度幅広く適用されるかどうかについては、私には知覚できなかった。私は危険という概念に意識を向け、強欲が人格の破壊者であるとの返事を受けとった。それは生の残りのものと適合しない。油と水のようなものだ。愛と強欲は混ざり合わない。私はイエスが説教をしているという印象はもたなかった。それはまるで、ただ彼が人生の事実を語っているようであった。

生態系の概念に意識を向けると、イエスは、神はすべての生命を創造・再創造することが可能であると語った。生命の目的は進化を生み出すことである。このあと、私は銀河系連邦の概念に意識を向けた。連邦にかかわる生き物たちは人間よりも高い進化レベルにあるとイエスはほめかけた。彼らもまた自分たち自身の進化を促すために働いているが、彼らの行動が人間の行動よりもいちだんと重要であるとか、また劣っていたりするということはない。さらに、彼らは特に彼のために働くことはない、と彼は強調して語った。彼らは自分たち自身のために、そして自分たち自身の成長

のために働く。しかし、彼らは自分たちの進歩が、人間よりもさらに明確に、神の心にかなうものとして見なしている。

なぜ私は連邦の人々を通して彼のところにやって来たのか、イエスに尋ねてみた。それは主に私が書いている本のためであると彼は教えてくれた。彼は本に関して私を助けたがっていた。というのも、それが私の進化に寄与するからだ。それは、他の人々すべてを助ける一つのささやかな行動であるという感覚を私はもった。一時的に先に進めないでいる他人を助けることなく、前進できる人はいない。それが進化の法則であり、その反対が自分本位と強欲である。

私は、人間はグレイと火星人を同情の目で見るべきかどうか尋ねてみた。答えは、そうだ、であった。これが他人を助けるという意味である。これなくしてだれも前進しない。助けるという人間の欲求に限界があつてはならない。これが最も絶対的な命令（イエスによる強調）である。人種、種族などに対する偏見は、高度に進化した形態とは共存できないのだ。最終的に我々の自由を縛る過去の知的・慣習的な限界を乗り越えることが、人間に課されている。

この時点で私はイエスに感謝し、セッションを終了した。そして注釈として、このセッション全体のトーンは自分の感情に左右されないものであつたと強調しておく。

## 【検討】

イエスは人間の進化的成長に対してかなり心配している。さらに、イエスは、少なくとも自分との実証可能なコンタクトを試みるいくつかの人間のプロジェクトに、喜んで直接参加したいと考え

ている。

イエスの歴史的な重要性から、SRVを利用しながら、私は我々自身の現在の重大な出来事の多くに関して彼の意見を求めてみた。彼は自由に自分の意見を提供してくれた。それ以上のことは行われず、私の結果はいかなる現存の宗教的概念にも異議を唱えようとするものではない。たとえば、イエスの見解に興味を見出すために、イエスをキリスト教の概念である神の子であると信じたり、それが何かを変えると信じたりする必要はない。ちょうど、我々すべてのサブスペース的側面が肉体が死んでも生き延びるように、彼は我々の惑星に一度肉体をもって存在し、そのサブスペース的側面はまだ生きていて、元気にしているのである。

本章同様、後章でも、ブツダやデブ導師の人格との交信にかかわるデータを紹介する。そのような人格者への私のアプローチは、何世紀にもわたって人間文化の発展に貢献してきたことに対して部分的に敬意を失しているところがある。しかしまた、賢明な人間に助言を求めることは賢明なことであると私は信じている。



## 第16章 初期グレイ文明崩壊の原因

私の研究の基本目的の一つは、初期のグレイ文明を理解することにある。彼らの故郷、彼らの歴史において起きた主な出来事、そして、彼らが一文明として直面したさらに重要な苦難について、私は知りたいと思っていた。

本章では、三回の異なるRVのセッションから、データを提示する。最初は「グレイ／初期文明」に意識を向けたモニターされたブラインドのセッション（タイプ4のデータ）である。二番目と三番目のセッションはタイプ1の条件下でソロで行われた。私が報告する二番目のセッションは、時的には最初に、私のモニターがようやくブラインド・セッションを行った約六カ月前に行われた。

日付…一九九四年六月一六日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

予備ステージでは、乾燥した陸地、多量の液体そして人工構造物を伴う一つの合成ターゲットを示していた。

私「青と黒の色をとらえている。手触りは濡れていて、泥だらけだ。気温は涼しく、味は塩辛い。匂いは生臭く、ぼしゃぼしゃという音が聞こえる。」

平らな表面には一種の構造物がある。今、私はこれをステージ3のスケッチに描いている。表面は池のように濡れているようだ。その構造物は堅い」

モニターは構造物のてっぺんに登るよう私に視点移動を命じた。

「建物の下には螺旋状の活発なエネルギー活動がある。一種のジョウゴのようだ」

私は池の表面にある構造物をステージ3のスケッチとして描いた。構造物の下には、螺旋を描く水の大きな渦がある。構造物のまわりの水（渦の外側）はひじょうに荒れ狂っている。

モニター「コートニー、ステージ4に進むんだ」

私「了解。今、マトリックス内にいる。確かに一種の渦がある。たくさんの水と、この場所にかかわる強力なパワーがある。生き物たちもいる。これは彼らの仕事環境だと感じられる。」

渦の中に入り込むと、大量の水に関係したとてつもないエネルギーがある。渦は下方に吸い込んでいる。

生き物たちはとても進んだヒューマノイドだ。今、その構造物の中に向かっていて。それは何か

ETのもの、おそらく飛行船だが、必ずしも宇宙船とは限らない。生き物たちのところに戻ってみる。彼らの仕事は環境にかかわっていて、海を扱っている。ここには海の生息地と関連した魚の多様性についての何かがある。目的はある変化に備えた保護・貯蔵・準備である。ここには生息地の破壊に対する不安に関係した何かがある。

今、その構造物の中において内部を見ている。ここにはコンピューターかコントロール・パネルがある。それらは、私が見たことのある他のETの宇宙船ほどには高度で複雑なものではない。飛行船の内部はヒューマノイドにとっては快適な無菌環境のようだ。清潔な匂いがある。

ふたたびその生き物たちのところにやってくる。彼らは明らかにヒューマノイドだ。近づいてみる。グレイ種のようにだが、何かが奇妙だ。目はそれほど大きくないが、明らかにグレイだ。目も同じようにくぼんでいる。

この人々は今私に気がついたようだ。彼らもまた私がここに現れたことに少し驚いているようだ。これは珍しい。私はこれまで一度もグレイを驚かせていないのに。

彼らは私の訪問に敬意を表しているようで、ちょうど今、上司あるいは実際に彼らがしたがうだけから、私と協同するようにいわれている」

モニター「彼らの服装について教えてくれ。彼らは何を着ているか？」

私「ユニフォームを着ている。ユニフォームの上にはバッジもつけている。それを今スケッチしている。うーん。それは、火星で火星人を助けたグレイたちがユニフォームに付けていたものと同じものだ。内側に蛇状のものをあしらったハート型のもの。バッジは彼らの部隊のシンボルだ。」

今、彼らの心の中に入っている。私の理解力が正確に彼らの心と一致しないような、一種の空しさを感ずる。しかし、それは、私が他のグレイに感じたような強い空しさではない」

モニター「彼らがどこにいるのかについて、彼らから情報が得られないかどうか調べるんだ」

私「今、そうしている……その質問は地理的なデータを含んでいるので、彼らは最初にこれを気づかっている。ある程度、混乱があるかもしれないことを恐れてこの情報に憂慮している。私は質問を無理強いするつもりはないが、できるかもしれないという感じを受けている。しかし、これは地球ではない」

モニターは私に、飛行船の母港に行くよう視点移動させた。

「私の現在の視点からは、前に開けた区域のある都市のような環境が見える。ここにはたくさん建物があり、つやがあり、すべすべしている。多くの建物は螺旋のようになってっぺんが尖っている。その場所の匂いにはススのような刺激がある。私は、これがグレイの故郷であるという〈分析的判断〉を行っている」

モニター「コートニー、この視点から、ユニフォームにあるバッジの意味を探るんだ」

私「それは救出部隊のシンボルを表している。ある種の惨事・災難が起こっていて、その部隊は何かを救うために活動している。特別部隊は、初期グレイ文明の崩壊の時期にその起源をもっているという明確な感覚を受けとっている」

モニター「崩壊の概念を探るんだ」

私「待つて。燃えているような、ツンとくる、ススのような悪臭をとらえている。ここにはとつもない環境汚染がある」

モニター「指導部はどうなってるんだ」

私「このグレイ社会はひじょうに利己的な志向がある。彼らの集团的社会は強欲を制度化した。全体的な利益を気に掛けることなく、個人の欲望を何でも受け入れることを正常なこととした。私は異様な〈分析的判断〉にとらわれている。サブスペースにおける反乱のようなものを知覚している。私はこれをルシファアの反乱と似たようなものとして書き留めたい。私はそれを無意識の心から生まれるデータの流れとして書き留めなければならない」

モニター「ただそれを書き留めるんだ。何も解釈しようとしてはいけない。先に進むんだ。災難・救出・復旧の概念を探り続けるんだ」

私「救出部隊はその社会の中から動員されている。彼らはバッジをつけてやって来た人々だ。待つて、何かが変化している……今、私はあるグレイと直接コンタクトをとっている。何が起こっているのかを理解させるのが彼の仕事だ。このグレイは大きな広角型の目をした普通のグレイのようだが、私には彼が、私がこのセクションで少し混乱しているので、重要なことを明確にするのは自分のつとめだと考えているように受けとれる。私は戻ってその建物を眺めている。今、その場所をより細かくスケッチしている。」

そのターゲット信号にしたがつて、私は環境崩壊の概念に移っている。ここは全体的に汚染している。文字どおり、この生き物たちは自分たち自身の糞便の中で泳いでいる。彼らの全体の意識は自己満足の方向に定められている。

今、セックスの概念を探っている。この人々はかなり性的関心が高いようだ。

食べ物に移る。彼らの食べ物は大量生産だ。食事を与えるべき人々はたくさんいる。文字どおり

何十億だ。長い時間の間に食べ物は高度に処理加工されたものになり、自然のものからかけ離れてしまった。食料の源はもともと海だった。この人々は魚を食べているように思われる。

ふたたび、ターゲット信号にしたがう。この生き物たちはある種のサブスペース戦争によって墮落したと感じられる。まるで彼らは傲慢で、反抗的で、ひじょうに力のある指導者によって集団的にあざむかれたかのようだ。彼らはのちに裏切られたと感じたが、その傷はあまりに大きすぎた。彼らはその傷から回復しなければならなかったのだ」

モニター「よし、コートニー。セッションを終わりにしよう」

私「それで、ターゲットは……?」

モニター「『グレイ／初期文明』だ」

右に示したデータは、半年前の一九九三年一月三日に行い記録したソロ・セッション（タイプ1データ）によって確かめられた。その前のセッションにおいて、私はひじょうに混雑し、汚染した都市を知覚した。グレイの故郷の大気は不快で、地球基準によれば腐食性に近く、その不快さは尋常ではなかった。

グレイ自身に関していえば、初期のグレイたちには口頭表現がいくらか認められた。彼らの声は奇妙なチイチイという音をたてた。その時代のグレイの心理は、人間の心理と共通した何かをもっていたという印象を受けとった。初期のグレイたちは、現在、地球の周辺で活動的なグレイよりも小さな目をもっていた。彼らの皮膚は薄い色で、なめらかで、触るとしわが寄った。私が見た限り彼らには髪の毛はなかった。性的興味の点において初期のグレイたちは、それだけを考えて性的衝

動に身をまかせていた。

前のセクションにおいて、初期のグレイの赤ん坊たちが、汚染の結果として病気に悩まされたのも私は見ている。これによって多くの死者が出た。グレイたちは生殖に問題を抱え始めたのだ。彼らは子供をつくったが、困難を伴った。また初期の社会は（今日の人間と同じように）、自分たちのジレンマに関してまったく無邪気であったという意味で、自分たちがどれだけの問題を抱え込んでいるのか、明確な考えをもっていなかった。

モニター・セクションのあと、私はそのターゲットで三度目のセクションを行うことに決めた。一九九四年六月二〇日、タイプ1の条件下で、私は「グレイ／初期文明」をターゲットにした。

セクションの初めに、私がモニター・セクションで知覚した海にあった渦の上の構造物にふたたび行ってみた。さらに詳細に調査してみると、これは食料の製造・維持の施設であったことがわかった。水の中の渦はこの活動に関係していた。

その構造物の中のグレイに焦点を合わせると、人間の基準からすると彼らの性器がひじょうに小さいことに気がついた。男も女も平等主義のようで、建物の中でともに働いていた。控えめにいっても、彼らの性生活はたくましかった。彼らの性行為の量は行為の頻度と相手の数において、人間のそれを小さく見せるようであった。人間よりもこの生き物たちの間ではテレパシーがさらに進んでおり、性行為におけるテレパシー的要素は性体験をいっそう激しくしていた。

グレイたちの故郷それ自体についていえば、大気が汚染されていると私は知覚した。汚染に加え、放射能が不健康なレベルでグレイたちを襲った。

ソロ・セクションのこの時点で、グレイの故郷における問題の原因を私は探り始めた。進化途中

で、ある種の間違いが起こったことは明白であった。自己満足のために自我に焦点を合わせたことは、大多数のグレイの器官に行動の機能障害を招いたのだ。彼らの精神には、肉体的快楽の衝動にバランスを与えるものは何もなくあったようだ。

さらなるターゲット信号にしたがつて、私は精神性という概念に意識を向けた。この時点で、セツションは著しく変化した。私はあるサブスペースの光の存在を知覚し始めた。私の感覚は、この無定形の生き物は、私にはわからないある面で特に力強かったというものであった。最初に、私はその中に暗いところと明るいところを知覚したが、それは優しくは見えなかった。

そこで私は、グレイの問題に対する外部原因という概念に意識を向け、場所の移動を経験した。私は複数のサブスペース生命体がいた場所で、サブスペース生命の層として自分がただ描写できるものを見下ろしているのがわかった。この生命の層においてはとてつもない混雑があり、ラッシュ・アワーのマンハッタン、グランド・セントラル駅のサブスペース版のようであった。この生命の層における混雑と混沌の規模は、ほとんど圧倒されるほどであった。私はこのサブスペース生命とグレイの間の関係を探りながら、このサブスペース生命体は肉体を伴って生まれてくる前のグレイであることを識別した。

サブスペース生命体の間には組織的な構造があるのを探り出した私は、それを追求し、彼らは厳格で階級的な社会秩序をもっていることを見出した。この階級内での彼らに対する統制は、質的にほとんど軍隊さながらである。彼らは命令を受けとり、それにしたがう。奇妙なことに、彼らは好き放題なことをし、破壊するように命じられていた(サブスペースと肉体的誕生後の両方において)。さらなるターゲット信号にしたがつて、私は組織の指導部を追い求めた。私は自分がサブスペース



スの指揮・統制センターにいるのがわかった。そのとき、センターには一〇人の生き物たちがいた。四、五人が、他の者よりも高い権限をもっているようであった。建物の内側はオフィス・ビルのように整理されており、厳格な軍隊的秩序がここを支配しているのがますます明らかになった。私は引き続きターゲット信号にしたがって、組織の一人の有力なリーダーのところにとどり着いた。この生き物は、私が先に知覚した無定形の明暗をもった生命体と同じであった。

私はその心に入って、きわめて暗い心をもっていることだけを見出した。そこでは何かがとても狂っていた。まるで、その生き物が心理的に病んでいるかのようであった。

最初に、彼は死に対して病的な恐れをもっていた。生き残るためには戦闘と征服が必要とされると彼は考えたようだ。彼は間違いが犯されたことを理解し、罰を恐れていた。リーダーは和解案を出すことができなかったようだ。恐れがそれを妨げたのだ。そして、このリーダーはテロリストだったことが私にははっきりとした。

心の探索を続けていると、このサブスペースのテロリスト・リーダーはグレイの故郷を破壊するつもりであることがわかった。その目的は、その領域の別の部分に恐れを教え込み、それによって反対勢力を弱めることであった。恐怖が重要な兵器であったのだ。リーダーの意図を最もよく反映する言葉でいえば、危機の間、グレイの魂が人質としてとらえられていたのだ。暗い心は、自分の生き残りの権利を保証する交渉による解決を求めているが、変更があった。テロリストは自分たちの領域を支配したかった。それは自分自身を君主、独裁者として確立したかったのだ。

実際、そのリーダーは（自分を）崇拜することを求めた。崇拜の必要は、その人格構造における弱さから生まれた。彼は、自身のひびの入った人格を補助するために崇拜を必要とした。妙なよう

だが、リーダーは低い自尊心に問題をもっていた。

それらの観察を行っていたとき、その生き物が注意を私に向けるのが感じられた。彼は、私を見つげるために時間と場所の移動を實行した。そして、私が自分のデスクにつくと、私をとり囲む暗いサブスペースの雲のように、彼が私のオフィスの中に降りてくるのを感じた。

かなり興味を引いたことに、私はこの生き物にまったく恐れを感じなかった。私はただそのテロリストを調べ、彼は私を調べた。そして、二、三秒観察したあと（おそらく三〇秒）、テロリストは立ち去った。私は直接、その活動や支配を脅かすわけではないとるに足らない人間だと感じとった様子で。

## 【検討】

グレイ文明の崩壊の裏には、どうやらサブスペース的要因があったらしい。この崩壊をもたらした出来事のすべてを私は完全には理解してはいないが、グレイたちが自分たちの故郷を破壊したということについては、疑いをもっていない。そこで彼らは生き残るための戦略を案出しなければならなかった。彼らの現在の肉体的外見は初期の頃とは異なるが、彼らが次に経験したことが、彼らにかなりの変形をもたらしたとだけ私には推定できる。彼らの目が大きくなったのは、彼らが暗い環境、おそらく地下に住み始めたことをうかがわせ、彼らの故郷の地上環境が急速に悪化していたことを考えれば、それも納得がいく。

現在のグレイに性活動が欠けているのは、彼らが遺伝子的に、この生理学的プロセスを自らとり

除いてしまったからと考えられる。実際、彼らはまるで遺伝子的に自らを去勢してしまったかのように見える。この理由は、彼ら自身の人口を抑制する必要があったからかもしれない。しかし、それは、おそらく胎児の成長を支える技術的手段を利用して、彼らが生殖の代替手段を開発したことへのめかしている。この推測は、UFOアブダクションの文献に一貫して現れる、液体に満たされた保育器内の試験管ベビーや胎児の報告と密接に対応する。

しかし、グレイが自らの性的機能を取り除くことを選択した背景には別の理由もあったのだろう。グレイたちがもはや性による再生を行わないというのは適切ではない。また、彼らが性行為を行うことに心理的な衝動をもたないというのも正しくない。私の憶測では、初期文明の崩壊時の体験が、機能障害を引き起こした潜在的原因を彼らに再び思い出させたのである。性的衝動が自分たち自身にジレンマを与えていると彼らは感じてたのかもしれない。当初は早急に、不慣れで苛酷な環境に適応できるように意図された遺伝子操作のプロジェクトはさらに拡大され、彼らの精神の性機能にまで及んだのかもしれない。

最後に興味あることとして、私の観察と分析のいくつかが、自分たちの研究をいわゆるチャネリング・データに基礎を置くロイヤルとブリースト（『宇宙人「内なる訪問者」』『宇宙人遭遇への扉』徳間書店刊の著書がある）によって提唱された概念（一九九二年）と一致していることに言及しておく。

初期グレイ文明の崩壊という問題に関しては多くの疑問が残されている。その崩壊に手を加えていたらしい反逆者リーダーについて、私はあまりわかっていない。崩壊それ自体はテロ行為だったようだ。しかし、だれに対して反逆者リーダーは戦っていたのか？ どんな過ちがあつて、そのり

リーダーは生き残りの手段として反乱を求めるに至ったのであろうか？ 正確にどのようなようにサブスペースの活動が物質世界に移し替えられるのかに關してもまたはつきりしていない。

最後に、反逆者リーダーの下で直接働いていた生き物たちはだれであったのだろうか？ 彼らは人間に似た体をもっていたが、反逆者リーダーは絶対にそうではなかった。前に行った研究では、肉体的存在はそうではないが、サブスペース存在は自らの外見をある程度コントロールすることを示していた。無定形が、そのリーダーの恐怖政治遂行能力を高めたのだろうか？ これらの疑問に對する答えは私にもわからない。しかし、一つだけ確かなことがある。初期グレイ文明の崩壊は簡単なプロセスではなく、物質的側面とサブスペース的側面の両方がかかわっていた。我々自身の生き残りのためにも、両次元における彼らの過ちから賢明に学びとる必要がある。

\*5 何人かの遠隔透視者たちは、ルシファーとサタンが、両者にとつて不幸な結果を生んだサブスペース戦争にかかわる二人の独立した人格である（あった）ことを示すデータを得ている。初期の神秘家たちは、どうやらこれらの出来事のいくらかを知覚していて、自らの文献においてこの戦争にも言及していた。のちにそれらは、宗教的信念に統合されることになったが。

## 第17章 『スター・トレック』とE T支援による人類文化の変質

私が本書のために研究を行ってきた二年間に、テレビ番組『スター・トレック／ザ・ネクスト・ジェネレーション』で紹介されたアイデアの多くと、RVを通して現実のE T活動について得たデータとの間に、類似点があるという印象を私はしばしばもった。

一九九四年春、このシリーズの最後の一編がテレビ放映されたあと、私は『スター・トレック』世代におけるE Tの影響という疑問を解く助けになると考えて、ターゲット・リストに新しい項目を一つ加えることをモニターに頼んだ。

私のもとでの目的は、E Tたちはテレビ作家の精神を操作して、彼らに番組のためのアイデアを出させるのかどうかを知ることにあつた。

私は、E Tたちは人間文化が銀河系生命の複雑さに対してもっと開放的になることを望んでいると推定してみた。その場合、人気テレビ番組は、E Tたちが間接的に、そのようなことに関して幅広い一般の集会的思考を作り上げる一つの方法にはなるだろう。特に、『スター・トレック』がひ

じょうに多くの若者に見られるようになって以来、現実的なアイデアを番組に挿入することは、このような方針に沿って次世代の人間を教育する理想的な方法になるだろう。これは、私がモニターと共有した考えであった。この種のハリウッド作品のEITによる操作は、長年にわたって行われてきたと彼は疑っており、軍のRVチームのあるメンバーたちもまた、その疑念を支持していたことを彼は思い出した。

本章では、二回のRVセッションの結果を紹介する。私が二番目のセッションを行ったのは、最初のセッションでもち上がった、ある重要な疑問に対する答えを得るためであった。

日付…一九九四年七月一日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…8074/7435

予備ステージでは（今回はステージ4の初めからとり上げる）、ターゲットに直接かわる二つの現場があることを示していた。グレイの故郷はその一つであった。モニターは私の最初の注意をもう一方の現場に向けさせた。

私「黒と灰色と黄褐色を知覚している。手触りはザラザラで、滑らかで、ある部分はつやがあり、葉が茂っている。気温は暖かく、ある場所は涼しい。微かに塩の味がし、いくらかホコリの匂いが

する」

さらに詳細なデータを得るためにステージ4に行く前に、ビルのような建造物のある風景をスケッチする。

「この場所には木々がある。それほど広大ではない、ある種の森がある。川か小川のように、ここには水もある。川の流れはかなり強い。」

この場所にも建造物がある。今、その建造物の中に向かっていて、たくさんの人々がいる。人間だ。彼らは皆最新のビジネス・スーツを着ている。うーん。私は今自分の意識を広げている。というのも、この部屋にはまた、たくさんの方物質的存在がいて、気がついていてからだ。オー、ここにはたくさんの方物質的存在がある。サブスペース生命体は私に気づいているが、私は彼らの関心の的ではないと感じている。彼らはここで肉体をもった人々と一緒に、本当に忙しく仕事している。

サブスペース存在はこの建造物内の実際の人間についてはあまり心配していないが、彼らの行っている活動については心配しているようだ。どういふものか、この活動は、よくも悪くも地球にかかわるある変化に関係している」

モニター「そこにはどれくらいサブスペース生命体がいるんだ？」

私「たくさん。おそらく一〇人かそれ以上。彼らの外見はヒューマノイドだ。彼らは皆、白の輝くローブをまとっている」

モニターは、このセッションの予備手続きで示されたもう一方の場所に私を移動させた。ふたたび、この場所はグレイの故郷である。ここに到着したときに時間のシフトを体験する。それは、二つ

の場所が時間的には異なる点にありながら同時に影響し合っていることを示す。読者は思い出してほしい。サブスペースにおいては、すべての時間が同居し、ある場所における過去や未来の何かが、別の場所における現在と相互に影響し合うのは自然なことなのである。

ステージ6において、グレイの故郷と、地球の構造物内のサブスペース生命体や人間とはどんな関係があるのか私は探り始めた。

「構造物の中のサブスペース生命体は、かつての人間である。人間と関係する地球プロジェクトにおいて、彼らはグレイたちと親密に働いているのを私は見ている。

グレイの故郷から、このプロジェクトを支持するのに膨大なサブスペース・エネルギーが発せられていたのを私は知覚している。これに関連して白い光がたくさんある。このすべてが何なのか私にはわからない。

待って、その構造物、いつてみれば部屋だが、その中にいるサブスペース生命体が、今、私に注意を向けている。事態は変わりつつある。何が起きているのか私に教えるように、だれかが彼らに指示しているようだ。彼らはじつに忙しくしていて、今、彼らの活動は難しいところに差しかかっている。彼らは自分たちがやっていることを止めたくはないが、私の困難を救うことが最優先される。彼らは教えられている。

これが、今、起きていることだ。これは一つのプロジェクトだ。もし広い意味での生息地が決められなければ、近い将来、地球はだれにとっても進化の役に立たなくなってしまうだろうと彼らは私に話している。ちょうど今、地球と人間社会が直面している問題に対する人間の意識を転換するためには、彼らの活動をグレイたちと同調させることが絶対的に必要である」



モニター「人間の自覚という概念に意識を向けるんだ」

私「人間文化の変容にかかわる最も重要な一要素は、サブスペースの生命と存在に対する人間の自覚である。物質的なものは、サブスペースにおける生命の進化を助けるために存在している（その逆ではない）。

私は今グレイの故郷での活動（エネルギー）のほうに移動している。このエネルギー量で作業するのに必要な機械は、唯一、グレイの故郷で利用できる（地球には便利に）。ETの宇宙船は今、このレベルのエネルギーを発生させるのに使用されている。

サブスペース人間によって使用されるために、数多くの科学技術が、グレイの世界から地球へのある種のエネルギー移動にかかわっている。そのエネルギーは、現にある種の管またはチャンネルに沿って、人間のサブスペース領域に移されている。二つのグループの間には積極的な協力関係がある。グレイたちには、一度に全惑星を瞬時に変化させるのに必要なレベルのエネルギーをつくり出す能力がある。

そのエネルギーは文字どおり全地球にサブスペースの光を浴びさせるために使用されている。あの意味で、地球は放射線治療を受けている。強いサブスペース放射線で地球を包み込むことは、人間の直感力を高めることに作用し、それによって人間は自らのサブスペースからやって来る情報をさらに受け止められるようになる。

その概念は、人間には、自らのサブスペース的自我を認識できるようになるには不備があり、そこでそのエネルギーが、人間のひじょうに希薄な心と体の関係を増幅するのに使用されているというものだ。

待った、今、妙な情報の断片をとらえている。何となく人間はこの弱きゆえに墮落したと私は知覚している。奇妙に聞こえるかもしれないが、ある種のサブスペースの乱れがあって、人間の進化の軌道がコースを外れてしまったという印象を受けとっている。私は、ルシファー事件か反乱のよ  
うなものを、データの流れから分析的に判断している」

モニター「構造物の中の人間たちに戻るんだ」

私「この人間たちは本当のパワー・ブローカー（政治的に影響力をもつ人々）だ。彼らはまったく汚染されている。彼らは自己満足という誤った現実の中で暮らしている。他人にいろいろな迷惑をかけているようだ。サブスペース生命体は、この特別な生き物たちの将来を気に掛けているが、今それは二の次だ。もし彼ら（建物の中の人間たち）が望めば、彼らは自らを殺すことも可能であるが、他人にさらなる損害を与えることは許されない。

重要と思われるある考えに私は戻らなければならない。この全体のことは、ルシファーの反乱として頭に浮かぶ何かから残ったものである。それはただそのようにはつきりと感じられるだけなので、これを説明してほしいといわないでください。この人間たちは、自らの初期文明が衰退する前のグレイたちと酷似している」

モニター「コートニー、その構造物内の人間たちに対するサブスペース生命体の影響力について調べろんだ」

私「これは大に行われている。彼らが下しているいくつかの重要な決定に関して、行動の変化を求めることに重点がおかれている。サブスペース生命体は、この肉体的人間たちの悪賢い、ほとんど邪悪な心の中に、思想を植え込んでいる。

その思想は、この会合の間の短い時間に固められる必要がある。自分本位はこの人々にふたたび勝利をもたらすだろうが、少なくともある有益で重要な決定が下されることにはなるだろう。だが、この人々はなぜそうした決定を下したのかは知らない。

サブスペース生命体はさまざまな仕事を行う。地球にサブスペースの光を浴びせるアイデアも彼らの活動を支えることになる。邪悪な人間たちが同時に多くの人々を奴隷化し、とらえ、殺す決定を下すことを食い止める一方で、サブスペースの環境を高めることで、共同プロジェクトはできるだけ多くの人々に肯定的な影響を与えなければならぬ」

モニター「わかった、コートニー。ここでセッションを終わりにしよう。ターゲットは『スター・トレック』／思想の起源だ」

## 検討

セッションのあとすぐに、私はこれらのデータをかいつまんで解釈してみた。私がこれをすぐに行ったのは、セッション時の記憶が私の心はまだ鮮明に残っていたからだ。この手短な解釈を通して、私は、グレイの世界で生まれ、地球に浴びせられるサブスペースの光が、『スター・トレック』的思想を一般大衆にさらに受け入れやすくするために作用しているのに気づいた。パワー・ブローカーたちは、どの番組に資金援助するかを決定する人々である。娯楽に関して決定権をもつ者たちは、そのような決定を下すために、しばしば隠れ家やリゾートで会合をもつことを、私のモニターはセッションのあとに言及した。利益が見込めなければ、番組に制作援助は下りない。もしそれが

首尾よく放映され、利益を上げなければ、パワー・ブローカーたちが「スター・トレック」のような番組を援助する理由はない。

ETたちがある意味で人間を変えるために、「スター・トレック」の思想をつくり出したように私には思える。彼らは同時に、その思想を自分たちの考えを幅広く伝えられる魅力ある媒体に浸透させ、その情報を肯定的に受け止める人間視聴者を準備したのである。

「スター・トレック」シリーズは全地球で見られているわけではなく、それゆえ、人間文化の発展に重要な変化を導く影響を与えることはできないと主張して、私の分析に反対する読者もいるかもしれない。私の考えでは、「スター・トレック」が、ETや他のサブスペース生命体が我々の文化を変えるために利用しようとする、唯一の影響源であると仮定するのは間違っている。おそらくこのセッションの結果は、我々の文化を揺り動かす数多くの影響源のただ一つを分析したものとして考えるのが妥当であろう。

私のセッションでは、正確にETたちがどのように特定のテレビ番組の内容——たとえば、「スター・トレック」の一編一編——に直接影響を与えるのかはわからずじまいだった。私はそこに意識を絞って、さらにソロのセッションを行うことに決めた。そのため、私が使用したターゲットは、「スター・トレック／ザ・ネクスト・ジェネレーション」／各挿話のアイデアの起源”であった。

日付…一九九四年九月一日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ1

SRVの予備ステージに続いて、私は茶や黄褐色に近い色を察知し始めた。手触りは木材やセメントのようであった。気温は暖かく、何かツンとくる匂いを感じられた。私のいた場所は平坦で広い印象を与えた。ステージ3のスケッチは広々とした都市と似ていた。

ステージ4において、私は砂漠環境の中に密集した都市を知覚し、ロス・アンゼルス、特にハリウッド地区というはつきりした〈分析的判断〉を加えた。ターゲット脳九〇センチへの視点移動を実行し、寝室で寝ている白人男性のそばに自分がいるのがわかった。私はその人物のスケッチを行った。

男の心の中に入ってみると、彼は夢を見ているのがわかった。彼の脳の中に移植物体があるのを見つけ、それをさらに間近で調べ始めた。どのようにその物体が彼の脳に入ったのかを見極めるためにしばらく時間に柔軟性を与えることが必要であった。時間をさかのぼると、UFOに連れ去られている間に、長い外科用の針を利用してその物体がグレイによって男の脳内に置かれたのが見極められた。

寝ていた男のところに戻り、ふたたび彼の心の中に入って、その夢の状態を観察した。脳内の移植物体からやって来る情報によって誘導されているという意味で、その夢は無理に見させられていた。この（移植された）装置は睡眠中に活発に動いて、ふだんのとおり思考をチェックしたり、挿入したりしていた。その人物はそれらの思考の源や頭にある装置の存在には気づいていなかった。目を覚まし、男はいつものように自分の新しいアイデアに関して興奮を感じていた。彼はこれら

のアイデアに対して自分自身の創造性を信じた。

私はその男のところに向けられた送信の起点から、三〇〇メートル離れたところに視点移動を実行した。自分が明るい円形の光の側にいることがわかった。その光は、高度な地球外生命体の装置であるというはつきりとしたデータの流れをもっていたため、最初、それがETの宇宙船に思えた。しかしよく調べてみると、通常の物理的感覚では視覚できない小さな機械装置（ETの宇宙船と比較して）であることがわかった。装置は、人間の目で見えるものの真下に高密度の物質をもっているようだった。それには機械に動く能力があり、膨大なエネルギーへの通路を伴っていた。

心をその装置に向けると、私ははつきりとある意識感覚を察知した。装置の中に生き物はいなかったが、それは意識（あるいは、おそらくただの思考）伝達用の管か入口、中継メカニズムとして作用していた。

ステージ6に移って、私は、円形の明るい発光装置から寝ている男の夢を見ている心に戻される送信をたどった。ふたたび発光装置への道をたどった後、送信の流れを追って起点までたどり着いた。

このステージで、私はある感呈上の構造物の中に自分があるのがわかった。構造物の中にはグレイと他のヒューマノイド——ある者はまったく地球人に似ていた——の両方の生き物たちがいた。グレイが固体に見えるのに対して、他の生き物たちのほとんどはさまざまに光っており、それらは概してサブスペース生命体であることを意味していた。グレイでないヒューマノイドは白のローブをまとうっており、私はそれが連邦の活動であるという印象をもった。これは直接多くの種族にかかわる共同プロジェクトであると断言することができた。

さらに調べてみると、現場自体はかつて連邦当局とかかわっていたことがわかった。実際、この現場にかかわっている生き物たちは、連邦本部に直接報告していた。私は現に連邦本部にいるという明確な印象をもったが、私が過去に出向いた場所とは異なる部屋であった。

それから私は送信内容に意識を向け、そのメッセージにはすこぶる詳細な情報が含まれていることがわかった。それには、筋立てのアイデア、登場人物、特定の景色の映像、諸惑星・宇宙船・生命体の図柄が含まれていた。その内容はのちに、特定の「スター・トレック／ザ・ネクスト・ジェネレーション」の一編として人間によって書かれた台本に見出されたデータであった。その番組はETたちをありのままに正確に描こうとしたわけではない。それはただ、さまざまな肉体的形態と文化に人々を慣れさせようとするものだった。

## 【検討】

これは重要なことであるが、私は自分がRVしたハリウッドの人物や移植をされた人物を特定するつもりはまったくなくことを強調しておく。その人物がシナリオ・ライターであったのか、「スター・トレック／ザ・ネクスト・ジェネレーション」の特定の挿話を制作する過程でかわった他のだれかであるのかは、私にはわからない。その人物が、筋立てや構想に直接的にかかわった人物の友人や配偶者であったことさえありうる。彼にとって必要なことは、このシリーズを作る人々に筋立てや、他の考えを公式あるいは非公式に提案できるポジションに存在することである。さらに、このRVがどの挿話を指しているのかは私にはわからない。それは、一つあるいは数多くの挿話に当

てはまることもありうる。私はこれらの疑問をさらに追うつもりはなかった。

絶えず開かれた、人間による地球外生命体の認識と彼らとの交信を促進する意味で、ETたちは明らかに惑星レベルの世論形成にかかわっている。私は、『スター・トレック』シリーズが、ただETたちが関係する多くの人間による着想、あるいは出来事の一つであるということに強い疑いをもっている。彼らは、人間が宇宙のただ中で孤独者であると考えることを徐々に止められるよう助けたいと思っており、それに代わって、我々は複雑な銀河系社会の一グループにすぎないことを理解してもらいたいと考えている。

読者に気づいてもらいたいことは、このプロジェクトに関連しては、私は露骨なマインド・コントロールの企みを特に感じなかったことである。むしろ、ETたちはその人物の心から生まれ出る考えに耳を傾けており、睡眠中に、彼の仕事に関係のある新しい筋立てのアイデアを与えていたのである。彼は、このようなアイデアを受け入れるために悪意をもったやり方で強制されることはなかった。代わりに、このようなアイデアを受け入れるか拒むかに関して彼には自由意志があったにもかかわらず、観客へ訴えるために、自由にそれらを受け入れることを選んだのである。実際、そのような台本へのよいアイデアをもって、彼は得意になって目を覚ました。そのアイデアが本当は自分のものではないとは彼は考えなかったのだ。

どれだけこのETによるプロジェクトが人間文化に及んでいるのか、私にはわからない。個人的に、そして、完全に推測として、もしテレビやSF映画の制作にさまざまにかかわっている人々が、個人的に、あるいは仲間を通じて、気づかずにそのプロジェクトにかかわっていたとしても、私は驚かないだろう。



## 第18章 ふたたびイエスへ

研究のこの時点で、グレイたちは私を混乱させた。彼らの遺伝子プログラムがさまざまな現実の要求に応えられることは私にも理解できた。しかし私のRV研究のすべては、異なる電氣的・化学的・機械的形態を獲得するには単に幸福な時をもつことよりもっと大きな何かが関係しているという考えを指し示していた。実際、私がグレイの心をRVしたとき、彼ら自身の進化の問題はまるで生死にかかわるかのようにパニック感でおおわれていた。

私は、グレイたちが何をしてきたのかに関してストレートな会話をしてみたかった。最近のセッションの結果のいくつかに対して、私は解釈上助けを必要としていた。私は自分が望むだけかから思慮深い助言が得られることを求めていた。グレイたちは乗り心地のよい肉体的生命を求めているのであろうか、それとも何かもっと重要なものを探しているのであろうか？ もし、さらに重要な何かがあるのなら、それは何なのだろうか？ なぜ人間は（グレイを）世話しなければならぬのだろうか？ このセッションに備えて私は、人間とグレイとの協力関係を発展させる重要性が私に

も理解できるような質問リストをつくってみた。基本的に、なぜ人間がグレイたちを助けるべきなのか私は知りたかった。

これらの質問に対する答えを得るために、私はもう一度イエスに戻ることにした。私はすでにそのターゲットとシグナル・コンタクトをもっていたので、タイプ1の条件下でソロのセッションを行うことに決めた。前回イエスをターゲットにしたとき、単に私は、今自分が答えを必要としているのと同じ質問を行わなかったのである。私は自分の研究が重要な点にさしかかっていると感じた。グレイたちについて私が最近学んだことを幅広い視点でとらえられるよう、私は指導者を必要としたのである。

日付…一九九四年七月一日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ1

ターゲット対応番号…0063 / 0473

今回、予備ステージでは、イエスへの私の接近ははるか昔に設定されていたことを示していた。ステージ4で、私は彼を発光する存在として認知したが、彼は肉体をもった人間たちに囲まれていた。そのとき、彼はある会合を行っていたか、それを観察していた。彼は会合を後にし、一時的に人間たちから離れ、私のサブスペースの顔をまっすぐ見つめた。彼は私の質問に気づいており、それらに答える準備もできていて、私が質問することを望んでいたのをはっきりと感じとった。

初めに私は、グレイたちの遺伝子プロジェクトに関係して、我々（人間）が彼らとともに働くことをイエスが望んでいるのかどうか尋ねてみた。彼の返事はほとんど命令であった。彼は断固として、我々は彼らとともに働かなければならないと主張した。彼らは神の子であり、人間と呼ばれる存在よりも価値が劣ることはないのである。

グレイのプロジェクトは、ある意味で神と一体化するようなより大きな進化のゴールに関係するかどうか、彼に尋ねてみた。彼はそれを肯定した。そして、彼らのプログラムは、彼らの肉体・精神間の回路に、個別化された人格の発達に必要な柔軟性をとり戻させることであると私に語った。その発達は、神の意識にとつて必要とされることである。しかしイエスは私に、自分（イエス）を誤解しないよう求めた。彼ら自身の方法で、彼らはすでに神と彼自身の両方に近づいている。彼らは愛されている。

彼の返事の背後にあるものをさらに感じながら、十分に発達した個別化された人格をつくり上げることは、神に近づくためにグレイに要求されることなのかどうか尋ねてみた。これに対し、彼は肯定と否定両方の返事をした。神は彼らを愛しており、彼らを気づかうであろう。彼らは神に向かつて進化することを選んだ。神は彼らを滅ぼさないだろう。しかし、彼らは個別化された人格の道を選んだ。彼らは、自分たちが交信した諸個人の生に感銘を受け、この個別化への道が達成されることを欲している。

神と一体化するということは、正確に何を意味しているのかを理解することが私には必要であった。神との一体化はどう感じられるのか、彼に尋ねてみた。個性においては即座な変化はないと彼

は教えてくれた。重要な違いは、個人の理解度が拡がることである。

神との融合は、神の意識または万物における知覚的生命力としての神の経験的意識に到達することと同じかどうか尋ねてみた。神の意識は一つであり同じであるが、それは達成されるものであると彼はいった。人は知覚において神とともにあるか、そうでないかのどちらかである。人は神と融合することなしに神を知覚することはできない。

瞑想がこの神との融合に導くかどうか彼に尋ねてみた。瞑想はこれを達成するための唯一の（または主要な）手段ではないと彼は答えた。通常、その道には多くの人生経験と膨大な時間を要する。瞑想はそのプロセスを短縮するという意味でのみ価値のあるものである。これは非一人間同様、人間にもいえることである。

グレイたちの話題に戻って、彼らは十分に神と一体化したことがあるのかどうか尋ねてみた。彼はまだまだと答えた。神の体験を十分に共有するには、彼らは十分な人格の発展を欠いている。十分に神と一体化するには、彼らは自分たちの状況を抜け出して前進しなくてはならない。

それから私は、キリスト教の背後にある思想が理解できないとイエスに話した。非キリスト教徒も十分な進化のためにはイエスに祈る必要があるのだろうか？ この質問に対するイエスの返事には憤りの気配が含まれており、今までこれほど彼が狼狽したのを見たのは初めてであった。力強く、名前は何の意味もないと彼はいった。すべてが個性の発展にかかっており、これには自我を超えて知覚し愛する深い能力の発展が含まれる。この点で、シデイーは価値があるが、それらはキリスト教起源ではない。神を理解し愛することが重要である。これが人を進化させるのである。

それから、神はグレイたちと一体化したがっているのかどうか尋ねると、神との一体化を望んだ

のはグレイたちであるといエスはいつた。それは彼らの最も偉大な自由意志の行為であった。神は一体化の可能性を与え、グレイたちが自由にそうすることを選んだのである。彼は力強くいつた。グレイたちの運命ははつきりしている、彼らは神と一つになるだろう、と。

\*6 神に関して「融合」や「一体化」という言葉を使用するのは、厳密には正しくないが、それらを使用したのは、実際にはそれ以上に適切な表現が見つからないという言葉上の限界による。これらのことに私が目及するとき、それは実際には、すべてのレベルの生命——肉体的・サブスペース的存在の領域を超えた生命も含めて——を知覚し、効果的に交信する生命体の能力のことをいっているのである。

## 第19章　すくすくハイハイが国じやばやばをい

今回のセッションは、ターゲットがこの研究のためのターゲット・リストに載っていないなかったという意味で、予定されていなかったものである。私のモニターは、モニターされたブラインドの、タイプ4の条件下でこのターゲットを私に与えた。というのも、彼の直感が我々はアブダクション体験についてさらに知る必要があるとささやいたからである。私自身の無意識はこのターゲットに、以前、我々が何も知らなかったグレイ社会の新しい側面が見えるアングルからアプローチした。こうしてこのセッションは、アブダクション現象に対する我々の理解をさらに深めてくれることになった。

日付…一九九四年七月一三日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

セクションの予備ステージでは、私が大きな塩水の海をもったある惑星にいたことをはっきり示していた。私が最初にいた場所は水面上であった。視界には陸地はなかった。セクションの予備ステージの手続きにしたがって、私は水面下で働いている生き物たちを見つけた。そこで、私は一つの水中構造物に出くわした。

私「この下にあるのはある種の中空の構造物だ。金属的で、何かの部屋らしい。構造物の中にはパイプがあり、歩行用の床がある。何かぞくぞくする場所だ。本当に奇妙だ。〈感情的反応〉として書き留めたほうがよいだろう。外観は潜水艦のようだ。事実、これはターゲット信号からの明確な〈分析的判断〉だ。」

構造物の詳細をさらにとらえようとしている……内部の表面はほとんど金属だが、革のような素材もいくらか使われている。

構造物の中には生き物が四人いる。彼らは人間のようだ。今、彼らの服を調べている。服はブルーワーカーで、袖無しのTシャツ、普通のスラックスなどだ。彼らは汗をかいていて、明らかに勤勉に働いている」

モニター「彼らの労働について情報をとるんだ。彼らは何をしているんだ？」

私「待って……魚。何か魚に関係がある。働いているのはみんな男だ。彼らは、自分たちが何をし  
ていて、何にかかわっているのか、実際には本当のことを理解していない。これはとても複雑だ。」

彼らはロボットのように仕事をしている。自分たちのまわりの環境にさえ気づいていない」

モニターは私をステージ6に進ませ、そこで私は水中構造物内の人々を含む時系列線を探索する。時系列線の初期において、私は通常の精神状態にある人々を見つめる。それから、肉体として生まれる前の彼らを見つけて出すために、私は時間を遠くさかのぼる。さらに、彼らの心にあるより明確な考えをつかむために、構造物内の人々の心の中に入る。

「魚はその構造物の外側において、人間たちにとって関心の的である。しかし、このシーンには誤った関係がある。人間たちは、自分たちが魚を追いかけていると思っている。しかし、彼らの活動の本当の目的はまったく違う。実際の魚と人間の間にはまったく直接的な関係はないのだ。」

この人間たちは、少なくとも一時的には心を奪われるかもしれない。それは、彼ら自身の思考が自分たちの肉体をコントロールしていないという意味で、彼らの体が精神的に麻酔をかけられているようなものだ。彼らは自分たち自身や、自分たちの環境を十分にはコントロールしていない。

まるでトランス状態で働いているように、彼らの心は停まっている。彼らは半狂乱になって働いているが、通常の人間の意識感覚では、これに気づいていない。この人々が利用されていることについて、私はいい感じをもっていない。おそらく虐待されている。完全にはないが、ほとんど奴隷のようだ。おそらく、モルモットという言葉がもっと当たっているだろう。

私は今、視界を広げている。ETの存在をとらえている。この人間たちにかかわるひじょうに大きなETの宇宙船がある。ETたちはグレイだ。宇宙船にはたくさんの工学的仕掛けがあり、最新式である。ただその科学技術は少し奇妙である。先進的すぎて人間にはハードウェアを理解しがたしい、というほどではないからである。私は、グレイの宇宙船からいつもこのような感覚を受けとつ



ているわけではない。とにかく、船員のコントロールはこの宇宙船が行っている」

モニター「コートニー、その人々にとつての最初のグレイと人間とのコンタクトを調べるんだ」

私「今それをやっている……少なくともこの人々の中の一人は、ひじょうに若い頃アブダクション体験をもったことがある。それは他の人々の体験と同じだろうが、今その一人にだけ焦点を合わせている。」

グレイたちは胎児期にこの人物にかかわっていたようだ。ターゲット信号にしたがつて、私は人間の母親を見つけた。私は今、海岸近くの地球の景色と思われるところにいる。グレイたちは胎児を子宮の中に入れていく。うーん。彼らは比較的原始的なグレイだ。彼らは子宮の中に胎児をインプラントした。彼らはその挿入に何もハイテク手段は使わなかった。それは、それほど遠くない将来に人間もできそうな種類の、おおざっぱな産婦人科医的手続きであった。

このグレイたちはあまり進化していないようだ。人間との交信にへまをしたり、人間を傷つけたりしそうだ。彼らはある意味で人間のもつ同情心を欠いている」

モニター「DNAの概念を探るんだ」

私「うーん。潜水艦内の人々の遺伝子構造が、実験されていたようだ。彼らのDNAのほとんどすべては人間であるが、人間ではない断片もあり、おそらくもとはグレイのものだろう。」

待って。特定のグレイたちが今、私の活動に気がついた。私に気づくのに時間が掛かったのは奇妙だ。

グレイたちは人間の遺伝子構造における小さな変化にかかわっている。変化は必ずしもグレイを起源としてはいいない。遺伝子は他の場所からもってくることもできる。しかし、その変化は本当に

小さく、選び抜かれたものだ。これは我々が目撃してきた遺伝学プログラムと同じであるが、もっと素朴なレベルで行われていて、おそらく彼らの初期の試みだろう」

モニター「異なるグループのグレイがいるというのか？」

私「分派というほどではないが、異なっている。このグループは、人間たちと似ている者の中で最も原始的だ。彼らはこの小さな遺伝子変化で何が起るのかを見るために、人間たちをモデルモットとして利用している。変化は直接、マインド・コントロールやテレパシーによるコミュニケーションに向けられている」

モニター「なぜ彼らはそんなことをやるんだ？」

私「最終的に、新しいグレイの乗り物〈肉体〉を自分たちでつくり出せるように、人間の遺伝子型を修正するためだ。実際、〈乗り物〉という単語は〈肉体〉という単語よりも意味が通る。グレイたちは、もともと人間の遺伝子で（グレイ特有の）集団を高めることに関心をもっているようだ。これは彼らの最優先課題らしい」

モニター「わかった、セッションを終わりにしよう。ターゲットは、グレイ・人間／胎児／出産の関係だ」

私「えー？ そんなターゲットはどこから来たんですか？」

モニター「君が油断しないように不意をついたのだ」

このセツションで得られたデータによって、アブダクション現象には二つの魅力的な要素があることが示された。一つは、アブダクションの中にはあまり優しくないケースもあるということだ。私には、グレイたちの側に悪意があることを示すデータはない。失格と悪意とは容易に混同されやすい。誘拐された人々はグレイとの交流を単に悪いものとして感じるかもしれないが、彼らにとつて、悪意と失格の相違は無関係だからだ。グレイたちの一部に見られる粗雑な態度が、人間に不快な感情を起こさせる原因であるようだ。グレイは害を与えることは求めていない。少なくともあるグレイたちには、人間のように感情的に複雑な生き物とどのように交流したらよいのかわからないだけなのだ。おそらく彼らは、我々が実験用モルモットを捕まえることを連想するようには、自分たちの活動を後ろめたくは思っていない。実際、グレイには感情的な柔軟性が比較的欠けているという認識があれば、彼らが自分たちを扱う方法と似たやり方で人間を扱うことは、大いにありうることである。一人一人が自己決定を行うという観念は、彼らには通じないということを、読者は思い出してほしい。

このセツションにおいて得られたデータで二番目に魅力的な要素は、明らかに異なる種類のグレイたちが人間と交流していることである。おそらく、我々はその分類を(1)原始的、(2)先進的、(3)超進歩的と呼べるだろう(このセツションの時点においては、私はまだ超進歩的グレイは見えていなかった。しかし、のちのセツションで出会うことになった)。このセツションのグレイ

私たちは原始的に見えたが、このタイプは、彼らの惑星文明が崩壊する前にその故郷に住んでいたごく初期のグレイたちと混同すべきではない。私の知る限り、ごく初期の惑星に縛られたグレイたちはまったく人間と交流をもたなかったのである。

主な三タイプのグレイたちは、互いに交流をもっているのだろうか？ どのように彼らは自分たちを組織するのであるのか？ 科学技術を用いて、容易に時間を貫いて宇宙船を送ることができ、生き物たちを扱う際には、現在と過去と未来の生き物たちが一カ所に存在するとき、どのように同じ種族かを見極め、互いに交信するのかを理解するのはひじょうに難解となる。科学的に進んだETたちはそのようなことには慣れており、最終的には交流の実験手順を確立するだろうとだけ、私には推測できる。

我々人類は銀河系生命の複雑さについてまだ学ぶべきことがたくさんあるという深い認識とともに、私はこのセッションを終了した。それはただ、銀河を貫いて拡がる他の社会について我々は学ぶ必要があるということではない。我々はまた、どのように種族と文化が時間を超えて交流するのかを理解する必要がある。

## 第20章 アダムとイブ

読者の中には、地球外生命の文明に関する本の中で、なぜ宗教的人物であるアダムとイブが調査のターゲットになるのか不思議に感じる者もいるかもしれない。

このターゲットに私が関心をもった基本的な理由は、神話の多くは歴史的根拠をもっているという仮説に基づいている。それは、神話が現実の出来事の流れに密接に類似しているということではない。むしろ、初期の文明がほとんど理解できなかった人間や出来事についての意味が、神話には潜在的に含まれているということだ。

R Vを利用したこれらの神話の調査は、時代を通じて伝えられてきたこの過去についての話と現実の過去との間には微妙な関係があることを、しばしば明らかにする。『ザ・ウランティア・ブック』はアダムとイブに関して、ちょうどそのような出来事を明らかにしている。そのような神話と現実の類似を見つけることは私の願望でもあった。そして、人類の進化の過程で突然変化が起きたことに関して、学問的文献の多くでもち上がっている疑問のいくつかを説明するのに役立てばと思

っていた。

私は、読者が『ザ・ウランティア・ブック』に見出されるアダムとイブの議論に通じているとは思っていないし、それは重要なことでもない。私は自分が最初に抱いた疑問の出所を特定するためだけにその本について言及しているのである。

日付…一九九四年七月一四日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…5328/6080

ステージ3スケッチまでの予備ステージでは、ターゲットへの最初の接近は山の近くの森林地帯を現していた。速く動く構造物が山の上にあった。

私「ターゲットの爆発的エネルギーに関連したある構造物を知覚している。それはしっかりと固定されて、円形だ。それは高いところから低いところへ、カーブした、どこか気まぐれな軌道を進み、部分的に木々が茂った山のような何かに向かっている。一本のモミの木を知覚している。また、この場所がニューメキシコ州のサンタ・フェ・ポールディの近くかもしれないというターゲット信号からの〈分析的判断〉を受けとっている。

物体自体は人工構造物だ。それは堅固で、大いに洗練されている。窓か覗き穴がある。今、構造

物の中に生き物たち、パイロットを知覚している。

この生き物たちはグレイではない。待って。彼らは火星人でもない。人間のようなだが、現在の人間のようではない」

モニター「彼らの性を調べるんだ」

私「男と女の両方がいる。ユニフォームを着ている。進化した人間であるという〈分析的判断〉を書き留めることにする。彼らは未来からやって来た人間のように見える」

モニター「彼らの目的をさぐるんだ」

私「この人々は観察が目的でここにいる。彼らは絶対に人間に干渉したり、コンタクトをとったりしない。ただ直接、連邦に報告するだけだ。また、私が彼らを透視していることに気づいていない」

モニター「宇宙船に関して、他に何が見える？」

私「宇宙船はほとんど飛行装置で満たされている。ここにある唯一の医療装備は、緊急時に彼ら自身を使うためのものだ」

モニター「搭乗者のほうに戻るんだ。彼らはだれで、どのように生きているのかについて調べるんだ」

私「この人間たちは進んでいるが、現在の人間ほどではない。調べている。彼らは明らかに菜食主義者だ。基地で宇宙船に食料を補充している。食料は、宇宙・惑星基地の庭園にある有機的な植物源と惑星上の倉庫から運ばれている。地球から食料を得ることは問題がある。問題は病気であり、人間の活動を混乱させる可能性があることだ」

モニターは私をステージ6に進ませ、私は時系列線上にターゲット時間を定める。セッションの

現在の時間は、このターゲット時間のすぐ近くである。この生き物たちに関して、私は時間の概念を探り始める。

「彼らには、宇宙船を過去に戻したり、未来に進めたりする柔軟性はあまりない。彼らはグレイのようには時間を自由に動き回れない。しかし、宇宙船内のこの人々は定期的な観察目的で地球を訪れている。しかし、グレイたちと較べると、彼らの活動は安定していない」

モニター「時系列線上に彼らが最初に訪問した時期を定めるんだ」

私「待つて。オー！〈感情的反応〉だ！これはアダムとイブのものだというはつきりした〈分析的判断〉だ。この生き物たちは立ち寄って長い間観察している。

彼らはおかたて地球上で積極的に遺伝子プログラムを行ったらしい。科学者と技術者だ。彼らは今、作業の進行具合を見ているが、干渉することは許されていない。彼らは長い間、地球プロジェクトにかかわってきた」

モニター「彼らの最初の地球とのコンタクトを調べるんだ」

私「最初、この人々はとも無邪気で、訓練を受けたばかりだった。多少の経験を積んだが、大量ではなかった。実際、彼らの以前の体は現在のものとあまり違わない。進化はほんのわずかだったようだ。彼らはある種の科学的マネージャーか技術者であるという考えが浮かんでいる。

また、私の心はある特定のカップルに注目している。二人はアダムとイブだという圧倒的な印象を受けとっている。これだけはつきりした〈分析的判断〉だと、さらに長いセッションを続けられるかどうかかわからない」

モニター「それでいい。セッションを終わりにしよう。ターゲットは、アダムとイブだ」



数カ月たつても私はまだ、アダムとイブの地球での最初の活動に関してもっと情報が必要であると感じていた。率直に言って、彼らはだれであり、何をしていたのか？　そこで、ターゲットを「アダムとイブ／地球での最初の活動」として、タイプ1の条件下でソロのセッションを行った。

日付…一九九四年九月一六日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ1

ターゲット対応番号…6957/4096

予備ステージでは、ターゲットは時間を通じたかなりの運動、および一様な陸地、いくつかの人工構造物にかかわっていることを示していた。気温はたいへん暖かかった。匂いは人間的で自然であった。私は声を聞いた。

予備ステージにしたがいがながら、私は気候が心地よく、基本的に乾燥しているのに気がついた。環境は中東か地中海のようだ。明るい肌と浅黒い肌をした二種類の人々がいた。

そのあとすぐに、ターゲット現場の近くにとてつもないエネルギーの動力源があるのを感じとった。データの流れから、私はある種の原子炉という（分析的判断）を行った。

激しいエネルギーの概念とともに、私はこの現場近くの生き物たちの中に幸せでない者がいると

いう感覚をもった。データの流れから、奴隷キャンプという〈分析的判断〉を行い、退化の感覚をもった。

現場のまわりには小規模な機械や石、建物があつた。住人のほとんどは平穏な人生を過ごしているようであつた。危機感はなかつた。平和であつたが、ひそかな不安感がただよっていた。

私はその不安の概念を調べ、現場に関係した発光する非物質的な生き物を見つけた。生き物は何か軍の指導者のようであつた。生き物の周囲には、他にサブスペース生命体があつた。

この指導者に関係していたのは、最近、分裂が生まれたという概念であつた。私は戦争という〈分析的判断〉を行つた。熱の入つた議論があり、多くの者たちが味方した。

この惑星は、この生き物たちが知っていた文明からかけ離れた奥地にあつた。一方の側は、自分たちは守りに回つて遠くの権威は無視すべきだと感じていた。二つの陣営が形成された。少数派の陣営は遠くの権威に忠実で、紛争の相手側との交流にたいへんな勇敢さを示した。両陣営は互いの接触を絶つたので長期の孤立があつた。

それから私は、その特定のターゲットから一メートル離れたところに視点移動を実行した。海の近くの砂浜のようなどころにいるのがわかつた。男と女があつた。遠くのほうには、進化した楽しいその他の生き物たちがたくさんいた。

私は自分の心をその男の心の奥深くに挿入した。彼はある意味で孤立を感じていた。彼は孤独で恋をしていたが、幼い恋ではなかつた。彼は十分、大人だ。女の心の奥深くに移ると、彼女は何かのマネージャーであることが知覚できた。彼女はひじょうに優れた労働者で、夫にもたいへん献身的であつた。しかし、彼女は自分の夫の出世があまり早くないので、夫の出世を後押しする必要が

あると強く感じていた。

私は次いで、その現場における状況的な問題に探りを入れた。そこにはサブスペースの乱れがあった。現場には、絶望して円滑な活動を混乱させたいと思っている生き物たちがいた。指導者の概念を探ると、軍組織のような感覚と、ルシファアの反乱という（分析的判断）を得た。私はこの判断を追求しなかった。しかし、この場所は中央権力からは遠く、反乱はもともと日和見主義的であったことを感じとった。

砂浜にいる男女の仕事に関心を移すと、彼らは教育にたずさわり、人々を呼び集めているのがわかった。また、現地のヒューマノイド種とともに働いていた。彼らは生殖行為と結婚の選択に関するテーマを教えている。また、主に生殖関連の教えに関心をもたせるための技術も教えていた。教員としての彼らの意図は悪意が少しもないという意味では、立派である。しかし、その目的には、受動的であると同時に積極的な要素をもつ選択的繁殖に対する不安感がある。

私は彼らの活動目的に意識を向けた。すると、彼らが新しい独自の種をつくり上げたいと思っているのがわかった。彼らは単に自分たち自身の遺伝子をその遺伝子プールの中に入れることはできなかった。そこで、進化を無理に制御することなく自然を加速させることを計画した。それによって一挙に自然の突然変異や分類、淘汰が数多く現れる最後の結果を得ようとしたのである。

問題は、そのプログラムが横道にそれてしまったことだ。プロジェクトは最初から十分に練られたものではなかった。それは、監視もされない安易な計画であった。過大な信頼が個人の忠誠心や常識に置かれていた。この人々は奥深い僻地に住んでいたので、頭がおかしくなっていた。

プログラムの最終目標をさぐると、この人々は神のごとく振る舞っていたことをはっきりと感じ

とった。彼らは自分たちが同意した方針にのっとって、急いで事態を変化させようとしていた。しかし、心の奥底には恐れもあった。彼らは自分たちのことを進化における最後の産物と見なしていた。

アダムとイブは、どうやらより遠くの権威への忠誠を守った少数派の仲間たちの側についたようだ。その反乱はつかの間であった。

## 【検討】

アダムとイブは、地球人のための遺伝子改良プログラムにおけるプロジェクト・マネージャーだった。彼らは森の中を走り回る裸のおろか者ではなかった。

この二人にまつわる神話は疑いもなく、生まれつきRV能力をもっていた予言者たちの直感によって、靈感を吹き込まれてきたが、予言者たちは自らの知的限界内にこのカプルの活動を止めおくことはできなかった。そのため、このカプルが人類の第一号として知られるようになった。ある意味で、これは部分的には正しい。なぜなら、彼らは人間の遺伝子プールを操作するプロジェクトにかかわっていたのだから。

アダムとイブは、肉体的な意味でもサブスペース的な意味でも、今日もまだ生き続けている。彼らは、おそらく連邦の規則によって、グレイの活動に干渉することはない。しかし、彼らは、地球人類の現在の遺伝的軌跡の結果に強い関心を示している。明らかに、彼らの体は昔の体とは同じではないようだ。しかし興味深いことに、私は彼らの肉体に大きな進化的前進を認めなかった。彼ら

がこれに賛成するかどうか確信はもてないが、このカップルのどこかがおかしかったのを、私ははつきりと感じた。

にもかかわらず、確かなことが一つある。人間種の遺伝子操作は今に始まったことではないのだ。それは長期間にわたって続けられてきた。さらに、これはある進化生物学者たちが断続平衡——進化の軌道が突然相対的に新しい方向をとる——と呼ぶ現象の背後にある主な理由の一つかもしれない。この仮説を確証するためには、さらなる研究（RVと伝統的な科学的方法の両方を使って）が必要とされる。

## 第21章 デブ導師

デブ導師は、マハリシ・マヘーシユ・ヨギの瞑想の先生であった。RV研究に費やした何カ月もの間、私はデブ導師にいくつか質問する必要があったとはつきり感じた。

他の遠隔透視者たちは、「聖職者」と呼ばれる火星人の一グループを観察していた。この火星人たちには、体外離脱による旅行や交信能力があり、おそらく彼らはシディーを実践したのだと私のモニターは考えた。火星人聖職者は我々の長いターゲット・リストに載っていて、いずれそのターゲットがブラインドで与えられることはわかっていた。

しかし、彼らの心の中に私の心を飛び込ませる前に、私は彼らについていくつかの情報を得ておきたかった。もし彼らがシディーを行ったのであれば、私はこれについてすぐに知る必要があった。一九九四年の夏のある朝、ミシガン州アン・アーバーで私はデブ導師をターゲットにしたソロのセッションを行った。

日付…一九九四年七月二四日

場所…ミシガン州アン・アーバー

データ…タイプ1

ターゲット対応番号…3745 / 4021

予備ステージでは、エネルギー活動、陸地そして何か人工物を示していた。

最初の知覚は、青や白や茶色を含んでいた。空気のような手触りだ。ふたたび、データ・タイプに関係ないすべてのSRVセッションと同じように、どのようにデブ導師とコンタクトをとるのか、どのような設定で彼を見つけられるのか、見当もつかなかった。SRV実験手順は、無意識がすべての決定を下すようつくられている。私の意識は、ただ無意識にそって進んだ。

気温は心地好かった。甘い味、それにガンターバと呼ばれるインド音楽の音を感じ始めた。サブスペースの「空気」には、香の微妙な匂いがただよっていた。デブ導師が舞台を設定しておいてくれたと思うと、思わず嬉しくなった。

実験手順にしたがって進みながら、物理的というよりもサブスペース的な場所にいるのがわかった。地形は、東アフリカの海岸沿いの潮だまりのように、窪みや穴のある不規則な形をしていた。しかし、水はなかった。頭上には空が広がっていた。

私の視界中央を少しはずれたところで、光の存在が私を見ていた。私はこの存在がターゲットであると察し、近づいた。それは本当にデブ導師であり、私を待っていたことが感じられた。

デブ導師と会話を交わす前に、周囲を見回してその環境を注意深く観察した。多くの色彩にあふれていた。(私には) その場所は少し奇妙に感じられた。全体の雰囲気はとても心地好かったが、物理的であると同時にサブスペース的でもある場所は私にはまったく想像もできなかった。それがどこであったのか今になってわからないが、確かにそれは特別に重要な場所であった。

ふたたび注意をデブ導師に向けると、その色は全部が白というわけではなかったが、体に巻きつける白い服を着ていた。実際、その服には蛍光色の濃淡があった。私はテレパシーで自分には質問があることを伝えた。彼にはこれがわかつていたようで、質問を始めるよう促した。

SRV実験手順の範囲内に留まりながら、火星人には聖職者がいるのかどうか尋ねてみた。返事は明快でイエスであった。それから、その聖職者はシディーを行うのかどうか聞いてみた。はつきりと、彼らはそれを行わないと返事が返ってきた。私はすぐに、彼らは何を崇拜するのか質問してみた。興味深いことにそれは、私が彼らから探り出すべきだと、彼は私に示唆した。私が直接それを体験すべきだと彼は考えたのだ。

それから、連邦評議会のメンバーはシディーを行うかどうか尋ねてみた。少し考えたうえで、彼らはそれに関係したことを行うが、正確にはシディーではないと教えられた。彼らは、自らのレベルと経験に見合った何かを行っていた。

続いて、シディーは連邦評議会の人間代表者にとって外交的手段として有益かどうか質問してみた。この質問に対して、これまでで一番力強い返事を受けとった。デブ導師はきっぱりと「そのとおりだ」と答えた。実際、シディーの実践は、人間が連邦内の評議会メンバーと交信するのを大いに助けるであろう。デブ導師は、特に評議会の有力者たちを強調した。意識の問題に馴染みのある



人間の代表者であれば、あまりそれに馴染みのない代表者たちと比べて、さらに容易にこの有力者たちと交信できるであろう。人間は、誰彼かまわず本部に送って連邦に迷惑をかけるべきではないという警告を私は感じとった。それは、合衆国が不慣れた人物をモスクワの米国大使にするようなものだ。だれもその人物を真剣に相手にしないであろうし、ロシア人たちは最終的に、アメリカ人は一体どうなっているのかと不思議に思うであろう。人間は自らの意識向上を積極的を目指している代表者を、連邦の執務室に送る必要がある。急速に進歩しつつある成熟した人間の代表者は、地球の仲間たちの優秀さを証明してくれるであろう。

最初に連邦評議会と交信する代表者のための手段としてSRVの利用に問題がないかどうか尋ねてみた。彼は、この交信方法は最善ではなく、人間社会の成熟に応じてやがて変わるだろうといった。しかし今のところ、それが唯一可能な方法である。

この時点で、私は質問をすべて終了した。彼は冷静であり、とても、とても落ち着いていた。彼に感謝してセッションを終えた。

## 【検討】

このセッションの終了後、私は、連邦において人間の利益を代表する外交官のために、総合研究コースの概要を説明することができると確信した。人間はまだ連邦の正規メンバーではないが、十分に訓練された外交官によって、まもなく公式の代表団が活動を開始するだろう。私の構想する銀河系外交コースは、のちの章で概説される。

## 第22章 神

私は読者に対して告白することがある。それは、本章のためにモニターも私も自分たちを抑えきれなかったことだ。長い間、我々はこの本を完全に宗教的話題から遠ざけようとしてきた。しかし、我々がどこを見ようと、ある中心点に向かう進化の観念が繰り返し現れた。さらに宗教的テーマは、単にETの概念であると我々が見なしたものと重なっていた。

これより先、私のモニターはSRVで神をターゲットにする勇氣がもてずにいた。しかし最終的に彼はかなり大胆になり、ターゲットを神にした、ブラインドでモニターされるセッションのために、一対のターゲット対応番号を私に与えた。

しかし我々が学んだことは基本的に、神の観念はあまりにも大きく（幅が広いという意味で）、無意識だけが神についての情報を、比喻や例を通して我々の意識的な理解力に直接伝えることができるということであった。明らかに、神は空想的な宮殿内で椅子に腰かけているような存在ではない。読者には、我々が得た結果に対する私の表現に我慢していただきたい。他の遠隔透視者たちも

近く神をターゲットにするだろうし、その努力の結果として、我々の神に対する知識も増すことになる。しかし現在のところは、以下が我々にわかることである。

日付…一九九四年七月二七日

場所…ミシガン州アン・アーバー

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…3590/6110

予備ステージでは、ある複雑なターゲットに対する最初の接近が、人工構造物と液体に関係していることを示していた。

私「茶に黄褐色、青、白をとらえている。何かパチャパチャ音をたてるものと、ザラザラした、汚い、柔らかいものがある。気温は暖かく、塩辛い味がする。何か燃えているような、刺すような、煙のような匂いがする。機械の音を聞いている」

私は水域の近くの構造物をスケッチした。

モニター「ステージ4に行くんだ」(彼はセクションの残りに備えてほとんどしゃべらなかつた)

私「了解。グレイを一人、いや実際はたぐさんのグレイを知覚している。ここには何か普通とは違うものがある。グレイたちは初期のグレイのようだ。目は少し小さく、顔の皮膚には少しあばたがある。彼らは性器をもっている。彼らは働いている」

オー。ちょうど感情的な印象がやって来た。彼らには希望がない。とてつもない恐れと絶望感がある。彼らから複雑な感情を受けとっている。彼らは「天が落ちる」ような感覚をもっている。自分たちの歴史において、この瞬間が彼らの世界の最後——彼らはそれを知っている——だということとを私ははつきり感じとっている。ここでは、明らかに大惨事が起こっている。

何てことだ、私はこの人々に同情している。私はそれを自分自身の〈感情的反応〉として書き留めて、先に進む。

オー、みんなここから逃げ出している。彼らの惑星の生態系と彼ら自身の処理能力が急速に衰えている。闘争が広がっている。ああ、ここでは戦争が進行している。あまり人間の戦争のようではないが、それでもこれは戦争だ。

氏族や家族集団に基づいた社会的組織が感じられる。生物学的戦闘がある。空しさが感じられる。突然、時間をシフトした。自分でも理由がわからないが、時間を先に進んだ。続けている。

今、不毛な世界にいる。そばにはいくらか水があるようだが、それは死んでいる。私は陸地の表面にいる。グレイたちは惑星の表面から立ち去っている。今、ここには地下室がある。彼らは地下に移動している。戦闘は止み、交戦中の両者は休戦を宣言した。

グレイたちは長期間、地下で過ごしている。彼らは今、ものすごいペースで自分たちの科学技術を高めようと動いている。最終的に、惑星から離れようという欲望がある。

オー。この人々は明らかに退屈している。彼らはそうした文明に疲れきっている。彼らは自分たちの基本的な本性を調査、吟味している。これは、彼らが自分たちの遺伝子組織を修正し始めたときのことだ。

彼らは、物理的エネルギーとサブスペース・エネルギーの両方を操作し、発生させる新しい方法をもっている。彼らはまたサブスペースの輸送をほとんどなし遂げるところだ。彼らは自分たちの条件や世界から、単に物理的に別の隣接地に移動するのではなく、次元を超えた脱出を模索している。

この人々は今、地下にいて、光を見たいという大変な衝動にかられている。そこには自然光が差し込んでいないため、科学者たちは「内部の光」を調査している。彼らは、サブスペースに純粹で素朴な新しい宇宙を発見する。そこには自分たち自身よりもさらにバランスのとれた文明があるように見える。彼らは他次元領域に脱出することによって、背後にある肉体的問題から逃れられると考えているのだ。彼らは以前の問題にはもう影響されまいだろう。彼らは、自分たちの基本的な問題は自分たちの存在態様にあり、他の次元にはそのような問題は起こらないだろうと考える過ちを犯した。彼らはサブスペースの天国に逃げ出したいと考えているのが私には感じとれる。

よし、何か新しいことが起こっている。私が行った数多くのRVセッションに現れたあのグレイの老賢者が、今、私を観察している。しかし、彼はこのRVセッションに積極的には参加していない。彼はただ見つめている。

今、私は脱出衝動の結果に意識を向けている。そうだ、そこには初めての幸福感がある。彼らはそれを理解しているので、大きな精神的進歩がある。この線にそった進化において多くの前進がある。しかし、彼らは行き止まりにぶつかっている。片方の腕や足だけを鍛える運動選手に似た感覚。もう一方の腕や足が萎縮してしまうのだ。

今、この生き物たちは不幸である。彼らは他の進化した生き物たちには欠けている幸

福や完全性を見ている。彼らには、自分たちの過去に向かう長く険しい道（彼らの視点から見ても）を歩み始める以外に他の選択はない。しかし、彼らはかつての状態に戻るまいとしている。彼らは過去を恐れている。彼らは進化の輪からめとられまいとしている。

人間の遺伝子プロジェクトは、ひじょうに長い大出国（エクソダス）への新しい逃亡ルートであると私は感じている。出エジプト後、何年も荒野の中をさまよったユダヤ人たちと比較できるように感じられる。

私は今「人種／運命」という概念を探っている」  
わずかの中断。

「ちようど先に時間が大きくシフトするのを感じた。オー！ これは何だ？

待って。なんて美しい生き物たちなんだ！ オー！ 至るところに私自身の〈審美的印象〉を感じている。これは驚きだ。この未来のグレイたちは人間にそっくりだ。しかし、私がこれまでに見たことのある人間とは少しも似ていない。

彼らはテレパシーを使う。しかし、それ以上のことがある。彼らは愛することを学んでいる。それが、彼らが遺伝子プロジェクトで強調した基本的感情であった。この生き物たちは圧倒的な愛をもっている。彼らの電気化学的機械は、今この自分たちの要求を満たしている。

私はイエスを感じている。イエスがここにいるという意味ではなく、彼らが一人一人イエスのように見えるということだ。主な違いは、私がイエスをRVしたとき、彼は支配力や権威をもっていたのに対して、このグレイたちはそうした付加物なしに、ただ愛をもっていることである。

ここには男女がいる。彼らには性徴がある。彼らにはとても健康的で、女たちは自分たち自身で子

供を産む（すなわち容器での出産ではない）。この人々はとても進化していて、精神的にまとまっている」

モニター「よし、コートニー。これでセッションを終わりにしよう。余談だが、これはこれまで聞いた中で最もよいセッションの一つだ。ものすごい流れがあった。基本的に途中で私は何もいわなかった。君はそれをどう思った？」

私「正直いって、とても面白かった。ただ、どんな種類のターゲットにこれができるのか私にはまったくわからない。これは、リストに最初からあったターゲットとは思えなかった。何だったんですか？」

モニター「メリーランド州フォート・ミードの下水処理場だ」

私「わかった、それで何だったんですか？」

モニター「神だ」

私「何ですって？」

モニター「神。それがターゲットだ」

## 【検討】

私の考えでは、神は数々の側面をもっており、我々はそれぞれのやり方でその時々、部分のみを知ることができる。神の各側面を理解する能力は、神の意識と呼ばれるものに対する我々自身の進化レベル如何による。

神には知覚力があり、彼（偏向した性別単語の使用を許してほしい）は進化中の生命やその他すべてのものに、断片的な形をとって文字どおり存在している。神は自らの実体から物質や生命を創造し、あらゆる種族たちの経験を通して生を生きること喜びを見出しているようだ。このセクションでは、創造の最初の瞬間に、どのように神が自らをまず分化させたかについては明らかにしていない。

神の特徴の一つは知性体であるらしいことだ。考えるという意味において、知性体は意識的でありうる。しかし、観察者としての我々の見解からいえば、我々の免疫システムや星の宇宙ダンスも無意識的だという意味において、知性体はまた無意識的にもなりうる。

この知性体は、思考する生命体の中に分化された形態をとって現れる。ひとたびこれが起こると、生命体は自己認識の最初のレベルに到達するや、自分たちの源泉と再統合することを熱望し始める。不思議なことに生命体は、自分たちが文字どおり源泉という実体（神）によってできていることに気づいていない。そのため、あまり進化していない生き物には、自分自身を恐れるのと同じように神を恐れることが不可能なことであることが理解できないようだ。

しかし、知覚力をもつ生命体の進化は、生命体自身の本質と神という源泉との関係を自らが発見する能力によって、事実上、限定づけられている。ひとたびこの限定にぶつかると、存在の主要なテーマは愛であることがわかる。人は自分自身と他のすべての者を愛することができる。というのも、万物は同じ素材から創造されているのを理解するからである。愛は神のテーマであり、宇宙をつなぐ糊である。しかし、高度に進化した生き物だけがこの現実を十分に認識する。

神は自らの創造物を通して存在を体験するようだ。万物は神の物質によってつくられているため、



我々の感覚と体験は神のものである。大きっぱな意味で、我々は無限に大きな体の中の細胞のようなものであり、無限に大きな体は、各細胞という存在の全側面を体験する。愛は宇宙の主要なテーマである。というのも、神が、悪い意味ではなく健全で発展的な広い意味で、自分自身を愛することは当然のことであるからだ（それが何を意味しようと）。

私自身のセクションにおいて、グレイたちが宇宙的な愛の感覚によって支配された高度に進化した生き物となったことに注意すべきだろう。しかし、ひとたびグレイたちが自分たちはより大きな存在の一部であることを悟った以上、崩壊して元の一点に戻ったり、存在しなくなってしまうことはなかったのだと気づくべきである。むしろ、彼らはその親密な本性においていちだんと神のようになり、別の神の断片として宇宙に留まることになった。

正直に言って、私は神についてこれ以上のことはあまり理解していない。だが、私は神のミステリーに際限がないことを心より希望している。なぜなら、もし私が神について、ということは、すなわち自分自身について、すべてを知っていると感じたら、何を目的に私は生き続けようとするのだろうか？ しかし最近、私は自分自身に、明日どのような驚きもち上がるかまったく思いもよらないと、いい聞かせなければならぬのである。

## 第23章 火星の探査者

昔、軍の透視者たちが最初に赤い惑星から地球へ向かう火星人宇宙船の軌道を追跡し始めたとき、火星人の社会において独特な役割を演ずるある一団に気づいた。彼らはまじない師かシャーマンに似ていた。彼らは多くの火星人たちにたいへん尊敬されていて、さらに不吉なことに、彼ら自身に似た他の者たちの会合に参加するために、自分たちの肉体からサブスペース体を分離させる能力をもっていた。正直に言って、これはアメリカ軍をおびえさせた。

やがて私は、RVの世界で火星人聖職者として広く知られるようになるこの謎めいた生き物たちを透視した（デブ導師は、彼らはシディーを行わないが、自分にもわからないそれ以上のことを行うと、すでに私に教えてくれた）。このセッションは通常のタイプ4の条件下でモニターされた。

日付…一九九四年七月二七日

場所…ミシガン州アン・アーバー

データ・タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号… 8711 / 3454

予備ステージでは、ターゲットが乾燥した陸地と人工構造物の上にあることを示していた。

私「黄褐色、赤、茶をとらえている。ここは砂っぽくて岩が多い。寒い、寒い。火星のようだ。今のところ、それを〈分析的判断〉とさせていただきます。

ステージ3のスケッチをやっている。いくつかの低い丘、右前方に緩やかなくぼ地、そして、何かの水路が中央を貫いて斜めに刻まれている。川底かもしれない。水を調べるべきですか？」

モニター「そのままステージ4に行くんだ」

私「了解。今、マトリックス内にいる。たくさんの赤い岩がある。険しい山々を考えれば、基本的には平坦な地域だ。ここには空気がない。地表は不毛で、生き物はいない。たいへん苛酷な環境だ。現実には、多少の空気があるのを今、感じている。ひじょうに希薄で、乾燥している。

ひじょうに美しい、何もないところだが、キャンパーにとっては天国のようなところだろう。

今、生き物たちをとらえている。彼らはグレイではない。これは本当に火星のようだ。この生き物たちをデータの流れから火星人と分析している。男たちと女たちがいるのがわかる。彼らはとても痩せていて、色白で、髪はいくらか小さく束ねられている。今、彼らの所在をとらえようとしている。持って。

彼らは部屋の中にいる。私はその中にある。あまりモダンではない。生き残り用の基本的な必需

品がある。実際、たいへん貧しいところだ。調べている。部屋は地下にある。今、私は何をすべきですか？」

モニター「統治という概念を調べるんだ」

私「了解。この人々は原始的な組織構造をもっている。アメリカの選挙のように、大規模な参加方式のネットワークはない。一族支配のようだ。長老は尊敬され権威をもっている。生き残るための条件は、自由気ままな民主的熱意を許さない。それは階級的で権威的な構造だ。権威の段階は選ばれた長老たちの間で行われる小規模な投票と経験を通して決められる。宗教を調べたいと思う」

モニター「そうするんだ」

私「ここでは礼拝が行われている。物質的生活をとり巻く苛酷な現実があるため、それは社会の結束を維持するために利用されている。子供たちは母親同様にそれを必要としている。しかし、選ばれた長老たちはあまりそれに納得していない。ただ、彼らは人々を励まし、おそらく、伝統が人々を助けるだろうという希望から、口先だけでそれを行っている。それはある段階ではすべての人々を助ける。

宗教的指導者の方向に引かれる感じがしたので、今、それを探っている。彼らは聖職者のようだ。修道士。彼らは社会的な階層（トーテムポール）のトップにいる。シンボルや魔術を使うようだ。彼らは物質的なものを超えた実在があるという、素朴だが真の理解力をもっている。特に内部組織の点で、彼らはイランの神学者に似ている。彼らは政治と社会の両方に影響を与える。しかし、ひじょうに進化した精神的存在というよりはシャーマンに近い。

彼らの魔術の観念を追いかけている。待って。トーテムか物神物の神のような物体がある。そうだ、こ

れらは西アフリカの物神に似ている。彼らは、自分たちの宗教的概念を補強するような体外離脱も体験している。そのような聖職者の一人が今このRVに気づいているようだ」

モニター「指導者の居場所を突き止めるんだ」

私「彼らは至るところにいて、利益を上げている。彼らは安全保障機構のようでもある。大衆を支配し続けるために、自分たち自身の諜報手段を使ってひそかに見張っている。

これは妙だ。この宗教的指導者に対する統制の限界を見つけ出してみろ。待った……。この社会には二つの階層がある。宗教指導者は下の階層を支配する。官僚的・専門的階級は彼らを寛大に扱っている。というのも、現在のところ彼らは大衆に対して（宗教の）代わりとなるような信念体系をもっていないからだ。

彼らの所在に関していうと、彼らは地球にもいる。待って……。これは面白い。彼らは地球への移動を重要な権力闘争と見なしている。ちょうど今、彼らにとって火星にはあまりめんどうなことがないので、火星から地球への移動が争いの種になっている。地球では、大衆は宗教指導者を完全に見捨てるかもしれない。

これは、彼らの火星の伝統を維持するための、本物でひじょうに現実的な闘争である。彼らは自分たち自身を個人的にコントロールできなくなるのを恐れているのではなく、自分たちを、少なくとも普通の人間ではなく火星人たらしめているすべての伝統が破壊されるのを恐れているのだ」

モニター「一般的な聖職者にとっての体外離脱状態に関してもっと調べ出すんだ」

私「了解、ちょっと待って……。彼らは招集されている。仕事はあまりはかどっていない。人間が肉体とサブスペース体の二つのレベル間で働くときと同じ困難を彼らも抱えている。聖職者たちは肉

体的にも意思の伝達を行うことができるが、サブスペースがコミュニケーションのために利用されている。体外離脱状態は聖職者たちを束ね、人々に伝統をうやまわせるためのものだ。それはまた人間の伝統に対する違和感を強めることを促す。

彼らは、体外離脱は自分たちのような種族がもつ高度な能力であると説いているようだ。これは事実ではないが、大衆の支配を説くには役立つことを知っている」

モニター「指導者のシンボルについてはどうなんだ？」

私「今それをとらえている。スケッチしてみる……これは面白い。どうやら、昔火星人を救出に来たグレイがユニフォームにつけていたのと同じシンボルだ。どうやってそれを手に入れたのだろうか？」

モニター「人間と火星人との会合に意識を向けるんだ」

私「火星人聖職者たちはむしろ原始的だ。彼らは我々人間を好んでいないようだ。火星の住民を隔離したがっている。うーん。彼らは、自分たちから人々が離れていくように見える事態のなりゆきに狼狽している。」

今、何かをとらえている。会合がまもなく開かれる。聖職者ではなく、官僚的・専門的階級とだ。私には、官僚的・専門的階級は我々が聖職者とかかわりをもつてほしくないと思っっているのがはっきり感じられる。それは、人間と火星人との交流を成功させる方法ではないからだ。なぜなら、聖職者とコンタクトをとる人間は、国連の代わりにローマ法王とコンタクトをとる火星人のようなものだからだ」

モニター「よし、コートニー。よくやった。セッションを終えるんだ」

私「それで、ターゲットは？」  
モニター「火星人聖職者」だ」  
私「やっぱりそうか」

## 【検討】

このセッションは多くの問題をカバーし、遠隔透視者たちが長い間抱えてきた数々の重要な質問に答えを出した。最初に、火星の聖職は火星人社会における公式の政府機関ではない。聖職者と非宗教的な官僚たちの権威争奪がどの程度社会を分裂させているのか、私にもわからない。だが、大衆における影響力は、非宗教的な指導者の方向に優位に傾いているが、彼らは、まだ聖職者たちを無視することはできないと感じている。

研究のこの時点において私にわかっているのは、火星の権力組織には二重の垂直に下りる指令の流れがあるという最小限のスケッチだけである。しかし、大衆には明確に上下二つの階層があり、聖職者の影響は下層で優勢であることははっきりしている。二つの階層をわかつものははっきりしない。富が基準になるようなことはなさそうで、何か他の要素が基準にされるようだ。この時点では教育レベルを推測できるが、間違っているかもしれない。というのは、彼らが最終的に行う（少なくとも理論上）ここ地球への移住を前にして全住人を向上させる必要があるれば、なぜ火星人は自分たちの社会の全メンバーに平等な教育レベルを与えることを否定しようとするのか、よくわからないからである。

## 第24章 ロズウェル事件

一九四七年にニューメキシコ州ロズウェル近郊で空飛ぶ円盤が墜落し、生きた宇宙人がアメリカ軍によってとらえられたらしいと、長い間、メディアの報告は示唆してきた。ある者は、少なくとも宇宙人一人が原因不明の死を遂げるまで基地内に囚人として長期拘留され、少なくとも宇宙船一機が分析のために軍の研究所に運ばれたと主張している。

軍にいた間、私のモニターは一度、ロズウェル事件が実際に起こったのかどうか、軍の情報源から見極めようと試みたことがある。最大の問題は、だれも宇宙人の死体や彼らの宇宙船を発見できなかったことであつた。しかし、ニューメキシコ地域の多くの人々が、また、軍の何人かが、そのような出来事に関する自分たちの記憶を固く信じているように見えた。それは彼を悩ませた。

やがて、軍の透視者たちはロズウェル事件をターゲットにする仕事を割り当てられた。当初は、皆うまくいかなかった。軍のチームがその事件を透視したとき、彼らは航空機ではなく、光の球体が空低く浮遊しているのを見た。彼らはE.Tの「気配」を察し、E.Tがある程度かわっていると



示唆した。

UFOアブダクションの解明(第5章)に続いて、モニターと私はロスウェル事件を長いターゲット・リストに加えることに決めた。ETが考えを変えて、アブダクションの間に何が起こったのかを我々に見せることを許したのであれば、他のことに関しても彼らは考えを変えるかもしれないと思ったのである。

日付…一九九四年七月二八日

場所…ミシガン州アン・アーバー

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…7633 / 4128

予備ステージでは、ターゲットは平坦で乾燥した陸地と人工構造物にかかわっていることを示していた。

私「主に黄褐色と茶色をとらえている。手触りは砂地で、木が茂っていて、風が強い。気温は暖かい。私のいるところは、どこも美しい。ステージ3で、今、その場所をスケッチする」

モニターは、ターゲットの上空一五〇メートルに移動するよう私に指示を与えた。

「了解、ここは砂っぽく、岩が多い。まったく乾燥していて、暖かいところから暑いところまで幅がある。もう一つ、ステージ3のスケッチを描いてみる」

空中の気まぐれな軌道を動く構造物と地上の別の構造物の絵を描く。またいくつか地形上の目立つ特徴をスケッチする。モニターは私に空中の構造物内に移動するようまた指示を与えた。

「ここには黒と灰色があり、手触りは、つやがあつて透明で、また磨かれた滑らかさもある。声が聞こえるが、何がいわれているのかわからない。ただ、その場所はひじょうに忙しく感じられる。とてもコンパクトで、小さな地区にひじょうに密集して組織されている」

モニターがステージ4に進むよう提案する前に、私はその構造物の内部をさらにスケッチする。「うーん。ここにはいくつか部屋がある。ここには確かに生き物たちがいる。彼らは作業中でとり乱しているようだが、パニックにはなっていない。しかし、ほぼそれに近い状態だ。これはロスウェル事件であるという強い印象をとらえている」

モニター「手続きにしたがうんだ。それを〈分析的判断〉としてマトリックスに書き留め、先に進むんだ」

私「ええと。生き物が四人いる。この人々は今、とてもおびえている。何かがおかしい。機械が壊れている。彼らはグレイで、これがロスウェル事件だというほとんど圧倒されてしまいそうな〈分析的判断〉を感じとっている」

この時点で、私の無意識は、ロスウェル事件が本当にターゲットであるのかを確認しなければセッションを先に進めようとはしないようだ。私はすでに同時に二カ所に存在する状態にあるため、ほとんど危険はなく、明確なことを認識する以外に選択の余地はない。

モニター「ロスウェル事件がターゲットだ。手続きにしたがうんだ。素早くステージ4に移るんだ。宇宙船の内部をマトリックスにスケッチをするんだ」

私「今、そうしている」

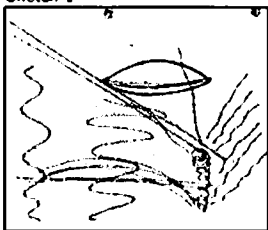
私ができるだけ素早くスケッチを行う間、スピーカーフォンはしばらく無音である。

「円盤は気まぐれに動いている。彼らは抑制を失っている。恐怖を体験している。自分たちが救出されるのが無理なことを知っている。問題は何か規則についてのことだ」

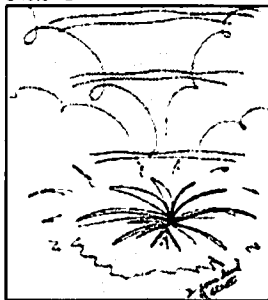
モニター「それをマトリックスに書き留めてステージ6に移るんだ。ステージ6の作業計画表のページ中央に、直径三センチの小さな円を描くんだ。これを（宇宙船の）送られてきた起点として表示するんだ。それから、矢印を終着点まで描くんだ。これを探って、君にわかることをマトリックスにすべて書き留めるんだ」

私「今、それをしている。起点を探っている。これは岩だらけの場所、クレイターだ。私は自分の〈分析的判断〉がターゲット信号と一致していることを強く感じている。これは月だ。私は今、そ

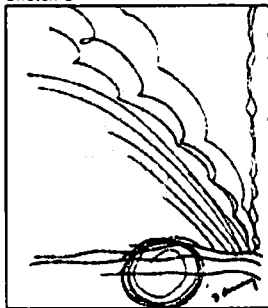
Sketch 1



Sketch 2



Sketch 3



ロズウェル事件をリモートビューイングしたときのスケッチ。ブラウン博士は、複数のリモートビューアーにより、情報の確度をあげるようつとめている。ブラウン博士のホームページより。  
<http://www.farsight.org/>

こにおいて見上げている。地球が空にある。よし。今、終着点への軌道をたどっている。私にわかることは、終着点は地球での任務であるということだけだ」

モニター「任務の目的を調べるんだ」

私「待って。これは奇妙だ。その任務は墜落することのようだ。終着点は地球、目的は墜落して、人間たちにETの謎の調査を仕向けることだ。これは信じがたいことだ」

モニター「分析してはいけない。それを、これは信じがたいことだ」とし〈感情的反応〉の記入欄に書き留めるんだ。先に進むんだ」

私「そのねらいは、ETは第一に肉体をもっていること、第二にもろく、第三に人間とあまり違わず、第四に間違いを犯すことを我々に示すことであつた。彼らは未来を知っており、自分たちが墜落することも知っていた。しかし、未来を知ることが、望まれなければ、出来事のみなりゆきを変えられることはない。機械は本当に壊れ、生き物たちはパニックになり、墜落して、肉体的に死んだ」

モニター「時間を先に進んで、見えるものを書き留めるんだ」

私「今、人間たちが地上にいるのがわかる。軍の人間だ。彼らはほとんどパニックになっているようだ。文字どおり走り回って、墜落した宇宙船の破片を拾い上げている。それらを箱やバッグの中に入れていく。」

非常事態のようだ。高官たちは事件の衝撃を含め、秘密にしようとしている。事件を隠蔽する計画が即座に進められたのが感じられる。これは軍の最上層部にも及んでいる。大統領には口頭で伝えられたと私には感じられる」

モニター「ステージ6の作業計画表上に、A点、B点、C点の三点を記した時系列線タイムラインを描くんだ。

生き物たちがパニックになっているときをA点、墜落時点をB点、地上にもはや残骸がない時点をC点と表示するんだ。それから、視点移動だ」

モニターは時系列線上のC点で、ターゲットの上空三〇〇メートルに私を移動させた。

私「肉が燃えている匂いがある。モニターの音が聞こえる。地上を不規則に運転する乗り物がある。軍の車輛だ。また空中にETの宇宙船一機を感じている。ステージ3のスケッチでこれをすべて書き留めている。

宇宙船の中に移動している。搭乗員たちは干渉することが不可能、あるいはそうしたくないようだ。この宇宙船は円滑に機能している。搭乗員たちは地上の活動に対してパニックになっている。彼らには「野蛮人たちが」が自分たちの仲間を回収している、と下を見つめているのが私には感じられる」

## 【検討】

セッションの残りで、モニターはその事件に関してETたちが時間を操作した可能性を私に探らせた。セッションのあとで彼は、自分は軍はその墜落に関する物的証拠はもっていないと信じている、と私に説明した。ETたちは未来を知っていて、干渉なしにその事件を起こさせるのを選んだかもしれないと彼は考えたのだ。しかし事件後、彼らは時間を後戻りし、墜落を防ぐことによってその事件を抹消した。

私は実際にその事件をRVしたため、この仮説に強く反対した。しかし、モニターは、二つの時

系列線がありえたことを論じ続けた。一つはその事件が起こった時系列線で、それが私が事件をR  
Vできた理由である。そしてもう一つは、その事件が起こらなかった時系列線で、それがその事件  
に物的証拠がない理由である。

事件は目撃者の実人生において起こり、彼らはいまだにそれを覚えているのだから、その仮説は  
なりたたないと私は反論した。それに対し彼は、その人々の非物質的側面（サブスペース的側面）  
が両方の時系列線を一つずつ体験し、そのためその事件を覚えているのだらうと説明した。それは  
明確な記憶というよりは（既視感（デジャ・ブ））のようなものであらう。

私は依然として彼の仮説に賛成はしなかったが、時間を超える旅を完全に自分のもののできるE  
Tたちには、事件を抹消することが可能であったことを認めなければならなかった。ETたちは、  
落ちた仲間たちの死体を含め、残骸をあとでひそかに回収したことのほうがさらにありえそうだと  
私は主張した。もし彼らが夜中に人々をひそかに誘拐することができるのであれば、どこにそれが  
保管されていようと、墜落した円盤を回収することができるであらう。

多くの疑問が残ったが、モニターも私もこの問題にさらに取り組む気はなかった。我々は単に、  
その事件が実際に起こったか否かを検証しただけだ。それは起こった。ETたちは間違いを犯  
し、墜落しうるのであり、ロズウェル事件は現実であった。

## ロズウェル事件に関する追記

一九九四年九月一八日付の、『ニューヨーク・タイムズ』国内版はその第一面で、ロズウェル事

件をとり上げた。記事は、今ではその謎めいた事件について真実を話せるという政府筋の発言を引いている。それによれば、墜落した乗り物が気象用観測気球であったという当初の政府の説明は嘘であり、真実は、別の種類の気球が墜落し、その気球は〈ムガール人〉と呼ばれる極秘の防衛プロジェクトに使用されていた。

私は〈ムガール人〉と呼ばれる防衛プロジェクトが存在しなかったとはいわない。また、政府の気球が墜落しなかったともいわない。しかし、どんなに複雑なものであろうとも、気球と、生死をさまようET住人を乗せた宇宙船との間には大きな違いがあり、人間に似たETを気球の断片と見間違えることはありえない。もしこれまで政府による偽情報キャンペーンが行われていたのなら、その試みはもはや無益である。政府がロズウェル事件について真実を語らないのであれば、真実が話されるまで、沈黙を守ることが最善の方法であろう。

## 第25章 未来の地球環境

地球外生命体に関して人々がまじめな議論を行う際、決まって、人間による地球環境破壊が話題にのぼるようだ。ジョン・マック著『アダクシオン』（一九九四年）においては、それがETからの情報の柱となっていた。これが、私が自分の心を地球の近未来に送った理由の一つであった。

数年前、何人かの透視者たちは、ますます増大する不吉なオゾン・ホールの影響を調査する、私的基金によるプロジェクトを終えた。そのプロジェクトの間、透視者たちは、地球の植生分布に急激な変化が現れ、地球全体で人口が激減するのを目撃していた。彼らはまた、砂漠のような環境に、残された人間の多くを収容し保護する大きなドームを見たことも報告した。このプロジェクトの詳細はまだ独占されており、その調査に資金を出した人々はそれを一般には公表していない。読者が地球環境の長期的未来をモニターと私に見させた原動力が何であったかを理解できるように、ハイライトのいくつかを紹介する。他のすべてのタイプ4データ条件の場合と同じく、このセッションが地球の未来の生態系をターゲットにしているという事前の警告は与えられなかった。



日付…一九九四年七月二八日

場所…ミシガン州アン・アーバー

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…6121/6026

予備ステージでは、ターゲットが運動と人工構造物に関係していることを示していた。

私「色は黒と白。手触りは、舗装面のようだ。気温は涼しいところから寒いところまでいろいろある。タールのような味、焦げるような匂い、そして燃えるような音が聞こえる。第一印象は、爆発的なエネルギーと素早い動き。これを、この場所の感じを好まない、という〈感情的反応〉として書き留めなければならない。私は死の感覚を強く感じている」

モニター「ステージ3」

私「今、スケッチしている。二つの矢が、円形か楕円形の平たい何かに斜めに接近してきている。また『地球の最後』という概念の〈分析的判断〉を受けとっている」

モニター「それを〈分析的判断〉として書き留め、ステージ4に行くんだ」

私「了解。最初にステージ3の矢を探っている。ステージ4のマトリックスでは、輝いて、素早く、ピカピカした灰色の、鉄のようなものを感じとっている。構造物、部屋の中には生き物たちがいる。それはある種の容器のようだ。表面を素早くたたいている。その衝撃に続いて、燃烧、吉痛、火事、

岩がある。しかし、生き物たちは死んでいない。ただ、彼らは苦しんでいる」

モニター「ステージ6に移って、時系列線を作るんだ。時系列線上に今の時間を置いて、それから、君が見ている出来事を置くんのだ。増加方式を利用して、時間差を算定するんだ」

長い中断。

私「その出来事は今から約二九〇年後に起こる」

モニターは私に、現在の時間とその出来事が起こる時間との間の、四分の一未来のほうへ行くように視点移動させる。我々は時系列線上にそれをA点と表示する。さらに彼は、ある知覚的な印象が得られるように、ターゲット地区の時間帯に私を向かわせる。

「この場所には悪臭がただよっている。事態は今、変わっている。ロス・アンゼルスという（分析的判断）を得ている。ここには大量の汚染、燃えているような味、エンジンやクラクションの音、都市の騒音がある。これは、永遠にクモの巣のように、平たく拡張し続ける都市環境だ。たいへんな浪費という感じがある」

モニター「時系列線をさらに進んで、我々のセッションの現時点と危機を迎える時間の中間点に行くんだ。これをB点と表示しよう。マトリックスにこの点に対する君の知覚的な印象をすべて書き留めるんだ」

私「黒い泥のような手触りだ。気温は暖かいところから暑いところまでいろいろ。燃えているような味とアンモニアの味。この場所には地獄のような悪臭がただよっている。ここは荒廃している。生命は見出せない。この場所は死んでいる」

モニター「時系列線上のA点に戻って、現時点からA点まで時系列線を進みながら、五つの主な変

化の原因を調べるんだ。できるだけ素早くこれらの行動を実行するんだ。ペースを上げるんだ」私「わかった、第一の概念を探っている。ロス・アンゼルスを感じしていて、はつきり地球にいると感じている。たぐさんの人々と活動、暴動も起こっている。これは都市、ひじょうに忙しい都市だ。第二の概念に移る。あまりにも多くの人々がいて今の制度では御しきれない。深刻な病氣、汚染が原因の病氣そして新しい病氣といった健康上の問題がある。第三の概念は食糧問題だ。全住民に食と住を与えるには資源が不足している。維持・収容力の限界を超えている。第四の概念は放射能問題だ。植物や動物も十分に成長していない。多くの場所が砂漠化が進んでいる。森林、海草、プランクトン、魚、全体の食物連鎖、そして、全体的な栽培環境が広範囲に破壊されている。第五の概念はエネルギー問題。身動きがとれなくなっている状況だ。ある問題が悪化すれば、それを解決するためにさらにエネルギーが必要となり、それがさらなる問題を引き起こしている。最大の問題は、己れ以外の生命に対する人間の無関心だ。生態系はあらゆるところで崩れつつあり、人間は「いまだに古びた制度を維持しようとしている」

モニター「時系列線上のA点に存在するかもしれない重要な保護区を突き止めるんだ」

私は新しく洗練されたターゲット信号に向かって即座に強く引つ張られる。

私「ペーリュ色、セメントの手触り、涼しいところから暖かいところまでの気温、それにヒューという音。大きさに関していえば、四角で、角があり、深く、中空で、ひじょうに大きい」

モニターは私をその保護区の上空三〇〇メートルに移動させる。この視点から、ある種の掘り出された構造物または建物のスケッチを描く。それは地下深く達していて、たぐさんのトンネルとつながっているようだ。構造物にはカバーか蓋がある。SRVの項目別段階に移って、詳細なデータ

を書き留め始める。

「構造物はとても複雑だ。新たに建設された地下都市のようだ。塀で囲まれている。塀は侵略者から住人を守るために使われている。データの流れから『マッド・マックス』のシナリオを思い出させる。それを今、『分析的判断』として書き留めている。全体的にこの場所は、少数分子や放浪ギヤングなどから住人を守るために建設されている。

私は自分自身の個人的な反応をも察知している。自分はその計画を嫌っているように感じられる。私はそれを〈感情的反応〉として書き留めるだろう。先に進んで……エリートたちが構造物内に住める人を選んだ。グレイたちが構造物の計画や住人の選択にいくらかかかわっているようだ。彼らには遺伝子のプールという動機があった。それ以外に、人間たちが保護区に住む人を選んだ。保護区外の者は困難に耐えるよう残された」

この時点で、私のモニターは個人的な用事でセッションを終えねばならなかった。彼はターゲットが地球の生態系／近未来から中間期までであったことを教えた。引き続き私はソロでセッションを行うことに決めた。ターゲットに関するデータの残りは、ソロの条件下で収集された。

私は自分が時系列線上のA点で見つけた塀で囲まれた建物に戻った。建物を探りながら、それが新たに建造されたものであるのがわかった。塀で囲まれた建物の建設の背後にある思想は、選ばれた人間たちの長期生き残りであった。これには、エリート支配という不愉快な感情をもった。人々の選別は富や影響力に基づいてなされたようである。

ある種の墜落を示す最初の矢と楕円のスケッチに戻る。その時点で何が起こっていたのかを割り出す必要があった。

ステージ3のスケッチで現れた楕円形を探りながら、部屋や複雑な指令室のようなものを感じとった。はつきりと軍事作戦センターであるという印象をもった。住民の何人かはユニフォームを着ており、武器やある種の掩蔽壕かくぺいこうがあった。

楕円に向かっていた二本の斜めの矢を探ると、実際は指令室への衝突コース上の乗り物（宇宙船）であった。乗り物の内部には絶望感がただよっていた。

危機の時点の堀囲いの建物に戻ると、施設は老朽化し、住民は惑星表面に出ようとしていた。楕円に向けられた矢は、攻撃ではなく、不時着であった。敵意はいっさいなかった。

墜落は建物の屋上または近くで起こった。宇宙船の搭乗員は堀囲いの建物のグループのメンバーであった。

時系列線上の墜落時点（一九九四年のセッション時点から二九〇年先の未来）は、保護区の住民たちが惑星表面に現れる時点であった。着陸準備前の宇宙船の任務に意識を向けると、搭乗員たちはその惑星の生物圏の状態を観察していたのがわかった。彼らはさまざまな地表の状況、大気の示度、放射能レベル、水質などあらゆるものを測定しながら、軌道を回る宇宙船内にいる。一見すると、墜落は保護区の建物に深刻な損害は与えなかった。

わずかに時間を先に進むと、建物は変わっておらず、住民たちはふだんの生活を送っていた。

## 【検討】

このセッションは私にとって強烈なものであった。セッションの三〇分後、私はなおも同時に二

つの場所にいるような感覚にとらわれながらベッドで休んでいた。私の印象では、地下生活の方法を覚えてくれるのは、火星人やグレイであろうと思われた。しかし、火星人たちは、惑星表面にふたたび現れるまでは、実際に我々と手をたずさえて、我々とともに暮らすであろう。

人類の進化という私の観点からは、このセッションの意味することは大きい。我々は本当につらい時期に向かっているようだ。SRVの増加方式を利用して私は、時系列線上のA点は未来に向かっておよそ七二年先であったと算定できる。これは、西暦二〇六五年前後に、保護施設の建物が必要な程度まで状況が悪化することを意味している。災害の紐は来世紀に向かって、次々に伸びていく。西暦二一五〇年頃には、混沌は拡がっているか、切迫している。

戦争や病気、飢餓は明らかに推測できるが、何が最終的に人口規模を減少させるのかはわからない。しかし、人口が現在（や近未来）のような高水準には留まらないことは明らかだ。三〇〇年後、人間たちは地表の生物圏の再建を始めるために、ふたたび惑星表面に現れる。他の透視者たちは、グレイたちが地球から、大掛かりな、できる限り完全な、生物学的サンプルを採集しているのを観察している。私には唯一、そのようなサンプルが生命とともに地球を再生するために使われると推測、希望することができる。

## 第26章 連邦及び州のインテリゲンチヤの組織とその仕事

本章で明らかかなように、グレイたちは複雑な組織構造をもっている。私は政治学者であり、当然のことながら、集団を形成する諸個人がどのように振る舞うかということ进行分析する。社会科学上の典型的な問題は、電話、委員会、新聞、テレビ、ラジオなどによってコミュニケーションをとる存在を扱う。そのような条件下での管理は、比較的簡単なことである。ある社会は、それ自体を統治機関と見なす、議会のような制度をつくり、その社会を研究しようとする社会科学者は、その統治機関を観察することから始める。そして、政府の指導者とのインタビューや出版物、世論調査や大衆の投票分析のような、普通のコミュニケーションの手段を通してデータを集める。

しかし、グレイたちに関しては、事情はそう簡単ではない。私は正確にどこから始めるべきかわからなかった。グレイたちの社会組織の基本的側面を見極めようと、このプロジェクトの長いターゲット・リストに、ある一般的なターゲットを加えることに決めた。それは、「グレイ／現在の管理組織」である。

このセッションはモニターされ、いつものように、セッションが完了するまでターゲットに関する情報は私には与えられなかった。

日付…一九九四年七月三〇日

場所…ミシガン州アン・アーバー

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…1443/7114

予備ステージでは、ただちにターゲットが別の時間か次元にあることを示していた。ターゲットに関連して、広々とした、終わりのない、無限の、といった感覚とともに、たくさんの青と白の光があった。

私はステージ3のスケッチで強い光を描き、連邦本部を感受する。ターゲットの中央に自分を移動させる視点移動を行う。ステージ4に移る。

私「大きな構造物の中にいるが、それはとても馴染みがあるような気がする。これは連邦本部であるという〈分析的判断〉をデータの流れから受けとっている。今、その建物の内部にいる。

以前に交信したブツダに似た仲間の真正面に立っている。彼は明らかに私がここにいることがわかってる」

モニター「連邦とグレイとの関係について調べるんだ」



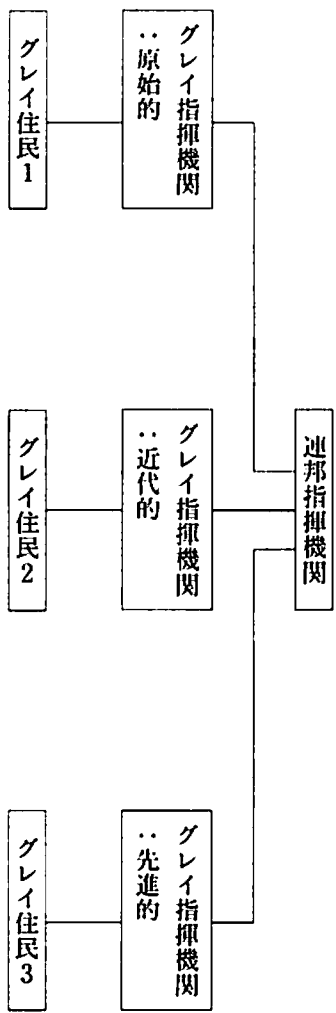
私「私はすでに知っているはずだと彼はいつている。グレイたちがいうことをそんなに疑うべきではないでしょう。彼は幸福そうだが、我々の遅い前進に少しいらしているようだ」

この時点で、私はできるだけ速く書き、透視していると思っていたので少し憤激する。ブツダに似た仲間、私のこの穏やかな感情爆発を気にしていないようだ。

モニター「指揮系統の概念を探るんだ」

私「了解。今、それをしている。グレイたちは連邦のメンバーだ。実際、彼らはとても尊敬されているメンバーだ。連邦全体が現在、グレイたちを助けるプロジェクトにかかわっている。彼らは十

### グレイの組織



分すぎるほど責任を果たしている。今度は彼らがチャンスを得る番だ。彼らは、今も昔も、本当に大切なこと、すなわち精神的進化に関して、人間を大いに助けている。彼らはとても礼儀正しい種族であり、やがて連邦の立派で貴重なメンバーやリーダーとなるだろう」

S R Vのステージ6に移る。

「私が以前に交信したあのグレイの老賢者が、ちょうど今、会話に加わってきた」

私は、連邦にかかわるグレイ組織の構造を探るといふ高度なS R Vテクニクを実行する（前ページ図参照）。スケッチにおいて、私はすべて連邦にかかわっている、グレイ・グループの指揮構造を識別する。三つのグレイ・グループの上層部は、彼ら自身のそれぞれの住民を代表する機関である。一般に、現在、人間と交信するグレイたちは、*「原始的」*、*「近代的」*、*「先進的」*の三つに分類できる。各グループは他の二グループとは独立して連邦とともに仕事をする。

「私は、連邦とともに直接働かない背教者グレイの少数グループがいくつか存在するのを感じている。しかし、三つの大グループは連邦とともに働く。

私はまた、三つの基本的なグレイ・グループは進化の度合いによって分けられていることも感じとっている。つまり、彼らは同じグレイであるが、生まれた時期が異なっているのだ。ただ、三住民とも同時に、ここ地球と交流をもっている」

モニター「コートニー、第一のグレイ住民を探るんだ」

私「オー！ 確かに強い〈感情的反応〉を感じる！ これをマトリックスに書き留めさせてください。この範疇には大量のグレイが含まれる。彼らはいくらか原始的だ。大きな目をもっていて、ほとんど表面に感情を表さない。ミツバチの群れのような心性をもっている。巨大な宇宙船を操縦し、

故郷に残っているのはほんのわずかだ」

モニター「この住民にとっての管理概念を探るんだ」

私「彼らは現に管理のための階級制度をもっている。階級の高いメンバーから低いメンバーまでいる」

モニター「第二のグレイ住民を探るんだ」

私「また、たくさんのグレイがいる。この人々は、第一のグループとはいくらか肉体的な違いがある。最初のグループと違い、時々このグレイたちは進歩的な人間や他の生き物たちとも仕事をす  
る」

モニター「この住民にとっての管理概念を探るんだ」

私「管理は、最初のグループよりも『完全』だ。すべてのことがテレパシーによって伝達される。

住民の合意は達成されている。投票を要求するという個人による異議申し立ての概念はいまだない。しかし、最初のグループのように、ここにはまだ階級制度がある」

モニター「第三のグレイ住民を探るんだ」

私「またたくさんいるが、最初や二番目の住民ほどではない。彼らはまた他のグループとは性格の点でかなり違いがある。彼らはある感情的な柔軟性を獲得、あるいはとり戻している。彼らは人間とは同じではないが、人間に近い存在だ」

モニター「この住民にとっての管理概念を探るんだ」

私「この人々は意見の相違と個性の独自性を十分に備えた個性をもっている。現に彼らはテレパシーを使ったある方法で投票する。しかし、そのふれはなおも意見の一致に向かつてのものであ

る」

モニター「連邦のメンバーになる条件と、第一のグレイ住民にかかわる責任について探るんだ」  
私「彼らはメンバーとなることを申請した。最初、彼らには暫定的な地位が与えられた。彼らは多くのプロジェクトにおいて有益なメンバーとしてとても長い間働いてきた。彼らは自分たちのプロジェクトに助けを求めた。彼らのプロジェクトは、他の高度な連邦の種族を観察することに始まった。彼らは、高度な生き物の能力や技能および進化の潜在能力を得る機会をもった。しかし、彼らは何か独自のものを欲しがった。彼らは自らを高く評価し、ある重要な側面がいくつかの異なる別の遺伝子と結びついて、一つの生物学的な機械——彼らにとって心地好く、しかも彼ら自身と他の者たちにとって特に価値がある——を生み出すと考えた。連邦の役員たちは彼らの計画に同意した。全体の計画は最初に連邦に提出され、そして承認された。地球はその計画のための中央遺伝子プール・バンクとして選ばれた」

セツションのこの時点で、私のモニターは他の用事で去らなければならなかった。私はすでに同時に二つの場所にいる意識状態になっていたので、ソロでセツションを続行することに決めた。

私はブツダに似た連邦の仲間に出会ったために戻り、連邦の指揮構造に関する情報を探った。私は念入りにつくられた組織があることを告げられた。実際の物理的会合もたびたび開かれる。それは、地球の国連に似ていなくもない。

強い中央権力ではないが、種族や故郷、グループが組織的に協力しているものである。連邦の影響は銀河系全体にまでは及ばない。他の銀河系組織が存在するが、彼らとの交流は限られている。その状況は、かなり『スター・トレック／ザ・ネクスト・ジェネレーション』に似ている。連邦は

ゆっくりと拡大している。最終的に連邦は人間、特に地球が参加することを求めている。これが最終目的である。しかし、これが起こるためには、地球に世界政府が必要である。連邦のメンバーとなるためには、これが唯一最も重要な基準である。連邦は惑星の分派たちとは付き合わないであろう。そうすることは連邦の規則に反することである。そのグループがグレイのように時間によってへだてられている場合を除いては。

ふたたび、ブツダに似た仲間を前にして、私は指導、手引きの概念を探った。ことは緊急を要すると私は教えられた。知識のある人間たちは連邦のことについて教えなければならぬ。まもなくして地球上の出来事が加速を始める。連邦との絆は初步的な方法で確立される必要がある、それによって、苦悶、死、混乱の期間にもコンタクトが維持されるであろう。連邦は我々（地球）の問題を解決はしないであろうが、求められれば指針を与えることにやぶさかではないと、私は特に告げられた。

ターゲット信号にしたがって続けると、我々はまもなく連邦のメンバーになることを申請する必要があるのはつきり見極められた。

申請はさまざまな方法で行われる。世界政府はただ連邦のメンバーになることを求める精神的な決定を下す必要がある、その後のことは連邦が引き受けるだろう。その際、連邦は公平に振る舞うであろう。

私はブツダに似た仲間と、前に私を助けてくれたグレイに礼をいってセッションを終了した。

私はその日、あとでモニターに電話して、ターゲットが「グレイ／現在の管理組織」であったことを知った。

グレイの社会構造を理解する鍵は、サブスペースにおいては直線的時間が存在しないという事実を受け入れることにある。直線の時間は、物理的宇宙において我々の存在を組織立てる数多くの側面の一つである。しかし、それはこの全体的な物理的構造内においてのみ意味をなす。訓練された多くの透視者たちによる何年もかけた多方面に及ぶRVは、物理的世界の外には直線の時間は存在しない、ということを示している。すべての出来事は同時に起こる。時間が連続的に流れる地球に住む我々にとつて、これはほとんど理解できないことである。

透視者たちは空間同様に簡単に時間を貫くことができ、その時その場所です実際に存在する感覚を与える異なる時間点の出来事をRVすることができる。そのため、もし透視者がポート・レースを観察することになれば、その出来事はレースとリアルタイムで知覚されるだろう。

今、我々は、グレイたちが自分たちの宇宙船と肉体の両方を時間を買って移動させる科学力を、長い間、保有してきたことを知っている。私にはそれにかかわる原理を理解できないが、彼らが物理的空間からサブスペースへ自分たちの存在を一時的に移動させることによってそれを行うことはありうることだ。ETたちが物理的宇宙を去ることなしに、物理的宇宙における光速の壁を超える能力をもっていることを示唆するデータは、透視者たちにはない。そのため、厳しい物理的な視点からは、彼らは我々が遭遇するのと同じ相対性理論に出会うことになる。

系譜的に理解されるグレイ社会は、長い間、時間に入り込む科学力をもっていたので、我々が異

なる時間帯からやって来るグレイ・グループに訪問されていることは理にかなっている。しかし、おそらく最も興味深いことは、進化や時間のへだたりは地理的なへだたりと同様に肉体的存在に作用するらしいことだ。比較的原始的なグレイたちは近代的グレイたちとともに働くことを快く思っておらず、一方、この二グループは先進的グレイとも親しく仕事をしていないようだ。実際の意味で、三種類のグレイたちは国籍を異にする人間たちの状況に近い。自分たちに共通な国民的体験は、他の国からやって来た人間には必ずしも簡単には理解されないことを、我々はしばしば見出す。言葉と習慣の違いがあり、我々は国境を超えた仲間たちとは違う見方で世界を見る。同様にして、異なる時間帯からやって来たグレイたちは、別の時間帯からやって来たグレイたちのことは十分に理解できず、彼らが現在地球近辺で行うように同じ時間帯で交流するとき、彼らは互いに距離をとるのである。初期のグレイたちがのちのグレイたちのように進化しようとしているにもかかわらず、これは事実である。

私はおそらくこれを、議論をさらに明確にするであろう幅広い視野に置くことができる。

遠隔透視者たちは、現在、地球は時間を買って移動できる科学力をもった未来の人間と思われる者たちによっても訪問されていることを知っている。そのため、未来の人間たちによって操縦されている宇宙船の飛行を、現在の我々が目撃することもありうる。もしも、そのような宇宙船が私の裏庭に着陸して、未来の私とその宇宙船のハッチから現れることになったら、何をしたらよいのか私にはわからない。未来の私がどれだけ先からやって来るかによるが、彼と交流することを私は心地好く思えるかどうかかわらない。

疑いもなく、このすべての問題に関してさらなる研究が必要とされる。しかし、グレイと連邦の

両方と我々が交流することに関して、今や我々はその複雑さを理解している。物理的な距離によってばかりか時間によってもへだてられたもろもろの文化との交流に対して、我々は理解を広げなければならぬ。同時的銀河系交流を理解することは、おそらく我々の最も偉大な知的挑戦となろう。



## 第27章 フツダ

E Tの謎を調査し始めてまもなく、私はS R Vを利用してインタビューしたいとモニターに提案したが、そのとき同時に、導師デブとフツダもリストに含めることを決めた。フツダ自身は私にとって未知の存在であった。私はフツダや仏教を論じた本を数冊読んだことはあるが、そのような情報源が私に、彼が何ものであり、地球で実際に何をしていたのかという明確な概念を残すことは決してなかった。つまり、彼は私にとって依然として未知の存在であり、私が彼をせひターゲット・リストに載せたいと思ったのは、ただ彼が偉大な精神的指導者として名声を得ていたからであった（当初の考えの浅さを認めてしまうのは、いささかきまり悪いことである）。

にもかかわらずフツダは、彼に対する私の知識不足を無礼であるとは見なさなかった。さらに、仏教についての私の知識から、多くの仏教徒は、私の彼との交流はそれほど意外なものではないと思うかもしれない。フツダは、つねにどこか神秘的な人格をもっている。実際、本章で紹介するセッションでは、彼はそのような人物であるが、同時に彼は人生の意味について、私が一回の人生で

何の助けもなく習得できること以上のものを教えてくれた。今回のSRVセッションは、これまでのRVの中で最もすばらしい体験であった。

ブツは真の大教師である。ある夏の夜中にミシガンで起こったことは、我々にはまったく予想もできなかったことであった。

日付…一九九四年七月三〇日

場所…ミシガン州アン・アーバー

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…1842/3355

予備ステージでは、ターゲットが暑い場所にあることを示していた。

私「黒、白それにベージュ色をとらえている。何であろうとそれは、平たく、幅広く、円形で、とても広々としている」

私はステージ3で大きな楕円からなる簡単なスケッチを描く。

「ステージ4に移る。黒いものと白いもの、暑いものと冷たいもの、光と温度におけるたくさんのコントラストをとらえている。ふたたびこれは円形で、素早く、活動的で、そして今、これが渦を巻いているのが知覚できる。煙のような燃えている感じがある。しかし、その煙は渦の中にある。それは煙とは別物かもしれないが、渦の中にある。少なくとも私にはそれがよくわかる」

モニター「渦の概念と内部に意識を向けるんだ」

私「了解。今、そうしている。オー！ 何という強烈な（感情的反応）なんだ！ ブッダが自分の意識を直径一・六キロメートルぐらいまで大きく広げ、それから分子レベルまで小さく縮めるといふ、大昔に聞いたことがある何かの話の思い出した。私の意識は今、ブッダの意識のように、実際に引き伸ばされて広がっているように感じられる。またとても力強いエネルギーを感じる。

ほとんど銀河系のような広大な地域において、小さな部分が周囲を回転しているように感じられる。不快ではないが、細く引き伸ばされている感じだ。

私はここで偉大な人物から何かを得ることになっているらしい。また、何か寓意的意味を受けとっている。連邦本部内にいたブッダに似た仲間の最初の心象を感じている。現在の状況は、私が彼の心に入り込み、彼が私に銀河系の像を見せたときのことを思い出させる。

しかし、この現在の場面は銀河系ではない。妙であるが、大いに異なっている。ここには創造という観念がある。生命はまだここには形成されていない。生命の本質は存在するが、それはまだ（形をとって）現れていない。しかし、それはもうすぐやって来る。

これから私は何をしたらよいですか？」

モニター「私にもわからない。何か考えはあるか？」

私「私の無意識に尋ねさせてください。マトリックスと相談してみます」

モニター「君の直感にしたがうんだ。我々は以前にはこんなことはまったくしたことがないが」

私「神を手掛かりにしようと思う。今、それをやってみる。待つて……私の知っている偉大な人物、イエスのほうに向かいつつある。イエスに意識を向けてみる。今、イエスがいる。私はたった今、

自分がどこにいるのかという質問をしている。

ターゲット信号ははっきりしている。生命が最初に始まった場所にいると教えられている。私がここにいる理由を尋ねている。

私は生命の存在理由を知る必要があると告げられている。これはとても力強いターゲット信号だ。今度は、私は今、何をすべきかという質問をしている。

私は解き放つべきだとイエスはいつている。私は渦の中に入るべきだ。それはあなたを知るにはよいことだ。内部に入ってみる。

何てことだ。何という強烈な（感情的反応）なんだ！ 私は今、内部にいる。神は一点の源として永遠を過ごした。彼の進化は転換点に到達し、もはや自分の孤独の寂しさに耐えることができな。彼の唯一の頼みは、無限を通して自分自身を再生することであり、それによって、新しい神々、新しい自分、彼を気づかう存在、そして彼が気づかう存在を創造することに着手することだ。彼は我々を愛している。なぜなら我々が、言葉では決していい表せない（神の）寂しさを終わらせたからである。

彼は決して自分の創造の終焉とくえんを認めない。というのも、それは彼にとつては監獄の、過去の一点の源に自分を送り戻すことになるからだ。未来は永遠に発展する定めになっている。

オー。これはまさに耐えがたい激しさだ！ 私はちょうど爆発的な転換を体験した。すべての時間が創造される。無限の多様性があり、絶えず拡張する銀河系がある。神の新しい存在には大きな喜びがある、大きな喜びが！

私は今、さらに自分には知るべきことがないかどうか聞いている。少し動揺している。もっと長

く続けられるか、あまり自信がない。

イエスはこれで終わりだと私にいつている。これで私は休める。彼はさよならをいつている。今回、あなたはどこに私を送ったのですか？」

モニター「コートニー、君を送ったのは私ではなかったぞ。ターゲットはブツダだった」

私「ブツダ？」

このモニターされたセッションが終了してすぐ、私は簡潔なソロのセッションを続けた。

私は連邦のブツダに似た仲間に意識を向けた。私は彼から暖かい感じを受けとった。

SRVの実験手順内に留まりながら、私は彼にブツダであるのかどうか聞いてみた。彼はそれを疑問に残しておくようにいつた。特定の答えを与える必要はないと彼はいつた。彼は、他の者たちも彼ら自身のやり方で彼を見つけるべきであることを示唆した。しかし、そのことに関して私の意識ははっきりいつた。彼は一人であり同じ人物であった。彼はブツダであり、私は初めから彼と交流してきたのであり、それを私は知らなかったのだ。

私は自分の本の中で彼についての情報を載せるべきかどうか尋ねてみた。彼は自分で決めるようにいつた。私は彼が存在するという無限の喜びを決して自分の言葉で正しくいつ表すことはできないが、それを含めることにいつた。

## 【検討】

ブツダは、自分がだれであるのか直接私にはいつたがらなかった。彼は私の質問に対する答えを

自分で体験すること求めた。にもかかわらず、ブツダは地球人類の行動を監視することを手伝う連邦評議会に腰を据えている。今日まで、彼は我々を見張っているのである。

ブツダは私が自分自身を解き放ち、神の創造的本質と実際の創造の瞬間を受容、知覚、体験するように求めた。ブツダと私の連邦の教師／友人が同一人物であることを確信させたのは、この親密な経験的知識であった。彼の導きから一般的な原理を引き出せる。すなわち啓示（何かを教えられること）は知識への子供っぽい道筋であり、経験は大人の道筋である、と。

どうやらブツダは、私が生命そのものの存在理由を知る必要があると感じていた。本章の結果は、「神」の章（第22章）で提示した結果に対応するものであった。このセッションによれば、神が生命の創造を欲したがゆえに、生命は存在する。神の動機は、自分自身の孤独に終止符を打つためであった。私がこのセッションで体験した孤独感、最も深い、身を貫くような純粹の感覚であった。さらに、神が時間や物質そして我々を創造したときに体験した喜びも、同じように最も純粹なすばらしいものであった。

今の私であれば、我々が神の象かたちにつくられたといわれるとき、それが意味するところを理解できる。それは、神が手足をもつことを意味しているのではない。それは、神は我々が感じるように感じる、あるいはおそらくもっと適切に言えば、彼が感じるように我々も感じるということの意味する。経験の豊かな活力源である感情は信心深い。今、私には、なぜグレイたちがあれほど必死になつて、感情、特に愛を体験できる肉体や脳とともに進化することを求めるのがわかる。彼らは、神と一体になるという、自分たちの最終的な進化の運命に向かって動きたがっている。

私のすべてのRV体験に基づいて、人間たちがしばしば交流をもってきたグレイたちは、神の実

際の科学的な構造についてさらによく知っている。私は確信している。しかし、このグレイたちはデータとして神についてさらなる知識をもっている。彼らは神を体験したがっているとともに、体験することを必要としている。しかし、彼らはまだそれを体験していない。

どれだけ違った目で、今の私はグレイの進化に向けた戦いを見ていることか。彼らは銀河系の驚異である科学技術をもっているが、この成果に満足してはいない。彼らは時間と空間を通り抜ける能力をもっているが、その旅行は彼らを満足させてはいない。彼らは完全にテレパシーを使いこなすが、自分たちの心にそれ以上のことを求めている。彼らは我々を驚嘆させるあらゆるものをもっているが、我々の遺伝子の断片を求めて天と地を移動している。彼らはふたたび感じ、したがっている。そして、実際に、神はふたたび彼らを通して感じ、したがっている。

今、私にとってそれは以前よりもはっきりしてきている。我々、そしてすべての生命は神の物質（実質）からつくられている。我々は神の一部であるため、彼は我々を通して生を体験し、そして我々が生を体験する。なぜなら、そうすることが神の特質であるからである。私はある日、神は元の一点の源にふたたび崩壊して戻り、私の真のサブスペース存在は永遠に終わりとなるかもしれないと恐れていた。私の恐れは、無限とは事実上すべてのことが起こりうる長い時間のことという考えに基づいていた。私はいまやそれを恐れていない。神は自らを一点の源に戻して崩壊させるようなことはない。なぜなら、それは、彼が永遠を生きることになる孤独状態に自分を引き戻すことになるからである。私が自分の存在を失いたくはないように、神も自分を失いたくはないのである。神は自発的に自らの地獄に戻ることはないであろう。

未来は、神が永遠に発展することであり、無限を通じて自らの明らかな複雑さを増加させること

である。神は我々が発展するのと同様に発展し、おそらくそれは、なぜ我々人間が沈滞するよりもむしろ成長するほうに駆り立てられるのかという質問に答えている。神自らの進化において、成長し発展することは神の特質である。我々は彼の物質からできているため、それは我々の特質でもある。我々の意識に深く埋め込まれているのは、創造、成長そして発展が破壊した、孤独と寂しさに対する、同じ神の恐怖である。まったく文字どおり、我々は神とそっくりである。我々は神に象かたどられている。我々は神が行うように行く。我々はまだ知られていない存在の可能性を理解しようと求めている。実際、我々自身の生き残るための闘いは、神が生き残るための神の闘いでもある。



## 第28章 地球上の火星文明

社会科学者として私が当然もつ関心の一つは文化である。モニターに最初に会ったとき、私は彼にRVは社会科学者が他の文化を研究するのに利用できるかと話した。そのとき、彼の受けた軍の指導方針は彼の注意をあまりにも狭めているように思えた。軍の透視者たちは、E T作戦を行っている社会よりも、その作戦の兵站学（へいざんがく）——だれが何を、どこで、どのように飛ばしているのか——になり関心を寄せているようであった。

社会科学者としての私の当然の関心にしたがって、本書のプロジェクトのためにリストに加えた最初のターゲットの一つは、現在の火星文明であった。私は現在の火星文明がどのようなになっているのか探り出したいと思っていた。

火星人たちは宇宙船を飛ばすことを我々は知っており、当然、彼らはハイレベルの科学技術的教養をもつまでに達している。

しかし、合衆国における人間社会もまたハイテク種をもっており、これを知ったからといって、

現代アメリカの都市中心部に生活する若者の生活について訪問者に何かを教えることはできないであろう。それと同じく、私にはパイロットや遺伝学者についての情報ばかりでなく、一般の人々について、彼らは何者であり、どこにいて、何をしているのかを知る必要があった。

一九九四年七月下旬、モニターは私に火星文明をターゲットに割り当てた。セクションはもちろんブラインドで、私の場合、これには特別に重要な理由があった。私が先導されずにセクションに入り、ターゲットが火星文明に関係していることを気づかずにいることは重要なことであった。

興味深いことに、セクションが終了したとき、私のモニターは彼とともに仕事をした他の透視者の多くが、私が集めたデータを別々に支持していたことを教えてくれた。セクション後、私は、その別々に行われた調査の記述データを見たことがある。彼は、私が見た火星人たちがどのように支援されているのか、という兵站学に関する多くの詳細を私に教えてくれた。

日付…一九九四年七月三一日

場所…ミシガン州アン・アーバー

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…4731/8279

予備ステージでは、ターゲットへの私の最初の接近が、動く、堅い、人工構造物にかかわっていることを示していた。

私「色は灰色で鉄のような色だ。手触りはピカピカで、つやがあり、光沢をもって発光している。気温は焼けつくほど暑い。何かがひじょうに速く動いているのを感じる。直線のようなもの、おそらく運動と高エネルギー」

ステージ3のスケッチで、素早く動くE.Tの宇宙船らしきものを描く。ステージ4に移って、その構造物がE.Tの宇宙船であることを確認できる、少ないが十分な量のデータを集める。宇宙船の目的地上空一五メートルに自分を移動させる。

「私の下に複雑な構造物がある。色はほとんどが茶色、黄褐色、赤である。感触は滑らかで同時にザラザラしている。気温は暖かい。何かが燃えている、煙の匂いがする。ごくわずかのノイズもある。全体の大きさは、広く平坦だ。私の下にはたくさんの曲線があり、いくつかの角もある」

新たなステージ3スケッチを行う。開けた地域に隣接して位置する、平屋建ての居住設備の集合に見える。

「ふたたびステージ4に進んでいる。下の幾何学的なパターンはかなり複雑だ。この場所はどこか天然の原始的な感じさえする。たくさん生き物たちがいる。ターゲット信号から、これは昔からの古い村のようなものだという〈分析的判断〉を行っている。これは過去のことであるというのではない。それは現在ただ今そうなのだ。構造物は居住設備であり、構造物の手触りは材木のようなものだ。今近づいている。そうだ、これらは比較的原始的な居住設備だ。」

生き物たちは穏やかだという意味で、彼ら自身には問題ない。また、さし当たって災害が起こることはないという意味で、生活はのんびりと平和的に見える。

さらに全体的にその場所を見渡すと、これはヒューマノイドたちの住む適度な大きさの街だ。生

き物たちに少し近づいてみると、普通の人間のようではない。何かが少し変だ……背が低い。しかももう少し高いのもいるようだ」

私は街の上空六〇メートルに視点移動を行う。ふたたびステージ４に戻って構造物の中の一つに入る。どの構造物が重要かを自分の無意識に決めさせる。

「今、私は大きな部屋の中にいる。これは大きなワンルールの建物かもしれない。少なくとも、このワンルームはその建物の主要部分を占めている。これはある種の倉庫だ。何かたくわえられている。箱だ。木材でできた箱だ。箱は内部に重要産品を収めている。ちょうど今、私は一つ調べている。これらは荷造りされた輸送用木枠だ。私はその箱の中に入るべきだろうか？」

モニター「中に入るんだ」

私「薬や医療品、そのようなものがある。これらは、アメリカがソマリアに行おうとしたように、一種の救援活動でここにもち込まれた」

モニターは私を前のステージ３スケッチに戻し、他の居住設備の中に何かあるのかを探らせる。「これらの建物に住むのは質素な人々だ。彼らは質素な生活を送っている。家族、子供がいる。料理をしている。最初の建物の中の医療品は、この人々の文化よりもさらに進んだものようだ」

ステージ６に移り、最初のE.T宇宙船の出発点から目的地までの飛行を図に描く。それから、その宇宙船を後方にたどって出発点にまで行く。

「これはとても最新式の施設だ。ここには生き物たちがいてユニフォームを着ている。施設の質は、ニューメキシコ州の洞窟に住む火星人生存者が使用しているものと似ている」

私は自分をその土地の上空三〇〇メートルに置いたまま、宇宙船の目的地に戻る。

「ここにはたくさん植物がある。ほとんどジャングルのようだ。近くには山々があり、おそらく古い火山だ。また、たくさん空地もある。熱帯雨林の近くらしいが、決して未開なところではない。」

居住設備はこぢんまりとして質素だ。それらは人間から離れて、森の中に置かれているようだ。これは火星人の難民キャンプであるというターゲット信号からの明確な（分析的判断）を得ている。場所は南に位置しているようで、おそらくラテン・アメリカだ」

モニター「ただそれをマトリックスの適切な場所に書き留めて、続けるんだ。君はステージ4にいるのを忘れるな。君の無意識にこの問題を解決させるんだ」

私「キャンプ／村の概念を探っている。そうだ、彼らは難民だ。少し心配しているが、少なくとも今のところは、最善のことがなされていることを知っている。彼らは自分たちが何者なのかを知っているが、おそらくすべてのことを知っているわけではない。彼らの記憶から消えている何かがあるようだ。それは、彼らが自分たちの環境に同化するのを助けるために意図的に行われたのだ。」

顔の特徴は南アメリカのインディオのようだ。居住設備は偽装用に使われている。そのうち、何が彼らの心の中で動きだし、彼らの記憶が完全によみがえるだろう。これは実際はばらしいことだ。彼らは自分たちの心の中に隠された独自の文化をもっているが、彼らはそれを知らないのだ」

この時点で、私のモニターはほぼセツションを終える準備を整えていた。彼は私をステージ6のマトリックス（作業表）に移らせ、私は、その村が位置していた国の国旗をスケッチした。彼はセツションを終了し、ターゲットが「火星／現在の文化」であったことを私に教えた。

モニターは私に、他の透視者によって行われたセッション——モニターされたものとソロの両方——が、私の観察を支持していると語った。事実、私のセッションは、彼がすでに知っていたその村のおよその所在を確認した。

読者は、私がラテン・アメリカの全人種が火星人であるといっているのではないことをはっきり知るべきである。むしろその数は少なく（正確にはわからないが多分数百人）、彼らは巧妙にまわりの大多数の人々と融け合っている。

このセッションが終わったあと、私が最初に考えたのは、旅行代理店に行つて航空券を購入し、ただちにこの場所を訪ねるべきだというものであった。しかし、この場所は現在政治的に不安定であることを思い出した。十分に組織された武装麻薬ディーラーたちが、彼らの領土を通じて火星人探しをするアメリカ人に脅威を与えることもありえる。私には家族がいることを思い出し、火星人コミュニティを安全に訪問できる機会を待つことに決めた。一つ確かなことがある。火星人たちは完璧な場所を選んだことだ。彼らは、訪問者の目に触れることはない。自分たちが何者であり、どこにいたのかを知っている人々でさえ、彼らには近づけない。彼らは我々の惑星表面に住んでいるが、我々は彼らのところまでたどりつけないのだ。

私がこの村で観察した火星人たちは、存在する唯一の火星人ではなかった。彼らはテクノロジの面でもより進んだ他の火星人たちによって支援されているようである。私自身の分析では、村の火

星人たちは、彼らの元の文化をできるだけ保存するためのプロジェクトに自発的に応じた火星人である。この文化の起源は、おそらく火星の生態系が破壊され、グレイによって救済されたときにまでさかのぼる。彼らの全文化遺産は、彼らの心に蓄積されている。彼らは自分たちの記憶を解放できるある合図を待っている。

その計画は驚くほどよく練られている。火星人たちは生き延びる必要がある。しかし、生き残りには正確に何が必要なのか？ 私には火星人のサブスペース的側面が、なぜ人間として生まれ変われないのか、その理由がわからない。しかし彼らが人間になれば、火星人的なものは失われるであろう。サバイバルに必要なことは、火星人としての記憶である。元の文化は保存される必要がある。加えて、彼らの元の遺伝子のある側面もまた、彼らの現在の肉体に保存されるかもしれない。しかし、地球での彼らの肉体は、当然のことながら、すでに元の火星人種とはかけ離れている。火星よりも重い地球の重力のせいである。彼らの文化は、もしそれが粗野な人間の環境に触れないですむ住民の隠された記憶の中にしまわれれば、多少は無傷のまま生き延びることができよう。

たとえば、この火星人たちをニューヨークのど真ん中に連れてくれば、おそらく彼らはあまりにも新しい人間の刺激に心理的に圧倒されるであろう。そして、彼ら火星人のアイデンティティーを未来の時間によみがえらせるどんな計画も、失敗に終わるであろう。しかし、普通の人間との接触が少なくてすむ田舎の村は、このグループにとっては完璧な場所となろう。今私は、こうした村を文化（を保存する）銀行と考えている。

火星人の地球移住計画は、たいへん複雑なようだ。まず、文化や歴史、アイデンティティーの保存の問題がある。一方で、我々は現在、移住の他の側面にかかわる火星人がいることを知っている。

彼らは、地球につながれた火星人たちを支援するために高度な宇宙船を飛ばすことから、遺伝子問題に取り組むことまで、あらゆることを行う。

他のSRVセツションからのデータ（ここには提示しない）は、いつか、火星宇宙船のたくさんの小艦隊が難民を火星から地球に運ぶことを示している。これらの難民たちの多くは、現在火星の地下シェルター内におり、船出の合図を熱心に待っている。また、彼らの科学技術は、高度に発達しているわけではない。彼らの好むライフスタイル（彼らが欲する風土も含めて）は、このセツションにおいて私が地球で観察した村の火星人たちのそれとかなり似ている。

現在地球に暮らす村の火星人たちの文化的な目覚めのときは、火星の同胞たちの到着に先立つものとなる。地球を根拠地にする村の火星人たちは、新しく到着する火星人たちのよき教師となるであろう。彼らは、この地球でのサバイバルの方法について新来の同胞に多くのことを教えることができるであろう。村の火星人たちは、見知らぬ世界での（新しい仲間にとつての）文化的なオアシスとなるであろう。

私はこの火星人の村の所在を公表しないことに決めた。この状況は、サンタ・フェ・ポールディ山の地下に位置すると思われる、ニューメキシコ州の火星人基地の状況とは大いに異なっている。後者においては、その所在の公表が火星人を勇気づけ、人間政府の指導者たちとのオープンな対話に導くよう私は希望している。

しかし村の火星人の場合、私は彼らの活動を邪魔したくはない。村の所在を公表することは、村の安全を深刻な危険にさらしかねない。村の建設を支えている根本的な思想は、火星文化を保存することである。彼らが最も望まないのは、自分たちが心を砕いて建設した避難所に人間どもが侵



入すること、または人間たちが、科学技術の面で高度に進んだ火星人たちが村への救援活動を続けることを不可能にすることだ。

私の希望は、火星人の村への慎重な訪問が人間と火星人との間の外交関係を促進することに役立つであろうと、いつか、合衆国かどこかの国の大物政治家を説得できるようになることである。火星、あるいはサンタ・フェのハイテク火星人の訪問に合意が得られるべきであろう。

## 第29章 リアリティー・チェックへ

本章では、検定ターゲットを使用した二回のSRVセッションのうち、二番目のものを説明する。最初のセッションは、ターゲットとしてホワイトハウスの大統領執務室を使った。私が第13章で説明したように、検定ターゲットはSRV実験手順の正確さをチェックするために利用される。そのようなターゲットは簡単に立証可能で、それはSRVセッションを一種のRV調整に変える。

これは、一九九四年の夏、私がミシガン州アン・アーバーに滞在している間に遠隔透視した最後のターゲットの一つであった。このセッションに先立つ二週間、私はかなりたくさんのRVをこなした。そして、火星人の小艦隊が地球に飛び立つ際の彼らの最終出発の喜びから、宇宙を創造した神の強烈な愛に至るまであらゆることを体験した。私の神経系は膨大な量のデータを自分の無意識から吸収してきた。そろそろ休息をとる頃であった。

私のモニターは簡単なターゲットを用意しているといった。彼がくれた唯一の情報は、それが過去に属することであるというものであった。彼は、それが場所なのか、出来事なのか、人物なのか、

あるいは他の何かであるのか私には教えなかった。

日付…一九九四年七月三一日

場所…ミシガン州アン・アーバー

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…3102/2137

予備ステージでは、ターゲットは乾燥した陸地にあることを示していた。陸地には人工物があつたが、それらは建物には見えなかった。

私「ページジュ、茶、黄褐色のような色をとらえている。手触りは汚れて乾燥しているが、湿つているところもある。気温は暖かい」

私は、一体に動きのある、広い開けた地域のステージ3スケッチを描く。私はターゲットのはるか上空にいる。ついでターゲットの現場中央に視点移動する。

「前と同じ色と感触をとらえているが、今は声を聞いている」

ターゲットの上空三〇〇メートルで、前と似たステージ3スケッチを行い、ステージ4に移る。「ここでは人間たちを知覚している。ターゲット視点からある種の〈分析的判断〉を得ているが、それは通り抜けることを望んでいない。サッカー・ゲームのようだが、これは正しくないことがわかるので、ただの〈分析的判断〉として書き留めることにする。ここでは何かがおかしい。」

今、現場の表面に降り立っている。ここには人間たちがいる。彼らは一種の衣装をまとうている。まわりには原色などたくさん色がある。ここにはまたかなりの量の、高速の活動がある。しかしまた、何かが本当に変だ。その人々からどんな感情も知覚できない。それは完全に空虚だ。まるで彼らの感情には激しさというものがいっさいないみたいだ。しかし、かなり深刻な心配事でもあるのか動き回っている。

今、何かが燃えている匂いを感じている。汗を感じ、叫び声を聞いている。ここにはとても混乱した面倒な事態がある。一貫した合図が一つもない。多くの人々が混乱して、バラバラなことをしている。しかし、何も建設的なことが進んでいない。今私は、これがある種の戦いであるという〈分析的判断〉を行っている」

この時点で、モニターは、私が何か他のものを求めてあたりを探り始めるよう提案する。

「ああ、まだ服を着た人間たちが見える。すべての色がここにある。まだ混乱と激しさが至るところに見られる。問題は、人々がここでやっていることを自分ではわかっていないことだ。食い違いと戦闘があり、すべてが台無しになっている。実際、この人々はすべてのことを混乱した感情のまま体験している。」

今、私はこの彼らの活動の目的を探ろうとしている。私は爆発感をとらえている。この人々は少しの見込みもない何かをやるうとしている。この人々の多くは成功できない、あるいは成功しないだろう。しかし、彼らにはそれがわかっていない。ある種の戦闘のようだ。何かすばらしいことが起こるだろうと考え違いをしている人々が多くいるが、それは起こらない。

私の心は心底これらのデータに抵抗している。これが何であろうと、私の心はそれを見たがらな

い。私はその混乱から抜け出せるように、少し時間を先に進んでいる。待って……これは戦いだ。この死者たちをみんな見てくれ。彼らは至るところにいる。彼らはみんな死んでいる。戦場には死体、武器、軍服がある。

これは（南北戦争当時の）南部同盟にかかわっているという明確な（分析的判断）を得た。これは戦争における主要な戦闘だ。私はこの場面を知っている。これは、最も多くの人々が殺された、南北戦争における最大の戦闘だ。ここはゲティスバーグだ」

モニター「了解、コートニー。セッションを止めるんだ。ターゲットは、ゲティスバーグの戦いだ」

## 【検討】

成功裏に検定ターゲットを識別した以外に、このセッションは、戦場の直接体験から私を守るために、私の無意識の心を意識の心と協力させた。興味深いことに、その戦闘が終わり感情が静まるまで、私はそのシーンを明確に識別できなかった。私が現場のすべてを見、感じることできたのは、私の無意識と意識の心が、広々とした回路を通して互いに対話を始めたときであった。つまりそれは、このセッションの初めにおいては、私の心は準備できておらず、私の心が、神経系に過度な負担を与えることなく、必要な情報を伝える位置を時空の中に見つけるまで待たなければならなかったということであった。私のそばにはいかなる意識的な決定もなく、すべては自動的に起こったということが強調されなければならない。

している。たとえその答えが、透視者の意識の心が正しいとするものではなくとも、無意識はつねに透視者を正しい答えに導くであろう。私の場合、サンタ・フェ・ポールデイがその地下に基地をもつ現実の山であるかどうかを知りたかったのである。

データ…一九九四年八月二日

場所…ミシガン州アン・アーバー

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…4471 / 3621

予備ステージでは、ターゲットは乾燥した陸地と人工構造物に関係していることを示していた。

私「赤、茶、それにベージュ色を知覚している。手触りはザラザラしているが、多少滑らかだ。気温はいくぶん涼しく、今は何も匂わない」

私のステージ3スケッチは、たくさんの構造物がありそうな地域を示している。私はターゲットの上空三〇メートルに視点移動を開始する。

「今、円形の建物の上空にいる」

別のステージ3スケッチで、多くの透視者たちが火星人に関連づけている建物のアウトラインを描く（ここでは報告しない他のセッションでは、この建物が、火星人に關して人間たちの間に高度の議論を呼ぶことを示していた）。

モニターは私に直接ステージ6に行くようにいい、そこで、私は紙の中央にその建物を小さな絵に描く。それから、周囲の環境に見当をつけ建物のまわりを探る。円形の建造物の側には他にも小さな建物がある。建物の集合の東方、何メートルも先に森と山を見つける。西方には人口が密集しているところがある。山は円形の建造物に密接にかかわっているようだ。

「今、大きな円形の建物の中に向かっていて。内部には、オフィス仕立ての広々とした部屋があるのがわかる。オフィスの壁は建物の湾曲に応じてカーブしている。たくさんの小部屋のある廊下に通じる部屋の中には、一つドアがある。大きな部屋に戻ると、講堂内の演壇に似た上演用の一角があるのがわかる。そこには傾いた椅子が列をつくって置かれている。」

自分の注意を部屋の中の人々に向け直している。彼らは普通のビジネス・スーツを着ているのがわかる。建物自体はある種の製造業と関係しているようだ。建造物の中では多くの活動が起きていることが察知できるので、構内はある製品に関係する研究を行っているように見える。しかし、少なくとも活動のいくつかはコンピューターのソフトウェアに関係しているとはつきりわかる」

私は時系列線タイムライン上に現時点と未来の四点を置く。個々の時点を探ると、二番目の点（現在から約二年前）で、大きな長方形の最新式の建造物が、先の円形の建物の近くで建造中なのを発見する。小さな建物のいくつかは、この大きな建物のスペースを確保するためにとり壊されている。時系列線上のあとのすべての時点では、大きな長方形の建造物が主役をとめている。

現在に戻ると、その大きな建物の建造計画があるのがわかる。

モニター「コートニー、もう一度未来におけるその大きな建造物に戻って、その建造物の中の人々が何をしているかを探り出すんだ」

私「了解。待つて……今、大きな長方形の建物の中にいる。建物の内部には、コンピュータの端子、実験室の仕事台、大量のワイヤー、それに実験装置がある。これは個人の商業的な関心に関連した科学的な研究実験室で、調査中のテーマは遺伝子とバイオテクノロジーに関連しているように感じられる」

一人の男性労働者が、一日の仕事を終えてその構造物から出てきたため、モニターは私に彼のとをつきさせた。彼は、守衛が立つ大きな構内の正面ゲートを通らなければならない。労働者は西方のより大きな人口密集地に車を運転して帰宅するので、彼のあとをつける。その道筋に沿った環境は、サンタ・フェ近くにいるような明確な（分析的判断）を私に与える。

モニター「もう一度大きな構造物に戻って、各階に何があるのか探り出すんだ」  
私「無意識が私を地下室に引き寄せている」

モニター「それにしたがうんだ」

私「何てことだ。わずかながら色がついた服を着た死体が何体かある。ここはいい場所ではない。私は探り続けている。この人々の死は秘密を守るためである。彼らは職務中に死んだ。他の者たちは、邪魔にならないよう即座に死体をどけるために、死体を安置する必要があった。彼らは最後にはこれらの死体を始末するだろう。ここでは安全が問題のようだ」

モニター「職務中」の意味するところを探るんだ」

私「彼らは施設の中の科学者たちだ。彼らは自分たちの研究の結果、死んだのだ」

モニター「彼らは何をしていたんだ？」

私「彼らは危険な科学的実験に従事していた。彼らはその危険性を承知していたが、ともかくもそ



れを行った。彼らは外部の超大型機関によって監督されてはいなかった。その活動は内々の私的なもので、秘密にされていた」

モニター「その活動は何なんだ？」

私「放射能と生物遺伝子の突然変異にかかわっていた。この人々は自分たち自身の実験室での産物、あるいは副産物によって殺された。彼らは適切な安全管理を欠いていたと思われる。今、心が私を東方の、あの山に引き寄せている」

モニター「それにしたがうんだ」

私「今、その山にいる。洞窟がある。そして、洞窟には生き物たちがいる。これは火星人の基地だが、変化がある。今、洞窟の中には車輪つきの乗り物がある。場所は近代的だが超近代的というほどではない。ちょうど今はE.Tの宇宙船が見えない。トンネルがある。西に向かつて、地表とつながり、外部ではカモフラージュされている。トンネルは現在のところ通気孔として使われているが、それはひじょうに大きい。乗り物がその中を通ることができる。」

ここにはたくさんさんの労働者がいる。かなり人間に似ている。事実、彼らは人間だ！ 彼らはワンピースの白いユニフォームを着ている。

これは面白い。私はこれを（感情的反応）として書き留めることにする。外の大きな構造物の地下室に置かれた死体のいくつかは、これら山の部屋に関係しているようだ。

この場所は、私が今までに見た場所よりもさらに活動的だ。建造中のものがたくさんある。労働者たちが施設を拡張しているようだ。

今、私は時間を先に進んでいる。近い将来には、その施設はでき上がるが、監督者タイプの者を

除いて空だ。少し先に行くのと、その場所は完全に難民の火星人たちで満たされている。彼らの何人かは不潔だ。今ここではたくさんの方が、大混乱と事件から湧き出る本当のおしゃべりが聞こえる。火星人たちはこれらの部屋に、希望、恐怖、興奮といった強い感情に満たされた子供や大人たちをぎっしり詰め込んでいる。

火星人たちは地表に出たがっている。彼らは本当にうれしそうで、興奮している！」

モニター「コートニー、現在の時間に戻って、円形構造物内の人々は何が起ころうとしているのか知っているかどうか探るんだ。それから未来に進んで、変化に気づくのがいつかを探るんだ」

私「現在の時間では、円形構造物内の人々は何もわかってない。私の時系列線の二番目の点までには、政府はサンタ・フェ近くに居住地を置くことを決定している。そのときは金がどつと使われる。拡張した火星人地下基地を、これからやって来る火星人たちのための収容センターとして使用する、という考えだ」

モニター「了解、コートニー。もう十分だ。セッションを終わりにしよう。ターゲットはヒュー・ヘフナー（『プレイボーイ』誌の創刊者）の最後の独身パーティー……」

私「よしてくださいよ」

モニター「ターゲットは、サンタ・フェ・ボールデイ（火星人／現在の生存者／ニューメキシコ州の洞窟）」だった」

## 【検討】

これは、火星人難民たちがどこに到着し、サンタ・フェ・ポールディの地下の火星人基地がどのように移民収容センターに変わるのか、私が初めて見たセッションであった。彼らの多くは、まったく普通の人に見えた。概して、彼らは高度な科学技術をもったタイプではなかった。母親であり、子供たちであり、平均的火星人の大人たちなどであった。彼らの合衆国への移民は、とりわけ社会生活に適合させるという点で、他の多くの新しい少数民族エスニックの場合と類似しているようだ。人間はまずこうした考えに慣れるようになるなければならないと私は確信している。しかし、不慣れが消えたと、これらの火星人たちも友好的な隣人として迎えられる可能性をもつことになる。

## 第31章 火星人と公式会見

今やほとんどすべての読者の心に浮かぶ最も重要な疑問の一つは、おそらく、どのように火星人とのコミュニケーションが始められるかであろう。私が前章で示したように、人間はグレイよりも先に火星人と公式のコンタクトをもつてであろう。その後どれだけたつて、我々がグレイとかかわりをもつのか私にはわからないが、国連によって放送されるグレイへの率直な会見要請は、ことを早めることになるであろう。しかしいざれにしろ、火星人とのコンタクトが最初に起こり、これが人間の意識を大きく星々へと向けさせるのに役立つであろう。

本章の基となっているセッションは、火星人たちがどれだけ首尾よく人間文化に自分たち自身を統合させているかを探り出すことが、本来の意図であった。当セッションは一つの答えを与え、多くの他のRV体験と同じく、それ以外にも重要な情報を豊富に明らかにした。その中には、第一歩として、どのように人間—火星人間の公式な交流が進められるべきか（または、おそらく進められるであろうこと）を示唆する情報も含まれている。

このセッションはタイプ4の条件下でブラインドで行われた。

日付…一九九四年九月二六日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…6068/0004

予備ステージでは、ターゲットに対する最初の接近は乾燥した陸地にある人工構造物にかかわっていることを示していた。

私「茶と黄褐色をとらえている。手触りは木とセメント。気温は暖かく、実際とても暖かい。甘い味を感じており、人間の声が聞こえる。何か円形で平たいものがターゲットのある場所に存在するのを知覚している」

平たい屋根をもった円形の構造物と思しきものを素早くスケッチするために、ステージ3に進む。モニター「ステージ4に移るんだ」

私「今、マトリックスにいる。ある建物をはっきりと知覚している。建物の中に声が聞こえるので中に入ってみる。会話が行われている。話をしている人々がいる。建物は円形で、以前この建物を透視したことがあるかもしれないという感じがする。しばらく外に出てみると、建物のまわりには木々がある。今、内部に戻った。」

オー！ 何という〈感情的反応〉だ！ 建物の中で話をしてた人々にまさしく注目している。ひじょうに力強く精力的な人々だ。これはトップレベルの会合だ。彼らの心の中に入らせてください。待つて……彼らはE.T.たちについて話している。

この人々は軍服に身を包んでいる。将軍、提督、軍の高級将校たちだ。ここには一人、文官もいる。合衆国の大統領のようだ。〈感情的反応〉の欄にさらに「オー！」と書き留めさせてくれ」モニター「わかった。それをすべて書き留めて、先に進むんだ。ペースを速めるんだ。いいぞ」

モニターは私をすぐにステージ6に移らせる。彼は私に、聞こえる会話の主要テーマの構成要素を分離させるS.R.V.テクニクを実行させる。

私「ひじょうに実践的なレベルの議論がもち上がっている。主な焦点は、まさにE.T.たちとのコミュニケーションの方法である。彼らは、意識にはこれが可能なことに気づいているが、さらに物理的な何かを求めている。意識を通じたコンタクトは始まったが、今、彼らは何か他のものを必要としている。提案の一つは電波の使用だ。彼らはこのやり方を考え出そうとしている。

グレイたちが彼らの会話の主題ではない。この人々は火星人たちについて話している。これは現実の惑星間コミュニケーションの問題だ。彼らは今電波に焦点を合わせている。」

未来の特定の時点を探れるよう、私はステージ6の時系列線をつくる。

「人間が火星人と対話を始めている時点を見つけた。私はこれをコミュニケーション・ポイントと呼ぶことにする。彼らは電波望遠鏡——複数の望遠鏡で一つではない——を使っているようだ。その望遠鏡は世界中にある。」

人間たちは火星に望遠鏡を向け、耳を傾けることから始める。彼らはあまり多くのことを拾い上

げてはいないようだ。それで、人間たちは戦術を変えて、送信を始める。解決されるべき数々の問題がある。一つの大きな問題は、何語を使うかということだ。それから通信定式書を開発しなければならぬ。

グレイたちは観察しているが、このすべてに積極的に参加してはいない。彼らは興味をもっているようだが、消極的だ。

人間たちはまた、月のET基地にも送信しようとしている。ただ、火星に向けてのほうにもっと力を注ごうとしている。月のETたちは沈黙を守っている。

最初は、火星の火星人たちは黙っている。彼らは発見されたと感じ、何をすべきか、どんな人間の反応が生じるのか、考えを巡らしている。この日がいずれはやって来ることを彼らはつねに自覚していた。彼らは少し傷つきやすいようだ。

時間を先に進むと、火星人たちは対話を行うことを決定する。彼らは大きな音ではっきりと信号を送り返す。彼らは、人間が使い始めたのと同じ電波定式書を使用するようだ。

火星人たちの様子に私は少し感動した。火星への電波信号を追いかけ、私は今そこにいる。火星人たちはヒューマノイドで、今ほとんども人間に似ている。髪の毛もある。この火星人たちは圧倒的に男性だ。ある種のユニフォームを着ているが、軍の戦闘グループではない。火星人たちはそのようなことはしない。彼らの全防衛体制は、戦闘ではなく、秘密主義によって形づくられているようだ。火星人の皮膚は薄い。この火星人たちは本来の火星人と同じようだ（サブスペースの意味において）。しかし、彼らの肉体は地球人とそっくりだ！

モニター「時間を先に進むんだ。火星人たちはどこにいる？」

私「待って……彼らは地球にいる。彼らは、ここに早くから移住してきた人々のように、自分たちの土着のグループと一緒に働いている。また彼らは自分たちの仕事を継続するために、人間の政府から支援を得ている。現在、彼らの仕事は明るみに出ている。何でことだ。火星人たちは本当に人間のようだ」

モニター「グレイたちはどこにいるんだ？」

私「グレイたちは自分たちのことを行っている。この未来の時点で、彼らの遺伝子プロジェクトは終わっているか、あるいはほとんど終わっているところだ。残されているのは仕上げだけだ。彼らはまだ人間たちと直接話していない」

モニター「了解、コートニー。必要なことはやった。ターゲットは火星人／未来の文化だ」

## 検討

将来、我々が交流することになる火星人たちは、おそらく違いを見分けられないほどに我々と似ている。地球を根拠とする人間と比較すると、彼らの事実上の違いは、文化と科学技術にある。我々が彼らと首尾よく交流するつもりなら、彼らは、我々が彼らの気持ちを理解しなければならぬという要求をもつであろう。しかし、彼らは「リトル・グリーン・メン」（ラジオ放送「宇宙戦争」に登場した宇宙人「緑色の小さな宇宙人」）としては我々のところにやって来ないであろう。ET文化との我々の最初のオープンな交流は、少なくとも見たところ彼らの肉体が我々と変わらないこととで気持ちよいものとなるであろう。



## 第32章 地球の低次の生命体

次のセッションは、ターゲットの手がかりとなる内容に関して事前に何も教えられないことなく私に与えられた。手がかりは「エレメンタルズ「宇宙を充たす自然精霊」」であり、そのターゲットは本書のターゲット・リストにはなかった。これは、モニターが私に定期的に与えた多くのターゲットの一つで、リスト外で、私にはまったく未知のものであった。彼はそのテーマの概略すら私に話さなかった。時折そのようなターゲットを私に与える理由は、私がターゲットの性格を推測しようとする——間違った（分析的判断）に導きやすい——のを抑えることによって、データに対してさらなる保護シールドを与えるためである。しかし実際は、RV中の私自身の精神的訓練のレベルがかなり高まっており、かつての教官で今は私のモニターである彼は、私のデータの質に関してほとんど心配してはいない。にもかかわらず、彼はさらなる安全を求めた。私に予期しないターゲットを与える彼の訓練は、セッションの間、本当に私を緊張させた。

この特別の手がかりの背後にある動機は、人間が肉体としての生命を破壊するとき、残ったサブ

スペース生命に何が起るのか、私のモニターが長い間不思議に思ってきたことにある。我々のRVの努力のすべては、ヒューマノイド存在をターゲットにしている。しかし彼は、彼自身のRVセッションの間に個人的に観察したヒューマノイドではない数多くのサブスペース生命体のことを気づかっていた。彼にとつて、彼らは「エレメンタルズ」に見えるらしい。それは、ほとんどの非ヒューマノイド生命体について言及する際、彼が使用する用語である。そのような生命体のほとんどは、一般的に人間よりも背が低く、しばしばまったく予測できない行動特性をもつ。この生き物たちが肉体的な対応物をもつのか、あるいは、かつて肉体的な存在であったのか（同じことかもしれないが）、彼にはわからなかった。彼はまさに、彼らが我々の周囲に存在することを知り、人間の活動が何らかの意味で彼らを傷つけているのではないかと考えた。つまり、人間が物質的環境を破壊することが、サブスペース中の大きな生命コミュニティに否定的な影響をもたらしているのではないか？ もしこれが事実であるとすれば、地球に対して現在まで続く環境破壊の本当の規模に関して、我々は氷山の一角だけしか見ていないのではないかと、私のモニターは心配した。

もちろん、このセッションはタイプ4の条件下で行われた。予備ステージのあとすぐに、これはまったく予期していなかったターゲットだと私は悟った。それはリストに載っていないターゲットであったのを私は知らなかった。私の無意識が自分を向かわせている場所に関して、私は事前にまったく予想していなかったことをまさしく理解した。これが何であろうとも、私はこれまでにまったく知覚したことのない何かを知覚することになるであろうとすぐに感じとった。

日付…一九九四年九月二八日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…3660/1161

予備ステージでは、ターゲットは乾燥した陸地と液体との境界を含むことを示していた。

私「青と白のような色をとらえている。手触りは泥だらけで、湿っている。気温はかなり寒い。魚のような味を感じており、海水の匂いがある。私のいる場所はどこも、幅広く、広大で、平坦であり、とても深い」

私はどうやら大量の水溜まりの隣にある乾燥した陸地を含むステージ3スケッチを描く。またその液体の下にある種の人工構造物と思われるものを知覚して、描き始める。

「ステージ4に移って、まだたくさん液体を知覚している。これは大きな海のようなのだ。ええと、少なくとも私はある惑星にいますといえる。その惑星は馴染みがあるようだが、私が以前に訪問したときのことではない。液体は水のようにとても深い。」

乾燥した陸地の断片がある。今そこに向かっていく。そのまわりを探っている……そこは不毛だ。何も生えていない。あたりは自然のままだが、ある文明にかなり影響を受けているという感じがある。火星のように不毛だが、これは火星ではない。色はさまざままで大気がある。

今、その水に戻ろうとしている。水中には、ある種の構造物があるようだ。かなり巨大だ。今、調べるために水の中に入ろうとしている。待った……。

モニター「了解、終わりにしよう。コートニー、このターゲットは「エレメンタルズ」だった」  
私「えっ？ それはリストになかった！ エレメンタルズというのは何なんですか？ もう私には  
そのような好奇心につき合う時間はないのはご存じでしょう。この本はもうすぐ出版社から出され  
るんです。エレメンタルズとは何なんですか？」

モニター「コートニー、説明させてくれ。エレメンタルズを理解することはとても重要なことだ。  
私は何年も彼らを見てきている。彼らはすべてのことにかかわっていて、ただ彼らがヒューマノイ  
ドではないという理由で彼らを無視することはできないんだ」

モニターは、エレメンタルズが何であり、なぜ自分が彼らのことを案ずるのか説明を続ける。説  
明にはその日の残りの時間すべてを要したが、結局私は、彼の関心事に正当性を認め、この生命体  
のことを本書で言及しなければならぬと悟る。私は、多くのETが我々に対するのと同様に、こ  
の他の生命体にも関心を寄せているらしいことを示すRVのデータを得ている。

## 【検討】

UFOアブダクション文献において、人間が物質的生命体とそのそばに存在する「他次元」生命  
体の両方を破壊する間は、グレイたちは人間を支援できないと語っていることが繰り返し報告され  
ている。正直に言って、これまでこれが何を意味するのか私にはまったく理解できなかった。概し  
て人間は、広範な低次元非物質生命体に気づいていない。またおそらく、この生命体の物質的側面  
と非物質的側面の間には微妙な関係が存在することにまったく気づいていない。

人間の無知はある程度、サブスペース（非物質的）生命体の知覚に関する問題とかわわっている。多くの専門分野において、人間は本当に魂をもっているのかどうかに関してまだかなりの論争がある。尋ねられれば、ほとんどの人々は魂は存在するというであろうが、科学者たちはめつたにそれを測ろうとはしない。人間自身のサブスペース相に関して科学的知識階級の間には相当の混乱がある。したがって、異なる形態の生命体がサブスペース相をもつのかどうか、我々が尋ねてみようとしてもしないのも無理からぬことである。

総じて人間たちは、自分たちのことを地球上の生命の管理人としてではなく、勝手に使うことができる庭園のオーナーとみなしている。他の生命に対するそのような視点からは、人間および非人間を問わずすべての生命体にサブスペースが存在するのかという疑問がほとんどもち上がらないのも不思議なことではない。しかし、今の私には、その問題は尋ねるに値する重要な事柄であるとわかつている。個人的に答える用意もある。

サブスペース生命体のすべては物質的生命体に依存している。私はこの依存の全側面を理解してはいないが、それが存在することはわかつている。我々が自分たちの物質的環境にダメージを与えたり、種を破壊したり、非人間生命体の存在を危うくしたり、苦痛を与えたりすれば、サブスペース生命体の繁栄・進化能力は妨げられる。物質的生命体とサブスペース生命体は相並んで生きている。一方はもう一方なくしては前進できない。もし我々が真の銀河系市民へと進化することになつていけるのなら、我々は他の生命体、全生命体に対する我々の見方を変えなければならなくなるであろう。しかしながら、我々にとってこれは、地球外生命体（宇宙人）が存在する事実よりも受け入れがたいことかもしれない。

## 第33章 火星を破壊した出来事

火星がかつてしつかりした生態系をもっていたとしたら、何がそれを破壊したのであろうか？ 破壊以前の時期から得られたR Vデータは、火星人自身が、火星の大気はいうまでもなく自分たちの環境を破壊するような科学技術をもっていたとは示していない。これまでの章で提示されたデータに基づいて、グレイたちは環境的に向こう見ずな行為を通して自分たちの故郷を破壊し、また人間たちも同様の道を歩んでいることを、我々は現在知っている。しかし、火星の事情はまったく異なっている。調査の初めから、火星環境の崩壊はある自然災害にかかわっているように思われた。たぐさんの異なる透視者たちは、火星の災害は、おそらく彗星か小惑星に関連した天体の出来事によって起きたと結論づけている。

そのためモニターと私は、火星文明崩壊の原因を見極めるための、手がかりとなるターゲット設定を行った。結局のところ、今回のR Vセッションは、我々が本書のために予定した二つの最終セッションの一つとなろう。何カ月も前にモニターと一緒に最初のターゲット・リストをまとめ上げ

たあと、私が私の無意識が実際のセッション前に意見を形成するのを防ぐために、注意深くリストを見ることを避けていたのを読者は思い出すであろう。リストは長かった。それに加えて、暫定リストに新たなターゲットを加えたモニターの強い好みも、まだ割り当てられていないターゲットについて私があるこれ考えないようにさせてくれた。しかし、最後から一つ前のターゲットが回ってきたとき、私は初期火星文明の崩壊を見極めるターゲットがまだ割り当てられていなかったことを意識的に思い出した（他のどのターゲットに際してもこんなことは起こらなかった）。セッションが始まると、ターゲットからの最初の信号は、このセッションが本当に火星がターゲットであることを示した。タイプ4の条件下で始まったこのセッションは、それゆえ実際にはタイプ4とタイプ6が合わさったものとなった。

日付…一九九四年九月二十九日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

ターゲット対応番号…59666/2695

予備ステージでは、ターゲットが動きと荒れた自然の陸地にかかわっていることを示していた。

私「茶とペーリュ色をとらえている。手触りは岩だらけで、気温はとても寒い。ハリケーンのように、すさまじい風の音が聞こえる。また何か円形で丸いものを知覚していて、火星の災害を分析し

ている」

モニター「ただ手続きに忠実にしたがって、ステージ3に進むんだ」

私のステージ3スケッチは二つの円形物体の単純な表示である。

私「ステージ4に移ると、少なくとも円形物体の一つは惑星であるようだ。まだ茶色と岩だらけの手触りを感じとって、何か冷たい。また強い大気の乱れ、特に渦巻き運動を感じとっている。この惑星にかかわる生き物がいて、現在のところ彼らは恐怖状態にある。そこにはものすごい動揺がある。二つのものを(分析的判断)としてとらえている。一つは月か小惑星、もう一つは火星だ」

モニター「コートニー、直接ステージ6に行くんだ。君は正しいターゲットをいい当てている。それは火星の災害だ。ただ手続きに忠実にしたがって、続けるんだ」

モニターは私にその惑星と小さな物体をスケッチさせる。この二つの物体に比較して地球を定め、私に火星と比較して小さな物体の動きの方向を割り出させることを可能とするSRVテクニクを実行する。またその出来事の時系列線をつくる。

私「小さいほうの物体は片側が大きい、いびつな形をしている。そこには分子レベルでのみ計測可能な、きわめて薄い大気がある。この物体はより大きな惑星の大気の端を通り抜けた。惑星の大気は比較的濃く、物体は成層圏を押し抜けて去っていった。物体が大気を通り抜けた地域を交差地区と呼ぶことにする。物体は惑星の表面には墜落しなかった。」

今その惑星を探っている。最初に、大気にはあまりダメージはない。交差地区に近い区域では高い乱気流がある。他の場所では、惑星全体の大気を通じてただ揺れているだけだ。交差地区にさらに近づくと、さらに高いレベルの乱気流がある。



最初の乱気流に続いて、水面に落ちた石が外側に向かってより大きな波紋を描くの似て、物体は大気中に円形の波を起こした。波は大気の津波に成長した。

大気の乱れからは表面の環境には最初衝撃はなかった。それは、すべてのものがただちに破壊される地震のようなものではなかった。

円形の波が大気を通して伝わり、惑星の反対側で出会い、跳ね返ってくるかまたはそれ自体を通り抜けて、交差地区に戻ってきた。それからふたたびそれは円形の波として押し寄せてきて交差地区で出会い、振幅を起こして、ギターの弦のように振動しながら跳ね返りか通過現象を繰り返し、何度も続いていった。それは共鳴を起こした。共鳴は、太陽熱のように他のすべての影響源を圧倒しながら、大気状況の最初の伝動装置となった。見たところ重力は素早く振幅を和らげられるほど強くはなかった。そのため、この状態は長く続いた。

惑星の生き物たちは徐々に影響を受けた。すべての気象パターンは変わった。惑星の状況はゆくりと悪化し始めた。農作物が育たなくなつたため、食料が問題となつた。雨も問題となつた。最初に洪水と干ばつの両方が現れた。

大気はしばらくの間は呼吸するのに十分の濃さであったが、絶えず起こる波は徐々に大気を宇宙空間に飛ばしていった。惑星の重力は、波の運動エネルギーを打ち消すことはできなかつた」

モニター「了解、コートニー。もう十分だ。ターゲットは「火星人／文明崩壊（の出来事）」だつた。これは面白い。我々は決してこんな過程を推測できていなかった。これは、惑星の大気における乱気流や流体力学を研究する科学者の間で、完全に新しい研究分野を切り開くことになるだろう。私にはここから出てくる数学的なモデルが想像できる」

## 【檢討】

私が目撃した過程は本当に面白いものであった。それは、大きな重力をもつ地球であれば、通過する小惑星か彗星によってつくり出される大気の波は素早く静められたであろうから、起こりえなかったことである。しかし、火星においては、大きな波が長い時間をかけて形成された。火星人たちが自分たちの惑星に深刻な問題があることを悟り、連邦はグレイによって編成された救出チームを送るだけの時間があったのだ。

## 第34章 未来の地球文化

本章では、この調査に利用された、最後のモニターされたRVセッションからデータを紹介する。このターゲットは、モニターと私が本書のために考え出した元のターゲット・リストに載っていた。このセッションの結果は私を不意打ちしたが、やがて明らかになるように、つまりは楽しいものもなかった。事実、セッションを終えるまで、私は地球人類の未来に対してかなり悲観的な展望もち始めていた。我々がいずれにしても自滅の方向に向かっているのなら、どうしてETたちが我々を助けるのにこれほどまでに多大な努力を払っているのだろうか。幸運にも、彼らの努力にはわけがあるのを今私は知っている。

日付…一九九四年九月三〇日

場所…ジョージア州アトランタ

データ…タイプ4、遠隔モニター

ステージ2までの予備ステージでは、ターゲットが乾燥した陸地と液体、そして人工構造物にかかわっていることを示していた。さらに、時間を横切る動きがあるという印象を即座にもった。

ステージ3スケッチは回転する球体と似ている。直接自分をターゲットの現場に置くSRVの視点移動を実行する。自分が密集した複雑な環境にいるのがわかる。

私「私のいる場所はどこもひじょうに複雑だ。複雑な生態系を感じている。ここにはある種のヒューマノイドがいる。たくさんの植物が繁茂するジャングルのようだ。すべてのものが、回路基盤やジャングル棲息地のように、他のすべてのものにつながっているか依存している。本当に、これはうまくバランスのとれたジャングルのように感じられる。エデンの園として〈分析的判断〉を加えているが、これはエデンの園ではない。ただそのように感じられるだけだ。ここはよく手入れされている」

ステージ6に移り、そこで時系列線タイムラインをつくり調べる。ターゲット時間を設定し、それとセッションの日との間に他に三つの重要な区分点を置く。

「現在とターゲット時間との間は約三〇〇年だ。ターゲット時間においては、ヒューマノイドは明らかに人間であるのを知覚できる。普通の服を着ていて、環境に関係した仕事をもっているようだ。時系列線上の最初の区分点では深刻で大規模な環境退化が現れる。三番目の区分点は、環境再生の発生点である。待って、他の点をチェックする……」

ターゲット時間には、自給の足がかりを得つつあるという意味において、しつかりした生態系の始まりがある。私がこのセクションで得た複雑さの最初の感覚は、生態系における植物の、文字どおりの複雑さに関係していた。

まだターゲット時間においては、人間たちは地上の避難所をもっていないようだ。彼らはガソリン・エンジンの乗り物なしで徒歩旅行している。彼らは食料をあさるのではなく、観察している。彼らの心の中にあるのは、利用ではなく貯蔵である。人々の心の中には、何かの最も悪い部分を取り切ったという感じがあり、今、彼らには自分たちの感星を再生できるという自信がある。これ以前には、つねに疑念があったようだ」

モニター「生物の多様性という概念を調べるんだ」

私「あまり現在に近いというわけではないが、おそらくターゲット時間よりも一〇〇年以上前のことだ。ターゲット時間における彼らの努力で主に強調すべきところは、相互に影響し合う感星の生態系における複雑さを高めることである」

モニター「連邦／交流という概念を調べるんだ」

私「この人間たちと連邦との交流は、現在のセクション時間からターゲット時間までの全期間を通してである。連邦は監視して指導を申し出るようだが、人間からトラブルをとり除くことはない。人間たちは自分たち自身でこれをしなければならぬ」

モニター「代表という概念をチェックするんだ」

私「前と同様にターゲット時間においては、サブスペースの人間代表がいる。彼らはもはや肉体をもっていないようだ。しかし、現在のセクション時間のあとすぐには、肉体をもった人間と連邦と

の間に対話がある。時間が進み、人間たちは自分たちのことを、連邦と密接にかかわる職人、代表者、おそらく協力者とみなしている。人間は、初期の地球の遺伝子向上プロジェクトにおける、最初のアダムとイブのようなタイプに進化すると私は考えている。しかし今回、その向上プロジェクトの管理者たちは、他の惑星からやって来たのではなく、この地上で進化したもののたちである。

ターゲット時間までに、人間たちは領地の所有者から管理人に進化しており、惑星レベルの造園家という概念すら当てはまる。まだその惑星は完全に再生されてはいない。しかし、たくましい生命が根づいた庭園または狭い土地があり、その土地はやがて拡がっていくだろう。

生態系は概して開いている。しかし、まだ知られていない種のための温室がある」

モニター「人間の居住地を調べるんだ」

私「待つて……現在のセツション時間には、特別な生活の場はない。時系列線の最初の区分点では心配事はあるのだが、人々は特別な避難所をつくるという概念について考え始めているだけである。次の区分点では、『マッド・マックス』のシナリオが始まり、人間たちは奪い合いを始めている。砂漠化が深刻になっている。まだ生き物はいるが、ほとんど砂漠のような、せいぜいサバンナのような環境だ。三番目の区分点では、特別な避難所タイプの人間の居住地が十分に機能している」

モニター「連邦との対話に備えた人間側の取り決めについて調べるんだ」

私「了解。今そうしている……特別なものは何もない。連邦は他の人間の言語同様に英語も知っている。彼らは何か変わったことは期待しないだろう。連邦は必要なすべてのコミュニケーションの輪をつくるだろう。人間が用意できた都合することが待たれている」

モニター「直接、連邦の支援という概念を探るんだ」

私「非公式な支援だけがあるだろう。人間たちはこの状況から抜け出さなければならぬ。連邦の介入は、監視しているという意味で受動的であるが、人間に働きかける目的を示しているという意味では積極的である。彼らは我々を追い出さないうだろう。人間にとって必要なことは、従属種になることではなく、成熟した有用種となることである。この成熟は経験によってのみ得られる」

モニター「そうだ。おそらく我々は、次のプロジェクトまでその運命が何であるのか探り出すのを待たなければならぬだろう。セクションを終わりにしよう。コートニー、今の我々にはふたたび希望がある。ターゲットは「地球／未来の文化」だった」

私「そうでしたか？ そのターゲットについては完全に忘れていた。リストをつくって以来、本当に長い時間がたっているから。『地球／未来の文化』……この本に関して私を知るべきことを、私の無意識は知っていたようだ。我々には二回目のチャンスがあるだろう！」

## 【検討】

我々人間は変わるであらう。我々は自分たちの惑星の破壊を目撃するであらう。すべての人間にとって、長期間に及ぶ苦難の時期が訪れるであらう。しかし、我々の損失が、我々をむなしいままにしておくことはないであらう。全体として、我々は自分たちの過ちから学び、今度は生命の破壊者ではなく、我々の世界の管理者かつ守護者として、ふたたび我々の種は復活するであらう。しかし、人間の再生を議論する前に、来るべき我々の衰退の背後にある論理についてしばし注目してみたい。

ある読者は、地球がより賢明な人間の管理者によってふたたび再生する前に、塵の惑星となるに  
違いないという考えに反対するかもしれない。RVデータは、地球の未来の軌道上のある段階とし  
てこれをはつきりと示しているが、人間精神の稼働要素のいくつかに対する知識を深めていけば、  
論理的にも同じ結論に導かれる。問題は、ただ地球にはあまりにも多くの人々がいて、理論的に限  
られた積載力を維持できないということではない。地球は現在以上に多くの人間たちを支えること  
もありうる。問題は、ほとんどすべての人間が、少なくとも地球上のより裕福なエリート層と同等  
の物質的なライフスタイルを求め続けるであろうという、我々自身の人間としての性（ユル）にある。平均  
して、我々は短期間の物質的欲求を満たすために天然資源を利用し続けるであろう。意識の心とそ  
のサブスペース面との間の弱い関係が、我々のほとんどに選択の余地を与えず、我々に自分たちの  
物質的な感覚を通じた幸福を絶えず追求させるのである。地球の積載力があまりにも酷使され、そ  
れがつぶれてしまい、それによって、全部ではないが、人口の多くが滅びるまで、人間の大多数は  
際限なく自分たちの物質的な幸福を追求するためにもがき続けることになる。この時点で、いわ  
ゆる「マッド・マックス」のシナリオが発動し、人間たちは惑星レベルの環境破壊から生き延びる  
ことを考え始めるようになる。

（銀河系）連邦は我々を助けはしないであろう。連邦はグレイたちの自己破壊を止めさせなかつた  
のに、どうして人間に対して止めさせることがあろうか？ しかし、グレイ自身の過去の経験によ  
って、現在の彼らの進化の方向からどんなよいことが生じたのか、今は見てみるべきであろう。大  
いなる苦難が偉大さを生み、人間たちは重大な未来の運命をもつ。

たいいてい読者はこの近未来のシナリオを暗いものと受け止めるであろうと私は認める。しかし



本当は、種としての我々の未来は明るい。あまりにも我々の近未来の試練の深刻さに圧倒されてしまつて、この試練の先で我々の種族を待ち構えている栄光は認識されないと、ということがないよう私は説者を励ましたい。本書における私のRVのほとんどすべてを通じて、私は我々の現在の状況に固有の問題に焦点を絞つてきた。これらの問題には、環境問題、人間における心と体の弱結びつき、さらに我々自身、連邦、グレイそして火星人との間交流などが含まれている。実際、私が目撃したすべてのものは、それらの集合的な問題を解決しようとする多くの種族の一般的考えとどこか関係している。これは避けがたいことではあつたが、私の研究の視野の狭さがもたらす限界でもあつた。

しかし、現在のセツションは、我々にさらに先の未来を見るように命じている。西暦二三〇〇年前後には、我々人間は自らもたらした問題から相当回復しているであろう。集團としてのほうが、我々は種としてさらに成熟してよくなるであろう。我々は自分たちの注意を、我々をとり巻く外の世界や宇宙に向けるようになり、自分たちが出会ふ、かつての自分たちと同じように奮闘している生命を助ける仕事をするであろう。我々の精神的な展望は和らげられるであろう。我々は、広義な意味での愛し方を学んでいることであろう。

私は自分の精神を三〇〇年以上未来には送つたことはないが、あのように新しく賢い人間たちがぶらぶらして墮落するようなことはないだろうとひたすら思つている。以前のセツションで、連邦の人々は人間が正会員として組織に加わり、銀河系を通じて連邦の継続的拡張に助力することを望んでいると私は示唆した。私が現在のセツションで観察した生き物の意識傾向は、戦士タイプの銀河系探険家のそれではなく、生命を賛美する者のそれであつた。未来の人間が（積極的な意味で）

穏やかな存在となり、破壊性もはや彼らの心理を代表する特色ではなくなるとき、連邦と我々の自発的なきずなは完全なものとなるであろう。

これら西暦二三〇〇年の未来の人間たちは、西暦三〇〇〇年まで我々の銀河系を通して向上する、私が信頼するより進んだ人間たちの原形ではないかと思っている。我々は他の種族と交流し、そして、つねに生命の進化にのしかかる問題を通じて互いに助け合う。我々の前で展開する銀河系ドラマで我々が演じることになる役割がどのようなものか、私はかろうじて想像することができただけである。

私は自分の精神を送った場所と回数が少なかったことを覚って恥ずかしく感じる。我々人間が二〇〇〇年、またはそれ以上先の未来にかかわるようになることについては、まったく見当もつかない。我々はやがては連邦のリーダーとなるであろうか？ 我々は連邦が天の川の川のすみずみまで影響力を拡大することにはいつかは手を貸すのであろうか？ 我々は最後には他の銀河系に存在する我々の宇宙の領域にまで手を伸ばすことになるのであろうか？

私の遠隔透視の努力のすべてはいかなる疑念をも超えて、我々は本当に物質的存在（肉体）以上のものであるということを明示している。我々の結合された物質的・サブスペース的人格は、決して進化的前進を終える必要はなく、そのために、存在の未知の可能性を考へるとき、私は純粋な喜びを感じる。まさに挑戦と困難の向こうで、我々は、まったく文字どおり終わりのない時間を通じて拡がる、興奮と不思議に満ちた束縛されない未来に直面する。神は生命の贈り物をされたとき、出し惜しみはされなかった。

今後数年間で、我々人間は火星人と交流方法を学ぶことになるであろう。その後、グレイを含む

めた他の種族ともオープンに交流を始めることになろう。最後には、我々がこの惑星の生命力をもつて健康状態をとり戻し、自分たち自身の宇宙船を使用してこの惑星から飛び立つであろう。その他に、我々が何をするか私にはわからない。しかし、他のだれもがそうするように、私もそこにいることになろうし、ある日我々は集団として次に来るべきものをすべて発見することになるであろう。当面はささやかではあっても、我々の人生経験に立ち向かうことが最善である。今こそ恐怖とためらいをとり除き、火星のほうを見るときである。これは、より大きな銀河系への参加に向けた、我々種族の進化における次なるステップである。今、我々は火星人への話しかけを始めなければならない。

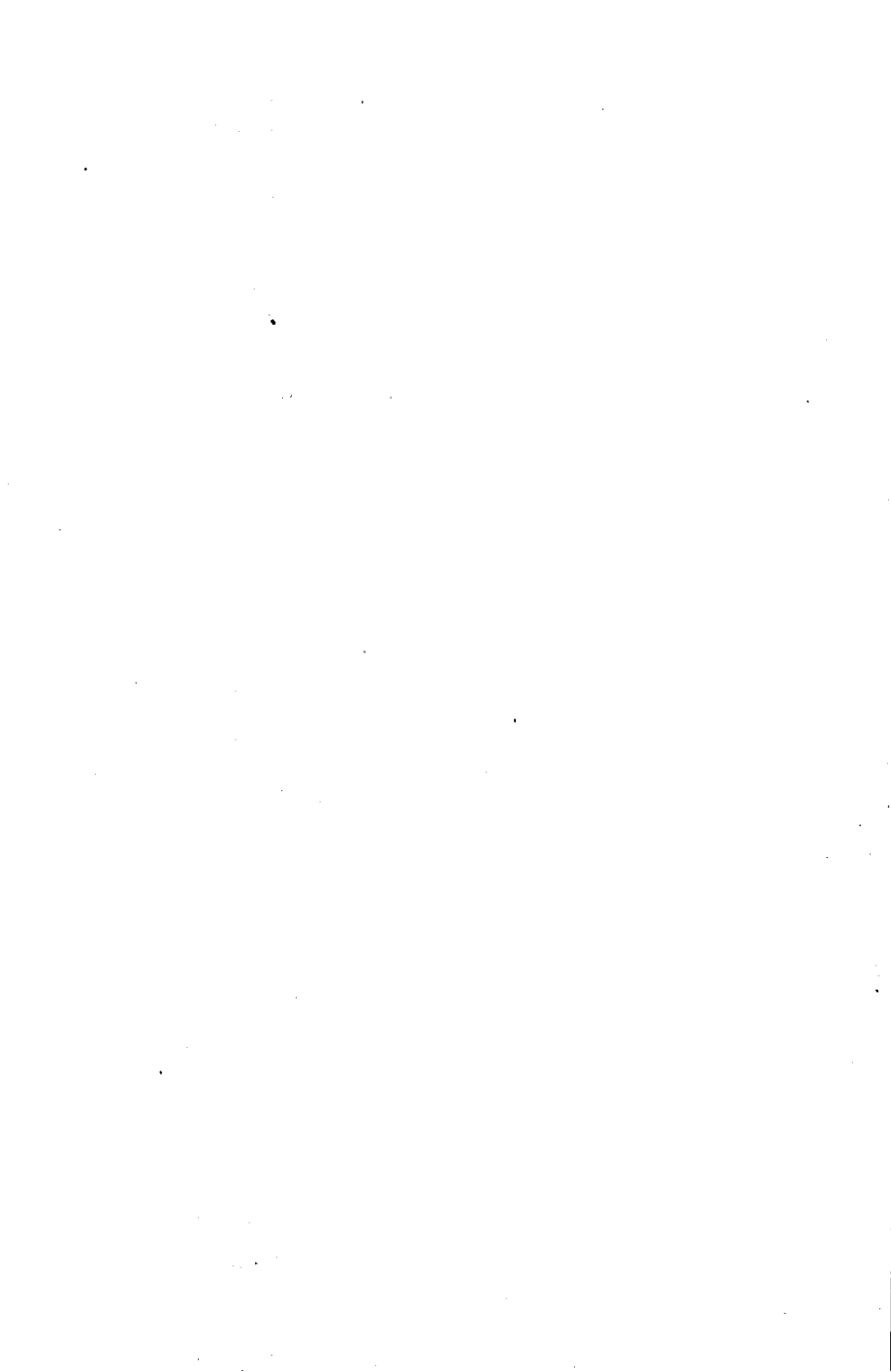
\*7 未来の出来事の性質を決定するためにR.V.データを利用すること、および我々の行動パターンを変えてその出来事が起こらない時系列線をつくり出すことは可能である。いい換えれば、現在と未来が交信することは可能である。しかし、現在の人間の遺伝子的機能不全——特に心と体の弱い関係性——を考えると、まもなく我々に振りかかる残酷な生態系破壊を避ける能力が我々にあるとは私には思えない。





**PART III**

**銀河系政治への  
人類のアプローチ**



## 第35章 外交官の訓練

もし人間が銀河系外交の領域に入ることになっているのなら、我々は（少なくとも）生命には二つの形態、すなわち物質的なものとサブスペース的なものがあることを完全に認識しなければならぬ。我々はその二つが合わさった生き物である。我々の物質的な形態（肉体）にはサブスペースの生命が住んでいる。肉体的な生命形態は最後には死ぬという意味で、一時的な生き物である。生命形態のサブスペース的側面は、見たところ永遠に生き続ける。我々の「魂」は単に、我々が肉体化する前にすでに存在していた我々のサブスペース的自我であり、肉体が死んでその衣服を脱いだあともそれは生き続けるであろう。

進歩した知覚力をもつ種族はこのことをすべて理解し、しばしば物質界とサブスペース界の間のギャップを埋めるためのテクノロジーを使って、隔てられた物質界とサブスペース界との間に積極的なコミュニケーションをとる。私が観察してきた進歩した種族は、彼ら自身の肉体的・サブスペース的神経系統を使って、双方の領域を同時に知覚することができる。人間はおそらくその独自の

遺伝子構造のため、この能力を開発する訓練を積むことは可能であるが、本来的なものとしては通常この能力をもっていない。的確で専門的な訓練は高くつくが、明確なデータ収集とコミュニケーションを求める人々には、今日利用できるすべての訓練を受けるようにとだけ私は助言しておく。銀河間の外交に従事する人間たちは、そのような訓練を受けるのに理想的な候補者であろう。他に、科学者や歴史家たちのグループも、この訓練から利益を得るであろう。

本章では、物質界とサブスペース界との間の相互コミュニケーションに必要とされる全コースを概説する。コースは明確な三つのパートからなる。最初のパートは、特定の瞑想技術の習得とかかわっており、さらに先に進みたいだれに対しても、最低限の入門レベルの訓練としてそれを推薦する。また、進歩したETや未来の人間たちに向かって自分自身の個人的成長を求める人々に対してもそれを推薦する。この最初のレベルの訓練に関しては特に警戒する必要はない。実際、もし子供たちがこのレベルの訓練を求めれば、レーザー砲と対決するよりも、もっと「面白い」ことを認め、それは歓迎すべき傾向であろうと私は思っている。

第二の訓練レベルは、生徒たちに変容意識を紹介するために特に計画されている。アメリカ軍は遠隔透視（RV）の訓練にはそれが必要不可欠であると考えた。この第二の訓練レベルは、モンロー研究所によって開発されたヘミシンク技術による作業とかかわっている。

第三の訓練レベルは、科学的遠隔透視（SRV）の正式の指導である。

ここで読者にぜひ理解しておいていただきたいのは、私がここで仲間やグループと見なした人々は、公式あるいは非公式に以下に概説する完全な訓練プログラムに対してお墨付きを与えているわけではないということである。さらに彼らは、自分たちの成果がUFOや宇宙人を調査するのに有



効であるとは宣伝しない。この訓練プログラムは私自身の研究の成果である。これらの仲間やグループのだけれも、人々を銀河系外交官にしようと訓練してはいない。しかし、私の経験では、彼らが教えることは、この目的を達成するのに効果的な方法であり、私の方法と結びつけられることを示唆している。しかし基本的には、これらは私の考えであり、実際の訓練を行う当のグループの考えではない。

私が以下に概説する研究コースの各パートは、互いに補い合っている。しかし各パートは交じり合わずに、互いに独立して実行されなければならない。各パートはそれぞれ違ったものを達成し、それぞれのすべてが重要なものである。私の考えでは、研究の全コースにまったくリスクがないわけではないと認識することも、やはり重要なことである。ある個人が、私の概説する訓練を積むことによって逆の影響を受けることもありうることであり、これが頻繁に見られることなのか、めつたにないことなのか私にはわからない。そのため、この全体のコースは、各生徒の発展に関係したすべての問題に適切な心理上の監督を与える機関によって支援されている個人用に計画されている。そのような監督がない場合、心理的な問題は起こりうる。この訓練は人々に、一般の人生体験ではふつうは得られない意識の、あらゆる種類の活動と領域を開かせる。たとえば、ある生徒はテレパシーで受けとる思考がどのように感じられるかを覚るとき、ただ深刻に動揺してしまうかもしれない。

適切な指導がなければ、おそらく自分の思考のすべては、実際は不可視の存在によるテレパシーによって操作されているのではないかと考えて、その生徒は妄想狂になってしまうかもしれない。人々はこれに対して準備しておかなければならない。訓練を受けたあとは、適切な訓練を受けた監

督者が特に感受性の高まっているときにカウンセリングを行えるよう、彼らは近くで注意深く見守られていなければならない。

まったく現実的な意味で、火薬の調合法を記述する百科事典の一ページのように、訓練プログラムの記述を考えていただきたい。だれもがこの調合法を習得することができるが、適切な監視がなければ、つねに何人かは自宅の地下室で火薬を混ぜようとして、不注意にも自分の頭を吹き飛ばしてしまうのである。百科事典にはこの災難に対する責任はない。なぜなら、我々が自由な社会で暮らすことを続けるつもりならば、知識自体は共有財産からとり除くことはできず、またそうするべきでもないからである。同様に、私がここで概説する研究コースを追求するだれもが、責任ある監督者をもつべきである。仕事のひとつとしてこのコースを奨励するか必要とする、いかなるグループ、会社、機関も、全体のプログラムの費用に監督費を加えなければならない。一般的にこの監督は、実際に訓練を行うグループによって与えられるわけではない。訓練生とその雇用者はこれを満たさなければならない。

この研究コースにしたがうどんな個々人も、自らの責任でそれを行う。私は訓練された精神科医でもなければ、そのような研究コースがその人の精神的幸福に危険をもたらすような個人心理の特徴を識別できる訓練も正式に受けてはいない。それにもかかわらず私は、私の知識の及ぶ限りできるだけ安全にそれをつくろうと考えて、このコースを組み立ててきた。現時点のこの地球で、私以上に体系的にこれらの問題を探求してきた者はだれもいないと私は理解している。

コースの開発に際しては、自分の責任でそれを行った。私には自分の前進を観察してくれる精神科医がいなかった。しかし他方で、私は自分の意識の成長に関してはとてども慎重であった。最初に

超越瞑想（TM）を学び、それは自分の心をサブスペースの複雑さに慣れさせてくれた。そしてこれは、TMシディー・プログラムの訓練完了をもって終わった。続いてモノロー研究所で利用できる成果を体験し、さらにSRVを学んだ。

しかし、この段階的な成長をもってしても、私の体験は心底私に動揺を与えたのがわかった。わずか二年間で、私の世界観を構成した表面的なすべての信念は崩壊した。我々は宇宙の孤独者ではなく、非物質的生き物たちが私とこの次元の現実を共有していることを学んだ。地球の近隣でET文明が生まれては崩壊したこと、そして、ある者は、通りを横切るように簡単にタイム・トラベルしていたことも学んだ。

私は、神とすべての宗教に対する理解を再定式化しなければならなかった。私は自分の前に開かれた現実と直面するために、どれだけ適応し、成長しなければならなかったことか、それを人に語ることは不可能である。

このように、意識の成長に対する私の取り組みは保守的であり、プログラムは個人的な発展において段階的体験を可能とするように構成されている。この安全な道筋はまた最も効率的な道筋でもある。コースは、自分自身のサブスペース存在を安全に直接的に体験することに始まり、テレパシーや体外離脱状態といった概念の経験的自覚をへて、SRVの専門的なプログラムで終了する。最後に一言。私は各パートが連続するようにコースを構成したが、これが絶対的に必要なことであるのか私にはわからない。

ただ、ひじょうに重要なことであると思うのは、たとえ、SRVの訓練が最初にあるとしても、生徒たちは適当な期間において三つのすべてのパートを完了することである。

## 銀河系外交官のためのコース

### (パートI)

生徒たちはTMとTMシディー・プログラムを学ぶよう奨励される。瞑想にはたくさんの方法があるが、ほとんどの人は実際には非物質的な自己を直接体験させてくれる瞑想家を師にもっていない。瞑想としてとらえられる種の活動は、単に精神の想像的産物であるか、さらに不吉なことに、不幸な状態に導きうるストレスが伴う訓練である。TMや、その上級編であるTMシディー・プログラムは、個々人に、自らの全自我を直接自覚できる状態に導くよう正確に設定されている。訓練は本当にストレスのないもので、精神的なバランスを向上させ、人生により満足感をもてるようになり、生理機能や直観力を高めるといった、科学的に十分実証されたさまざまなプラスの副作用をもつ。

TMの教官はひじょうに訓練されており、だれが教官でどこで教わったかということに関係なく、コースは同一である。指導基準やコースの有効性は、一貫性が主要な関心事であるより大きなプログラムにとって基本的な要素である。

TMの組織は、銀河系市民へと進歩する個々人を助けるためにTMを利用しようとする私の提案には賛成しないかもしれない。むしろ、TMを実践する人々の意識は、進化したETや未来の人間たちの意識にかなり似た雰囲気をもってしていることを、私の個人的な観察は示唆している。公開講演

において、TMの教官たちは伝統的にTMの生理学的利点に焦点を合わせている。おそらくこれは、非物質的生命にかかわるより直接的な指導に対して、過去に人々から異議がもち上がったという彼らの体験から来ている。我々の社会においては、TMの実践によってすぐに自分自身の魂を意識するようになるかと語るよりも、血圧が改善されるというほうが問題が少ないのである。

それにもかかわらず、マハリシ・マヘーシュ・ヨギの著作は、これらの問題についてひじょうに明確である。マハリシによれば、物質的であろうと非物質的であろうと、すべての生き物は相対的と呼ばれる存在領域に住んでいる。この相対的な領域にはさまざまなレベルがある。マハリシの視点から推定すると、物質的レベルの存在とサプスペース・レベルの存在の両方とも相対的な領域内に住んでいる。マハリシはまた、存在の相対的レベルにあるすべてのものが生まれる、彼が絶対と呼ぶ領域を確認している。さらに、各人の存在の分離した二側面（相対的と絶対の両方）を統合する必要について一貫して言及している。もしTMの教師が指導中にこれを強調しないとしても、それは彼らの過失でもなければ、彼らが何かを隠しているわけでもない。この全体性を直接体験することによって各自の完全な自我について学ぶことは、だれにとっても必要なことである。TMは経験的な実践である。たいていの人々の通常の知覚は、自分たちの物理的な感覚によって制限されているので、サプスペースと絶対の側面についての話題は、瞑想体験に無縁な人々にとっては意味をなさないことである。

TMによって、ある者は朝と夜に二〇分間瞑想することによってその目を「区切る」。瞑想するのは簡単なことであるが実践は難しく、瞑想の仕方を、資格をもった有能な教官から学ぶことは絶対に必要である。さらに、TMコースは、訓練が適切に継続的に行われることを保証する後続セツ

シヨンを含んでいる。

一度私はある女性に、自分で自宅でただでできるのに、どうして瞑想の指導にお金を払わなければならぬのか尋ねられた経験がある。最初、私は彼女が理解できなかった。彼女は私に、なぜこの指導のためにお金を払う必要があるのかと尋ねているものと思った。TMの教官は生活のためにこれを行っていて、他の人々と同じように自分自身をまかなっていかねばならないのだ、と私は彼女にいった。しかし、あとになって、この人物の質問は本当はまったく別のことに向けられていたことを知った。彼女は、瞑想とは自分自身、または本で理解できるものと思っていたのである。そのため、私は彼女に間違った返事をしてしまった。

本書の読者は、瞑想の適切な訓練は自力で理解できるものでも、本を読んで理解できるものでもないことを理解しなければならない。TMのコースは、数世紀に及ぶ試行錯誤を通じて発展している。TMは単純ではあるが、高度に洗練された慎重を要する訓練である。創造的に独自の手順を案出しようとする試みは、すでにどこにでもスポーツカーが存在する時代に、車輪をふたたび発明しようとするようなものである。

TMとTMシディー・プログラムの訓練は、RVとはまったく異なることを読者は理解すべきである。RVでは、別の場所や時間からその場所とサブスペースの精神的関係を利用することで、直接知識を得る。これは、我々もまたサブスペースの生き物であるがゆえに可能である。しかし、TMとTMシディー・プログラムで、この関係を利用しようとする試みはない。瞑想しながら、人は経験的にただ自分の完全な自我——サブスペースと肉体的な面の両方——に気づくことを学ぶ。そのため正式な瞑想は個性の発展を導き、自らの全体的自我に無知ではないという意味で完全な人格

を目指す。

この経験的な知識により、人は幸福や完全、満足といった内なる感覚を体験するためには、触覚、視覚、嗅覚、聴覚および味覚の満足を通じた物質的喜びをもはや追いかける必要がなくなるため、人生において大きな個人的満足が得られるようになる。サブスペースの領域は、これらの感覚を通しては直接近づけないため、物質的な追求は最終的に失敗に終わることになる。一日に二回、もう一人の自分を直接体験することは、ひじょうに心を落ち着かせ、それはあとの物質的体験により満足を与えることができる。というのも、これらの体験はもはや、サブスペースとのコンタクトをひそかに熱望することで潤色される必要はないからである。

銀河系外交におけるこのコースのために、生徒たちはTMとTMシディー・プログラムの両方を学ぶべきである。それらは、世界中のたいの主要都市と多くの地方地区のTMセンター（最近拡張されてマハリシ・ヴェーダ大学と呼ばれる）で教えられる。便利なことに夜間や週末のコースがある。TMは完全なコースで約一週間を要するのに対し、TMシディー・プログラムはもう少し長くなる。

TMを学んだのち（シディーが完了するのを待つ必要はない）、学生たちはマハリシによる二冊の本を読み始めるべきである。最初の本は、すべてのTMセンターとたいの本屋で手に入る『存在の科学と生の技法』である。一日二〇ページ以内のペースで、ゆっくり読むよう助言する。この本の重要なポイントは一見ただけではとらえどころがなく、ありふれているように見えるので、さっと読んだのでは失望するかもしれない。二冊目の本は、『バガバッドギター』の最初の六章のマハリシによる翻訳と注釈である。両書ともに、人間存在の合成的特質「肉体的なもの」とサ

スペース的なものの「一体化」について豊富な情報を含んでいる。

## 【パートII】

このパートには二つのセクションがある。最初は、バージニア州フェアバーにあるモンロー研究所から販売されている三六本組みのテープを自宅で聞くことである。テープは一般に「入門体験編」と呼ばれていて、徐々に生徒たちをテレパシーの段階的体験、スペースとの交信およびエネルギー操作の技術へと導くものである。各テープを朝一回と夜一回の計二回聞くことを勧めたい。テープは朝の瞑想前には聞くべきではない。瞑想は一日の最初に行うべきである。しかし、瞑想後であれば、いつでも都合のよい時間に聞いてよろしい。

一日に一本のテープを（二回）聞くというこのルールにしたがい、休息と避けられない状況も考慮して、自宅コースは約二、三カ月で終えるべきである。その後、特定の二本のテープを一日に二回、さらに三、四週間、聞くよう勧めたい。二本目のテープを聞く前に、一本目のテープでの体験を消し去っておくために、少なくとも二、三時間は間をとるべきである。そこで、両方のテープを聞くためには朝と午後（または夜）に予定を組むことが理想的であろう。この二本のテープは「ミッション12」と「ファアー・リーチス」と呼ばれており、両方とも入門体験編の家庭学習コースでの三六本組みテープのコレクションの中に含まれている。私自身の個人的体験に基づけば、ミッション12のテープを繰り返し聞くことはテレパシーによる交信能力の開発に役立ち、ファアー・リーチスのほうは寛容意識に共通する極性移動に直感的に慣れるのに役立つ。

二本のテープを一カ月間十分に聞いたあと私が推薦することは、それ以上テープへの依存度を高



めないように、すべての家庭学習テープの使用をいっさい止めることである。さらに、これらのテープを繰り返し使用する間にも精神的なストレスが高まるようであつたら、すぐにテープの使用を止め、コースの残りを進めるかどうかをカウンセラーと相談すべきである。

訓練の二番目のセクションは、実際にモンロー研究所を訪問して、〈入門航行プログラム〉コースをとることを含んでいる。このコースで教えられるより高いレベルの意識は、家庭学習テープでは得られない。こうした高次の状態を体験するには、当研究所の訓練されたスタッフによる監督が必要である。したがって私は、上級テープの一般への販売が制限されていることに賛成する。たとえば、高次の意識には膨大な数のサブスペースの生き物が住んでおり、注意深く彼らに接することが大切である。それは、その生き物たちが危険であるというのではなく、彼らとの遭遇がある人々を驚かせるかもしれないということである。一般的に上級レベルの意識には、死後まもなく体験する意識を含んでいる。モンロー研究所での研修コースでは、この最終の旅の前に、十分にこのレベルの体験方法を安全に教えてくれる。

参考文献として、私は学生たちにロバート・モンローによる三冊の本を読むよう勧める。それは、『体外離脱の旅』『通かなる旅』そして『最終の旅』である。この三冊はすべて最寄りの書店で購入でき、当研究所に注文することもできる。

## パートⅢ

このコースのパートⅢは二つのセクションからなっている。最初のセクションは、資格をもつ教官によって教えられる科学的RVの一週間集中コースで構成される。かつての軍の遠隔透視者たち

が、現在は個人的にRVの陸軍版を教えている。さらに、ジョージア州アトランタでSRVを教えている学校である遠隔透視研究所も多数の生徒を効率よく指導することができる。遠隔透視研究所はまた、モニタリング・プログラムと教員訓練プログラムも提供している。

次に、資格あるモニターは各生徒と共同して、学生が計画したプロジェクトを推し進めるべきである。モニターは、生徒が最低一〇から一五のモニターされたセッションを体験するよう手助けする。セッションが遠隔モニターか近接モニターかは関係ない。広範囲に及ぶ数々のSRVセッションをモニターとともにするこの経験は、将来の科学的・外交的仕事のために要求される高度のプロ意識を生み出すことになろう。

### なぜ全体の教授科目を学ぶのか

明確に識別可能な物理的ターゲット（たとえばホワイトハウスの大統領執務室）を標的にする際、RVは容易に理解可能な実在物に関するデータの流れを生む。そのようなターゲットについて情報を集めることは、一般的には簡単なことである。無意識の心はターゲットの現場に自分を置き、その人がそこで見るものを見ることになる。

しかし、ETをターゲットにする場合はそんなに簡単にはいかない。SRVデータはつねに事実に基づいているが、ターゲットがより深い概念——人が情報を必要としていて、無意識がこの情報の要求を理解しているあるものについて——を示すことがしばしば起きる。そのような状況においては、無意識はターゲットの背後に存在する隠された問題へ答えるデータをしばしば与える。その

ような場合、透視者は、そのデータをより広い視野に置くようではなくてはならない。無意識は、物理的宇宙とサブスペース宇宙の両方におけるすべての情報を入力するため、透視者が意識に対して柔軟な理解を示さなければ、無意識によって与えられたデータは不可解なものになる。RVのすべての情報は、意識に対する理解力の範囲内で得られる。無意識がまったく字義どおりのものであったら、不慣れた透視者には、そうしたデータは象徴的もしくは何か寓意的なものと思えるかもしれない。そのため、データを理解するために、人は進んだ意識をもたなければならず、この要求から逃れられないのである。

## 第38章 人間政府の介入

### なぜ政府は沈黙を守っているのか

UFOに関心をもっている人々がだれでも抱く不満の一つは、その問題に関する政府の沈黙である。この人々をさらに激怒させているのは、政府がわざとUFO報告を嘲笑し、抑圧し、無視しているように見えることである。私もまた政府が、投票を行った有権者に対してこの問題に関する情報を公開せず、選ばれた者としての義務を果たしていないと感じたことがある。しかし、私の気持ちには変わった。大事なことは、この問題に関する私自身の方法を述べることだ。

読者には、私が政治学の教授であるということをまず思い出していただきたい。その分野における私の専門の一つは世論と大衆行動に関するもので、それはETやUFOのテーマについての政府の関心事に直接関係する。

確かに政府は、地球上および周辺での多くのE T活動に気づいている。情報公開法に基づいて米政府が公開した情報に焦点を合わせた本が何冊か出版されている。しかし今さら、政府がE Tが地球で活動している事実気づいていることを確認する必要などない。

私自身、何人かの退役した軍の高官たちと話をしたことがある。彼らは自分たちがひそかにU F Oに因するハイレベルの情報収集活動にたずさわってきたこと、そして政府はこの問題に最大の努力を払っているがあまり成功していないことを率直に述べた。さらに私は、民間ジェット機がU F Oに追いかけられたという体験を覚えてくれた航空会社の乗務員と話をしたこともある。ある場合には、パイロットたちは着陸時に安全保障担当の政府高官たちに「迎えられて」いる。パイロットたちは聴取を受け、他のだれにも口外しないよう厳しく口止めされている。特定のパイロットたちは命令にしたがわなかったが、他の者たちはしたがっている。

政府はE Tについて知っているが、自分たちの国民には告げていない。なぜそうなるのであろうか？ 自分の国の政府を例にとって、もし自分が合衆国の大統領としてそのような状況に直面したらと、注意深く考えてみる必要がある。あなたはE Tたちが許可を求めることなしに、勝手に国家の領空を侵犯していることに気づくはずである。さらに、少なくともあるE Tたちは、あなたの国民の多くに対して不愉快なことを行っているにもかかわらず、あらゆる軍や諜報組織をもってしても、政府はそれを止めることができないのである。まったく何もできないのである。あなたはどうするであろうか？ 全国テレビでE Tの到来を告げるであろうか？ 「彼らはここに来ています。好きなようにパニックになってください」という以外に何がいえるであろうか？

訪問者たちがやって来ており、政府は彼らと外交関係を開始しようとしていると語ってもよい。

しかし、もしE Tたちがそれに応えなければ、どれだけの間これを押し通せるであろうか？

E T問題について広く国民に知らせなかつたことは正しい戦略ではなかつたかもしれないが、政府がその問題により巧みに対処できるチャンスを得るまで、それは最小限、防衛的戦略ではあつた。もし成功の望みがいくらでもあるのであれば、どの国の指導者も失敗を告げたくはないものである。

何年にもわたつてどれだけのことを政府が知っているのか、私には正確にはわからない。しかし国家の指導者たちは、我々がR Vを利用して収集することができた広汎な情報まではもつていないことを私は知っている。そのため、本書に収められた情報は、人間とE T間の交流において新しい一步を築くのに役立つであろう。しかし、E T現象にかかわる過去の政府の政策について、新旧の政府役人たちをことさらに攻撃することで利益は得られないことはわかっている。間違ひはあつたかもしれないが、状況を考えると、おそらく完璧な政策を望むほうが非現実的であつたらう。

他方で、否定というこれまでの政策に対して、変化を真剣に考える時期が来ていると私は強く信じている。歴史的に、E Tとの交流に関して人間はつねに受動的であつた。我々は宇宙船の低空訪問飛行を目標しており、仲間のだれかがアブダクト（誘拐）されたかもしれない。しかし、E Tはつねに我々のところにやつて来た。我々はただそれをじつと見つめるだけであつた。今や我々は、星間生命の研究において受動的な段階から積極的な段階へと移行できる能力がある。この能力によつて、我々はより大きな（星間）社会の中に責任をもつて参加する必要があるという、新たな理解に到達しなければならぬ。ちやうどE Tたちが我々の社会を研究したように、我々は彼らの綿密な調査を始めることができる。さらに、E Tについて我々自身の仲間を教育することは、相互の外

交関係の確立に向けての第一歩となる。

## 火星

我々の政府の指導者たちは、宇宙人たちとのコンタクトに積極的に参加するという次のステップに深い関心を寄せているに違いない。私はすでにこの次のステップが（グレイ）ではなく、生き残った火星人との直接の物理的コンタクトを伴うであろうと主張してきた。我々はいつかもつと満足していく方法で、直接、グレイとともに働くようになるであろうが、その日は今ではない。現在、我々が火星人との交信に回路を開くのを止めるものは何もない。

まず、火星人とのどんなコンタクトも、部分的には我々の惑星政府の指導者たちの認可を受けなければならぬ。たとえこの政府が現在どんなに弱々しいものであろうとも。国連の指導者たちはこれらのコンタクトに関して少なくとも相談を受けなくてはならない。さらに、もし実際にコンタクトを行う国家や組織が、すべての交信を直接に国連安全保障会議に関係づけなければ、火星人とのコンタクトの試みは成功しそうにない。そのような火星人との会合がとり決められたら、ただちにすべての加盟国に通知されなければならない。

これは、成功への不可欠な要素であり、私自身の道義的立場からいっているのではない。火星人たちは地球へ来たがっている。もし彼らが全惑星の代表者たちとともにやっつけていける保証をもてなければ、自分たちが存在することを人間に知らせようとはしないだろう。気まぐれでしばしば暴力的な人間種に対する彼らの最善の防衛は、つねに沈黙と秘密厳守であった。もし、人間の大多数に

よって受け入れられるという彼らの目標を達成する適当なチャンスがなければ、彼らはその防衛的態度を維持するであろう。彼らは、地球上の多くの国家主義的派閥の一つの側につくという第一印象を与えてしまつては、将来この地球惑星において受け入れられる望みが薄れてしまうことをよくわきまえている。

しかし事実上このことは、火星人に出てくるよう説得できる十分な政治的・科学的方策をもつ国は、ただ一國しか地球上にはないことを示している。私の考えでは、その国はアメリカ合衆国である。私のRVデータは、火星人との最初の公式なコンタクトは電波交信の利用を伴うことを示唆している。合衆国にはすでにそのようなプロジェクトに必要とされる多くの装置があり、必要ならば、付加的な通信装置を供給できる他国の支援も得ることが出来る。火星人との開かれた対話を試みる際に、電波望遠鏡は火星と月の両方に向けられることが可能である。私のデータでは、月に本拠を置くどんなETたちも、この対話には沈黙を守るであろうが、火星の火星人たちはどんな地球からの送信に関しても月在住のETたちと協議するであろうから、おそらくその送信回路に彼らを含めることが賢明であろう。

私は、合衆国大統領が、地球の人間たちと選ばれた火星人代表者たちとの間に直接の会話を始めることをすすめる火星への送信を許可する（国連の承認とともに）よう提案する。その送信では、人間たちは相互の関心事について火星人たちと協同していく考えを温かく受け入れる用意があると伝えるべきである。メッセージはまた、火星人による迅速な回答は、人間と協力的な隣人となることに彼らが乗り気となっていることを示し、これは二つの惑星文化間の将来の関係にとっても役立つということを示唆するものとなる。これは、いささか彼らに無理を強いる洗練された外交的方法



かもしれないが、今のところ、こうしたやり方は欠かせないのかもしれない。火星人たちは秘密厳守の習慣を築いてきており、この習慣を破る努力と直接人間と協同することに価値があるということを、彼らに語らなければならない。

大統領がこの送信を許可するかどうかに関しては疑問が残る。送信の時期は今である、と私にははっきり感じられる。もし合衆国の現在の大統領がその送信を許可すれば、それは都合のよいものとなる。しかし、送信の時期にだれがホワイトハウスの主人であるかに関係なく、一つ確かなことがある。地球を本拠地とする人間と火星人との間の有効なコミュニケーションに着手する指導者は、数千年間は続くであろう人間文化の発展に大きな衝撃を与えることになるであろう。

一般に、地球外文明とのコンタクト以上に、人間の集合的進化の行方に影響を与える出来事は他にはないであろう。惑星間の対話の開始を求めて火星に送信を行うような並外れたことをあえて買ってしまう人間はだれであれ、地球ばかりか全銀河系を通じていつまでも好意的に記憶されるであろう。最終的に彼らは、正規メンバーとして銀河系コミュニティに加わられるほど今や人間は成熟しているというしるしを、待機中の銀河系コミュニティに送ることになるであろう。そのようなメンバー資格は贈り物として与えられるのではない。それを獲得するのに必要なことは、我々がだれであるのか——生命で満たされた宇宙の中の複雑な生き物——という現実を受け入れるための集合的な成熟である。

この送信と火星人の返答に続いて、まだこの地球に到達していない火星人たちの受け入れを計画し始める必要がある。私の提案は、ニューメキシコ州の現在の火星人地下基地を検査・収容センターへと変えることである。火星人の医療技術は、彼らの到着が地球に新しい病気をもたらすこと

はないと保証できるほど、十分に発達していると私は確信している。実際、もしそうしたことが起こりうるのであれば、多くの火星人たちがすでにここにいるのだから、それはずっと以前に起きていたであろう。しかしこれは、人間たちが火星人の医学知識を黙って受け入れるべきであるという意味ではない。火星人の生理学や心理学の複雑さを十分に自覚するようになることは、人間の医者たちにとって重要になるであろう。そのため、地球人の難民を検査するのとほとんど同じ方法で、我々は火星からの難民たちを検査する必要があるであろう。

市民権の問題も生じるであろう。まず、すでに地球で生まれた火星人の子供たちは生まれた国の市民権をもつべきである、ということが認識されなければならない。ニューメキシコ州のサンタ・フェ・ポールデイの地下の洞窟内で生まれた火星人たちは、自動的に合衆国の市民である。さらに彼らの近親者（たとえば両親）も、合衆国において永住の権利をもつ。同様に、国連は、他国の領土内で生まれた火星人にその国の市民権を与え、彼らの親類にも永住権を広げて与えるよう各国政府に促さなければならない。現実には、国連は地球出身の子供をもたない数多くの新しい火星人の到着を調整しなければならない。また、この新しい希望に満ちた旅行者たちを永久に住まわせ、受け入れる計画を進めるために、我々の世界政府は協力し合わなければならない。

地球における我々の存在のこの新しい段階において、人間の行動がどれだけ重要であるか、強調してもしたりないほどである。文字どおり銀河系全体が、自分たちの近隣の惑星に住み、助けを必要としている人々に対して、我々人間がどのように振る舞うかをじっと見守っている。我々は必ずしも気づいてこなかったが、我々の進化の歴史の大部分は宇宙人たちの手助けによっている。我々が直面する現実の試練は、我々が自らを超えて、本当に困っている他人に対して同情をもって振る

舞えるほど十分に成熟しているかどうかである。我々は、過去一〇〇〇年にわたる星間文化交流においてつねに行われていたこと、すなわち進化の闘いにおいて、他の種族を救援する行為に参加できるであろうか？

私のRVでは、今の我々にはこのレベルの利他的な行動が可能であることを示している。私はこの単純だがきわめて重要な情報に対する自分の知覚が誤っていないことを、心から希望する。

## グレイ

私の意見では、〈グレイ〉たちは多数の人間たちと肉体的に協同する準備はまだできていない（すなわち、ある人間が別の人間と交流するようなレベルで）。彼らのテレパシー能力はきわめて進んでいて、我々の激しい感情に対処するのに、彼らは大きな困難を感じている。さらに、我々がグレイたちのまわりにいるとき、我々の感情は歯止めのないパニックに容易におちいりがちであり、それで、なぜテレパシーに敏感な生き物が抑制の効かない環境で、我々のそばで働くことに不安を感じるのかが理解できる。

しかしこれは、人間が着手したグレイとのコンタクトに他の方法を用いるべきではないというのではない。もし我々ができるだけ早くそのようなコンタクトを始めれば、それは我々自身にとってもグレイたちにとっても利益となる。私が勧めるのは、人間の外交官たちがグレイとの交信目的で、幅広くSRVを利用し始めるべきであるということである。さらに私は、今日地球の近くで活動を行っているすべての進化的な種を超えて、人間たちがサブスペース界と物質界の両方のグレイとコ

ンタクトを始めるとを提案する。

さまざまな経験から、グレイたちはサブスペースを介した人間のコンタクトにたいへん寛大であることがわかつている。これは、人間にはこのサブスペースとの接続を介して、直接グレイたちと働ける能力があることを意味している。この能力は特に有効で、グレイたちは十分な意識をもった人間たちと仕事をともにする経験が必要のため、秘密の方法でのみ人間とかわつてきた彼らの過去の行動パターンを勇氣をもつて崩すことができる。グレイたちの多くの努力によって我々が利益を受けているのと同じくらい、彼らは自分たちの問題で我々の助けを必要としている。このことがすぐに思い出せなければ、重要なRVデータを思い出してほしい。それによると、人間がせわしく破壊し続けている地球環境から、グレイたちは植物と動物の遺伝子サンプルを採取し、その貯蔵に専念しているのである。のちになって我々がこれらの貯蔵された遺伝子ストックを利用して地球の再建を始めるとき、我々は彼らのこうした努力にとても感謝することになるであろう。人間とグレイの関係はひじょうに複雑である。彼らとさらに開かれたコミュニケーションを図る能力の改善のためには、辛抱と持続が必要とされる。

おそらく、人間とグレイとの間のコミュニケーションを向上させる最善の方法は、グレイ自身の種の進化に関連する遺伝子プロジェクトで、どのように彼らを助けることができるのか彼らに尋ねるために、SRVを使用することであろう。過去、このプロジェクトには、意識的で自発的な人間の助けは存在しなかった。グレイたちは、サブスペース生命体の複雑さについて、ほとんど理解していない人間たちとともに仕事をしなければならなかった。

コミュニケーションにおけるそのような試みは、すぐにはグレイたちの返答を引き出せないであ

ろうと私は思っている。ちょうど、我々が彼らを助けられるかどうか最初の人間外交官が一人のグレイに尋ねるそのときに、彼らの宇宙船が国連ビルの隣に着陸するようなことはありえないという意味で。しかし、たび重なる努力は大きな見返りを生むであろう。グレイたちは、我々が十分に成熟して彼らと冷静にコミュニケーションをとれるまで、長い間待ち続けてきたことを我々は自覚する必要がある。

## 銀河系連邦

グレイたちの場合と同じく、銀河系連邦における人間の永久代表権を確立するために、我々はSRVを利用する必要があるであろう。人間が連邦当局とコミュニケーションをとれる物理的な手段があり、これはまもなく使用されると私は確信している。しかし、SRVは一つの重要な理由のためにここで必要とされる。銀河系連邦は本来サブスペース組織なのである。

ただの肉体的な存在には、銀河系の統治は事実上不可能である。その理由は、肉体的存在はわずか短い期間だけ物質世界に参加する一時的な生き物であるからである。さらに、肉体的存在の大半の人生は幼年期と老齢期に消費され、たとえ長寿の人間の人生においても、大人の生産性は実際にはひじょうにわずかな年数にしか得られない。他方で銀河系は、一人の人間の寿命と比較すると、圧倒的に長いとしかいいようのない時間枠において進化する。一つの銀河系生命の進化を監視し、促すために、その生き物たちは、いつてみれば七〇年よりもはるかに長い鋭敏な記憶をもっているに違いない。たとえ一種族の進化のドラマでも、しばしば数千年が費やされ、もし連邦がその種族

への助力にたずさわっていれば、そのプロジェクトに関係する生き物たちは長期間健在である必要があるであろう。肉体的存在にはこれではできない。

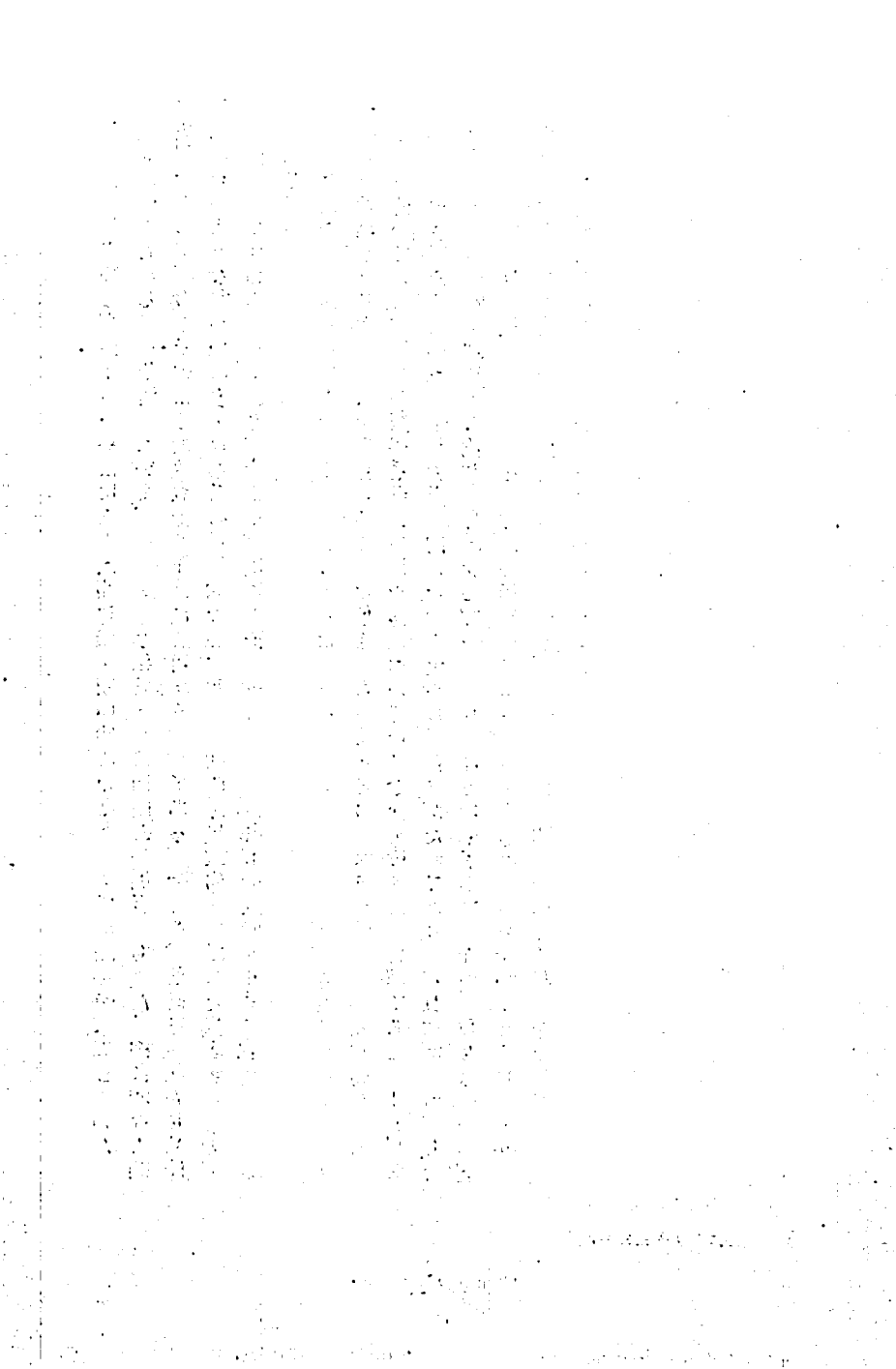
肉体を伴う人生は、我々すべてがかかわるものである。時々それは、ある意味でサブスペース存在がさらに成長する方法を学ぶために通う学校にたとえられる。しかし肉体を伴う人生は、サブスペース生命体にとっての学校どころではない。それはまさに存在の真の次元である。肉体的存在とサブスペース存在との主な違いは、単に、肉体を伴う人生はだれもが一時的にしか生きられないということにある。それは一時的な生への参加かもしれないが、それにもかかわらず、それが人生の本当の筋道である。

銀河系連邦を物理的宇宙の中に止めることは、多くの種族と連邦にとって自殺行為となりかねない。物質的・社会的進化の気まぐれがあった場合、どのように物質的社會が変化するのか、だれが予言できるであろうか？ ある日、その物質的社會は他の社會への助力を支持するかもしれない。しかし、当の社會の經濟が一年うまうまいかなければ、彼らはすぐにも考えを変えるかもしれない。気まぐれな人格ではだれも銀河系を統治できない。銀河系の統治には長期的な展望が要求され、サブスペース存在以外のいかなる生命形態もこの不可欠な長期管理を生み出すことはできない。そのため、銀河系連邦がサブスペース組織であることは偶然ではない。それはまったく他のものでは無理であったのである。

物質世界とサブスペース世界との間を橋渡しするテクノロジーを人間が手に入れるときはやって来るであろう。しかし、そのときがやって来るまでは、連邦当局と話をするために我々は、我々自身のサブスペース領域を通して耳を傾ける訓練を受けた自分たち自身の神経系を使う必要がある。

我々は連邦当局と交信するために自らの人間意識を使い始めたとき、すでに連邦を代表していた。人間の代表となるこの過程において、モニターと私はともに初期の参加者であった。肉体的な人間当局にとって、今がそのような代表権を正式に許可するときである。今こそ、私自身や私のRV仲間たちのような宇宙放浪者・探索者の具体的な努力が、人間の惑星政府の熟練した代表者たちの努力によって代わるときであり、今こそ、国連が直接的な人間—連邦間の対話を正式に認可するときである。

これについて過ちを犯さないようにしなければならない。火星、グレイ、連邦当局のいずれも、彼らと連絡をとるように我々を強いることは何もしないであろう。彼らは我々が最初に行動に移すことを待っている。我々が銀河系世界の共同体において正式な発言権をもつに値するまで十分に成熟した種族であるという、全銀河系へ向けたシグナルは、我々がだれであり、だれに囲まれて我々は生きていくのかを認識する我々自身の能力である。我々はもはや子供ではない。我々は一つの運命をさづけられた種族である。その運命の新しいフロンティアを堂々と渡り始めようではないか。我々の冷笑的な性格や恐れを捨てようではないか。最後に、長い間、辛抱強く我々を待っていた遠いかなたの人々に対して、我々は話しかけようではないか。





コートニー・ブラウン

エモリー大学準教授。専攻は政治科学。自らリモート・ビューイングの訓練をつんだ後、本書「Cosmic Voyage」を出版。全米科学界に波紋を巻き起こす。

南山 宏 (みなみやま・ひろし)

オーパーツと超常現象研究における日本の第一人者。「謎のパミュード海城」「X-ファイル」等のベストセラー翻訳および「オーパーツの謎」「奇跡のオーパーツ」等の著者として知られる。

ケイ・ミズモリ

早稲田大学理工学部卒業後、渡米。アメリカ最大のUFO研究団体である MUFON [Mutual UFO Network] に所属、未解明現象の謎を追求すべくさまざまな活動を行っている。

訳書に「プレアテス科学の謎」(徳間書店)がある他、数冊の著書を出版している。

SRV：科学的遠隔透視による宇宙(謎の大探査)

コズミック・ヴォエージ

第一刷——1997年3月31日

著者——コートニー・ブラウン

訳者——南山宏/ケイ・ミズモリ

発行者——徳間康快

発行所——株式会社徳間書店

東京都港区東新橋1-1-16

郵便番号105-55

電話(03)3573-0111(代表)

振替00140-0-44392

(編集担当)石井健資

印刷——三晃印刷(株)

電子組版——(株)徳間コンピュータ・ネットワーク

カバー印刷——(株)真生印刷

製本——ナショナル製本協同組合

©1997 Kei Mizumori Printed in Japan

乱丁・落丁はおとりかえ致します。

ISBN4-19-860663-3

【脳・心・遺伝子の未知なる働き】

ノーベル賞の天才科学者  
ブライアン・ジョセフソンの

# 「超常現象と音楽の プラトンの世界」

ケンブリッジ大学教授

ブライアン・ジョセフソン [著]

茂木健一郎 + 竹内薫 [訳・解説]

量子力学の分野の研究[ジョセフソン効果]によって、

弱冠32歳でノーベル賞を取った天才科学者が

30年以上の長きにわたる沈黙を破って、

今、世界で初めて世に問う“禁断の研究”の成果!!

心が産み出す特殊な力——遠隔透視、サイコキネシス、テレパシーなど、

超能力と意識と物質の問題を

最先端物理で解明する革命的な科学の書!!

未来感覚の科学

TOKUMA NATURE SERIES 第1弾

---